

# チャシコツ岬上遺跡

## 総括報告書

2018.3.31

斜里町教育委員会



1 ウトロ地域



2 チャシコツ岬上遺跡全景



1 5号竖穴および上層配石遺構出土土器



2 各遺構出土骨角器類

# 序

斜里町は北海道の東北端に突き出した知床半島の西岸を占め、半島中央部以先は知床世界自然遺産に指定されています。また、半島基部を含めて町内には380箇所以上の遺跡が確認されており、豊かな自然の下で営まれた人々の生活の跡が残されています。

なかでも、サハリン南部を起源とし、5世紀頃に北海道に南下したとされるオホーツク文化の遺跡が多く発見され、古くから注目されてきました。このたびの発掘調査は、オホーツク文化終末期頃の遺跡とされるチャシコツ岬上遺跡の概要を明らかにするとともに、史跡としての保存・活用を目的に、文化庁の補助を受けて斜里町教育委員会が実施したものです。

遺跡の調査方法などにご指導・ご協力いただいたチャシコツ岬上遺跡検討委員会の委員各位、並びに文化庁文化財記念物課、北海道教育委員会文化財・博物館課、北海道森林管理局網走南部森林管理署等の関係機関、玉稿を賜った執筆者の皆様に、衷心より感謝申し上げ、発刊のごあいさつといたします。

平成30年3月

斜里町教育委員会

教育長 村田 良介



## 例言

- 1 本書は平成25年度から平成29年度にわたり実施したチャシコツ岬上遺跡の発掘調査総括報告書である。
- 2 発掘調査並びに本書の作成・刊行は、平成25年度から平成29年度の国庫補助金を受けて、斜里町教育委員会が実施した。なお、平成25年度調査分の報告は当該年度に完了している。このため本書の中では掲載していないが、各章内で必要に応じ引用している。
- 3 遺跡名、登載番号、所在地は次のとおりである。  
遺跡名：チャシコツ岬上遺跡  
登載番号：I-08-21  
所在地：北海道斜里郡斜里町ウトロ西地先国有林1377林班は小班
- 4 これまでの調査の目的と経過は第1章1節に、調査年度、期間、面積、並びに調査体制は第1章2節に記している。なお、平成29年度については、報告書作成にかかる整理作業のみで、発掘調査は実施していない。
- 5 本書の作成にあたっては、チャシコツ岬上遺跡調査検討委員会の委員から全般にわたってご指導いただいた。  
チャシコツ岬上遺跡調査検討委員会（平成27～29年度）  
本委員会は、チャシコツ岬上遺跡の調査の方法について検討を行い、調査成果に客観的な評価を与えるために設置された委員会で、平成27年8月に考古学の専門的知見を持った有識者に委員を委嘱し設置した。
- 6 本書の執筆は、斜里町教育委員会並びにチャシコツ岬上遺跡調査検討委員、分析協力者などが行った。執筆分担者は各項の文末に記し、内容の責任はそれぞれの執筆者が負う。  
現場作業における原図作成は各調査員（第1章2節調査体制を参照）が、遺構・遺物の写真撮影は平河内毅が担当した。土器の接合、拓本作成、遺物実測図及びトレース、遺物計測表は各年度の整理作業員が担当した。また、報告書内の本文図版および写真図版は平河内がAdobe PhotoshopCS6、Adobe IllustratorCS6を使用して作成した。
- 7 本書の編集は平河内がおこなった。
- 8 放射性炭素年代測定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 9 5号竪穴内出土の炭化材樹種同定は、株式会社古環境研究所に依頼した。
- 10 出土銭の成分分析は、小林淳哉・中村和之教授（函館工業高等専門学校）に依頼した。
- 11 繊維製品の分析については、吉本忍（国立民族学博物館名誉教授）・宮地鼓（国立アイヌ民族博物館設立準備室研究員）両氏に依頼した。
- 12 出土人骨の鑑定については、石田肇教授・當山武知氏（琉球大学）に依頼した。
- 13 出土動物遺体の鑑定については、佐藤孝夫教授・吉永亜紀子氏（慶應義塾大学）に依頼した。
- 14 出土植物遺体の鑑定については、山田悟郎氏（元北海道開拓記念館学芸員）に依頼した。
- 15 石器やレキの肉眼鑑定については、知床博物館の合地信生学芸員が行った。
- 16 遺跡位置、発掘調査区、層位、遺構平面及び断面図にはそれぞれ方位、凡例とスケールを入れ縮尺比を示した。遺物写真図版は実測図版の縮尺に合わせて。遺構図などに付した方位は全て磁北である。
- 17 遺跡位置図には、国土地理院発行の1/25,000地形図、ウトロ（NL-55-36-4-2）および知床峠（NL-55-30-16-4）の一部を使用した。
- 18 遺物の保管・管理は、斜里町教育委員会（知床博物館）で行う。
- 19 調査及び報告書作成にあたり、次の方々及び機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（順不同、敬称略）。  
文化庁、北海道教育委員会、水ノ江和同、近江俊秀、森先一貴、西脇対名夫、中田裕香、藤原秀樹、村本周三、北海道埋蔵文化財センター、田口尚、藤澤隆史、山谷文人、佐藤雅彦、斉藤譲二、高畠孝宗、山田哲・市川岳朗、夏木大吾、米村衛、梅田広大、種石悠、北海道大学アイヌ先住民センター、加藤博文・平沢悠、函館工業高等専門学校、小林淳哉・中村和之、吉本忍、宮地鼓、琉球大学、石田肇教授・當山武知、慶應義塾大学、佐藤孝夫・吉永亜紀子、山田悟郎、天方博章、小野哲也、村田一貴、

石渡一人、猪熊樹人、前田潮、天野哲也、澤井玄、  
札幌国際大学、小林航、金盛典夫、島多哲夫、桑島  
繁行、河面正吾、門馬惠彦、竹川智恵、山田武志、

斜里町国民健康保険病院、株式会社シン技術コンサ  
ル、清水昌樹・久未泰範、  
(有) 写真事務所CREEK、佐藤雅彦

# 目次

序	
例言	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査の目的と経過	1
第2節 調査要項	2
第3節 地理的環境	4
第4節 歴史的環境	8
第2章 発掘調査の成果	9
第1節 調査の方法	9
(1) 発掘区とグリッドの設定	9
(2) 発掘及び整理等作業の経過	9
(3) 層序	12
(4) 遺物の分類	12
(5) 掲載遺物の選定	13
第2節 遺構	15
(1) 遺構の概要	15
(2) 5号竪穴 (TR5-Pit3)	15
(3) 5号竪穴上層配石遺構 (TR5)	25
(4) 23号竪穴 (TR7-Pit6)	25
(5) 22・23号竪穴上層廃棄層 (TR7)	29
(6) 1号墓 (TR4-Pit1)	29
(7) 2号墓 (TR5-Pit4)	34
(8) 土坑 (TR4-Pit2a)	34
(9) 土坑 (TR4-Pit2b)	38
(10) 配石遺構 (TR6-Pit5)	38
(11) 遺物集中 (TR6)	41
第3節 遺物	45
(1) 遺物の概要	45
(2) 5号竪穴 (TR5-Pit3) 出土遺物	45
(3) 5号竪穴上層配石遺構 (TR5) 出土遺物	46
(4) 23号竪穴 (TR7-Pit6) 出土遺物	64
(5) 22・23号竪穴上層廃棄層 (TR7) 出土遺物	64
(6) 1号墓 (TR4-Pit1) 出土遺物	64
(7) 2号墓 (TR5-Pit4) 出土遺物	70
(8) 土坑 (TR4-Pit2a) 出土遺物	70
(9) 土坑 (TR4-Pit2b) 出土遺物	70
(10) 配石遺構 (TR6-Pit5) 出土遺物	70
(11) 遺物集中 (TR6) 出土遺物	79
(12) I・II層出土遺物	79
(13) III層出土遺物	89
第3章 各種分析	101
第1節 チャシコツ岬上遺跡出土オホーツク土器・トビニタイ土器の編年試案 (熊木俊朗)	101
第2節 チャシコツ岬上遺跡から出土した石器分析 (松田功)	107

第3節	チャシコツ岬上遺跡から出土した神功開宝の成分分析（小林淳哉・中村和之）	113
第4節	チャシコツ岬上遺跡出土炭化繊維遺物の分析（吉本忍・宮地鼓）	117
第5節	チャシコツ岬上遺跡から出土した炭化材の樹種同定結果（株式会社 古環境研究所）	121
第6節	チャシコツ岬上遺跡の放射性炭素年代測定及び14C年代に基づくオホーツク文化の 暦年代（中村賢太郎・パレオ・ラボAMS年代測定グループ；株式会社 パレオ・ラボ）	129
第7節	チャシコツ岬上遺跡から検出された人骨（石田肇・當山武知）	135
第8節	チャシコツ岬上遺跡から検出された動物遺体（佐藤孝雄・吉永亜紀子）	137
第9節	チャシコツ岬上遺跡から検出された植物遺体（山田悟郎）	179
第4章	総括	185
第1節	発掘調査の成果	185
第2節	オホーツク文化終末期の集落としての位置付け	189
第3節	大陸や本州との関係性	193
第4節	今後の課題	197
引用文献		198
Summary		205
報告書抄録		

## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡	5	第30図	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚 出土土器	49
第2図	地形測量図	6	第31図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(1)	50
第3図	竪穴住居跡分布図	7	第32図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(2)	51
第4図	調査区およびグリッド配置図	10	第33図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(3)	52
第5図	遺構配置図	11	第34図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(4)	53
第6図	5号竪穴(TR5-Pit3)	16	第35図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(1)	54
第7図	5号竪穴(TR5-Pit3)柱穴配置図	17	第36図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(2)	55
第8図	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚A 微細図	18	第37図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(3)	56
第9図	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚B・C 微細図	19	第38図	5号竪穴(TR5-Pit3) 炉・囲炉裏 出土石器	57
第10図	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚 出土土器 位置図	20	第39図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(1)	58
第11図	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚 出土土器 微細図(1)	21	第40図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(2)	59
第12図	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚 出土土器 微細図(2)	22	第41図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(3)	60
第13図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面炭化材 位置図	24	第42図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(4)	61
第14図	5号竪穴上層配石遺構(TR5)	26	第43図	5号竪穴(TR5-Pit3)出土骨角器	62
第15図	5号竪穴上層配石遺構(TR5) 出土土器 微細図	27	第44図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土金属製品	62
第16図	23号竪穴(TR7-Pit6)	28	第45図	5号竪穴(TR5-Pit3)覆土 出土金属製品	62
第17図	22・23号竪穴上層廃棄層(TR7)	30	第46図	5号竪穴上層配石遺構(TR5) 出土土器	63
第18図	TR4遺構配置および 1号墓積石分布図	31	第47図	23号竪穴(TR7-Pit6) 出土土器	65
第19図	1号墓(TR4-Pit1)	32	第48図	23号竪穴(TR7-Pit6) 出土骨角器	65
第20図	1号墓(TR4-Pit1)掲載 遺物分布図	33	第49図	22・23号竪穴上層廃棄層(TR7) 出土土器	66
第21図	TR5遺構配置図 および2号墓積石分布図	35	第50図	22・23号竪穴上層廃棄層(TR7) 出土石器	66
第22図	2号墓(TR5-Pit4)	36	第51図	22・23号竪穴上層廃棄層(TR7) 出土骨角器	67
第23図	2号墓(TR5-Pit4)掲載 遺物分布図	37			
第24図	土坑(TR4-Pit2a)	39			
第25図	土坑(TR4-Pit2b)	40			
第26図	配石遺構(TR6-Pit5)	42			
第27図	遺物集中(TR6)	43			
第28図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(1)	47			
第29図	5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(2)	48			

第52図	22・23号竪穴上層廃棄層(TR7) 金属製品	67	第72図	配石遺構(TR6)出土骨角器	82
第53図	1号墓(TR4-Pit1)出土土器	68	第73図	遺物集中(TR6)出土土器	83
第54図	1号墓(TR4-Pit1)出土石器	69	第74図	遺物集中(TR6)出土骨角器	83
第55図	1号墓(TR4-Pit1)出土金属製品	71	第75図	I・II層出土土器(TR4)	84
第56図	2号墓(TR5-Pit4)出土土器	71	第76図	I・II層出土土器(TR5)	85
第57図	2号墓(TR5-Pit4)出土石器	71	第77図	I・II層出土石器(TR4)	86
第58図	2号墓(TR5-Pit4)出土金属製品	72	第78図	I層出土石器(TR7)	86
第59図	土坑(TR4-Pit2a)床面 出土土器	72	第79図	II層出土石器(TR5)	87
第60図	土坑(TR4-Pit2a)覆土 出土土器	73	第80図	I層出土骨角器(TR7)	87
第61図	土坑(TR4-Pit2a)出土石器	74	第81図	I層出土金属製品(TR4)	87
第62図	土坑(TR4-Pit2a)出土金属製品	74	第82図	II層出土金属製品(TR5)	88
第63図	土坑(TR4-Pit2b)出土土器	74	第83図	III層出土土器(TR4)	89
第64図	土坑(TR4-Pit2b)出土石器	74	第84図	III層出土石器(TR4)	90
第65図	配石遺構(TR6)出土土器(1)	75	第85図	III層出土骨角器(TR4)	90
第66図	配石遺構(TR6)出土土器(2)	76	第86図	ヒグマ骨の出土地点	187
第67図	配石遺構(TR6)出土土器(3)	77	第87図	北海道内のオホーツク文化 およびトビニタイ文化の遺跡分布	190
第68図	配石遺構(TR6)出土土器(4)	78	第88図	ウトロ地域の集落変遷	191
第69図	配石遺構(TR6)出土石器(1)	80	第89図	出土した本州系遺物 (鉄製品・神功開寶・布)	195
第70図	配石遺構(TR6)出土石器(2)	81	第90図	周辺諸地域との交流	196
第71図	配石遺構(TR6)出土石器(3)	82			

## 表目次

表1 検出遺構一覧	44	表5 出土鉄製品計測値一覧	99
表2 出土土器観察表	91	表6 神功開寶計測値	99
表3 出土石器観察表	95	表7 オホーツク文化集落属性表	192
表4 出土骨角器観察表	98		

## 図版目次

PL.1 チャシコツ崎周辺 空撮 チャシコツ岬上遺跡 全景	5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚出土土器1 5号竪穴(TR5-Pit5)骨塚B 5号竪穴(TR5-Pit6)骨塚出土土器2 5号竪穴(TR5-Pit7)骨塚C
PL.2 チャシコツ崎 俯瞰 残雪期のチャシコツ岬上遺跡	PL.5 5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(1)
PL.3 5号竪穴(TR5-Pit3)掘削前状況 5号竪穴(TR5-Pit3)検出状況	PL.6 5号竪穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(2)
PL.4 5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚A	PL.7 5号竪穴(TR5-Pit3)骨塚 出土土器

- PL.8  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(1)
- PL.9  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(2)
- PL.10  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(3)
- PL.11  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(4)
- PL.12  
5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(1)
- PL.13  
5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(2)
- PL.14  
5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(3)
- PL.15  
5号竖穴(TR5-Pit3)炉・囲炉裏 出土石器
- PL.16  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(1)
- PL.17  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(2)
- PL.18  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(3)
- PL.19  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(4)
- PL.20  
5号竖穴(TR5-Pit3)出土骨角器  
5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土金属製品  
5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土金属製品
- PL.21  
配石遺構(TR5)検出状況  
配石遺構(TR5)土器出土状況1  
配石遺構(TR5)土器出土状況2  
配石遺構(TR5)土器出土状況3  
配石遺構(TR5)土器出土状況4
- PL.22  
5号竖穴上層配石遺構(TR5)出土土器
- PL.23  
22・23号竖穴(TR7)南側断面  
廃棄層(TR7)魚骨出土状況  
廃棄層(TR7)骨角器出土状況  
廃棄層(TR7)海獣骨出土状況  
廃棄層(TR7)神功開竈出土状況
- PL.24  
23号竖穴(TR7-Pit6)出土土器  
23号竖穴(TR7-Pit6)出土骨角器
- PL.25  
22・23号竖穴上層廃棄層(TR7)出土土器  
22・23号竖穴上層廃棄層(TR7)出土石器
- PL.26  
22・23号竖穴上層廃棄層(TR7)出土骨角器  
22・23号竖穴上層廃棄層(TR7)出土金属製品
- PL.27  
1号墓(TR4-Pit1)検出状況  
1号墓(TR4-Pit1)調査状況1  
1号墓(TR4-Pit1)完掘状況  
1号墓(TR4-Pit1)調査状況2  
1号墓(TR4-Pit1)出土人骨
- PL.28  
1号墓(TR4-Pit1)出土土器
- PL.29  
1号墓(TR4-Pit1)出土石器  
1号墓(TR4-Pit1)出土金属製品
- PL.30  
2号墓(TR5-Pit4)検出状況  
2号墓(TR5-Pit4)完掘状況  
2号墓(TR5-Pit4)刀子出土状況  
2号墓(TR5-Pit4)布片出土状況  
2号墓(TR5-Pit4)土器及び人骨出土状況
- PL.31  
2号墓(TR5-Pit4)出土土器  
2号墓(TR5-Pit4)出土石器  
2号墓(TR5-Pit4)出土金属製品
- PL.32  
土坑(TR4-Pit2a)上部配石  
土坑(TR4-Pit2a)土器出土状況  
土坑(TR4-Pit2b)調査状況  
土坑(TR4-Pit2a)完掘状況
- TR4調査風景  
土坑(TR4-Pit2b)完掘状況
- PL.33  
土坑(TR4-Pit2a)床面 出土土器  
土坑(TR4-Pit2a)覆土 出土土器
- PL.34  
土坑(TR4-Pit2a)出土石器  
土坑(TR4-Pit2a)出土金属製品

土坑(TR4-Pit2b)出土土器  
土坑(TR4-Pit2b)出土石器  
PL.35  
配石遺構(TR6-Pit5)検出状況  
配石遺構(TR6-Pit5)調査状況  
配石遺構(TR6-Pit5)ヒグマ歯出土状況1  
配石遺構(TR6-Pit5)土器出土状況  
配石遺構(TR6-Pit5)ヒグマ歯出土状況2  
PL.36  
配石遺構(TR6)出土土器(1)  
PL.37  
配石遺構(TR6)出土土器(2)  
PL.38  
配石遺構(TR6)出土土器(3)  
PL.39  
配石遺構(TR6)出土土器(4)  
配石遺構(TR6)出土石器(1)  
PL.40  
配石遺構(TR6)出土石器(2)  
PL.41  
配石遺構(TR6)出土石器(3)  
配石遺構(TR6)出土骨角器  
PL.42  
遺物集中(TR6)調査状況1  
遺物集中(TR6)調査状況2  
PL.43  
遺物集中(TR6)出土土器  
遺物集中(TR6)出土骨角器  
PL.44  
I・II層出土土器(TR4)  
PL.45  
I・II層出土土器(TR5)  
PL.46  
I・II層出土石器(TR4)  
I層出土石器(TR7)  
PL.47  
II層出土石器(TR5)  
I層出土骨角器(TR7)  
PL.48  
I層出土金属製品(TR4)  
II層出土金属製品(TR5)  
PL.49  
III層出土土器(TR4)  
III層出土石器(TR4)  
III層出土骨角器(TR4)  
PL.50  
調査検討委員会 現地視察風景  
遺跡見学会1  
調査検討委員会 出土品検討風景  
遺跡見学会2  
平成28年度発掘調査集合写真

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の目的と経過

知床の玄関口にあたるウトロ地域には数多くの遺跡がみられ、豊かな自然と人々の営みの歴史を現在に伝えている。しかし、2004（平成16）年度から実施された国道改良工事によってその一部は破壊され、残されているものも風化による自然崩壊の危機に瀕しており、保護が求められる状況に直面していた。もっとも、こうした開発工事に伴う発掘調査によって得られる情報も多く、市街地の中心に位置するウトロ遺跡では縄文時代からオホーツク文化期までの多くの遺構が検出され、ウトロの地域史の基礎的な資料が蓄積されてきた。

そうした折、知床が世界自然遺産に登録されることとなり、知床の自然の価値がクローズアップされる一方で、地域住民からは歴史的な価値のある文化財を活用して地域の活性化を図りたいという要望が斜里町教育委員会に寄せられていた。これを受け、町教委ではウトロ地域において保存状態の良好なチャシコツ岬上遺跡を調査対象とし、遺跡の保存を目的とした学術調査を計画した。

これまで、チャシコツ岬上遺跡に関する情報は少なく、1949（昭和24）年に北海道学芸大学（現北海道教育大学）の河野広道博士らによる北海道東北部の考古学的調査の一環として行われたものが唯一の発掘事例であった。調査記録によると、岬先端部付近（A号）と丘頂部（B号）の2箇所の竪穴を試掘し、「竪穴内からオホーツク土器、竪穴付近から北筒土器が出土する（宇田川編1981）」ことから、竪穴群がオホーツク文化期に属するものであることが明らかとなった。

その後、1977（昭和52）年には北海道大学の井晴男教授らにより遺跡全体の地形測量調査が実施され、30棟におよぶ竪穴住居跡の存在が確認された（大井1984）。こうした調査によってその学術的価値が高いことは認識されてきたものの本遺跡の全貌は依然として不明確なままであった。

そのため、チャシコツ岬上遺跡の価値と位置付けを明確化するべく、斜里町教育委員会による5ヶ年に及ぶ内容確認調査を実施することになった。各年度の調査の経過は以下の通りである。

2013（平成25）年度はチャシコツ岬上遺跡の基本層位の確認、利用時期の確定、集落構造の調査を目的とし

て、中位海岸段面上に大きく3段見られる平坦面の中位平坦地に3列のトレンチ（TR1、TR2、TR3）を掘削した。TR1からはオホーツク文化の土坑1基、TR2からは同時期の配石遺構を検出し、集落内における空間利用の一端を知るに至った。また、検出遺構および出土遺物から、利用時期はオホーツク文化終末期が主体となることが確認され、目的としていた成果を十分に得ることができた。なお、2013（平成25）年度の調査結果については報告済みである（平河内2014）。

2ヶ年目にあたる2014（平成26）年度は、引き続き中位平坦地でのトレンチ調査（TR4）を継続するとともに、岬の縁辺部において自然崩壊の危機に瀕していた5号竪穴住居跡（TR5）の発掘調査に着手した。TR4からはオホーツク文化の土坑墓1基と、土坑2基を検出し、内容確認のために完掘した。また、5号竪穴住居跡（TR5）は良好な保存状態であり、覆土中からトビニタイ土器を伴う配石遺構を検出したため、完掘は次年度以降へ先送りすることとなった。また委託業務として、遺跡全体の詳細な地形測量を実施し、竪穴住居跡等の正確な位置関係を把握した。

3ヶ年目の2015（平成27）年度は、5号竪穴住居跡（TR5）の調査を継続した。調査の結果、床面に大量の動物遺体と炭化材が残存していることが判明した。これらについてチャシコツ岬上遺跡調査検討委員会（以下、調査検討委員会）で検討した結果、2015（平成27）年度での完掘にこだわらず時間をかけて慎重な調査を行う必要があるとの指導を受け、調査方針を変更することとなった。

発掘調査最終年の2016（平成28）年度は、5号竪穴住居跡（TR5）の完掘、未調査であった高位平坦地でのトレンチ調査（TR6）、22号及び23号竪穴住居跡を覆うように形成された廃棄層（TR7）のコラムサンプリング調査を目的とし、約1ヶ月の調査を実施した。

2017（平成29）年度はこれら過去4ヶ年の発掘調査によって得られた資料を整理・分析し、文化庁や北海道教育委員会、調査検討委員会からの助言を受けながら成果の取りまとめを行い、総括報告書を作成した。

（松田功）

## 第2節 調査要項

事業名：町内遺跡発掘調査事業

事業者：斜里町

遺跡名：チャシコツ岬上遺跡（登録番号I-08-21）

所在地：斜里町ウトロ西地先国有林内1377林班は小班  
各年度の事業内容

平成25年度

事業期間 平成25年9月3日～平成26年3月28日

調査期間 平成25年9月3日～9月17日

整理期間 平成25年11月26日～平成26年3月28日

事業費 2,507千円（国庫補助額1,253千円）、

調査 面積20㎡

平成26年度

事業期間 平成26年9月2日～平成27年3月31日

調査期間 平成26年9月2日～9月30日

整理期間 平成26年10月1日～平成27年3月31日

事業費 4,853千円（国庫補助額2,426千円）、

調査面積40㎡

平成27年度

事業期間 平成27年8月29日～平成28年3月31日

調査期間 平成27年8月29日～10月10日

整理期間 平成27年9月24日～平成28年3月31日

事業費 2,895千円（国庫補助額1,447千円）、

調査面積27㎡

平成28年度

事業期間 平成28年8月30日～平成29年3月31日

調査期間 平成28年8月30日～10月8日

整理期間 平成28年9月16日～平成29年3月31日

事業費 5,852千円（国庫補助額2,926千円）、

調査面積37㎡

平成29年度

事業期間 平成29年5月9日～平成30年3月31日

整理期間 平成29年5月9日～平成30年3月31日

事業費 4,502千円（国庫補助額2,251千円）

調査体制

調査主体者：斜里町教育委員会 教育長 村田良介

事務局：斜里町立知床博物館 館長 山中正実

担当者：斜里町立知床博物館 学芸主幹 松田功

斜里町立知床博物館 学芸係 平河内毅

調査員：斜里町立知床博物館 学芸係 平河内毅

臨時職員 高橋鵬成（平成25・27年度）

臨時職員 大西凜（平成25年度）

臨時職員 工藤大（平成26年度）

臨時職員 服部太一（平成27・28年度）

発掘作業員：牧野睦美（平成25～26年度）、元木哲

之（平成25～27年度）、平田陽子（平成

26～28年度）、井上博之（平成26～28年

度）、湯浅秀明（平成26～28年度）、狩

野博之（平成27年～平成28年）、小松

努（平成28年度）、近藤政幸（平成28年

度）、日野康彦（平成28年度）、松本規

裕（平成28年度）、女部田かなみ（平成

28年度）、山田貴博（平成28年度）、平

井友里（平成28年度）

整理事業員：近藤富士子（平成25年度）、佐藤美由

樹（平成25年度）、丹治八千代（平成25

年度）、野口京子（平成25年度）、西塚

玲子（平成25～29年度）、牧野睦美（平

成25～26年度）、元木哲之（平成25～27

年度）、斉藤葵（平成26年度）、佐藤ト

モ子（平成26年度）、平田陽子（平成26

～29年度）、井上博之（平成26～29年

度）、湯浅秀明（平成26～29年度）、松

本規裕（平成28年度）、山田貴博（平成

28～29年度）、内田雪華（平成28～29年

度）、森陽子（平成28～29年度）、門間

勇（平成29年度）、佐藤雅彦（平成29年

度）

斜里町チャシコツ岬上遺跡調査検討委員会（平成27～  
29年度）

体制

委員長：白杵勲（札幌学院大学教授）

委員：熊木俊朗（東京大学大学院准教授）

委員：内山幸子（東海大学准教授）

現地指導および調査検討委員会出席者

水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門）  
近江俊秀（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門）  
森先一貴（文化庁文化財部記念物課埋蔵文化財部門）  
藤原秀樹（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物

館課）

中田裕香（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物  
館課）

村本周三（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物  
館課）

## 第3節 地理的環境

### 1. 地質概略

知床半島は約900万年前の海底火山活動から始まり、約100万年前から陸上の火山活動へと変わり現在の姿になった（勝井ほか2007）。海底火山活動はマグマの活動が激しい時代と、静かで堆積層が発達した時代があったことが露頭などから観察され、半島基部から岬の先端部へと地層が新しくなる。

チャシコツ崎付近には新第三紀の泥質団塊の含有を特徴とする遠音別川層（約400万年前）とシルトを挟む集塊岩で特徴づけられるウトロ層（約200万年前）が分布している。遠音別川層はチャシコツ崎より半島基部の南西の地域に広く分布し、凝灰質泥岩（頁岩）を主体とし、マグマが層の間でドーム状に固結した餅盤をしばしば含む。チャシコツ崎南西部にあるオシンコシン岬はそれにあたる。ウトロ層はチャシコツ崎より北東の地域に広く分布し、水冷破碎岩で形成されている。水冷破碎岩は地下深くから上昇してきたマグマが海水と接触し急冷されて礫や砂になった岩石で、活動の中心部ではしばしば上昇してきたマグマの岩脈が観察される。

### 2. チャシコツ崎および周辺の地理的・地質的環境

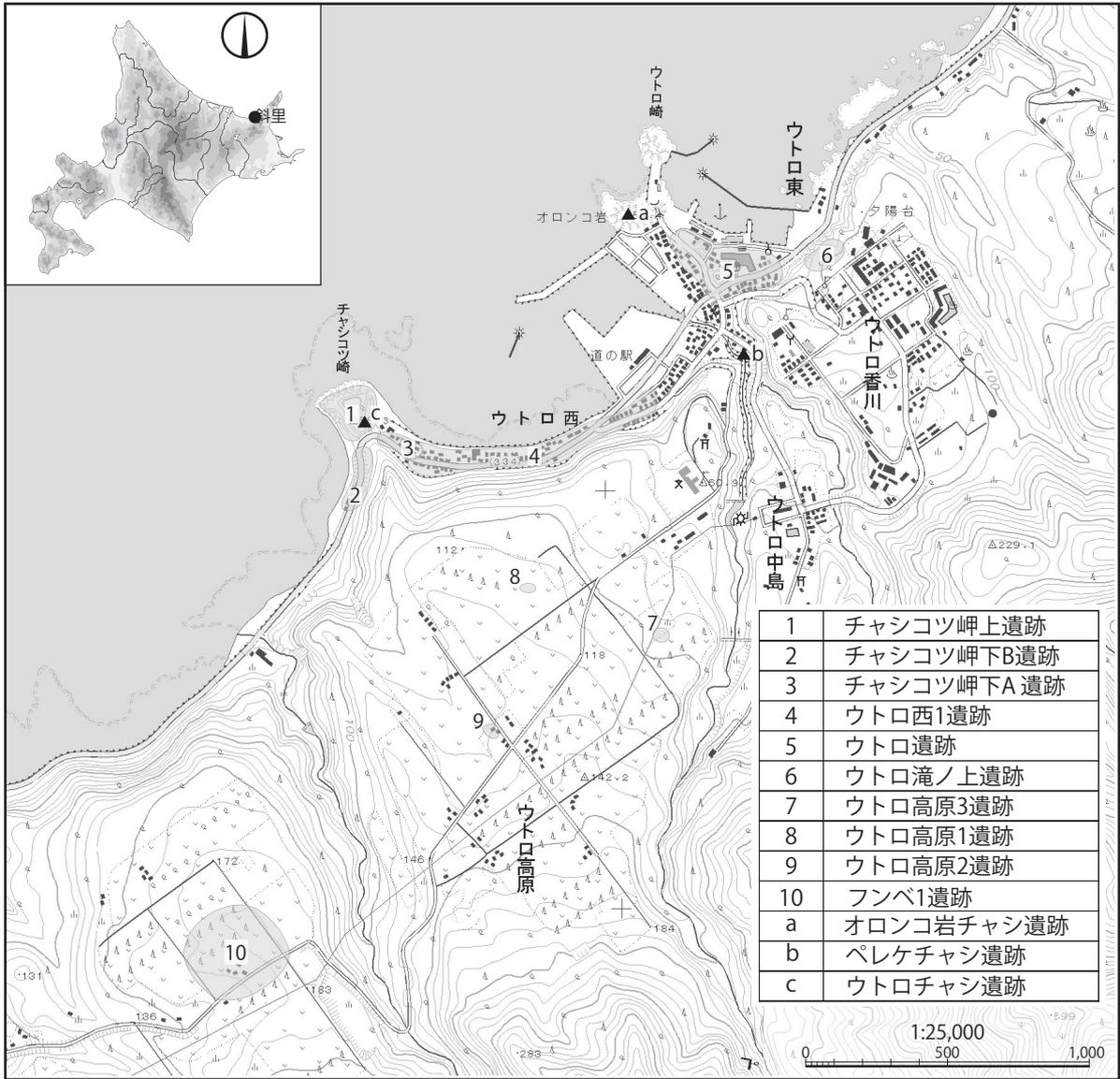
チャシコツ崎上遺跡は、北緯44度04分00秒、東経144度58分40秒、ウトロ市街地の南西方向にあたる、海に突き出たチャシコツ崎の中位海岸段丘頂部の平坦面上に位置する。遺跡の周辺には火山性の台地をはじめとする中・低位の段丘面、海浜地などの低地、台地崖、岩脈地形、地滑り地形が見られる。

チャシコツ崎には層序の下位に遠音別川層、上位にウトロ層が分布しちょうど地層の境界の位置にあたってい

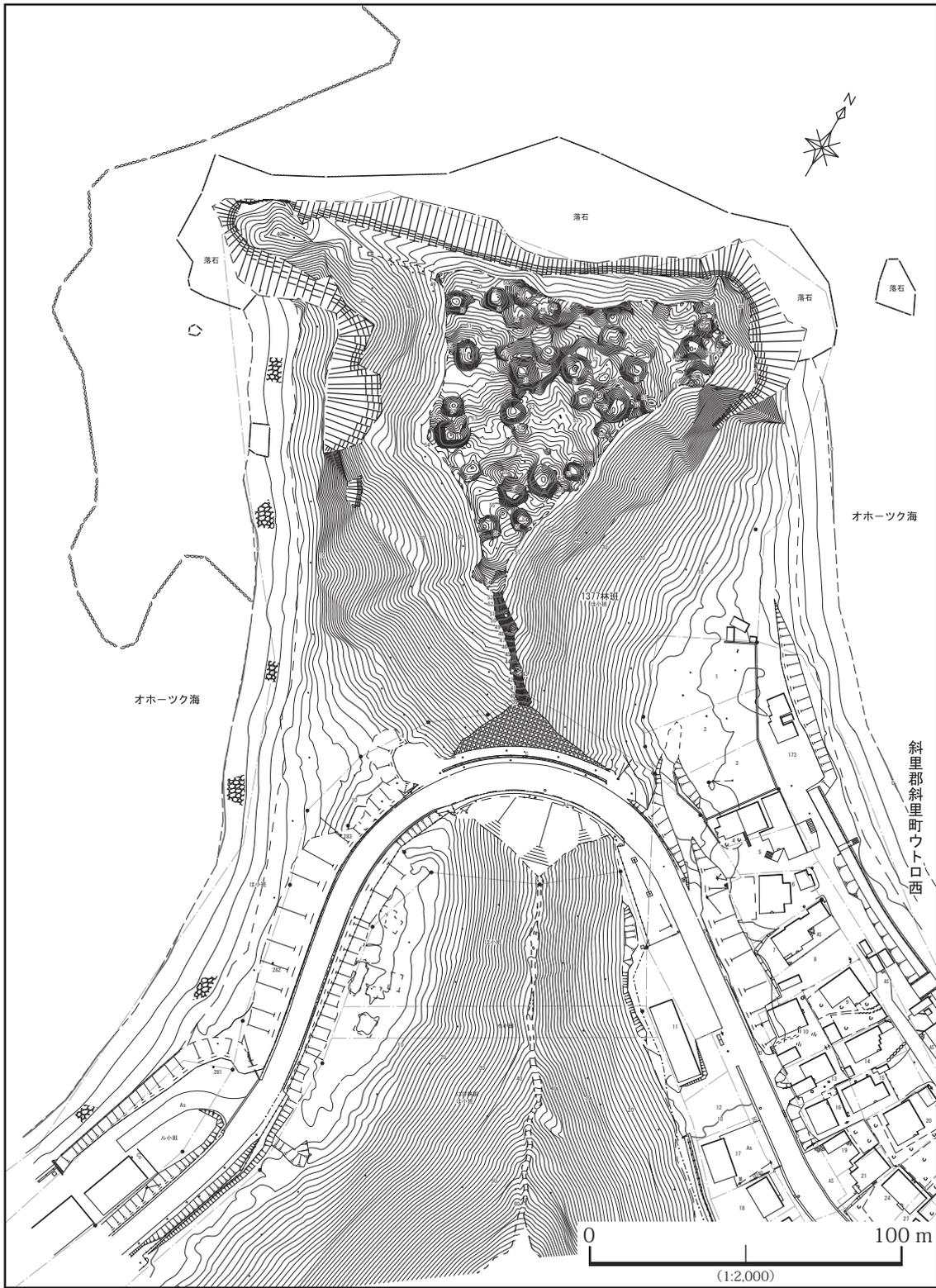
る。堆積物主体の比重の軽い遠音別川層の上に比重の重い水冷破碎岩が分布しているため、重力的には非常に不安定である。そのため、岡（2010）によると近くでは地滑りや土石流複合体が観察され、地層がブロック化しているのも観察された。また、チャシコツ崎のすぐ陸側に位置するウトロトンネルの掘削の際にはトンネル部に断層粘土が大量に分布していることが判明した。

知床半島では、陸上の火山活動による半島中軸部の上昇により地層は海側に傾斜している。ところが、チャシコツ崎の先端部では地層が陸側に傾斜しており、例外的な外観を示している。また、チャシコツ崎の海食台にはブロック化した地層が落下しており、地滑りによるものと推察される。さらには、岩脈が発達した水冷破碎岩が分布し、ウトロ層の活発な活動の場を示しているが、その層序上、上位に当たる海面上のチャシコツ崎では下位に遠音別川層の上部があり、さらにその上位には海底火山活動が始まったウトロ層の下部が分布している。チャシコツ崎海食台と海面上のチャシコツブロックは時代が逆転した不整合の存在が推察される。そのため、杉本ほか（1961）の5万分の1地質図「ウトロ」ではチャシコツ崎の付け根に断層を引いている。以上のことより、チャシコツ崎全体が山の高い部分から滑り落ちて現在の位置で大きなブロックとして「岬状地形」になった可能性が高い。ウトロ国道334号線改良工事に伴うウトロトンネル掘削時の地質調査で判明した大量の断層粘土はその時のすべり面の可能性がある。またチャシコツ崎先端部の地層の傾斜が逆なのは、地滑り先端部がまくれ上がった結果とも考えられる。

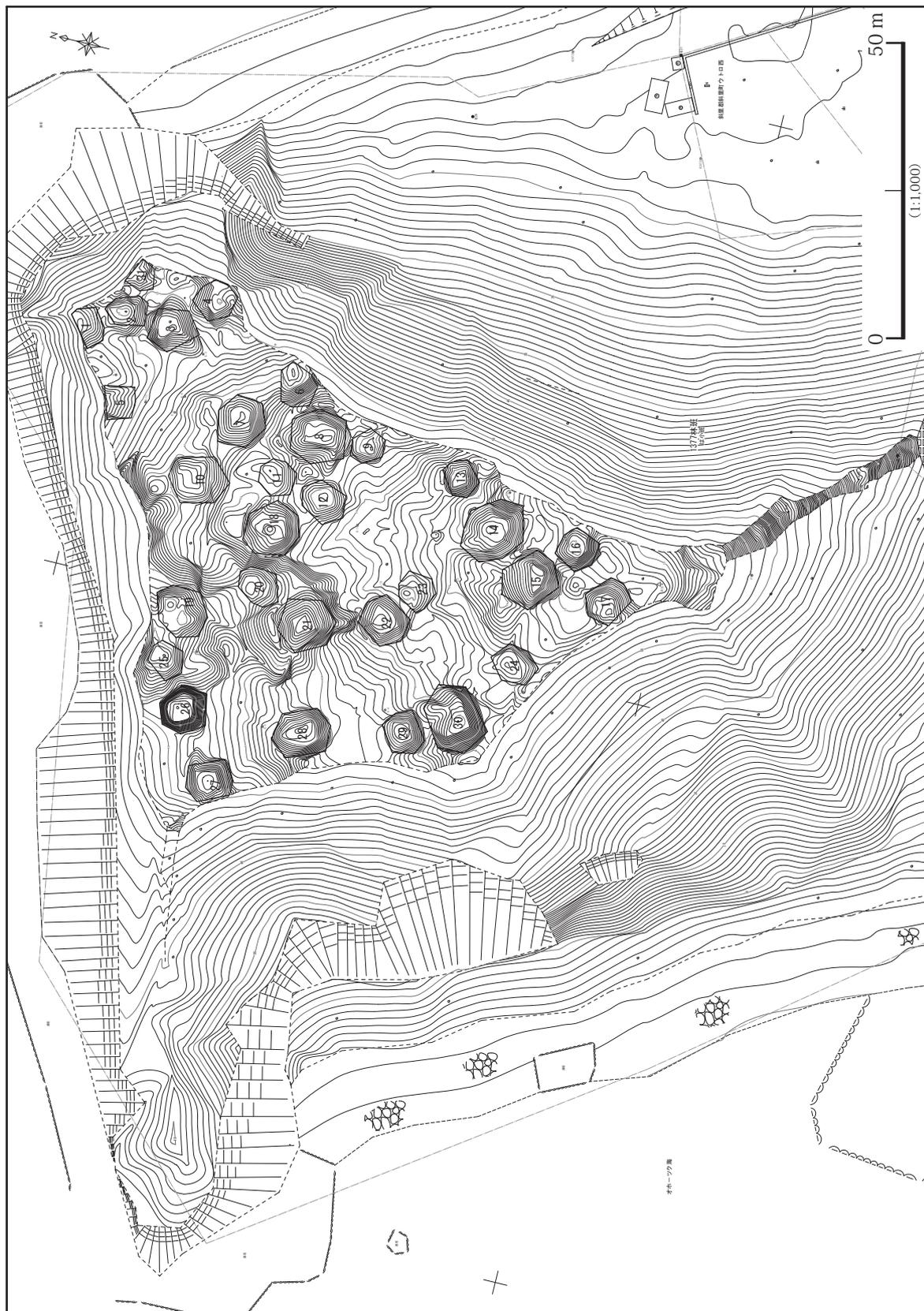
（松田功）



第1図 周辺の遺跡



第2図 地形測量図



第3図 竪穴住居跡分布図

## 第4節 歴史的環境

### 1. 地名の変遷

チャシコツ岬上遺跡のチャシコツとは、アイヌ語でチャシ・コツ・エト（砦のある岬、砦跡の岬）と言われるが、初出とされるのが、松浦武四郎の東西蝦夷山川地理取調日誌の安政五年の「戊午 志礼登古日誌」である。この中の記述には、「赤壁崖峨々として海中に突出し、其れに撃する潮勢乱れて玉を飛ばし、上には緑樹陰森として枝を垂、その眺望実に目を驚かせり。此処むかし土人の城壘有りしと。…（秋葉1985）」とありチャシコツ岬の様子が詳しく記載されている。なお、安政五年より前の文献などには地名としての表記はない。その後、明治30年の北海道庁陸地測量部5万分の1地形図には「チャシコツ」と表記され、大正13年測量で昭和8年発行の第日本帝国陸地測量部仮製版5万分の1地形図では、すでに「チャシコツ崎」と表記され、今日に至っている。

チャシコツ崎と呼ばれるようにチャシ（アイヌの砦跡）があったと考えられるが、現況ではその痕跡である壕などが確認できない。昭和29年のウトロ周辺写真（下の写真）を見ると遺跡の背後にある中位段丘面と細尾根でつながっており、僅かに溝のようなものも確認できる。この溝がチャシの壕とも考えられる。現町道の前は、国道、道道であったが、最初の道道建設の折にこの溝の部分を開削し、壕が失われてしまったものと考えられる。

### 2. 周辺の遺跡と概要

チャシコツ崎はウトロ地域に包含される。チャシコツ崎の周辺には、チャシコツ岬上遺跡、チャシコツ岬下A・B遺跡、ウトロ西1遺跡が確認されている。ウトロ地域全体を見ると縄文時代早期～中期の遺跡は中位海岸段丘上、河川沿いおよび低位段丘の河口付近を中心に分布しており、幌別河口遺跡(其田・河野編1980)、ウトロ遺跡(河野1955)、ウトロ高原1～4遺跡、チャシコツ岬上遺跡(河野1955、平河内編2014)などが知られている。縄文時代後期～晩期の遺跡は、海岸の低位面に見られるようになり、ウトロ遺跡(松田編2011)、チャシコツ岬下B遺跡(松田編2002・2011)、幌別河口遺跡などが知られている。続縄文文化期も縄文晩期と同じく、海岸を中心とした低位面に遺跡が集中する。ペレケ川縁辺やウトロ中心市街地に集落を作るようである。オホーツク文化期は、ウトロ市街地やチャシコツ崎の海岸低地面とチャシコツ崎上(中位段丘面)に遺跡が集中する。トビニタイ文化期及び擦文文化期は、ウトロ遺跡やチャシコツ岬下B遺跡で遺物の散布が認められるが、竪穴住居跡は、トビニタイ文化期のものしか見つかっておらず中位段丘面上のウトロ滝ノ上遺跡(駒井編1964)でのみ検出されている。

(松田功)



写真. チャシコツ崎のようす (1954年)

## 第2章 発掘調査の成果

### 第1節 調査の方法

#### 1. 発掘区とグリッドの設定

グリッドは四等三角点（世界測地系、X座標=7701.398、Y座標=58320.507）を基準点とし、この基準点と任意に設定したプラスチック杭K-10（世界測地系、X座標=7745.983、Y座標=58309.567）を結んだ線上をAラインとし、東西方向をアルファベット順（h～a・A～K）、南北方向をアラビア数字順（1～20）とし、1区画を5 m×5 mとして設定した。また、設定はトータルステーションを用いて町教委が直営で実施した。

発掘区はTR1～7までの7箇所である。TR1～4とTR6は遺跡中央部の竪穴住居跡が分布していない空間を選択し、集落の構成要素を探る目的で設定した。

しかし、それらの調査区だけでは遺跡の内容確認を行うためには不十分であるため、検討委員会の意見をふまえTR5は自然崩壊の危機にあるオホーツク文化期の竪穴上に設定した。一方、TR7は岬の中央部に位置しており、隣接する22号・23号竪穴の上層に形成された廃棄層のサンプリング等を目的として調査区を設定した。

#### 2. 発掘及び整理作業の経過

発掘作業は平成25～28年度までの4ヶ年であり、竪穴住居跡1軒（TR5）とトレンチ6列（TR1～4・6・7）を掘削した。また、出土遺物は原則全点の出土地点を記録し、部位の判別可能な動物骨や遺跡外から持ち込まれた可能性のあるレキに関しても可能なかぎり地点計測し、取り上げ台帳に記載することとした。機材の都合上、取り上げにはTR1～4が平板、TR5～7はトータルステーションを用いた。以下、年度ごとに発掘作業の経過を解説する。

[平成25年度]

TR1～3を掘削し、複数の遺構を確認した（平河内編2014）。TR1の土坑1基については内容確認のために調査区内にかかる部分を掘削したが、焼土灰範囲や硬化面などは上面確認のみとした。TR2では配石遺構の性格を探るため、一部のレキを除去し下層の状況を確認するに留めた。

[平成26年度]

自然崩壊の5号竪穴（TR5）とトレンチ1列（TR4）を

調査し、TR4からは1号墓と配石を伴う土坑を検出した。1号墓は配石を伴うため、墓坑の平面形や軸方向を確認するために配石を除去し、下層へと掘り下げを続けた。また、本遺跡での墓の検出は初例であったため、墓の典型的な形態を探ることを目的として半截ではなく完掘することとした。さらに、その南側からは配石を伴う土坑が検出され、隣接する墓との関係性やその性格を検証するために、こちらも完掘することとした。

一方、TR5では5号竪穴上層に配石遺構が構築されており、写真と図面で記録を作成し、配石の除去は翌年度へ譲ることとした。

[平成27年度]

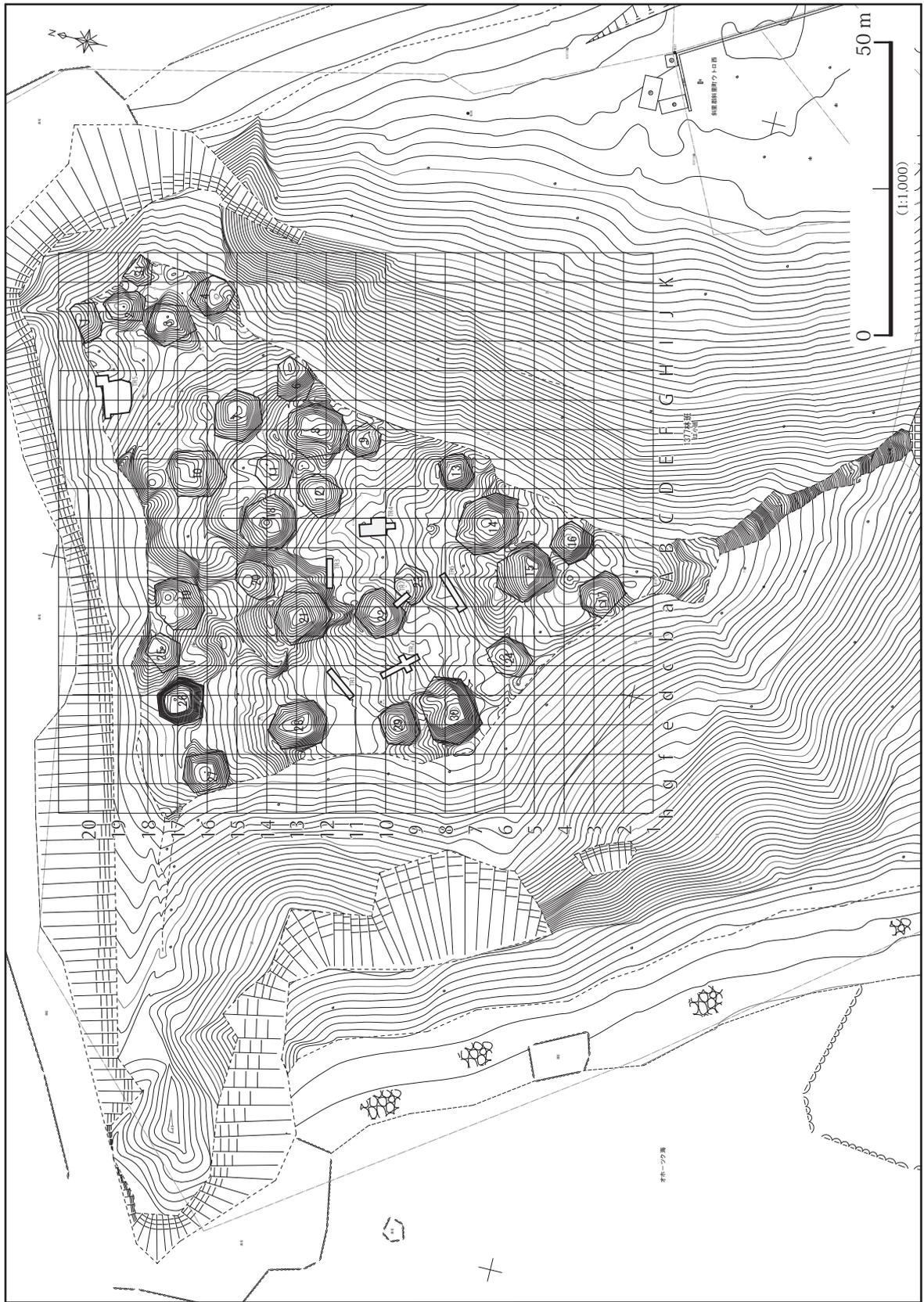
TR5の配石遺構を全面除去し、5号竪穴の床面へと掘り下げを行った。その際、竪穴の層位確認のために延長していた調査区北側で2号墓を検出した。5号竪穴と同様に、2号墓も自然崩壊の危険性が高く、崩落によって失われる前に記録すべきと判断し完掘する方針となった。また、5号竪穴では床面からヒグマ骨を集積した骨塚が検出されたことから、一括で取り上げるのではなく、検討委員会の意見をもとに部位の判別できる動物骨に関しては地点計測を行って取り上げを行った。そのため、竪穴の完掘には至らず、床面炭化材一部を検出するに留まった。

また、3ヶ年分の調査成果が蓄積されたため検討委員会を設置し、より効果的な調査方法を検討して翌年度の調査計画を立案した。

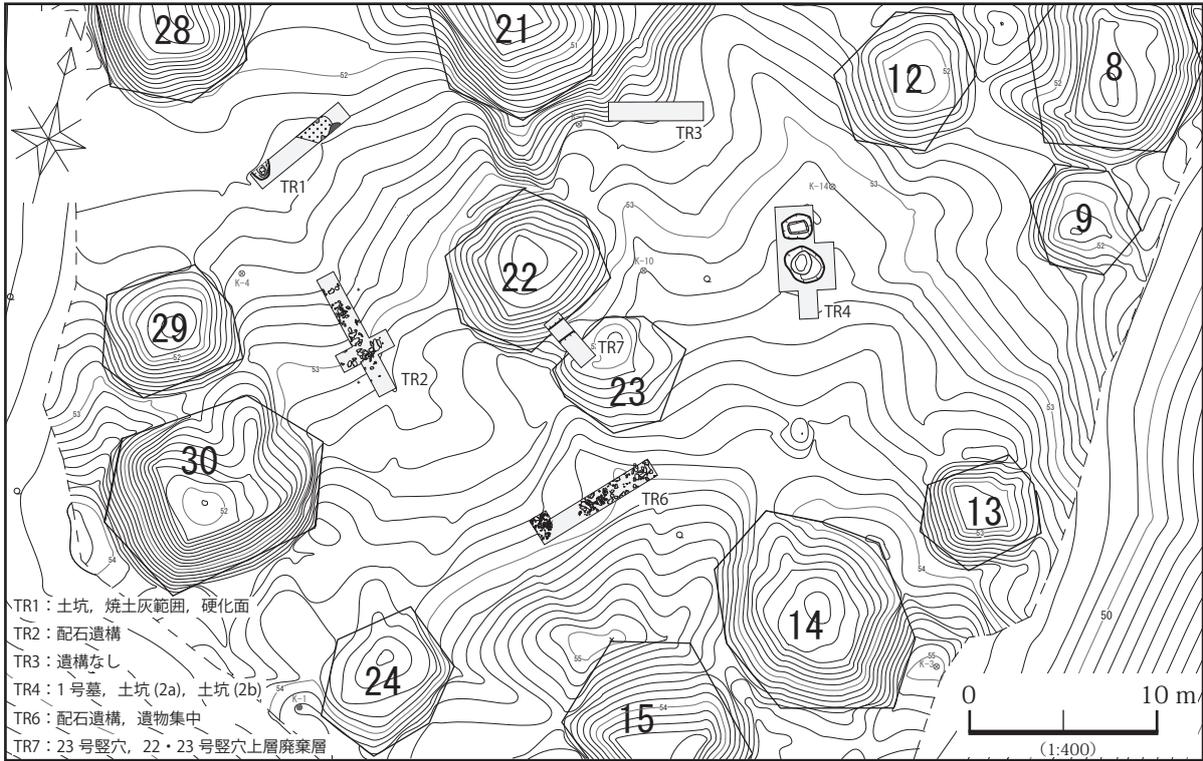
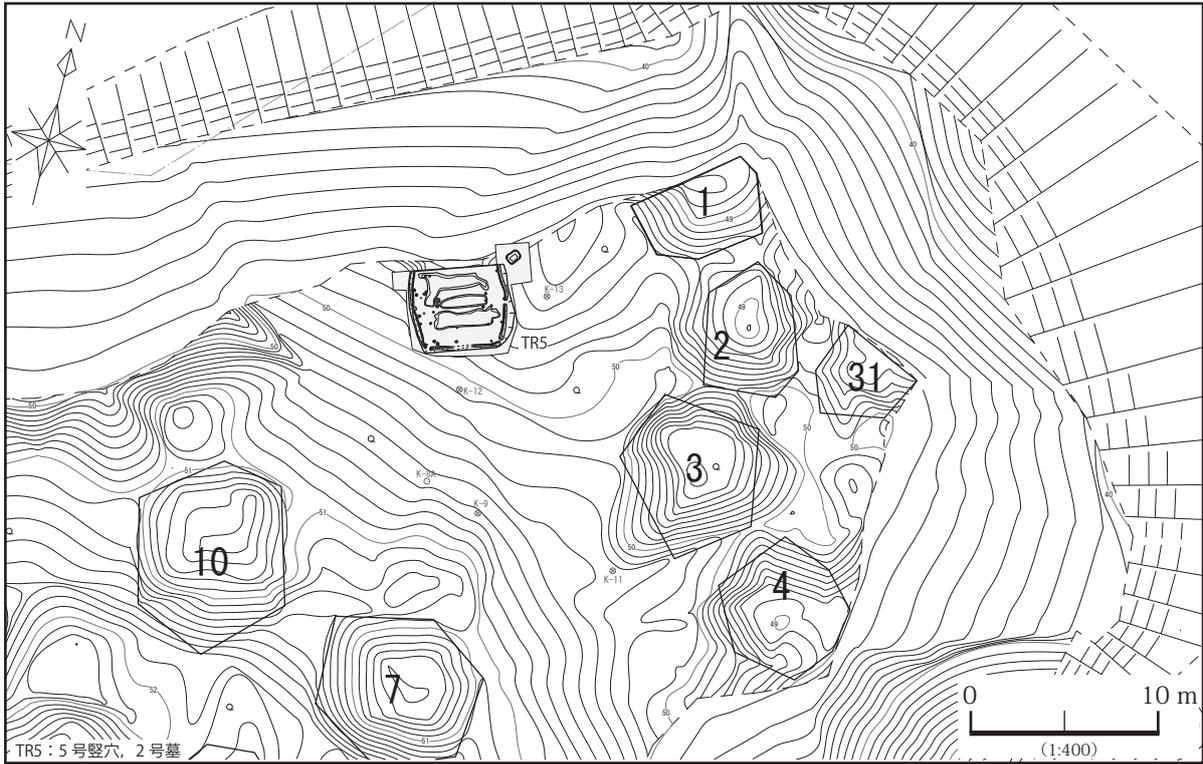
[平成28年度]

まず5号竪穴の床面を精査し、焼失に伴う炭化材の広がりを確認した。さらに、その下からは浅く掘り込んだ床面に粘土を充填して成形した貼床を検出し、記録後は貼床を除去し、建て替えの痕跡を探ったが見当たらなかったため、本竪穴については調査完了とした。

同時に調査を進めていたTR6では表土直下のⅡ層中から角礫を主体とした配石遺構が検出された。まずは配石の分布範囲を確認、その後調査区北東端のサークル状に組まれた配石を一部除去し、小規模な掘り込みを確認し半截した。これより、他の配石下にも土坑が伴う可能性が浮上したため、調査区中央でも同様に下層を確認した



第4図 調査区およびグリッド配置図



第5図 遺構配置図

が土坑は伴わなかった。そのため配石部分はⅡ層中の確認面で掘削を止め、調査区北側長軸に沿ってサブトレンチを設定し、層位の確認を行った。その際、配石が見られない南西部分のⅢ層上面から動物骨を伴う遺物集中が出土し、内容確認のために調査区を一部拡張して記録した後、取り上げを実施し調査完了とした。

一方、廃棄層の調査を目的としたTR7ではコラムサンプルの採取が優先事項であったため、50 cm角の小区を設定し土壌を採取した。その際、廃棄層の保存状態が良く、想定よりも調査に時間がかかったため、調査区の南西部（Aライン）を優先して掘り下げを行った。その結果、廃棄層の下層からは22号縦穴の掘り上げ土が堆積、さらにその下層から魚骨集中が検出された。これより、副次的に22・23号縦穴と廃棄層の新旧関係を明らかにできた。しかし、時間的制約から残りの北東部（Bライン）については覆土の一部を残し調査を終了することとなった。発掘作業は以上の4ヶ年であり、平成29年年度は整理作業および報告書作成に専念した。

また、整理作業は平成25～29年度までの5ヶ年かけて実施した。全出土遺物について、洗浄・乾燥・注記・接合を行い、報告書に掲載するものは復元、拓本・実測、写真撮影を実施した。また、廃棄層にて採取したコラムサンプリングは洗選別後、乾燥・フルイがけ（3mm・1mm）を実施し、さらに肉眼による微細遺物選別を行った。

### 3. 層序

調査区内の堆積層はⅠ～Ⅳ層までを確認した。主な包含層はⅠ～Ⅲだが、TR2ではⅣ層上面からも遺物が出土している。また、隣接するチャシコツ岬下B遺跡では縦穴住居跡内からTa-a（樽前山a火山灰）とMa-b5（摩周岳b5降下軽石）が確認されているが、今回の調査では肉眼でテフラを確認することはできなかった。以下、基本層位について解説する。

Ⅰ層：表土の腐植土層を含む黒色土層。縄文中期から現代の遺物までを含む。層厚5～25 cm。

Ⅱ層：基本の土色は黒褐色土層。中に焼土や炭化物、灰などの層を挟在する区域もある。主としてオホーツク文化期の遺構・遺物、縄文時代中期の遺物を包含する。層厚10～30 cm。

Ⅲ層：暗黄褐色土層。部分的に暗褐色土を含む。主にオホーツク文化期と縄文中期の遺物を包含する。TR2

での確認層厚30 cm。

Ⅳ層：黄灰ないし黄褐色土層。剣先スコップでも掘削が困難な締まりある土層。無遺物層。

### 4. 遺物の分類

土器：本報告では器形、文様、胎土、製作方法などから時期・型式を分類した。ただし、オホーツク土器やトビニタイ土器は胴部が無文のものが多く、分類が困難なため「不明」として扱うこととした。よって、無文に分類されるものは完形品もしくは口縁部破片から判断している。

Ⅰ群 擦文土器

Ⅱ群 トビニタイ土器

a類 無文

b類 貼付文

c類 貼付文+沈線文

Ⅲ群 オホーツク土器

a類 無文：口縁部文様が無文のものも含む。

b類 刻文：刻文を含むものすべて。

c類 沈線文：沈線文を含むものすべて。

d類 単独貼付文：紐状貼付文が1本単独のみで構成され、かつ刻みや刺突、ひねりなどを施した紐状貼付文を含むもの（意匠文のみも含む）。

e類 単位貼付文：紐状貼付文が2本以上1単位で構成されるもの。あるいは施文のない紐状貼付文を含むもの。

f類 不明：風化や残存部位から分類できないもの。

Ⅳ群 続縄文土器

Ⅴ群 縄文土器

a類 前期

b類 中期

石器：石器については、出土が確認されたものを以下のように分類した。よって、従来の斜里町の石器分類群と違う体裁になっていることを書き記しておく。また、石鏃については石鏃最大長が5cmを超えるものや大型の三角形石鏃については銛先鏃の可能性が高いが、ここではまとめて扱った。未製品や欠損品については観察表（表3）にその旨を記載した。

Ⅰ群 石鏃・銛先鏃

a類：柳葉形石鏃（長軸と短軸の比での細分可能）

- b類：ひし形石鏃（逆刺の状況により細分可能）
- c類：三角形石鏃（平基と凹基とで細分可能）
- d類：将棋駒形石鏃（鏃身部側縁の状況により細分可能）

#### II群 石錐

#### III群 削器

- a類：刃部調整はされているが定型的でないもの
- b類：安山岩製ナイフ

#### IV群 搔器

- a類：ラウンドタイプ
- b類：サイドタイプ

#### V群 剥片・破片

- a類：リタッチドフレイク（縁辺部に二次調整があるもの）
- b類：フレイク及びチップ（調整が見られない剥片や破片）

#### VI群 石核・原石

- a類：明瞭なプラットフォームを有するもの
- b類：明瞭なプラットフォームを有さないもの
- c類：石核状フレイク、残核状のものに微細調整が見られる。

#### VII群 石斧

#### VIII群 たたき石

- a類：棒状レキを素材としたもの
- b類：扁平レキを素材としたもの
- c類：円レキを素材としたもの

#### IX群 くぼみ石

- a類：棒状レキを素材としたもの
- b類：扁平レキを素材としたもの

#### X群 すり石

- a類：棒状レキを素材としたもの
- b類：扁平レキを素材としたもの
- c類：円レキを素材としたもの
- d類：その他の石を素材としたもの

#### XI群 砥石

#### XII群 石錘

- a類：穿孔の見られるもの
- b類：有溝の見られるもの

#### XIII群 石製品

- a類：円レキ有孔石製品
- b類：円板状有孔石製品
- c類：両頭調整石製品

#### 骨角器

銚頭、骨鏃、釣針軸、骨針、骨斧、刺突具、彫像、原材（素材）、ヘラ状製品、円盤状製品、骨匙が出土している。

#### 金属器

刀子、鉄片、鉄針、鉤状鉄製品、棒状鉄製品、貨幣（神功開寶）が出土している。

#### 繊維製品

炭化した織物断片のみである。詳細は第3章4節を参照されたい。

## 5. 掲載遺物の選定

本報告にあたり以下のような基準を設け、掲載遺物の選別を行った。

**土器：**遺構内外を問わず、口縁部から胴部、底部については細片を除く全点を掲載した。ただし、オホーツク土器に限っては胴部が無文であることから、貼付文や沈線文などが付され時期を特定できるものや、元の器形を想定し得る大破片に限定し選択することとした。また、破片数の少ない擦文土器、続縄文土器、縄文土器は部位を問わず全点掲載した。

その中で、遺構の検討の際に重要な要素となる一部の土器については同じ層中の出土土器から抽出して掲載している。具体的には、第30図、第46図の2箇所であるが、第46図の配石遺構では完形のトビニタイ土器4個体が出土しており、配石遺構の時期判断に有用であることから覆土出土土器片から擦文土器とトビニタイ土器を抽出して配石遺構に帰属するものとした。一方、第30図は5号竪穴床面出土土器の中から骨塚に伴うと判断される位置関係から出土したものを抽出した。その他の土器図版については時期毎に口縁部から底部、完形個体という順に配置している。

**石器：**基本、加工痕跡のあるものについては剥片並びにレキ石器を含め全て掲載している。剥片石器の中で、典型的な石核とは言えないが、円レキの原石面を残し微細な加工痕を有し、石核に比類するものを石核状フレイクとして呼称、新設した。加工痕のないレキの中でも特徴的なものがあり、今回、利尻島杵形岬周辺に分布する杵

形溶岩と呼ばれる石材と同じものが見つかった。点数は多くはないが、当時の交易を考える上では重要となるキーアイテムであり、今回の報告では掲載することとした。

**骨角器**：出土骨角器全点を掲載した。基本的には地点計測遺物であるが、一部廃棄層に含まれる動物遺体の同定作業中に発見されたものも含まれている。また、素材や残片と考えられるものについても加工痕があるものは掲載することとした。

**金属器**：出土点数が少ないため全点を掲載した。ただし、攪乱や表土中から得られた明らかに現世遺物を判断されるものについては掲載しないこととした。また、神功開竇は斜里町国民健康保険病院で、その他は北海道埋蔵文化財センターにてX線写真撮影を依頼し、実測図と拓本の作成を行った。

**繊維製品**：2号墓から出土した炭化織物のみであり、第3章4節の中で写真等を掲載している。

(平河内毅、松田功)

## 第2節 遺構

### 1. 遺構の概要

検出した遺構はすべてオホーツク文化～トビニタイ文化に属するものであり、他時期の遺構は検出されていない。初年度に設定した調査区TR1～3では土坑1基と焼土木炭範囲、配石遺構1基と、構築の意図が明確な遺構を検出することができなかった（平河内編2014）。しかし、次年度以降に設定した調査区TR4～7では竪穴住居跡2軒（5・23号竪穴）、土坑墓2基、土坑2基、配石遺構2基、廃棄層1箇所、遺物集中1基と、多種多様な遺構を検出することができ、オホーツク文化期の集落機能を考える上で豊富な情報を得ることができた。以下、平成26年度～28年度の発掘調査によって新たに検出された遺構について個別に解説を行う。

### 2. 5号竪穴（TR5-Pit3）

調査グリッドF-18・19、G-18・19区に位置する竪穴住居跡である。チャシコツ岬の縁辺に位置し、海（北西）側は竪穴の壁が崩落寸前であった。そのため、自然崩壊に伴う本調査として3ヶ年にわたり発掘調査を実施し、完掘した。発掘調査に伴って海側への土砂流出が予想されたが、その対策として海側を掘削せずに残し、壁面をBラインセクションとすることとした。また、Bラインとは直行しないが、南北方向をAラインセクションとしてベルトを設定し、掘削を行った。以下、竪穴の形態および特徴的な内容について記載する。

#### 規模・形態（第6・7図）

本竪穴はオホーツク文化期の焼失住居である。規模は長軸5.4 m、短軸（掘削部）4.4 mであり、軸方向は岬の縁辺に沿って東北東を向く。平面形は緩やかな六角形を呈し、地表面から床面までの深さは約40～70 cmである。また、掘り込み面はⅡ層中、埋土の状況は第6図を参照されたい。

竪穴の内容は一般的なオホーツク文化期の竪穴同様、貼床や石組炉、骨塚を有するがいずれも内容が特徴的なものであった。まず、貼床であるが床面の一部を5 cm程度掘り込んで粘土を充填し、床面と貼床面の高さが揃うように成形されていた。周辺のウトロ遺跡やチャシコツ岬下B遺跡の竪穴では床面を掘り込むことなく粘土を床面上に盛っており、本遺跡のような充填型の例は稀であ

る。また、貼床は焼失時の熱によって赤褐色に変色し、レンガ状に硬化しているが、廃絶後の風化の影響が各所で崩壊が顕著であった。しかし、残存部分や掘り込みの形態からは重複や切り合い関係はみとめられない。

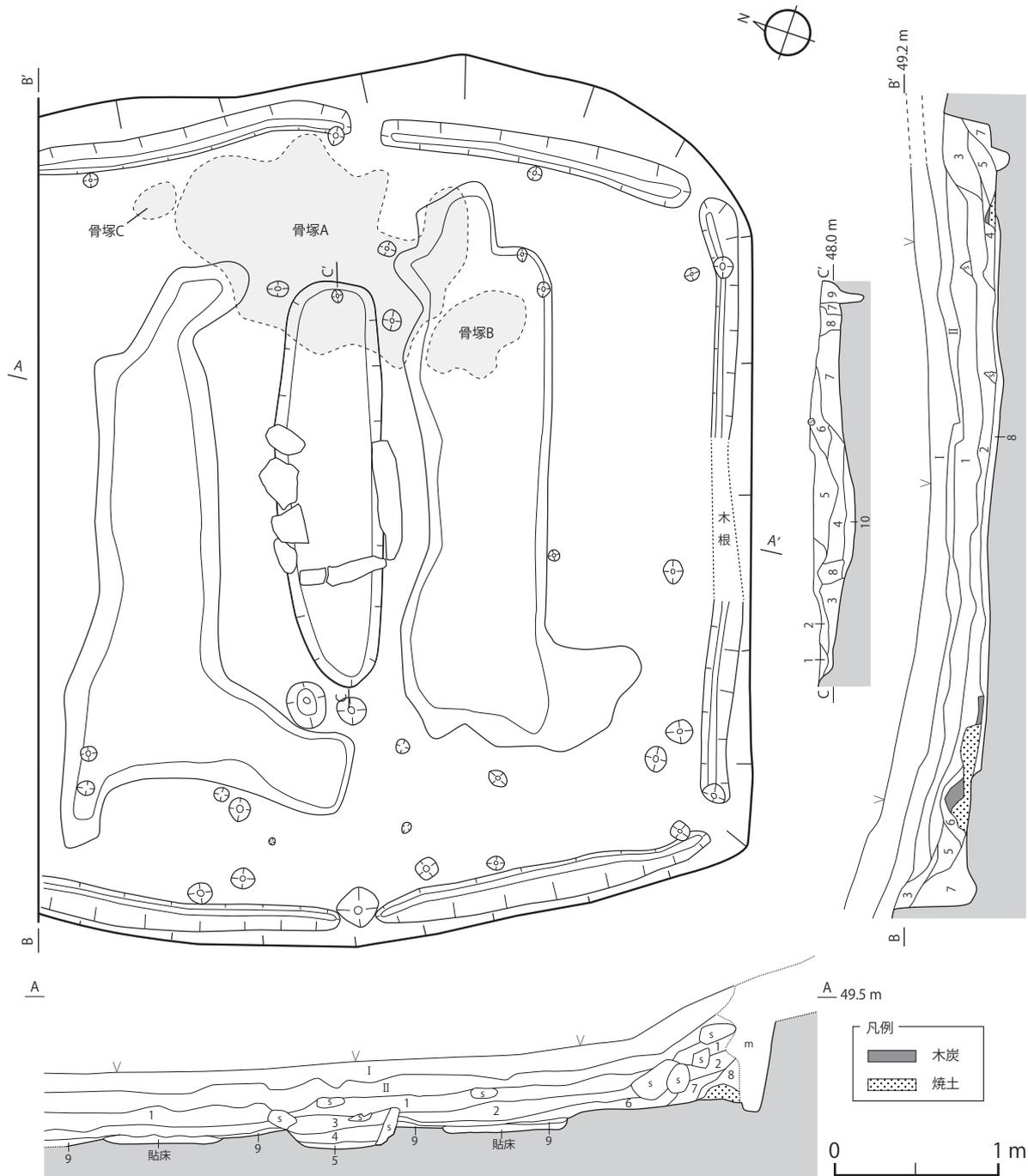
一方、貼床に囲まれた中央部からは長軸約2.5 mの長楕円形の掘り込みが検出され、その中心には東側を開口するように角礫を組み上げた石組炉が構築されていた。小規模な住居にしては炉が大きく、石組炉の両側には玄武岩質の黒色海砂を充填し、囲炉裏的な構造をとっている点が特徴的である。この海砂が充填された掘り込み（以下、囲炉裏）内には焼土が無く、柱穴も検出されていることから石組炉とは異なる機能を有していたと推察する。

また、竪穴の構造に関する痕跡としては柱穴と周溝が検出された。柱穴には径が小さく、深さは3cm程度のもの（第7図24・25・26）も含まれるが、内部に柱状の炭化材が残存していたため小規模ではあるが柱穴として扱った。柱穴配列を見るかぎり、主に奥壁側で2本1対となっている箇所（第7図1・4、3・5、6・15、18・31、19・30、32・33）がみとめられる。このような配列となる理由としては、10 mを超える大型の竪穴の場合は1つの柱穴に複数本の柱をまとめて立てている例がみられるが、本竪穴のように5 m規模の場合はそこまでの強度は必要なく、近い距離に個別に柱を立てて対応していると考えられる。ただし、柱穴9のみ内部に少なくとも2本の炭化材が残存しており、支柱穴は複数本が同じ柱穴内に立てられる場合もあったようである。

周溝は床面外縁に竪穴の輪郭一辺につき一条めぐり、貼床と同様に重複や切り合いは確認されなかった。すなわち、竪穴の平面形や貼床、周溝などの状態から総合的に判断して、本竪穴は同一箇所での建て替えを行っていないものと推察される。

#### 骨塚（第8～12図）

本竪穴では北東壁側の広い範囲に3基の骨塚が遺されていた。まず、最も規模の大きい骨塚Aは約1.8 mの範囲に分布し、ヒグマの掌先・足先の部位を主体として構成されていた。出土時には骨塚Aの上部に黄褐色土が5 cmほど堆積しており、壁の埋め土あるいは屋根上にあった土が倒壊に伴ってなだれ込んだものと考えられる。よっ



TR5 Pit3 (5号竪穴) 土層説明

A-A' ライン

1. 黒褐色土+灰褐色土、粘性なし、しまりなし
2. 黒褐色土+暗黄褐色土 (木炭を多く含む)、粘性弱、しまり普通
3. 黒色砂層、粘性なし、しまりなし
4. 黒褐色土層、粘性弱、しまり弱
5. 赤褐色粘土、粘性なし、しまり強
6. 暗褐色土+暗黄褐色土、粘性弱、しまり弱
7. 暗褐色土、粘性弱、しまり強
8. 暗黄褐色土、粘性強、しまり普通
9. 黒褐色土 (焼土粒と木炭を含む)、粘性普通、しまり弱

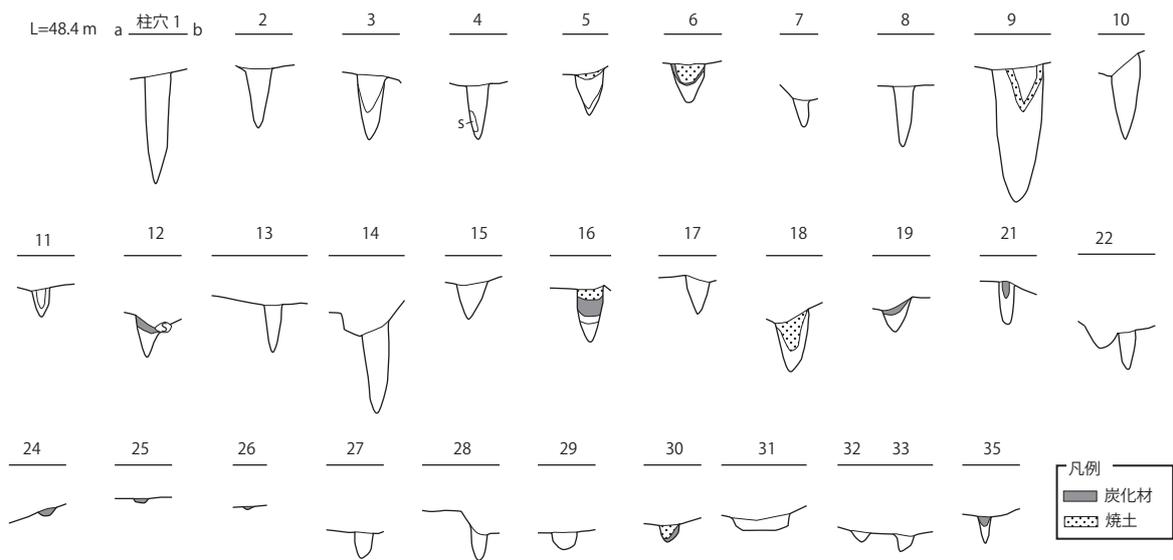
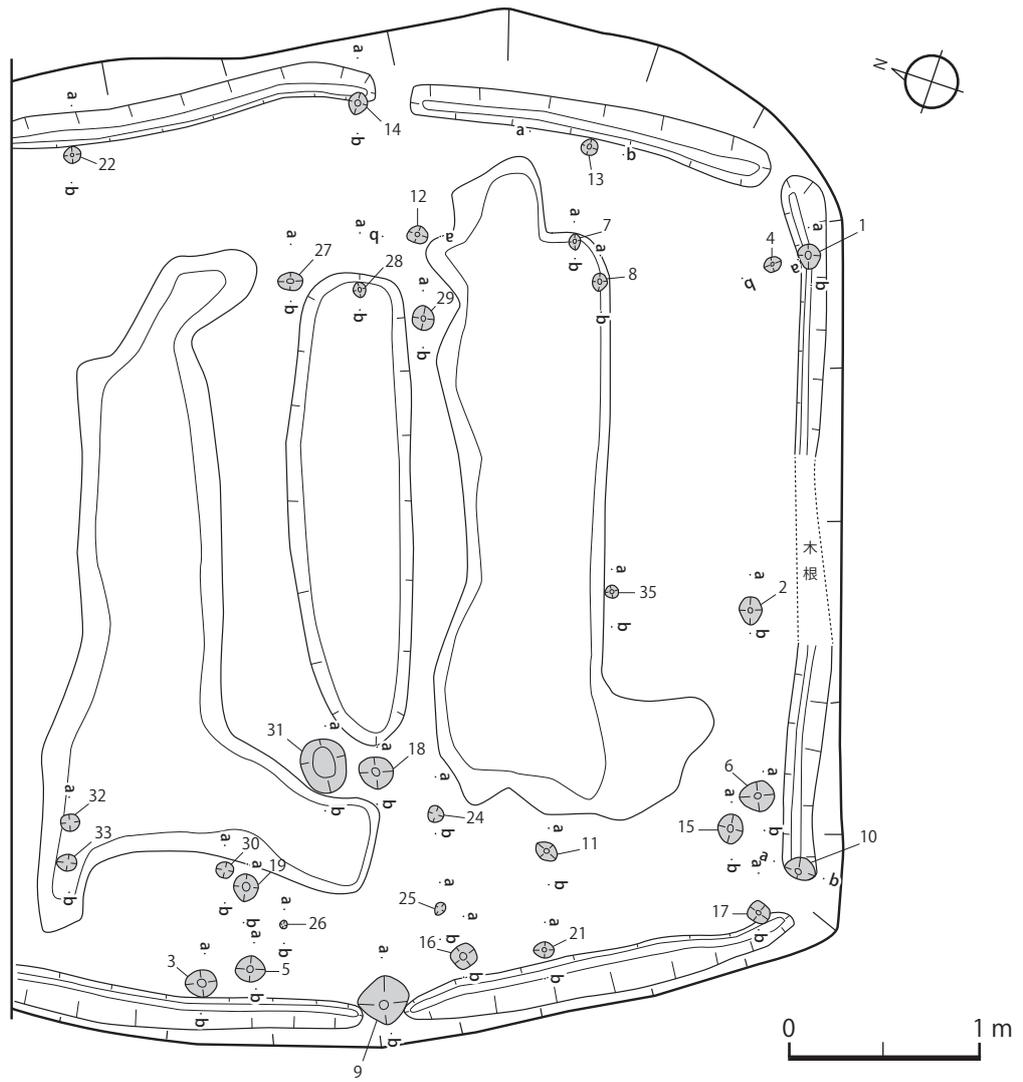
B-B' ライン

1. 黒褐色土+灰褐色土、粘性なし、しまりなし
2. 黒褐色土+暗黄褐色土 (木炭を多く含む)、粘性弱、しまり普通
3. 暗褐色土、粘性弱、しまり弱
4. 暗褐色土+黄褐色土、粘性普通、しまり普通
5. 暗黄褐色土、粘性強、しまり強
6. 黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまり普通
7. 黄褐色ローム、粘性強、しまり普通
8. 黒褐色土 (焼土と木炭を含む)、粘性普通、しまり弱

C-C' ライン

1. 茶褐色粘土、しまり強い
2. 黒色砂、粘性なし、しまりなし
3. 茶褐色砂 (焼骨を多数含む)、粘性強、しまり弱
4. 黒色砂層、粘性なし、しまりなし
5. 黄褐色土+赤褐色土、粘性普通、しまり普通
6. 黒褐色砂層、粘性なし、しまりなし
7. 茶褐色砂層、粘性なし、しまりなし
8. 暗褐色土、粘性普通、しまりなし
9. 暗褐色土、粘性普通、しまり普通 (柱穴 28)
10. 赤褐色土、粘性なし、しまり強 (レンガ状)

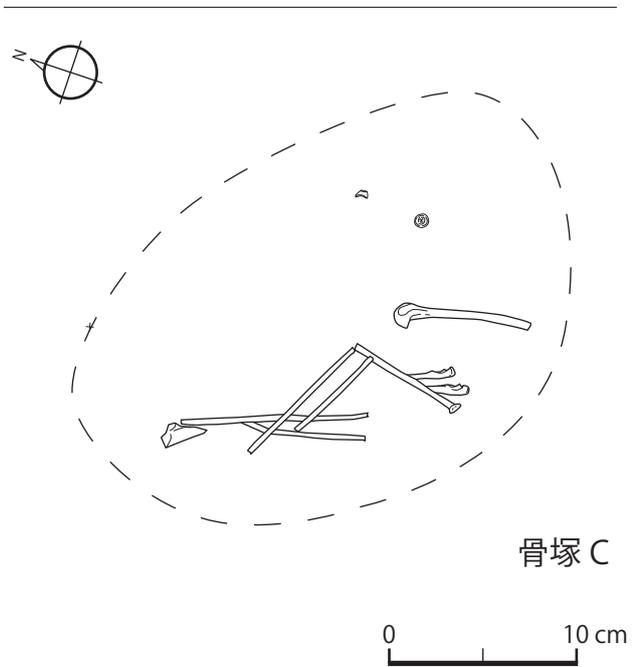
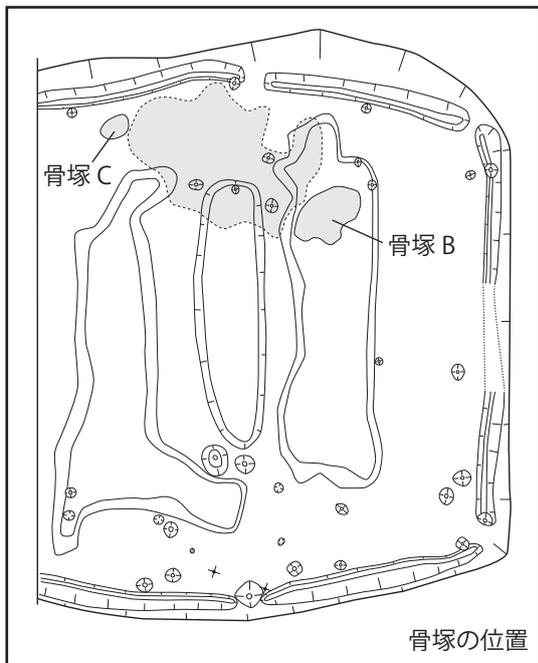
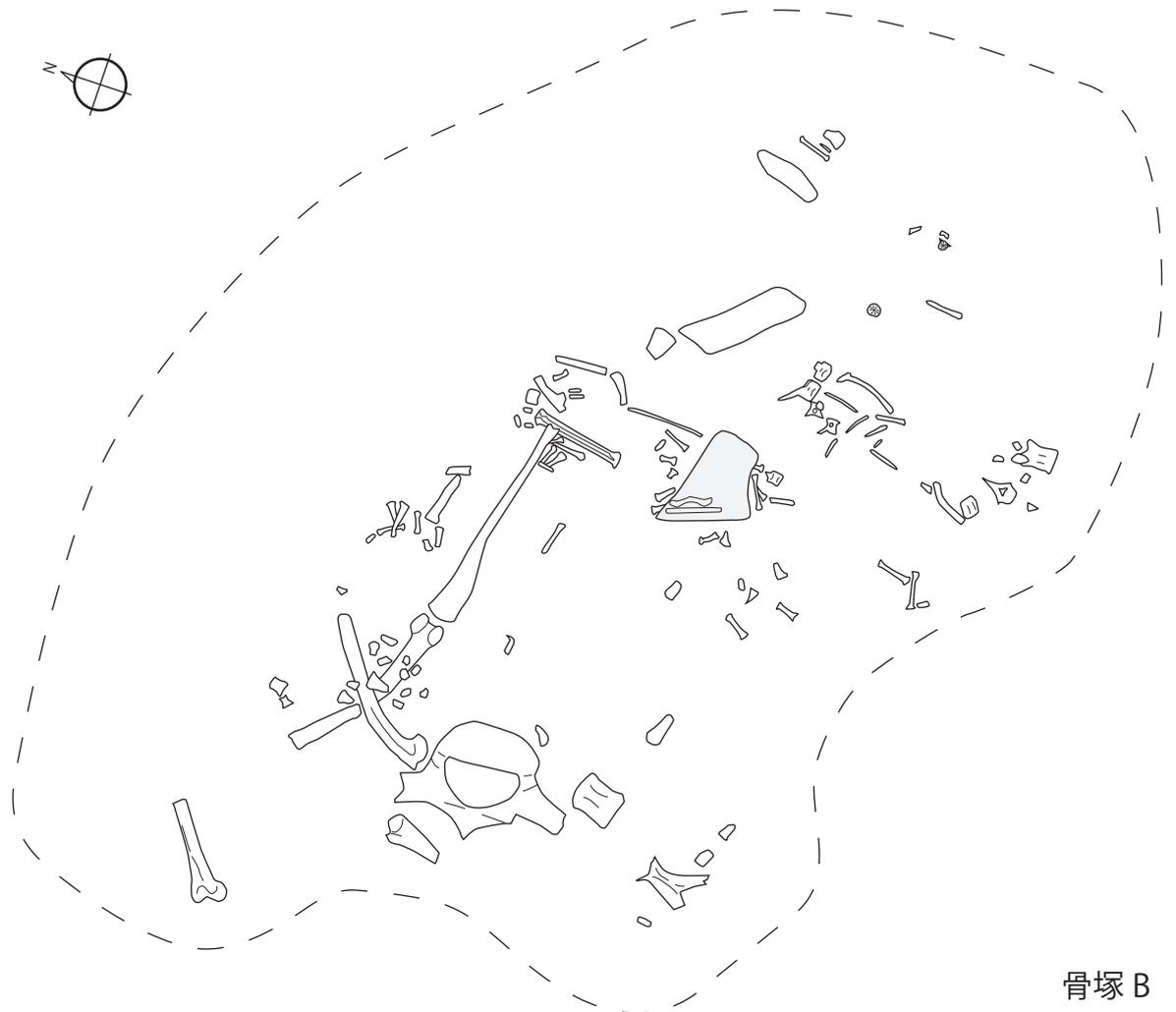
第6図 5号竪穴(TR5-Pit3)



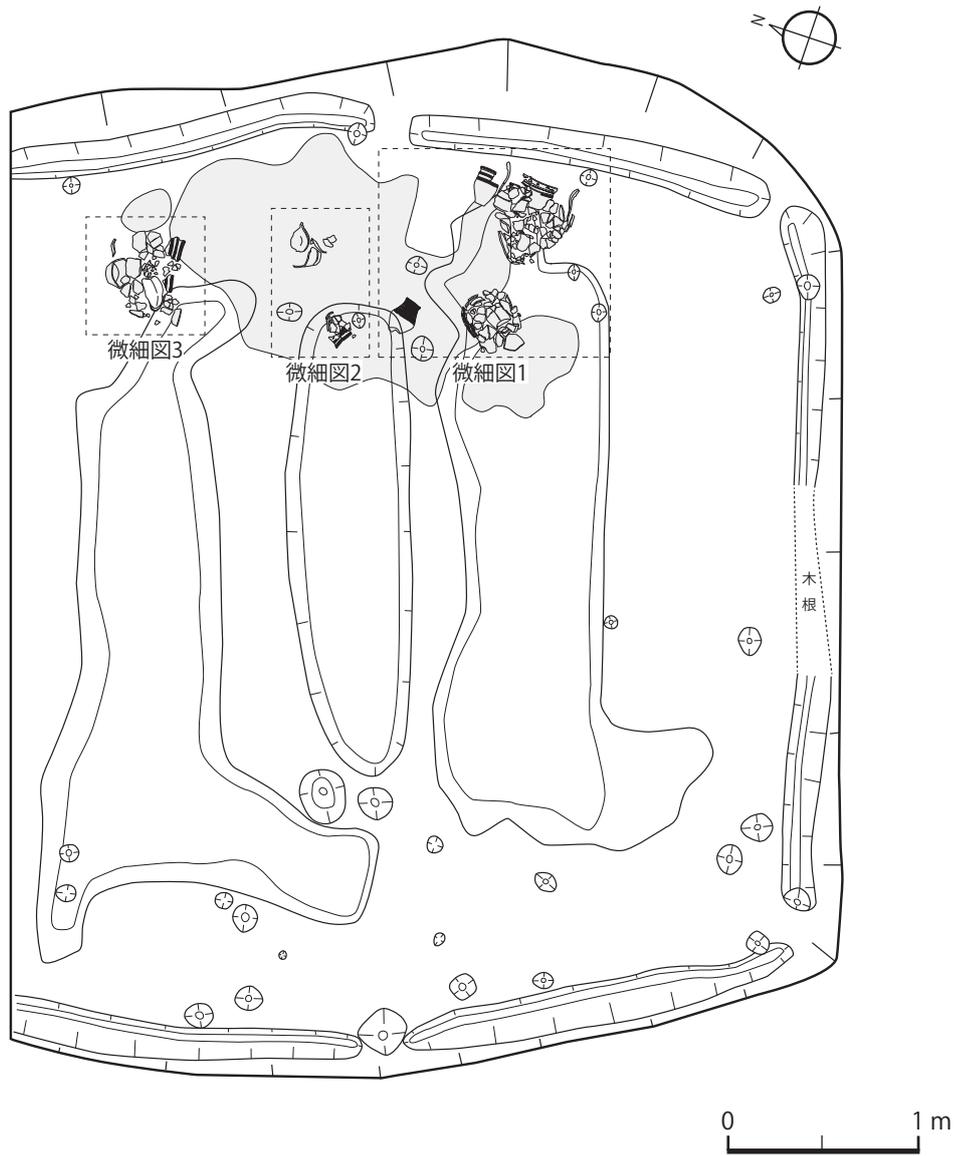
第7图 5号竖穴(TR5-Pit3)柱穴配置图



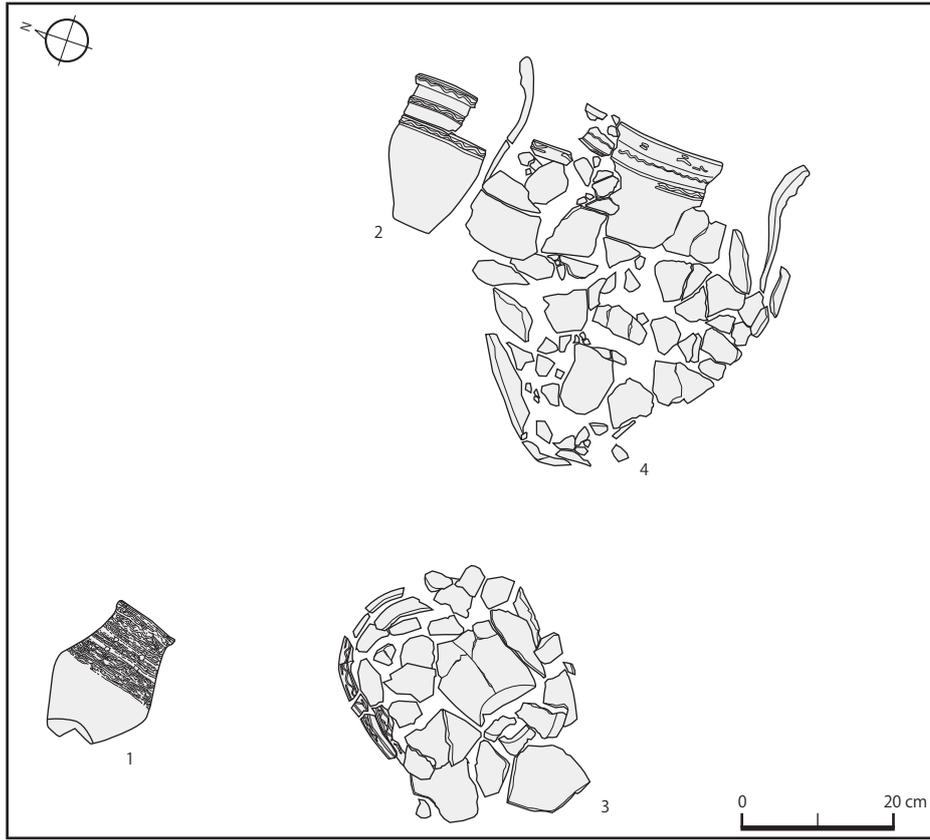
第8図 5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚A 微細図



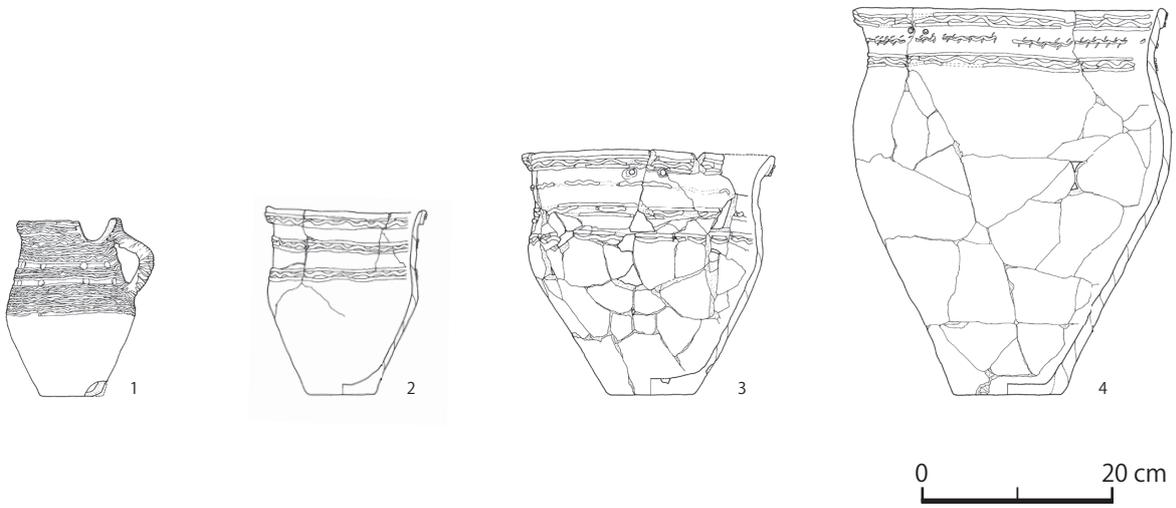
第9図 5号竖穴(TR5-Pit3)骨塚B・C 微細図



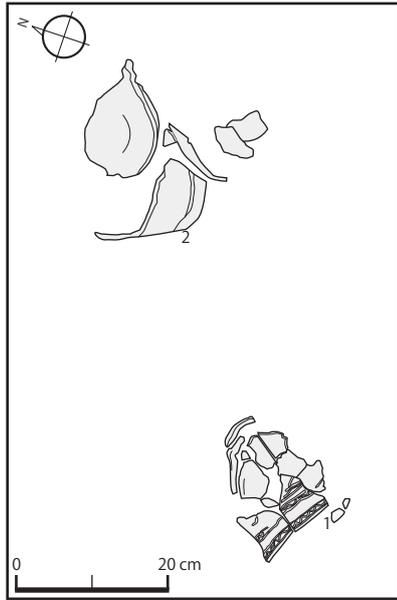
第10図 5号竖穴(TR5-Pit3)骨塚出土土器 位置図



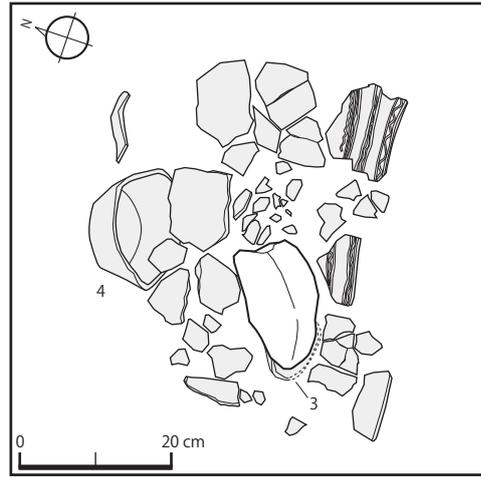
微細図 1



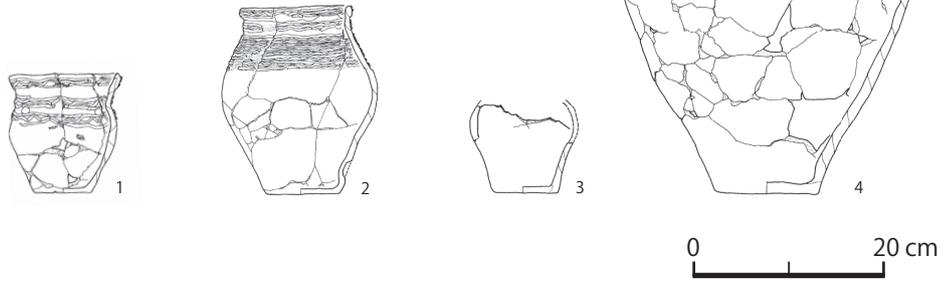
第11図 5号竖穴(TR5-Pit3)骨塚出土土器 微細図(1)



微細図 2



微細図 3



第12図 5号竪穴 (TR5-Pit3) 骨塚出土土器 微細図(2)

て、集積されていた動物遺体が住居倒壊の際に分散し、範囲が囲炉裏や貼床上まで及んだものと推察される。また、一部では骨塚下に板材が敷かれている箇所が確認された点も留意すべきである。

一方、ヒグマを主体とする骨塚Aに対し、やや南側の貼床上に位置する骨塚Bはキタキツネやエゾクロテンなどの中型食肉目を主体としたものであった。骨塚Bは貼床に接地し、規模は0.5 m以下である。位置に関しては骨塚Aの集中部からやや離れた位置に集積が認められたため、独立するものとして扱った。

次いで規模の小さな骨塚Cは骨塚Aの北側に位置するが、保存状態が極めて悪く、現場段階では粉化した動物骨の中に小動物の四肢骨と魚骨がかろうじて確認出来る程度であった。そのため、本来の構成については不明確である。

以上のように規模や内容の異なる3基の骨塚がすべて開口部側から検出されているわけであるが、その周囲には約8個体の完形のオホーツク土器が伴っていた。これらの土器にはセット関係が見られ、大型土器と中型もしくは小型の土器が揃って出土する傾向がうかがえる。具体的には第11図2・4が同一方向に口縁を向けて置かれ、1は把手部が下になり、底部に穿孔があることから1・3はおそらく倒置された状態で置かれていたと推察される。また、第12図3・4も同一方向に口縁を向けて配置されている状況が確認された。

つまり、本竪穴では多数の完形土器や骨塚すべて開口部側に集中し、奥壁部には完形土器はおろか一切の骨集積も認められないという偏りが認められるのである。この特異な状況については3章総括の中で改めてふれることとしたい。また、これらの骨塚を構成する動物遺体については第3章8節の分析を参照されたい。

#### 床面炭化材（第13図）

竪穴床面から多量の床板材、周溝からは壁材や柱材が検出された。第13図に示されるように、一部では貼床上にも床板材が残存していることから、広い範囲が板敷きであった可能性があげられる。これらの床板材の木目を観察したところ、ほとんどの床板材が近接する壁面と直角方向に木目が向いているが、骨塚Aの下に敷かれた板材のみ例外であった。この状況は骨塚Aとの関連で考える必要があり、意図的に木目の方向を変えていた可能性や何らかの構造物があったことも考えられる。

また、板材は床面だけでなく壁面に沿って立った状態

で検出されており、土留め用であったと推察される（第13図761・828・829・831・832・833・3540）。このように床面炭化材は大きく床板材と壁材に分けられるが、例外的に炉の木杵ともとれる丸太材（第13図644）や樹皮（第13図274・647・796）も含まれる。

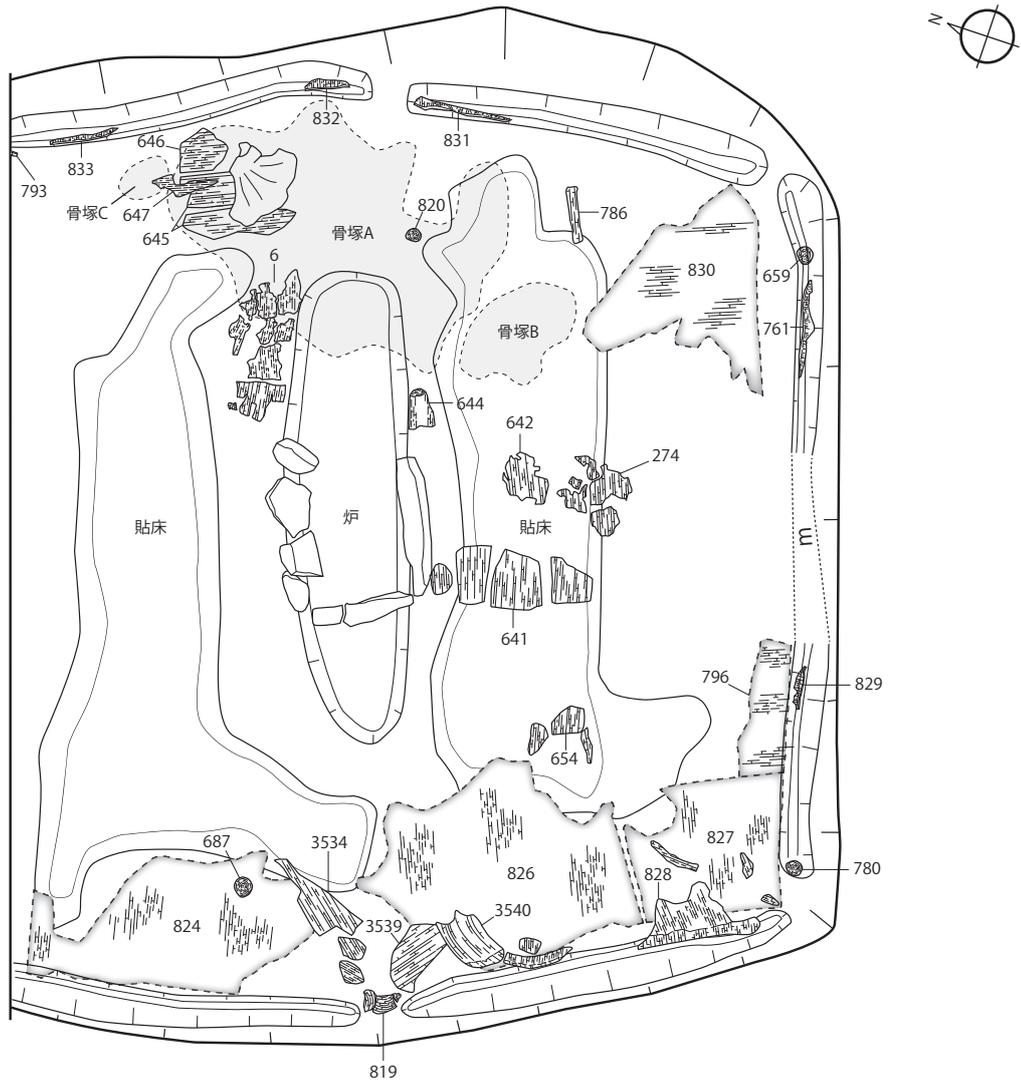
これら多くの材は比較的保存状態が良好であったが、床板材などは継ぎ目などが現場で確認出来ない程に灰化しており、炭化材範囲を一括で図化するほかない状況であった（第13図796、824、826、827、830）。そのため、保存状態の悪い炭化材については比較的状态の良い部分をサンプリングし、その他の炭化材と合わせて樹種同定を実施した。同定結果については第3章5節に詳細を掲載するため、本節ではその概要を記す。

床面炭化材のうち最も多く利用されていたのがモミ属であり、遺跡周辺の環境からトドマツと推察される。主に南北の壁材（第13図828・831・833・3539・3540）や貼床上の床板材（第13図641・642・654）などに利用され、骨塚Aの下にも板材として敷かれている（第13図646）。さらに、主柱穴9内や柱穴12からも検出されており、柱材としても使用されていることから場所を問わず、最も一般的に用いられていたものと捉えられる。

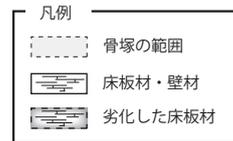
次いで多いのはイチイである。イチイは反りや割れが少なく、柱材としても十分な強度を保持している。そのため、本竪穴でも主として柱材として利用されている（第13図659・687・780）。この他に針葉樹だけでなく、カツラ、コナラ属コナラ節、クルミ属、ニレ属、トネリコ属など広葉樹も利用されているが、主に遺跡の周辺に多く生育していた加工が容易なモミ属（トドマツ）やイチイを建築材として選択していたと考えられている（第3章5節）。

#### 形成年代

床面で検出された柱材2点についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、2点とも一致した結果を示しており、1 $\sigma$  暦年代範囲が8世後葉～9世紀前葉、2 $\sigma$  暦年代範囲で8世紀中葉～9世紀後葉という結果であった。この結果は床面出土土器群の時期ともほぼ整合的といって良いだろう。ただし、測定資料が最終形成年輪ではないため、古木効果の影響も考慮し、1 $\sigma$  暦年代範囲よりもやや新しい年代となる可能性も考えられる。



番号は樹種同定した炭化材(第3章5節を参照)



第13図 5号竪穴(TR5-Pit3)床面炭化材 位置図

### 3. 5号竪穴上層配石遺構 (TR5)

本遺構はF-18・19、G-18・19区に位置する。5号竪穴を掘削中に覆土中から検出されたものであり、当初は竪穴の屋根上にあったレキが竪穴の倒壊に伴って落下したものと考えたが、レキは一切被熱しておらず、竪穴中央だけでなく壁面に沿って扁平なレキが敷かれていることから5号竪穴とは別の遺構と認識した。面的な広がりを確認するべく調査を継続した結果、配石に伴って複数の完形土器群が出土したことからも、5号竪穴廃絶後に構築された配石遺構であると認定した。

#### 規模・形態 (第14図)

配石は約4 mの範囲にわたって認められた (第14図)。検出面の深さは地表面から約20～30 cmであり、5号竪穴の床面からは明らかに離れて存在していた。主に扁平な角礫を用いており、直径30～40 cm程度のものが主体となって構成されている。これらのレキはチャンコツ崎の上では採取できない岩石 (安山岩) であり、外部からの持ち込みが想定される。

レキの配置を見るかぎり、中央部だけでなく南側の斜面にも広がっており、一見雑然と配されているようにとれる。しかし、下層に5号竪穴の骨塚が存在する位置にはレキの集中が存在せず、全く範囲が重ならないことから意識的に避けて本遺構を構築した可能性が高い。したがって、本遺構が構築される際に下層の骨塚あるいはそれに伴う土器群の一部が露出していたと推察される。

#### 出土土器群 (第14・15図)

配石遺構と同一面から4個体の完形土器がまとまって出土しており、配石遺構に伴い同時に廃棄されたものと推察される (第14・15図)。これら土器群の出土地点は中央部の配石群を挟んでおおまかに東西に分かれ、東側からは大型と中型 (第15図1・3)、西側からはやや大型と小型のトビニタイ土器が出土した (第15図2・4)。配置は意識的ともとれるが、何を意図しているのかは不明である。

#### 形成年代

配石遺構と同レベルで出土した炭化材1点についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 $\sigma$ 暦年代範囲が8世紀初頭～中葉という結果であった。本来であれば5号竪穴よりも新しい年代値となるはずであるがやや古い測定値が出ており、要因としては古木効果の影響が考えられる (第3章6節)。

また、年代値とは不整合であるが、配石遺構と同一面

から完形のトビニタイ土器群 (第46図10～13) が出土しており、トビニタイ文化期に属するものと推察される。

### 4. 23号竪穴 (TR7-Pit6)

A-8、a-9、A-8、a-9区に位置する竪穴住居跡である。本竪穴はチャンコツ岬の中央付近に位置し、22号竪穴と隣接している。これら22・23号竪穴の上層にはオホーツク文化期の廃棄層が形成されており、柱状サンプルの採取および竪穴の時期確認のため1 m×3 mのトレンチ (TR7) を設定し調査を実施した。以下、竪穴の形態および22号竪穴と廃棄層との関係について記載する。

#### 規模・形態 (第16図)

本竪穴はオホーツク文化終末期の竪穴住居跡である。地表面での観察から規模は7 m程度で、軸方向はおおよそ22号と同じ北東方向と考えられる。床面までの深さは掘削部で地表面から約0.8～1.1 mと深く、上層に廃棄層が厚く堆積していることがうかがえる。

これらの廃棄層 (1～3層) の下層には黄褐色土を基本とする土層 (4～7層) が厚く堆積しており、22号竪穴構築時の掘り上げ土と考えられる。それらを除去すると23号竪穴の床面から魚骨集中が検出され、わずか1片ではあるが魚骨中から貼付文系のオホーツク土器も出土している。

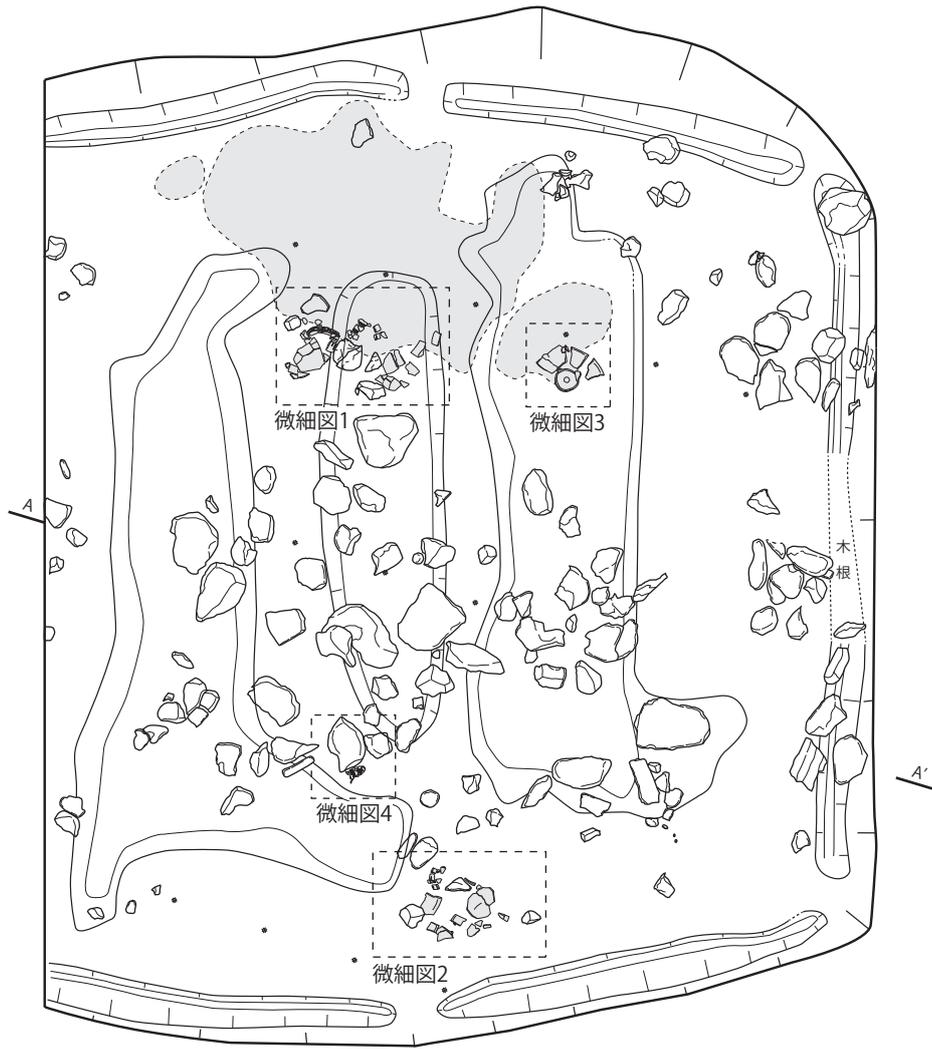
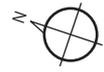
竪穴の一角しか調査していないため詳細な内容は不明であるが、貼付文系のオホーツク土器の出土および周溝の存在と合わせてもオホーツク文化期の竪穴住居跡であることは疑いない。

#### 切り合い関係

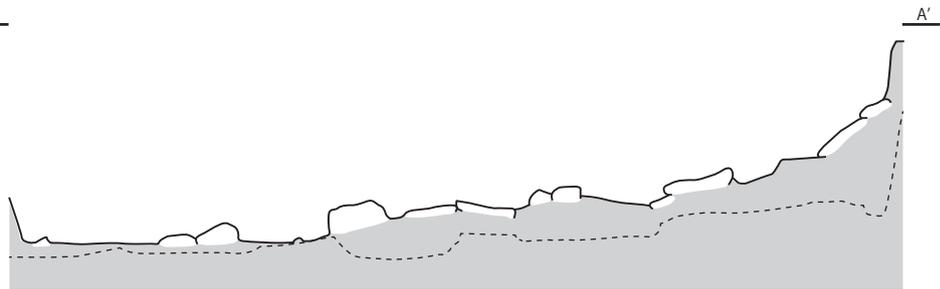
調査の結果、23号竪穴には22号竪穴の掘り上げ土と考えられる黄褐色土の堆積が確認された。したがって、23号廃絶後に22号が構築されたと推察される。さらに、廃棄層は両竪穴にまたがるように堆積していることから、22号竪穴の廃絶後間もなく形成されたことがわかる。つまり、23号→22号→廃棄層の順に遷移していると推察される。

#### 形成年代

床面の魚骨集中から得られた炭化種実1点についてAMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 $\sigma$ 暦年代範囲が7世紀初頭～中葉という結果であった。床面出土土器はオホーツク文化後期～終末期頃のものであるが、一方で年代値としては土器の示す時期よりも古い



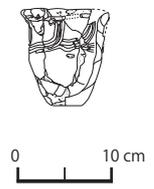
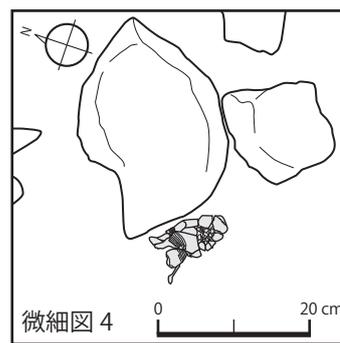
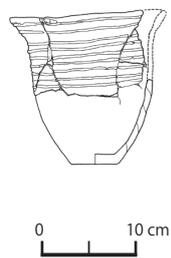
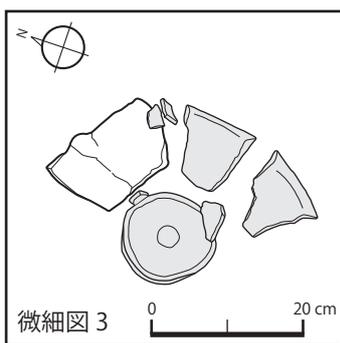
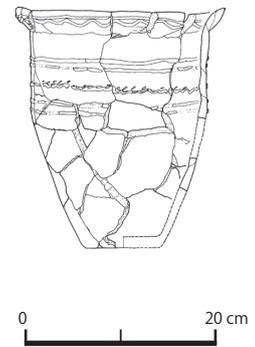
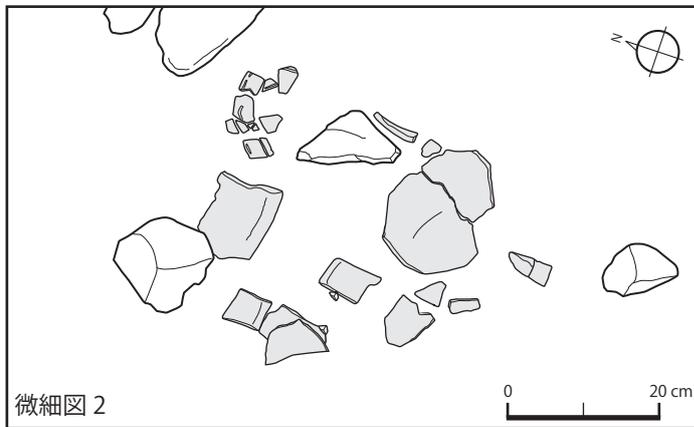
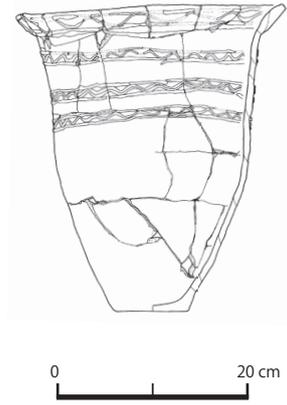
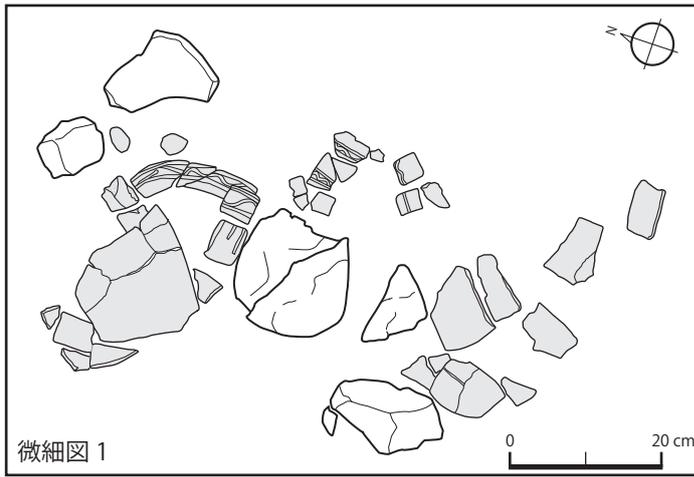
49.8m A



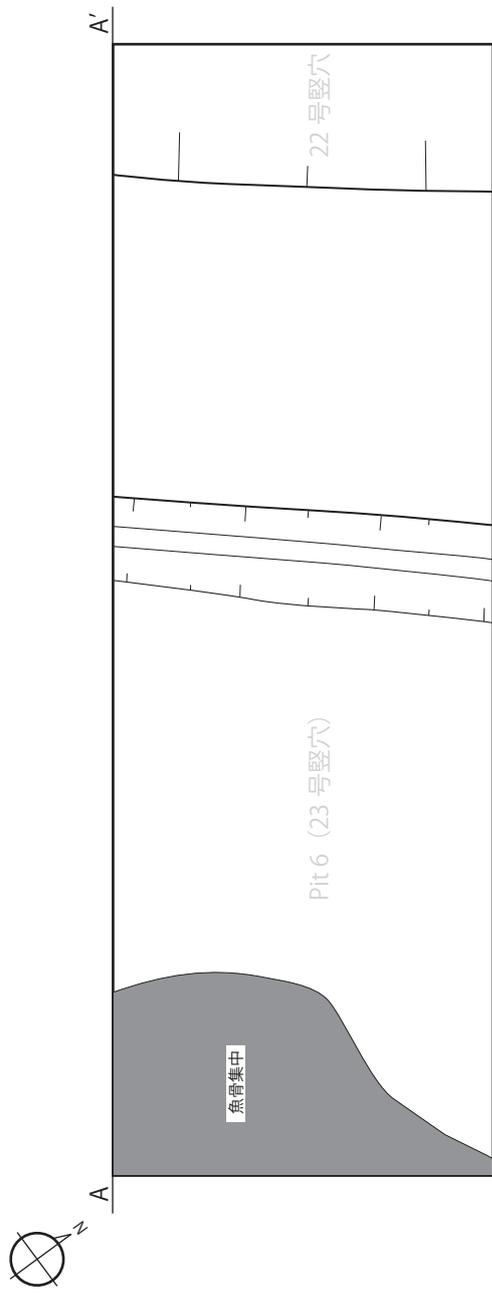
配石遺構南北 エレベーション (竖穴床面は想定ライン)



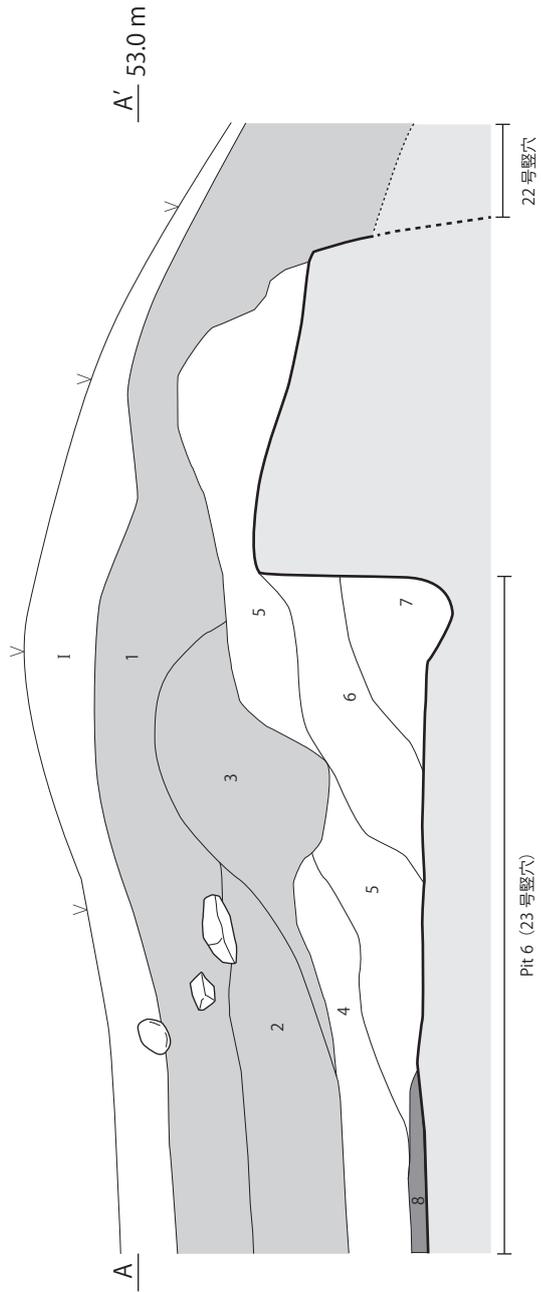
第14図 5号竖穴上層配石遺構 (TR5)



第15図 5号竪穴上層配石遺構(TR5)出土土器 微細図

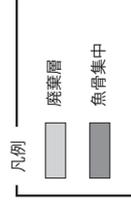


位置図



TR6 Pit 5 23号竖穴土層説明

1. 廃棄層：暗褐色土+海砂、粘性無し、しまり無し
2. 廃棄層：褐色土+海砂（1より細粒）、粘性無し、しまり無し
3. 廃棄層：白色砂（焼骨片含む）+暗褐色土、粘性無し、しまり無し
4. 22号掘り上げ土：暗黄褐色土（廃棄層の骨片を部分的に含む）
5. 22号掘り上げ土：暗黄褐色土、粘性普通、しまり強
6. 22号掘り上げ土：黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまり強
7. 22号掘り上げ土：黄褐色土、粘性普通、しまり強
8. 魚骨集中



第16図 23号竖穴 (TR7-Pit6)

値が得られている。前述のように、本竪穴が22号竪穴や廃棄層よりも古いことは切り合い関係からも明らかであるが、7世紀頃まで遡るといのは少々疑問の残る点であり、今後再検証すべき課題である。

## 5. 22・23号竪穴上層廃棄層 (TR7)

22・23号竪穴の窪地に形成されたオホーツク文化期の廃棄層である。

平成27年度に遺跡内を踏査した際、地表面に多量の魚骨が露出していたことから、一帯を廃棄場と認識し、平成28年度に調査を実施した。調査にあたっては廃棄層の分層が困難であったため、東西方向をA、B、南北方向を1～6に分け、50 cm角の小区を設定し、コラムサンプルを採取した。最も良好なコラムサンプルが得られたA-1・B-1については動物遺体の同定を委託業務として実施したため、結果は第3章8節を参照されたい。

### 堆積状況 (第17図)

1層を除去すると暗褐色土と海砂から成る廃棄層(1層)が20～30cm程堆積しており、22号竪穴および23号竪穴の窪地を埋める形で堆積がみとめられた。23号竪穴の窪地の方が明らかに浅く、平面形も不明瞭なことから23号竪穴に集中的な廃棄を行ったと推察される。

続く2層は層厚25cm程で、海砂がより細粒となり土壌も褐色であるため、1層と区別して扱った。1・2層はいずれも大量の魚骨を包含し、貼付文系のオホーツク土器片なども多く出土している。

さらに下層には白色砂と暗褐色土からなる3層が堆積し、他の廃棄層より焼骨片が多く含んでいる印象を受けた。層厚は最大45 cm程で、Aライン断面図では盛り上がるような堆積状況が認められることから、局所的な廃棄に伴うものと推察される。また、3層の上面から奈良時代の貨幣である神功開宝1枚が出土しており、当該期に廃棄層中に混入にしたものと考えられる。

### 形成年代

廃棄層中から出土した炭化種子1点について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1σ暦年代範囲が8世後葉～9世紀前葉という結果であった。この結果は、廃棄層中より出土した神功開寶の流通時期とも整合的であり、本遺跡の年代幅を考える上でも重要な要素といえる。

## 6. 1号墓 (TR4-Pit1)

調査グリッドB-10区に位置する土坑墓である。集落

内の平坦地利用を探るべく設定したトレンチ (TR4) 内から検出されたものであり、墓の検出は初例であったため内容解明を目的として完掘することとした。調査にあたっては、南北方向をA-A'、東西方向をB-B'としてセクション面を設定し、埋土の状況観察や記録等を行った。以下、墓の形態や時期等について記載する。

### 規模・形態 (第18・19図)

N-64°-Eを軸とするオホーツク文化期の土坑墓である。平面形は不整形であるが、坑底は意識的に隅丸長方形に掘削されている。全体規模は長軸約1.5 m、短軸1.3 mであるが、坑底が段状に深くなる構造であった。坑底面は長軸約1.0 m、短軸約0.6 mとひと回り小さくなる。掘り込み面はⅡ層中、最深部までの深さは約45 cmであり、底面は平坦で段状に緩やかに立ち上がる。

埋土は1～5層まで分層でき、暗褐色土と黒色土から成る2層は遺体の腐蝕に伴う土層沈下がみられる。

また、墓坑周辺に配されたレキは直径約5 cmのものから40 cm程のものまで大小様々であるが円礫を用いる点に関しては一貫性がみられる。平面分布範囲は約1.5～2.0 m、墓坑の外部にまで広がっている。一方、垂直分布は墓坑上から2層中までであり、土層の沈下に伴って墓坑内に落ち込んでいる様子が確認された。

### 遺物分布 (第20図)

第20図は掲載遺物の出土地点を示したものである。平面分布を見るかぎり、墓坑の範囲内に分散する傾向がみとれる。完形土器は墓坑中央よりやや西側から出土し、歯列の出土地点の真上にあたる。これより、完形土器は被葬者の頭部に被せられた状態(被甕)であったと推察される。また、人骨の周囲からは鉄製針1点が出土している。一方で、坑底から出土する例の多い刀子に関しては逆に北側の覆土上層から出土しているため、埋葬後に置かれたか混入した可能性も考えられる。

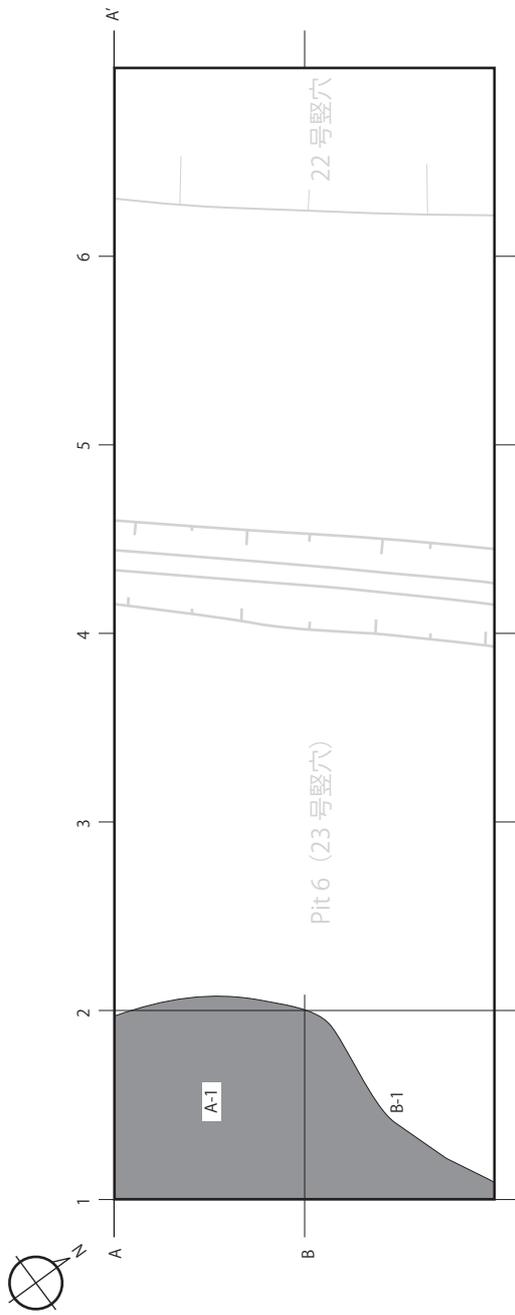
### 埋葬遺体 (第20図)

頭位は被甕の位置および人骨(歯)の出土位置から判断して南西である。人骨は歯のみの出土であったため詳細な埋葬姿勢は不明であるが、墓坑の規模と被甕および人骨(歯)の出土地点から屈葬と推察する。

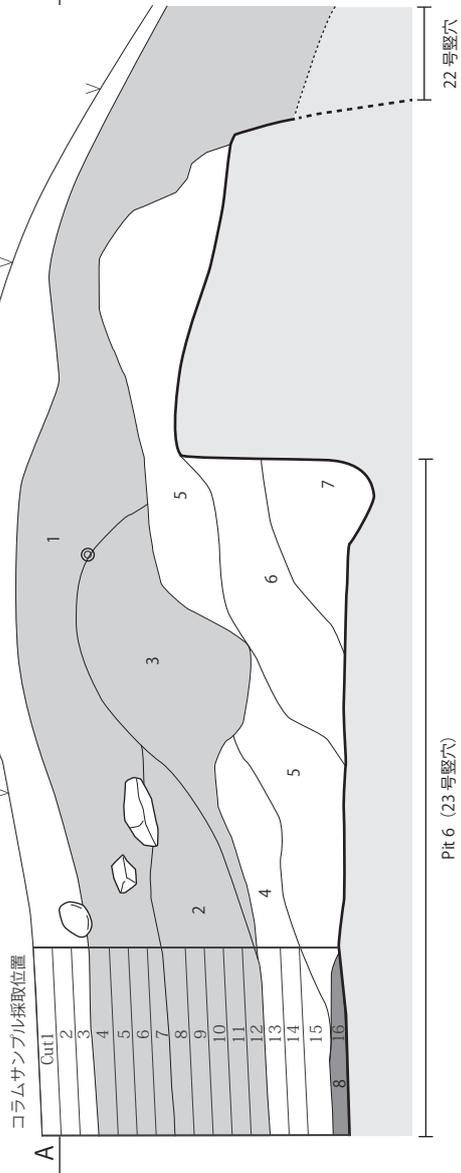
また、出土した人骨(歯)は摩耗が弱く、年齢は20歳に達していたかどうかという分析結果であった(第3章7節石田)。

### 形成年代

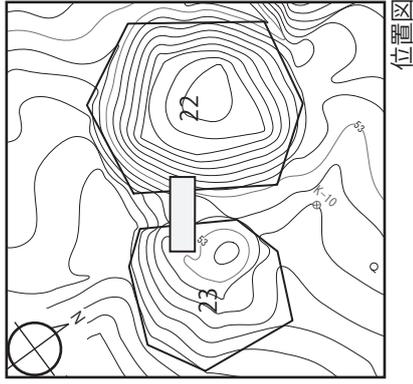
出土土器(第53図3)の内面付着炭化材1点について



コラムサンプル採取位置  
A' 53.0 m

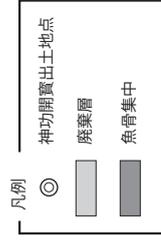


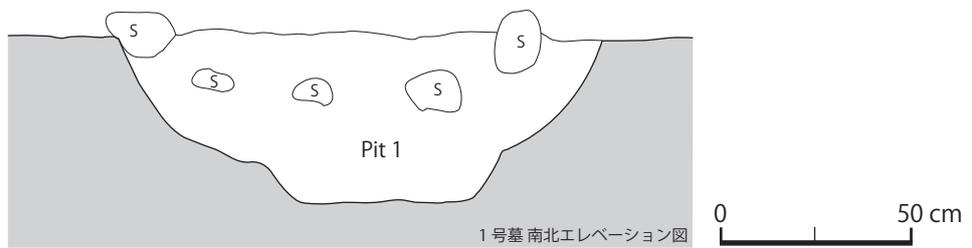
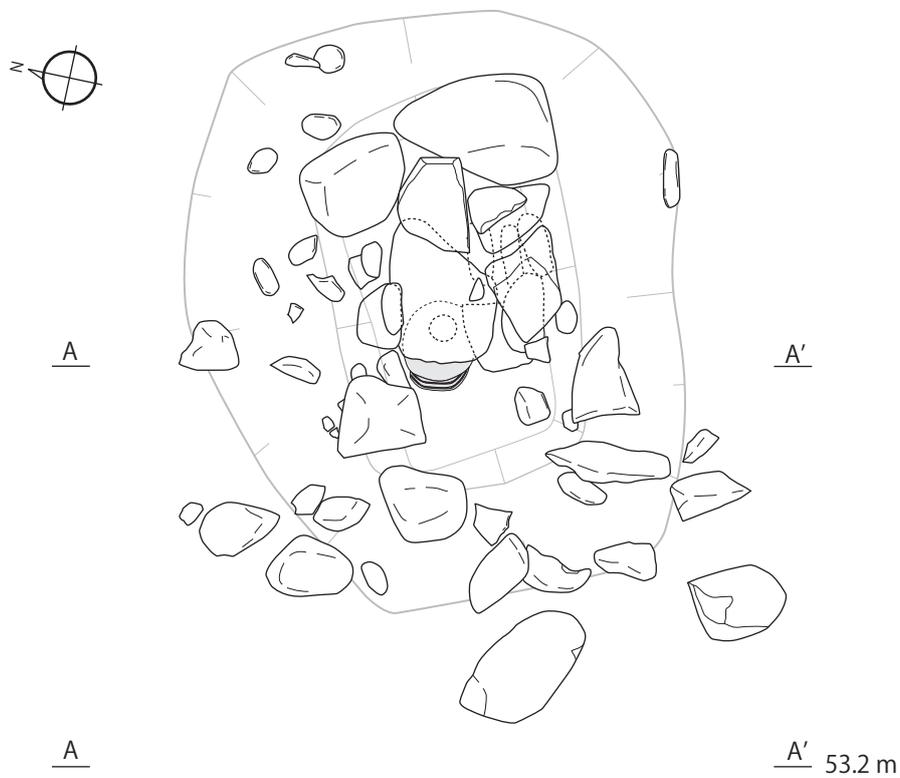
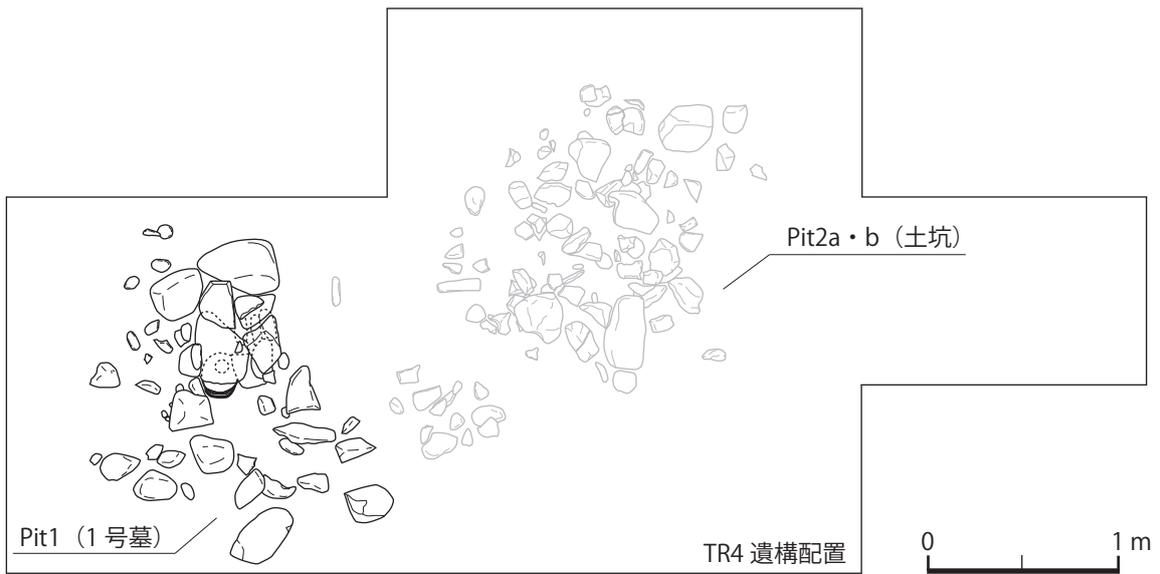
第17図 22・23号竖穴上層廃棄層 (TR7)



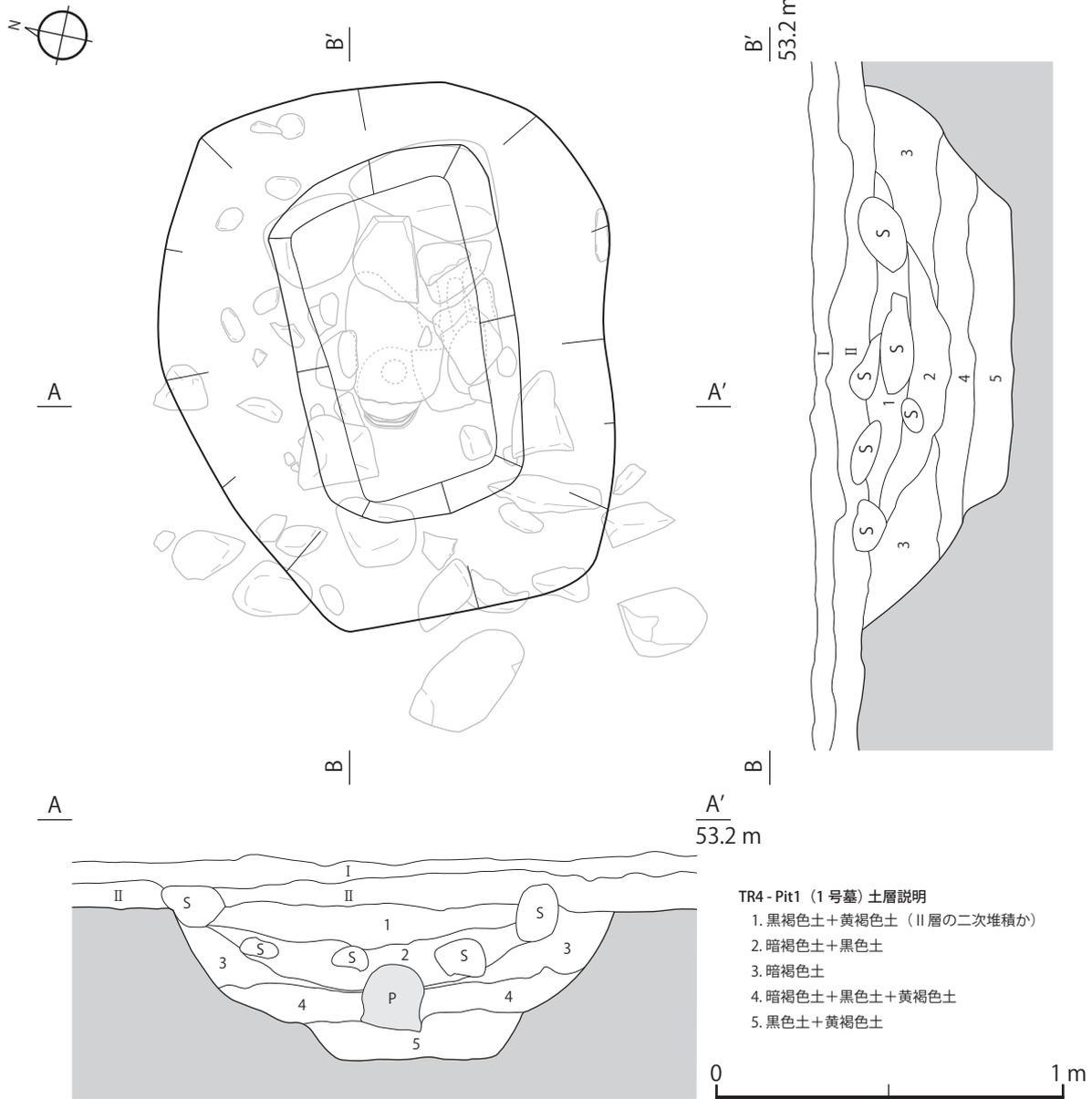
TR6 Pit 5 23号竖穴土層説明

1. 廃棄層：暗褐色土+海砂、粘性無し、しまり無し
2. 廃棄層：褐色土+海砂 (1より細粒)、粘性無し、しまり無し
3. 廃棄層：白色砂 (焼骨片含む)+暗褐色土、粘性無し、しまり無し
4. 22号堀り上げ土：暗黄褐色土 (廃棄層の骨片を部分的に含む)
5. 22号堀り上げ土：暗黄褐色土、粘性普通、しまり強
6. 22号堀り上げ土：黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまり強
7. 22号堀り上げ土：黄褐色土、粘性普通、しまり強
8. 魚骨集中

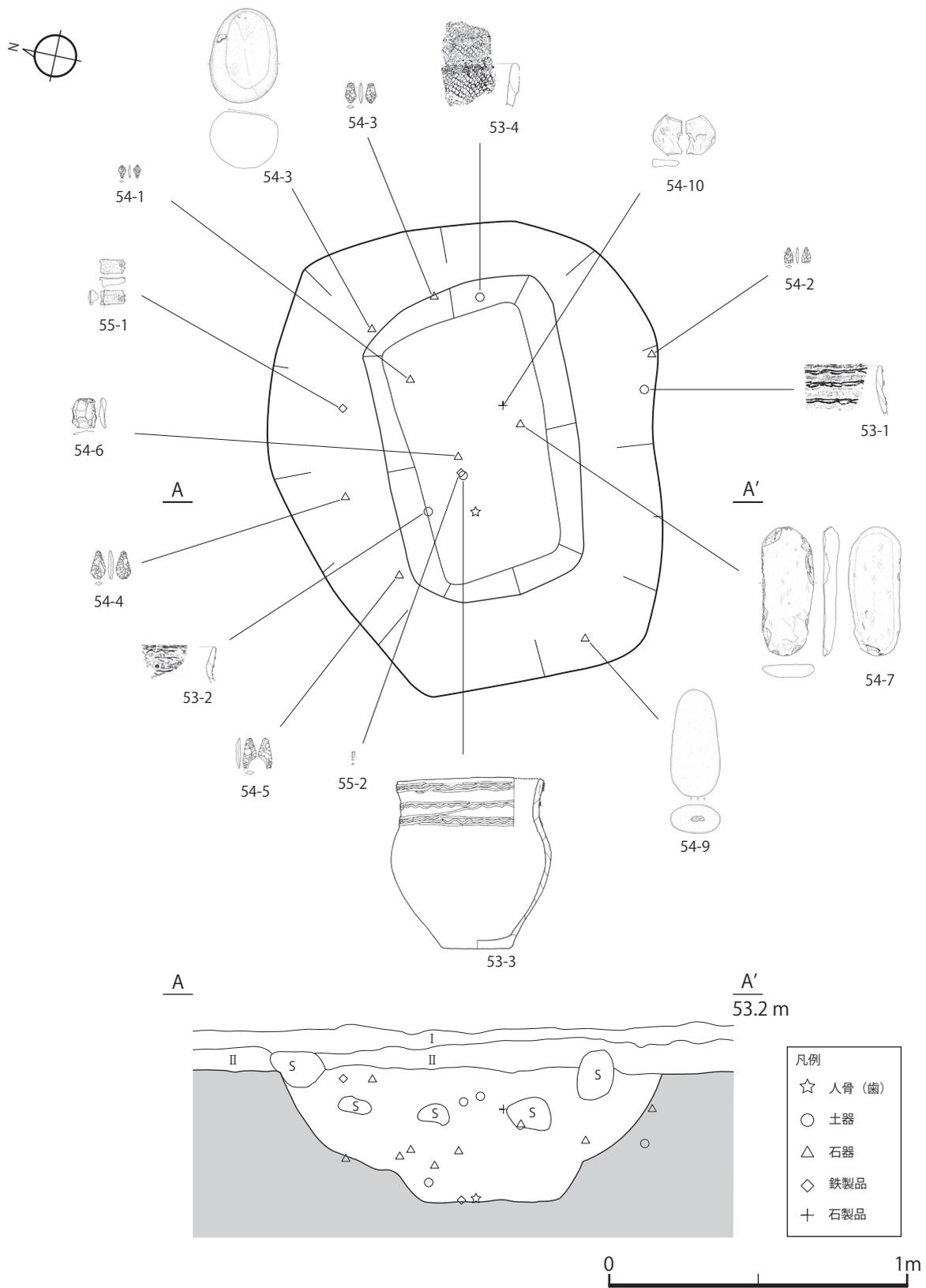




第18図 TR4遺構配置および1号墓積石分布図



第19図 1号墓 (TR4-Pit1)



第20图 1号墓(TR4-Pit1)揭载遗物分布图

て、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 $\sigma$ 暦年代範囲が5世後葉～6世紀前葉という結果であった。この結果は出土土器の時期と不整合であり、オホーツク文化前期に頃相当する。年代値が古く出た要因としては、土器内で煮炊きされた海産物に由来する海洋リザーバー効果が考えられる。これを受け、遺構の年代値を検証するために覆土中出土の炭化種実（クルミ核）で再測定したところ、1 $\sigma$ 暦年代範囲8世紀後葉～9世紀前葉という測定結果であった。出土土器の時期ともほぼ整合的であり、1号墓の年代は後者が信頼に値するといえよう。

## 7. 2号墓 (TR5-Pit4)

調査グリッドG-19区に位置する土坑墓である。5号竪穴の層位を確認するためにトレンチを拡張した際に検出されたものである。岬の縁辺部にあつて自然崩壊の危機に晒されていたため、5号竪穴同様に完掘することとした。調査にあつては、東西方向をA-A'、南北方向をB-B'としてセクション面を設定し、埋土の状況観察や記録等を行った。以下、墓の形態や時期等について記載する。

### 規模・形態 (第21・22図)

N-53°-Eを軸とするオホーツク文化期の土坑墓である。平面形は隅丸長方形を呈し、坑底はやや起伏がみられる。規模は長軸約0.7 m、短軸約0.5 mと小さく、掘り込み面はⅡ層中、最深部までの深さは0.5 m程度であった。立ち上がりは南西側では急に、北東側は緩やかである。埋土は1～5層まで分層でき、中でも2・3層は黄褐色土を基本とすることから、Ⅳ層に由来する墓坑の掘削土と考えられる。また、遺体の腐蝕に伴う土層の沈下もみとめられた。

さらに、墓坑上部には直径30～50 cm程の円礫が約1.3 mの範囲に円形に積まれていた。これらの使用された礫はすべて岬外からの搬入されたものであり、おそらく海岸部で採取したものと推察する。

### 遺物分布 (第23図)

出土遺物はほぼすべてが墓坑上部に分布が偏る傾向がみられる。刀子などの副葬品だけでなく人骨（歯）も墓坑上から出土しており、歯に伴ってオホーツク土器の底部と口縁部破片が出土している。また、石器の出土が全く見られない一方で、覆土中からは合計12.0 gの黒曜石の細片が確認された。1号墓とは異なる状況であり、本

遺跡の葬送儀礼を考える上で重要な要素といえる。

その他、特筆すべきは繊維製品の出土である。墓坑上部の配石除去中に確認されたもので、墓坑から若干離れた位置で発見された。繊維製品の詳細な分析結果は第3章4節を参照されたい。

### 埋葬遺体

頭位は人骨（歯）の出土位置から判断して南西である。出土人骨は歯のみであったため埋葬姿勢の復元は困難であるが、歯列の出土状況から、頭部が墓坑上に露出するような姿勢で埋葬されたと推察される。また、被葬者の年齢は永久歯の形成段階から4歳前後という分析結果であった（第3章4節）。

### 切り合い関係

5号竪穴に近接した位置で検出され、2号墓の積石の一部が竪穴の輪郭にかかっている状況が見てとれる（第21図）。5号竪穴の上屋が存在する状態ではこの位置に2号墓を構築することは不可能であることから、5号竪穴廃絶後に構築されたものと推察される。

### 形成年代

覆土中から得られた炭化種実1点について、AMS法による放射性炭素年代測定を実施したところ、1 $\sigma$ 暦年代範囲が8世前葉～中葉、2 $\sigma$ 暦年代範囲は8世紀中葉～9世紀後葉という結果であった。2 $\sigma$ 暦年代範囲でみると5号竪穴と同時期であり、出土土器の時期とも整合的である。

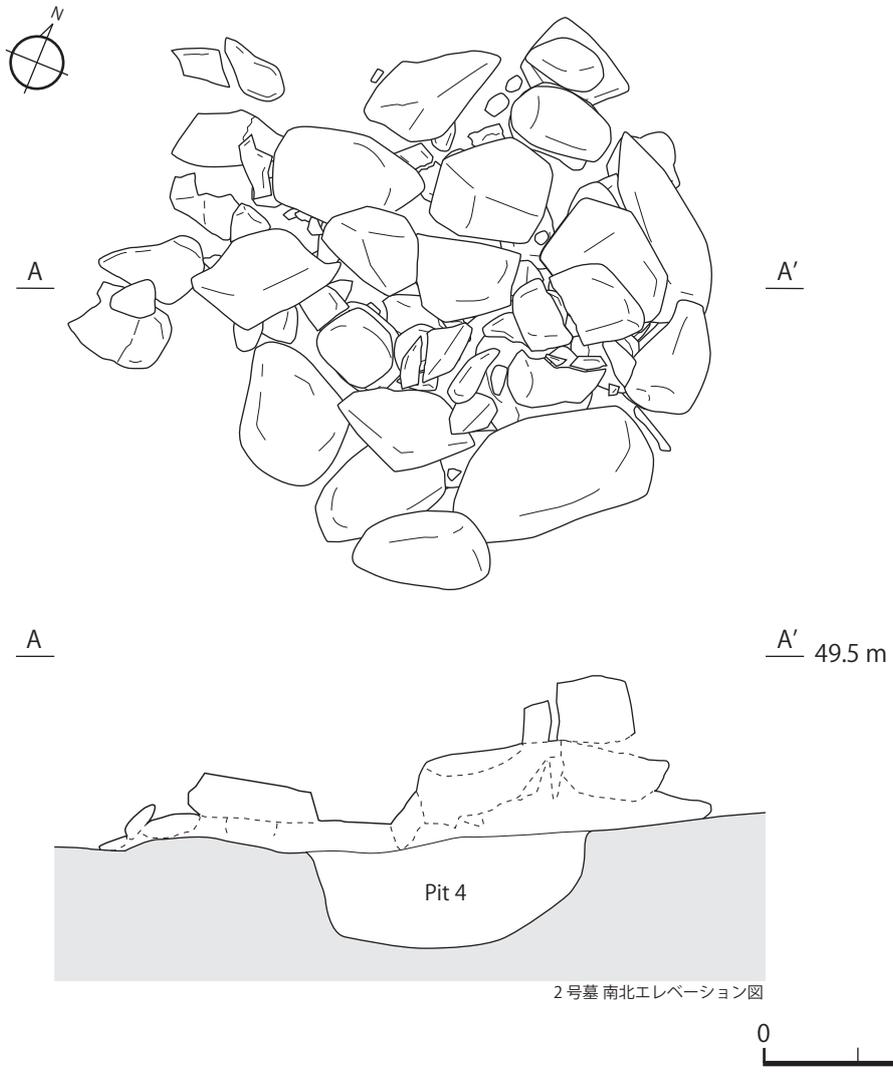
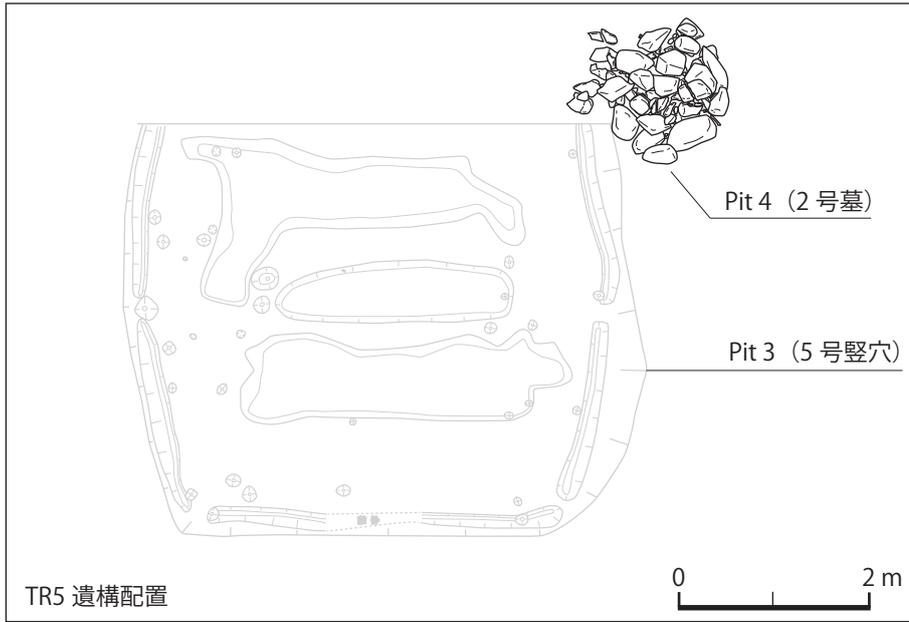
## 8. 土坑 (TR4-Pit2a)

本遺構は1号墓と同じ調査グリッドB-10区に位置する配石を伴う土坑である。

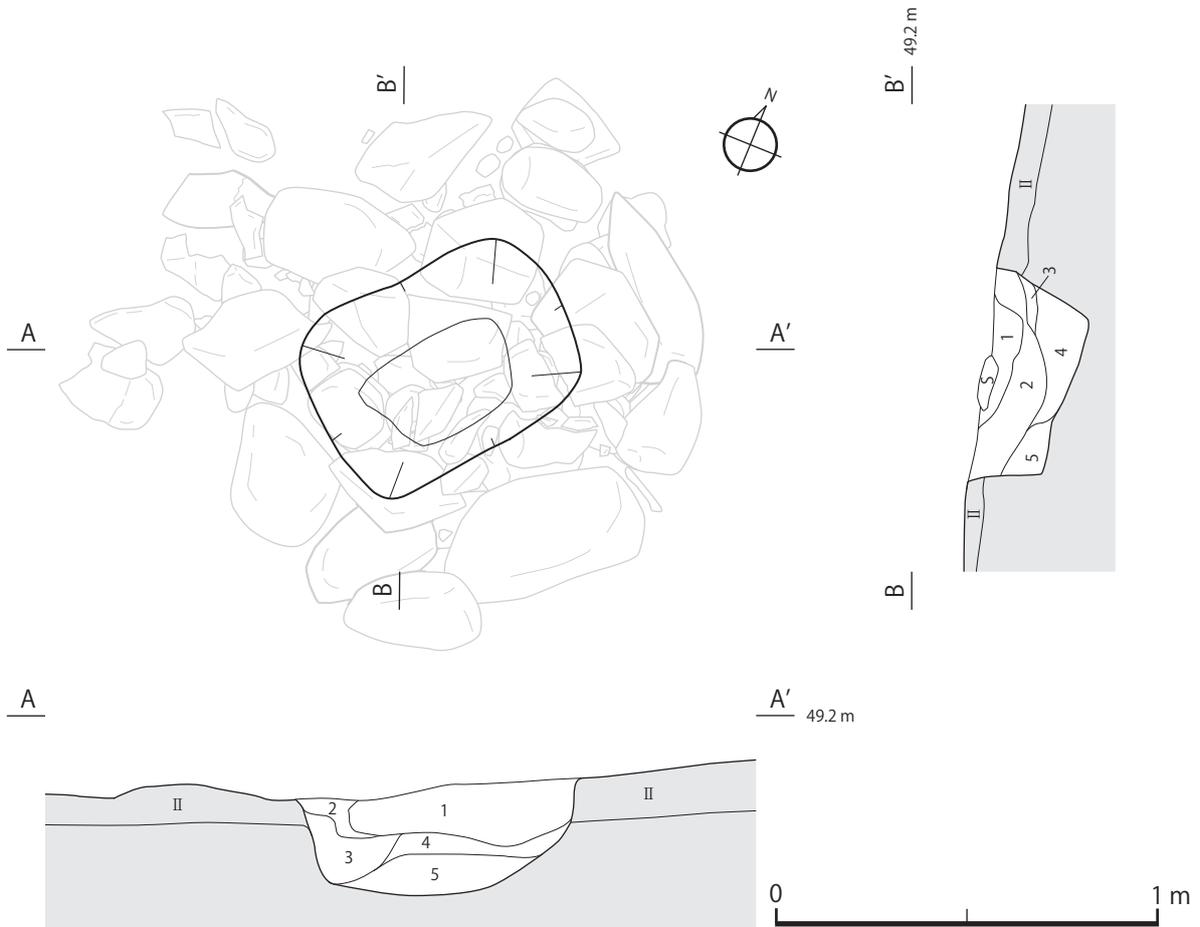
I層を除去したところ配石が確認されたため広がりを確認し、A-A'ラインにサブトレンチを設定して下層の状況を確認した。調査の結果、隣接する墓とは異なる皿状の掘り込みを持つ土坑であることが明らかとなった。さらに、底面を精査したところ、下層の古い土坑（Pit2b）を切って構築されている状況が確認された。以下、土坑の形態や切り合い関係等について記載する。

### 規模・形態 (第24図)

配石は約2.5 mに範囲にわたって認められた。配置に規則性はみられないが、およそ土坑の範囲内にまとまる傾向がみられる。礫は例によって遺跡外からの搬入であるが、被熱破砕したような角礫も散見される点特徴的である。



第21図 TR5遺構配置図および2号墓積石分布図



TR5 Pit4 (2号墓) 土層説明

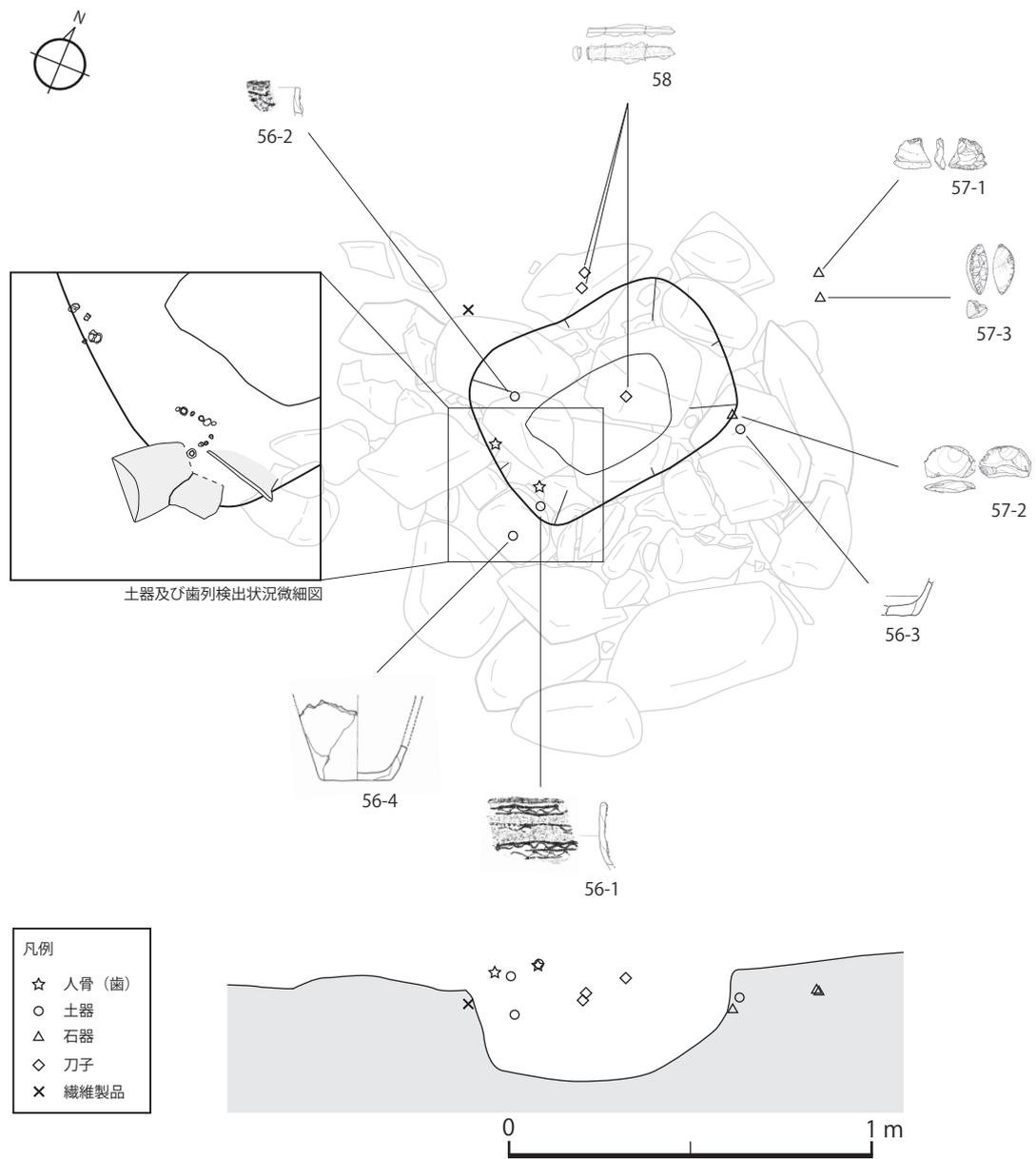
A-A' ライン

1. 暗褐色土 (II層混じり)、粘性なし、しまりなし
2. 黄褐色土+暗褐色土、粘性普通、しまりややあり
3. 黄褐色土、粘性あり、しまりややあり
4. 暗褐色土+褐色土、粘性なし、しまり普通
5. 褐色土、粘性なし、しまりなし

B-B' ライン

1. 黄褐色土 (木炭を含む)、粘性あり、しまりややあり
2. 暗褐色土+黄褐色土 (木炭を含む)、粘性弱、しまり普通
3. 黄褐色土、粘性あり、しまりややあり
4. 褐色土、粘性なし、しまりなし
5. 暗褐色土+褐色土 (木炭を含む)、粘性なし、しまり普通

第22図 2号墓 (TR5-Pit4)



第23图 2号墓 (TR5-Pit4) 掲載遺物分布图

土坑はⅡ層中から掘り込まれており、平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸約2.2 m、短軸1.7 mと本遺跡で検出された土坑の中では最も大型である。壁面の立ち上がりは緩やかであり、最深部で約25 cmと浅い皿状の掘り込みであった。

埋土は1・2層に分層でき、1層の黒褐色土は土坑全体を覆うが、灰褐色土含む2層は一部でのみ確認された。

#### 切り合い関係

埋土等の観察から、本遺構は下層に存在した土坑（Pit2b）を切って構築されている。よって、新旧関係はPit2b→Pit2aの順に遷移していると推察される。

#### 形成年代

AMS法による放射性炭素年代測定は実施していないが、底面出土土器（第59図）からオホーツク文化終末期～トビニタイ文化期に属するものと推察される。

## 9. 土坑（TR4-Pit2b）

本遺構は調査グリッドB-10区において、土坑（Pit2b）と重複する位置で検出された土坑である。以下、形態および切り合い関係等について記載する。

#### 規模・形態（第25図）

上層にPit2aが存在するため、Pit2bの上半は破壊されているものと推察する。そのため、掘り込み面は不明瞭、平面形は残存部で不整楕円形を呈する。規模は残存部から判断して長軸約1.25 m、短軸1.05 mと小型である。底面には若干の起伏がみられ、壁面の立ち上がりは緩やかである。

埋土は1・2層に分層でき、1層は少量の木炭を含む暗黄褐色土、2層は締まりのない暗褐色土であった。

#### 切り合い関係

本遺構は上層に存在する土坑（Pit2a）によって切られている。よって、新旧関係はPit2b→Pit2aの順に遷移していると推察される。

#### 形成年代

AMS法による放射性炭素年代測定は実施していないが、底面出土土器（第63図）からオホーツク文化後期～終末期に属するものと推察される。

## 10. 配石遺構（TR6-Pit5）

本遺構は調査グリッドA-7・8、a-7・8区に位置する。高所の平坦地利用を探るために設定したトレンチ（TR6）内で検出され、当初は墓の存在を想定して広

りを確認したが1号墓や2号墓とは異なり、分散的な礫の分布傾向であった。

また、遺構の内容を精査するには配石確認面では不十分であり、下層の状況も把握する必要があった。そのため、調査区の北東端にあってサークル状に礫が組まれた箇所について一部礫の除去・半截したところ、小規模な掘り込み（Pit5）を確認された。これより、他の配石下にも土坑が伴う可能性が浮上したため、調査区中央でも同様に下層を確認したが土坑の存在は確認できなかった。以下、配石遺構および土坑（Pit5）の形態等について記載する。

#### 規模・形態（第26図）

配石範囲は掘削部で約4.5 mにわたり、Ⅰ～Ⅱ層中に存在していた。主に角礫を用い、直径50～60 cm程度の大礫だけでなく5 cm程度の小礫も多くみられる。これらの礫は他の配石遺構と同様にチャシコツ崎の上では採取できない岩石（安山岩）であり、外部からの持ち込みが想定される。

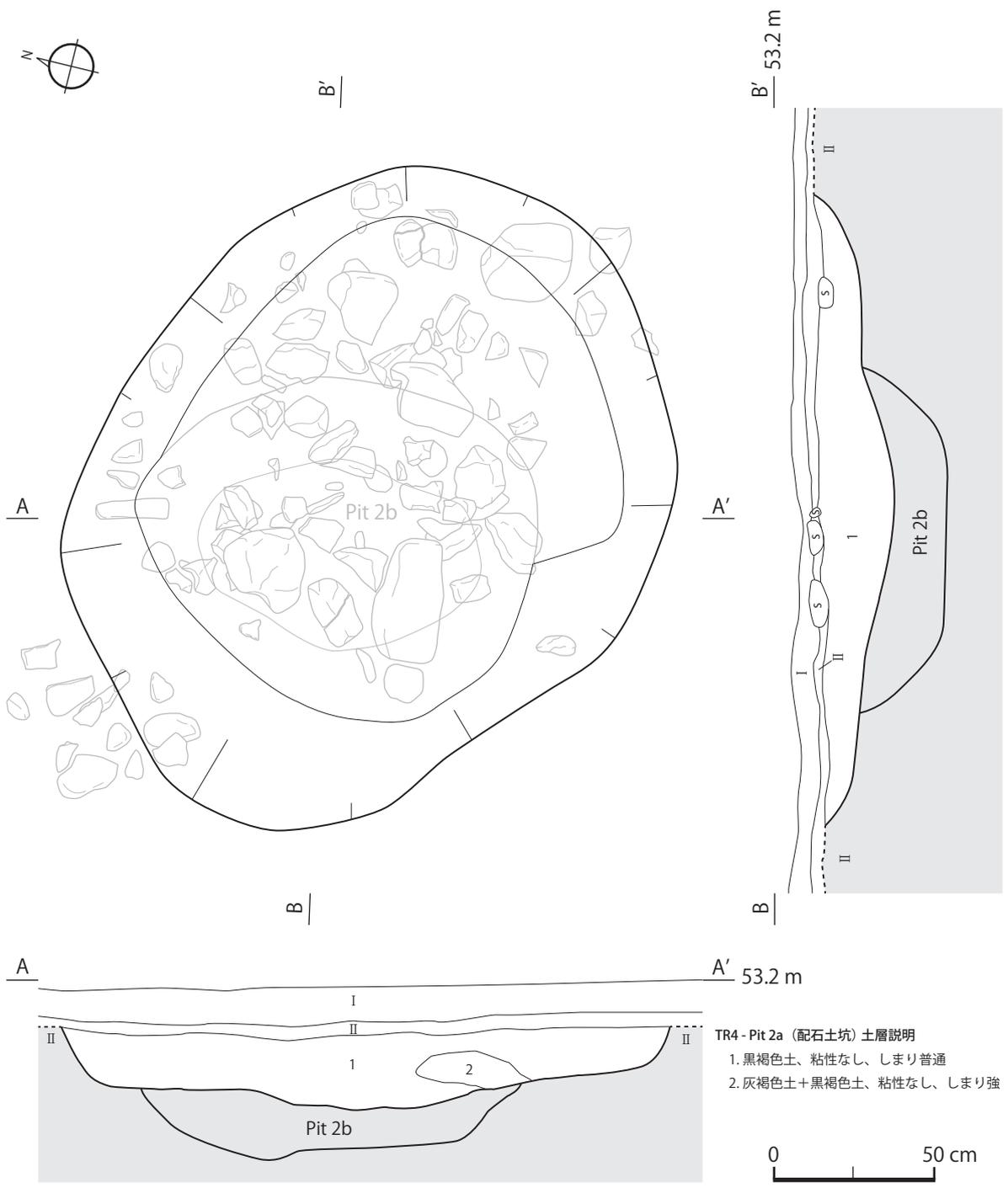
調査の結果、円形に礫が組まれる箇所の直下に土坑（Pit5）が伴う状況が確認され、規模は掘削部から想定して約0.8 mと上部の配石範囲と同程度であった。掘り込みはⅠ層下部～Ⅱ層上面と推察され、底面にはかなり起伏があることから礫を差し込むために掘削された印象を受ける。また、覆土中からは遺物の出土は見られなかったが、被熱したヒグマの臼歯が1点出土しており、出土状況などについて以下に記載する。

#### ヒグマ歯の出土状況（第26図）

本遺構からはヒグマの歯の出土が目立つ（第26図）。ちなみに、遺跡内でヒグマの歯が検出されたのは本遺構のみであり、5号竪穴の骨塚中からも発見されていない状況にある。加えて被熱した歯も含まれることから、本遺構と屋外の動物儀礼との関連性が示唆される。出土した歯は少なくとも2体分に由来するが、出土状況を見るかぎり屋内骨塚のように1ヶ所に集積されてはいなかったものと推察する。また、分布に規則性がなく、配石中に被熱したものとそうでないものが混在して分散する傾向は骨塚と大きく異なり、留意すべきである。

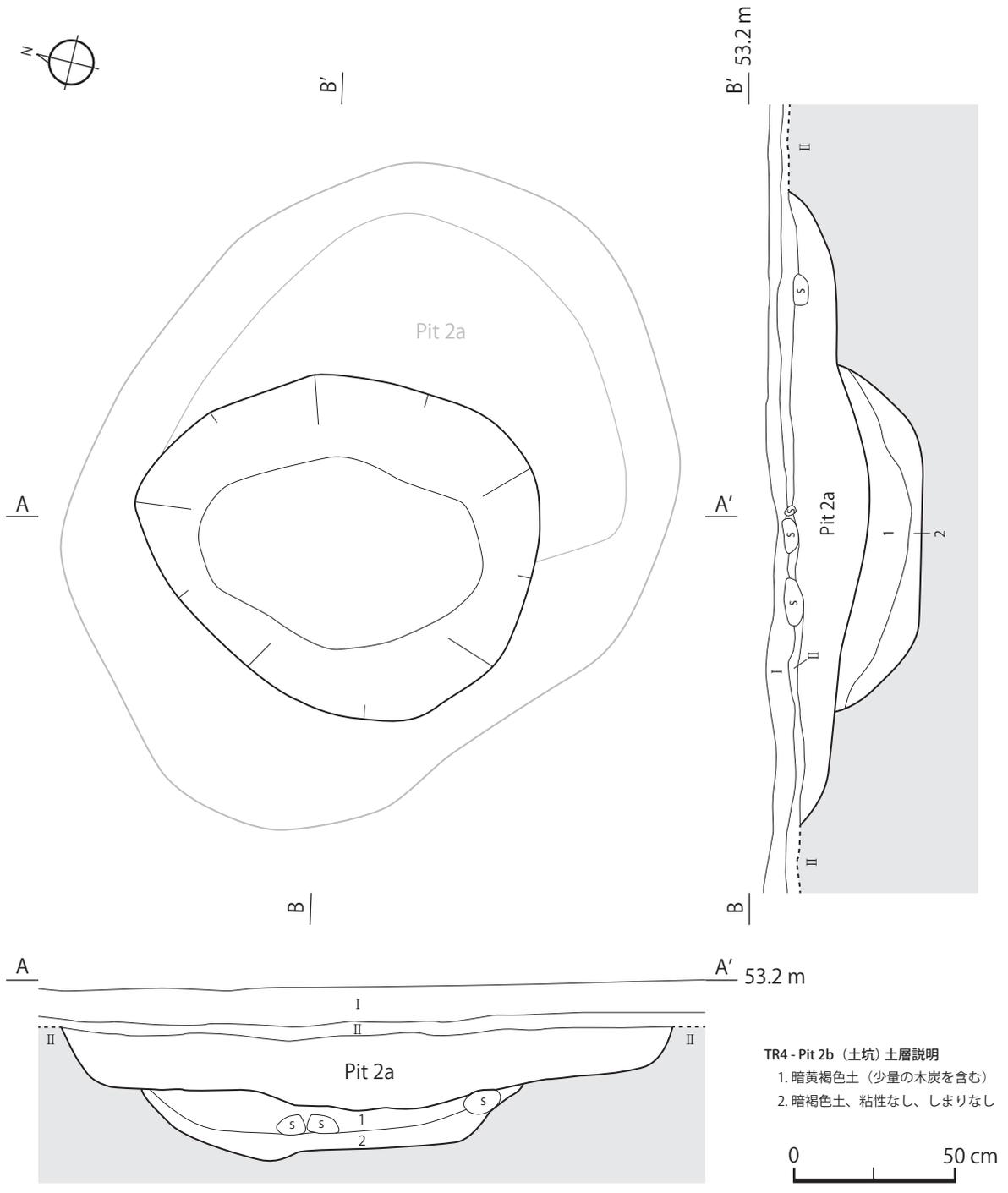
#### 形成年代

炭化種実等が得られなかったため、AMS法による放射性炭素年代測定は実施していない。しかし、同一面から出土した完形土器等（第65図5・第67図21）から、オホーツク文化終末期～トビニタイ文化期に属するもの



TR4 - Pit 2a (配石土坑) 土層説明  
 1. 黒褐色土、粘性なし、しまり普通  
 2. 灰褐色土+黒褐色土、粘性なし、しまり強

第24図 土坑 (TR4-Pit2a)



TR4 - Pit 2b (土坑) 土層説明  
 1. 暗黄褐色土 (少量の木炭を含む)  
 2. 暗褐色土、粘性なし、しまりなし

第25図 土坑 (TR4-Pit2b)

と推察される。

## 11. 遺物集中 (TR6)

本遺構は調査グリッドa-7・b-7区に位置し、配石遺構 (Pit5) と同じTR6内で検出されたものである。以下、遺構の形態および出土動物遺体等について記載する。

### 規模・形態 (第27図)

オホーツク文化期の遺物を包含するⅡ層下部～Ⅲ層上面で検出され、隣接する配石遺構 (Pit5) よりも若干下層に存在した。分布は調査区内で約2.6 mの範囲にわたって認められ、さらに調査区外へと広がることが予想される。

遺物集中は主に、土器、石器、骨角器、動物遺体から構成され、鉄製品などの金属器は見られなかった。また、南東側では約0.85 mの範囲に黒曜石の剥片集中が

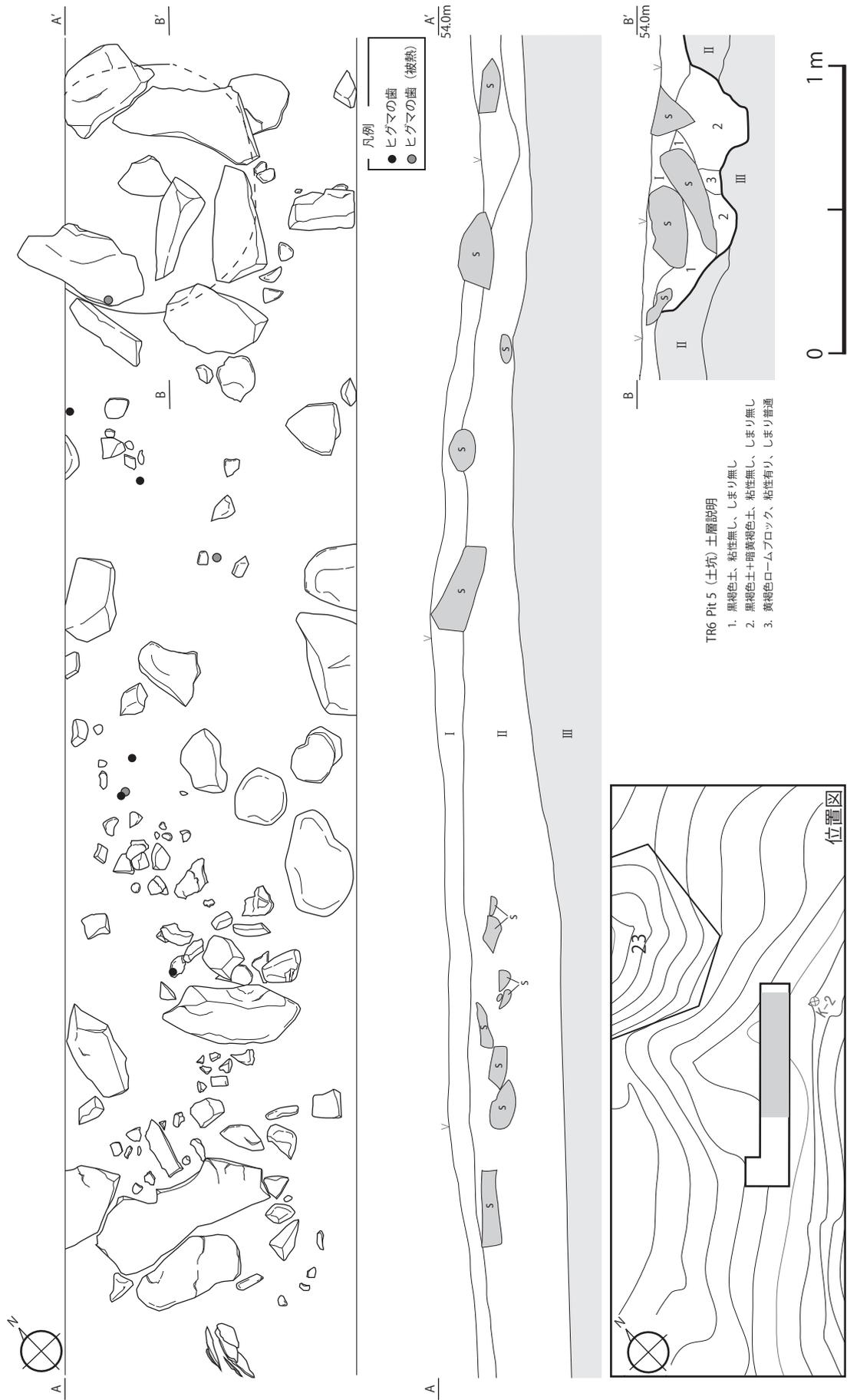
出土しており、遺物集中に伴うものと推察される。

特筆すべきは単なる遺物の集積ではなく、多くの動物骨を伴っている点である。最も遺物が集中する箇所では、鯨類の椎骨が連なって出土している。さらに、その両脇には欠損した釣針軸や骨斧などと共にアザラシ科の肩甲骨が出土しており、意図的な配置と推察される。同文化での類例が無いため、本遺構の位置づけは不明であるが道具類がまとまって出土し、黒曜石剥片が散らばる点は特徴的であり、屋外の儀礼場としての可能性も考えられる。

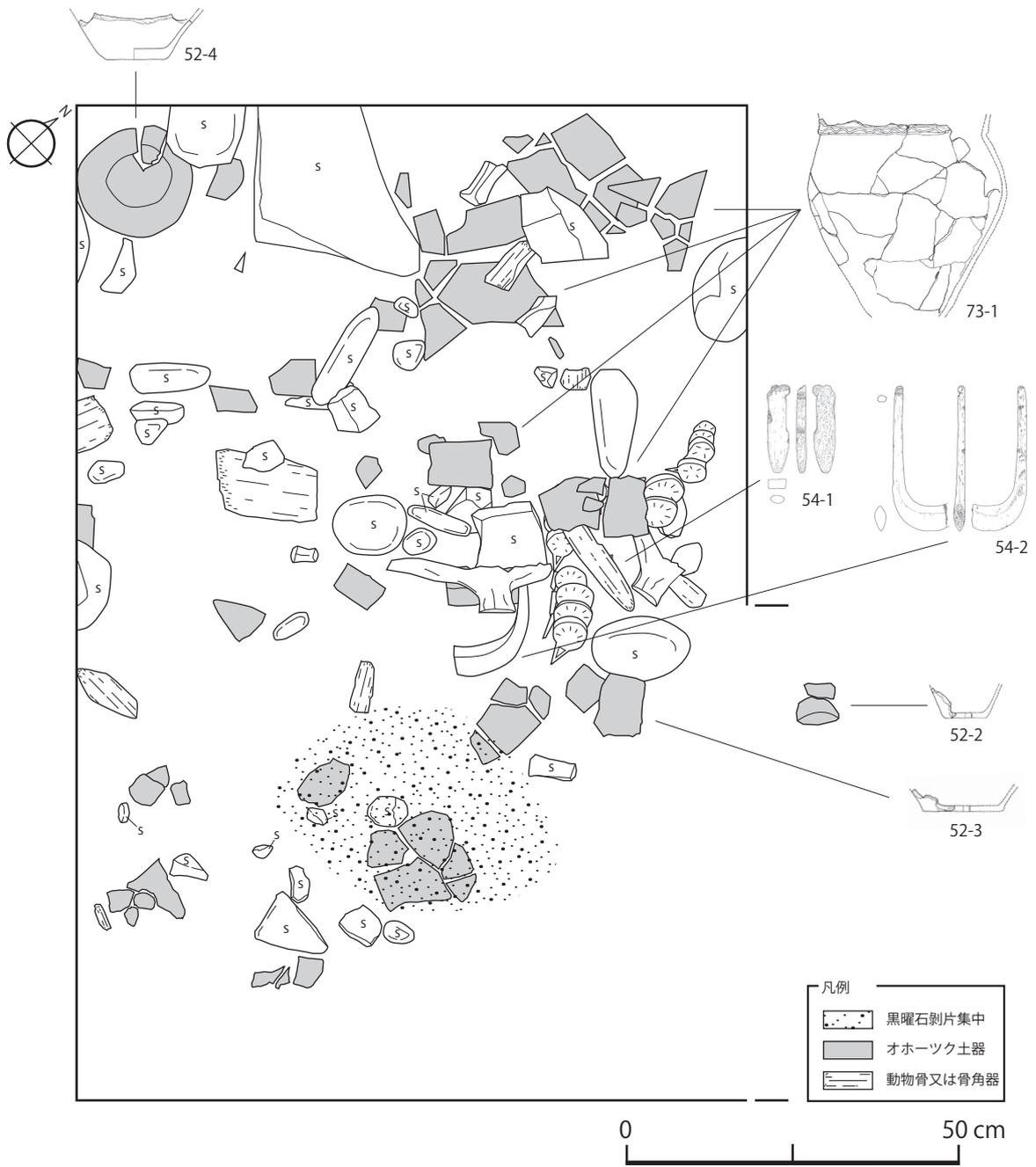
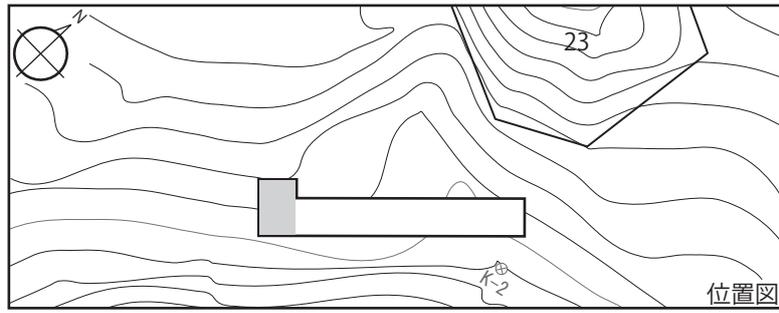
### 形成年代

AMS法による放射性炭素年代測定は実施していないが、出土層位および出土土器 (第73図) からオホーツク文化後期～終末期に属するものと推察される。

(平河内毅)



第26図 配石遺構 (TR6-Pit5)



第27図 遺物集中(TR6)

表1. 検出遺構一覧

図版	調査区	遺構名	Pit	時期	平面規模	軸方向	備考
—	TR1	土坑	—	オホーツク	—	—	
—	TR1	焼土木炭範囲	—	オホーツク	—	—	
—	TR2	配石遺構	—	オホーツク	—	—	
6～13	TR5	5号竪穴	3	オホーツク	長軸 5.4 短軸 (4.4)	N-72° -W	焼失、骨塚3基、 貼床、建て替えなし
14・15	TR5	上層配石遺構	—	トビニタイ	—	—	
16	TR7	23号竪穴	6	オホーツク	—	—	魚骨集中あり
17	TR7	上層廃棄層	—	オホーツク	—	—	神功開竈出土
18～20	TR4	1号墓	1	オホーツク	長軸 1.5 短軸 1.3	N-64° -E	積石を伴う
21～23	TR5	2号墓	4	オホーツク	長軸 0.7 短軸 0.5	N-53° -E	積石を伴う
24	TR4	土坑	2a	オホーツク～トビニタイ	長軸 2.2 短軸 1.7	N-57° -W	配石を伴う
25	TR4	土坑	2b	オホーツク	長軸 1.25 短軸 1.05	N-3° -W	
26	TR7	配石遺構	5	オホーツク～トビニタイ	—	—	動物遺体を伴う
27	TR6	遺物集中	—	オホーツク	—	—	動物遺体を伴う

## 第3節 遺物

### 1. 遺物の概要

土器：掲載土器244点のうち、オホーツク土器・トビニタイ土器が230点と全体の約94%を占める。オホーツク土器を時期毎にみると、刻文系土器4点、沈線文系土器2点、貼付文系土器154点と貼付文系土器が圧倒的多数を占めていることが分かる。一方、ごく少数ではあるが縄文土器9点、続縄文土器1点が出土しており、オホーツク文化期以前から本遺跡が利用されていたことを示唆している。

石器：掲載した石器201点のうち、剥片石器では石鏃が80点（38%）と最も多く、ついで石核状フレイク28点（13%）、リタッチドフレイク27点（13%）と続く。石核状フレイクとしたものは、円レキ面を残す黒曜石で、微細な刃部剥離調整の痕跡が見られるものや、一方で全く調整痕跡が見られないものもその特徴を勘案して含めて総称したものである。レキ石器ではすり石18点（8%）やたたき石13点（6%）が多く出土している。なお、石質について特に記載の無いものはすべて黒曜石製である。

骨角器：廃棄層中からの出土が最も多く、他の遺構からの出土は低調であった。器種は銚頭・骨鏃・釣針軸といった狩猟具だけでなく、骨針、骨斧、刺突具、ヘラ状製品といった実用的な道具、円盤状製品や骨匙、彫像など非実用的と考えられるものも出土している。

鉄製品：TR6を除く多くの調査区から鉄製品が出土している。刀子や鉄針が主体であるが、鉤状製品などもみとめられる。また、特筆すべきはオホーツク文化の遺跡では初例となる奈良時代の貨幣（神功開寶）が出土したことである。

その他：繊維製品として、2号墓の積石直下から布片が出土している。

以下、各遺構出土遺物、包含層出土遺物の順に個別に解説を行う。なお、掲載資料については観察表に詳細をまとめたため、本文中では主要な遺物を除き概要を記載することとした。

### 2. 5号竪穴（TR5-Pit3）出土遺物

（土器：第28～34図）

床面からの出土土器はオホーツク土器に限定される

（第28～30図）。文様は粘土紐による直線2本と波線1本の3本1単位の貼付文（以下、3本単位貼付文）を複数配置するものが一般的である。これらはⅢ群e類に分類され、オホーツク文化貼付文期後半に相当する。

第29図14は骨塚からやや離れた竪穴南東側から出土した小型土器である。器形は胴部に最大径を有する壺型で、口縁部は肥厚しない。文様は断面平坦な粘土紐を螺旋状に貼付し、3本単位貼付文直下に粒状貼付文を約2.5 cm間隔に連続して施文している。また、壁際から出土した影響か竪穴の焼失に伴う2次被熱は顕著でない。

一方、骨塚周辺からは復元可能なⅢ群e類土器が7個体出土しており、骨塚に伴うものとして床面出土土器の中から抽出して掲載することとした。出土時の位置関係については第10図を参照されたい。

以下、復元可能であった個体について解説を行う。第30図3～9は器形や容量も種々様々であるが、何れも竪穴の焼失に伴って2次被熱している。共通しているのは紐状貼付文の均整がとれておらず、途切れや太さ、波線のむらが目立つという点である。

3は器高19.1 cmと中型の甕である。最大径はわずかに口縁部が胴部を上回り、頸部は直立するようなプロポーションを示す。文様は3本単位貼付文を口縁部から胴部上半まで3段施文している。

4は逆位で出土した個体である。器形は口縁部に最大径を有する中型の甕で、頸部は直立気味である。文様は2段の3本単位貼付文間に波線文を配置し、胴部上半には2本1単位の紐状貼付文を施している。また、2次被熱によって若干器形が歪んでいる。

5は器高13 cmほどの小型土器である。最大径は口縁部と胴部でほぼ等しく、口縁はやや外反する。文様は3本単位貼付文を3段配置し、下半の単位貼付文間に粒状の貼付文を複数施文している。

6は胴部に最大径を有する壺型土器である。文様は他のⅢ群e類土器とは異なり、口縁部と頸部に3本単位貼付文をそれぞれ配置し、胴部上半には14本の多重貼付文を施している。また、強く火を受けた箇所とそうでない箇所が破片ごとにはっきりと分かれるため、竪穴焼失時にすでに半壊していたと推察される。

7は胴部に最大径を有する大甕である。文様は3本単

位貼付文を口縁部から3段配置し、下端にはひねりによる波線文を1本施文している。

8は本遺跡で最も大容量のオホーツク土器である。最大径は口縁部と胴部でほぼ等しく、胴部はあまり張り出さない縦長な器形である。文様は3本単位貼付文を口縁部と頸部に2段配置し、その間にひねりによって爪形の残る波線文を1本施文している。また、9は6と似た砲弾状を成し、側面の片側には把手を有している。口唇部から胴部まで多重の紐状貼付文が施文され、把手部分にも施文されている。さらに、底部には人為的な穿孔がみられるため、おそらく口縁の半月状の欠損も意図的と捉えられる。

また、第31図～第34図は覆土出土のオホーツク土器である。第31図はⅢ群e類の口縁部破片で、3本単位貼付文が主体である。中には7本1単位の多重貼付文が見られるもの(22)や、口唇部に突起がみられるもの(23)が含まれる。第32～33図はd・e類が主体であるが、風化により文様不明のもの(第32図11・13・14・16)もある。

第33図25は覆土出土のオホーツク土器のうち唯一の完形個体であり、逆位で出土した。文様は太く均整のとれていない紐状貼付文3本にへら状の工具で乱雑に刻みを付けており、Ⅲ群d類に分類される。器厚も不均一で粗雑な印象を受ける。

また、縄文中期の土器片も出土している(第34図)。

(石器：第35～38図)

竪穴床面や炉から出土している剥片石器中で注目すべきものは、第35図17・18・20、第38図5～7に示した石核状フレイクやすり石が多く出土していることである。第36図1のすり石には紐のような痕跡があり、第38図8は扁平のへら状状態で先端に打痕があり、僅かな窪みもある。炉の側から出ており、灰掻き用具の可能性もある。いずれのすり石も安山岩製である。第37図1・2は泥岩製の有孔石製品である。

覆土出土中では粗雑な刃部調整の石鏃が多く、床面と同様に石核状フレイクとすり石も多く出土している。特に注目したいのは第41図4・6、第42図である。第41図4は長軸8 cmの砂岩製の両頭調整石製品としたもので、両頭部を四角錐状に面取りし、握り部分には2列の窪みを作り出している。同図6は砂岩製の有孔有溝石錘であり、縦方向に二分された片割れである。横位に巡る6条の溝は規則的な間隔を保ち、装飾的な様相を呈してい

る。第42図のナイフおよび板状レキは全て玄武岩製である。注目すべきはこれらの石材が知床半島では産出せず、利尻島の杓形岬周辺に顕著にみられる杓形溶岩と呼ばれるものに成分・組成とも類似する点である。従来の調査ではレキとして遺物扱いしていなかった資料の一つであるが、今回のケースのように特殊な石材のものなどは特に注視する価値はあろう。

(骨角器：第43図)

床面と覆土中から出土した骨角器である。1は覆土出土であり、扁平なへら状製品の破片と推察する。2は海獣骨に先端加工を施したものである。用途は定かではないが裏面にわずかな窪みがもうけられており、柄などに装着して使用するものと推察する。3は鯨骨製の骨斧であり、基部には着柄のための加工があるが左右非対称である。先端部には使用に伴い摩滅している。4は用途不明の骨角器である。屈曲部に溝が掘られ、組み合わせ式となっているほか、長軸部は扁平で短軸部は厚みがあるという特徴を有する。

(金属製品：第44～45図)

床面から出土したものである。1は刀子の刃部破片である。2～4は鉄針で、断面は方形。そのうち2・3は両端が欠損しているため天地は不明であった。

第45図は覆土から出土したもので、1～6は刀子の破片である。4は意図的かは不明だが、切先が折れ曲がっている。5は平行して2ヶ所に刀子片が存在する。おそらく、折れ曲がったまま腐蝕し、湾曲部は欠損して一部のみ残存した結果と推察する。6は茎部分には木製の柄が残存している。7は不明棒状製品であり、両端が欠損しているため天地は不明である。

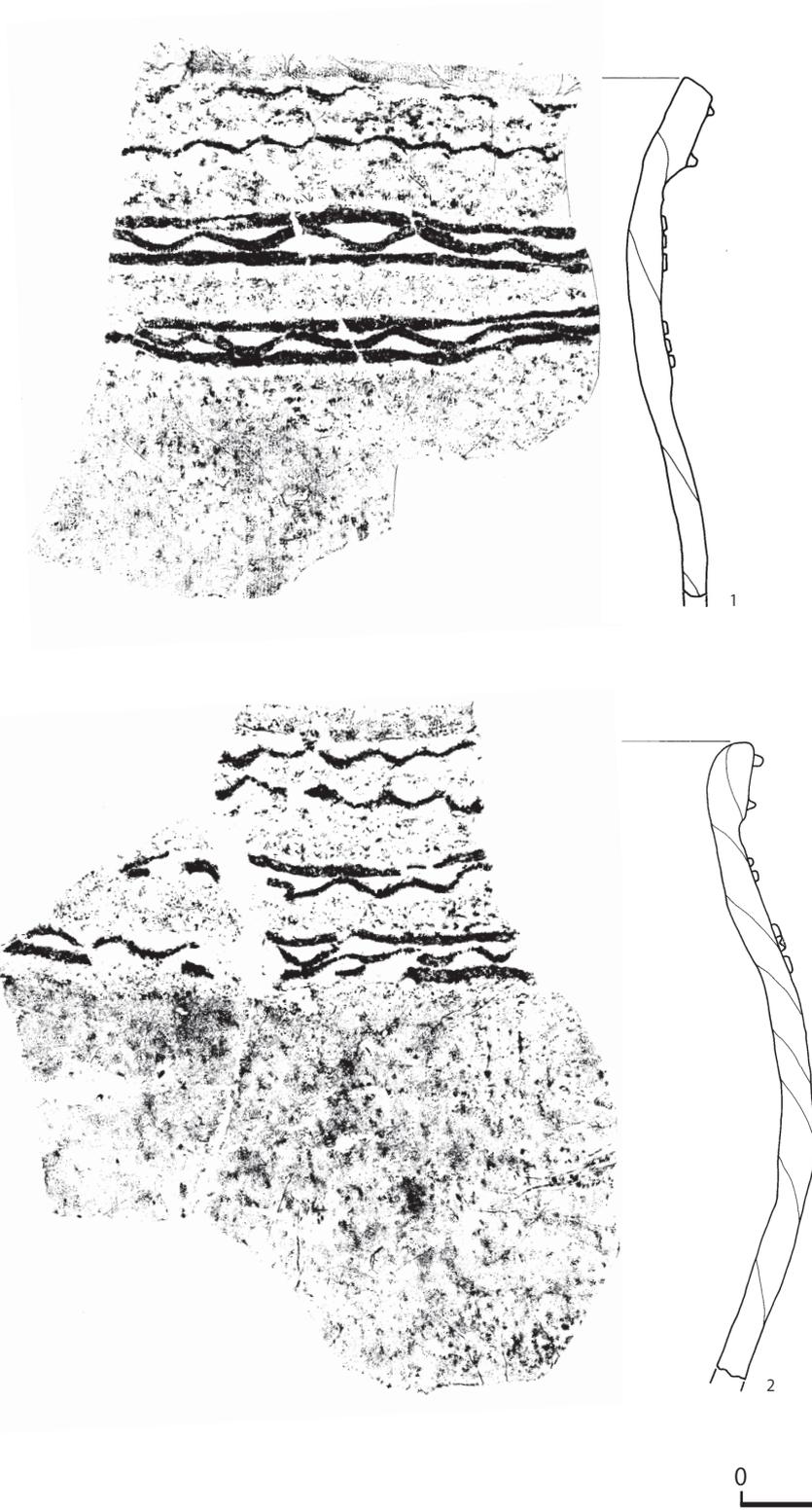
### 3. 5号竪穴上層配石遺構 (TR5) 出土遺物

(土器：第46図)

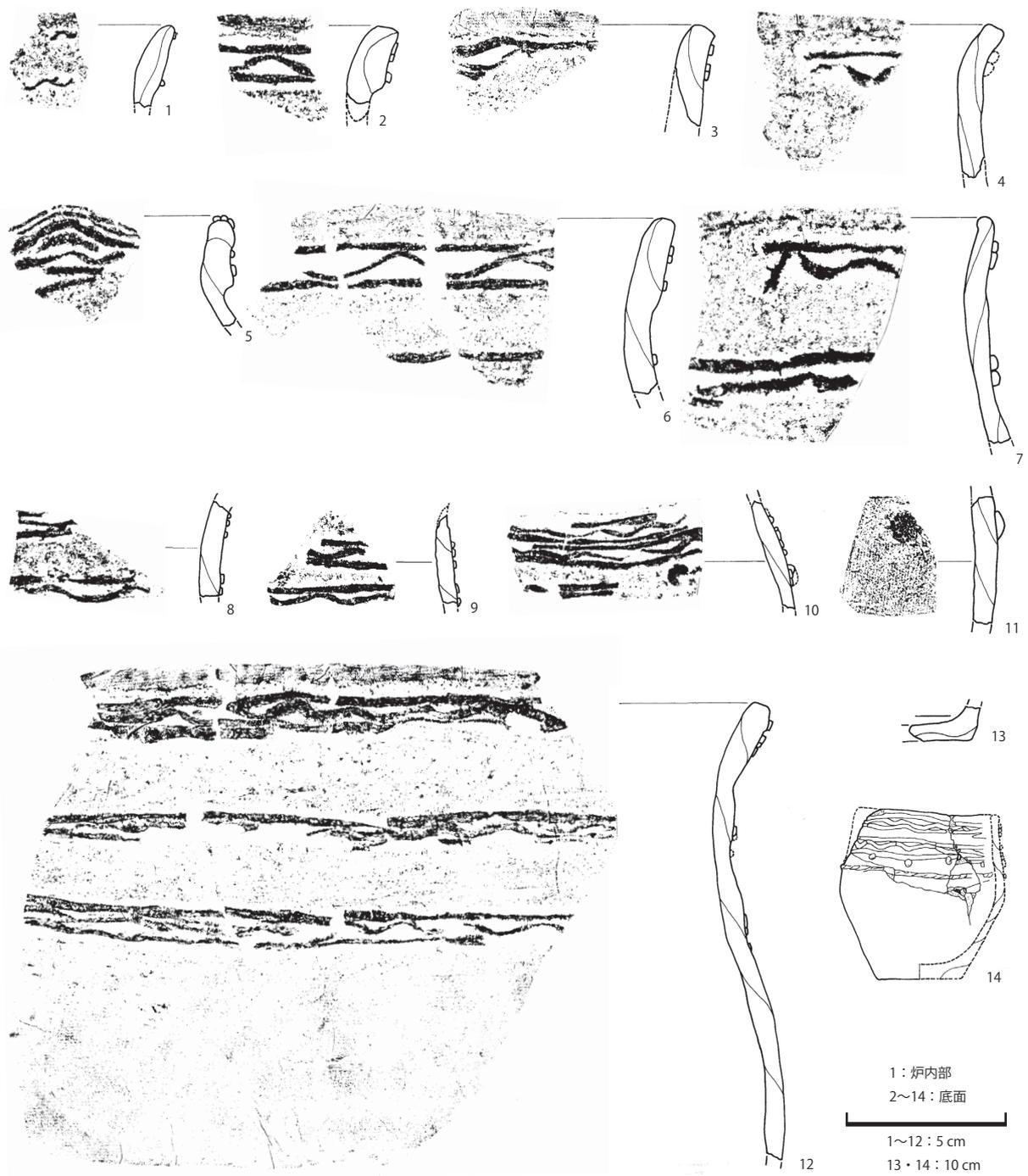
配石遺構と同一面で出土した擦文土器とトビニタイ土器である。また、第46図10～13は出土状況から同時期的な廃棄と推察される。

1はⅠ群土器の頸部破片であり、4条の横走沈線の上端に工具による刺突が施されている。2～9はⅡ群b類土器の口縁部～胴部である。オホーツク土器とは器形や文様構成が異なるが、胎土に差は見られない。Ⅱ群b類土器は口縁部が強く外反するもの(2)が一般的であるが、やや内傾するもの(3)も出土している。

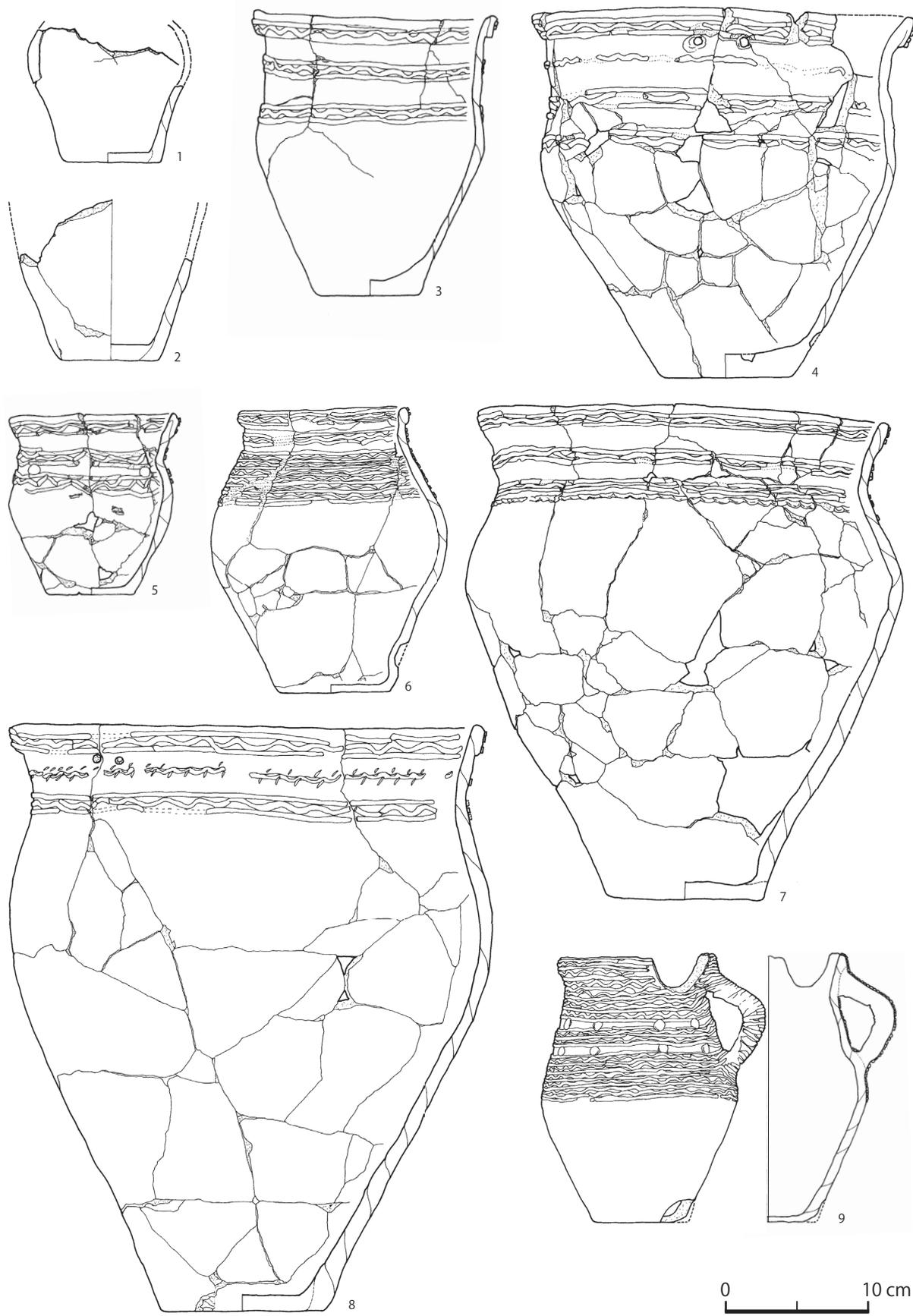
10は小型のトビニタイ土器である。文様は口縁部に1



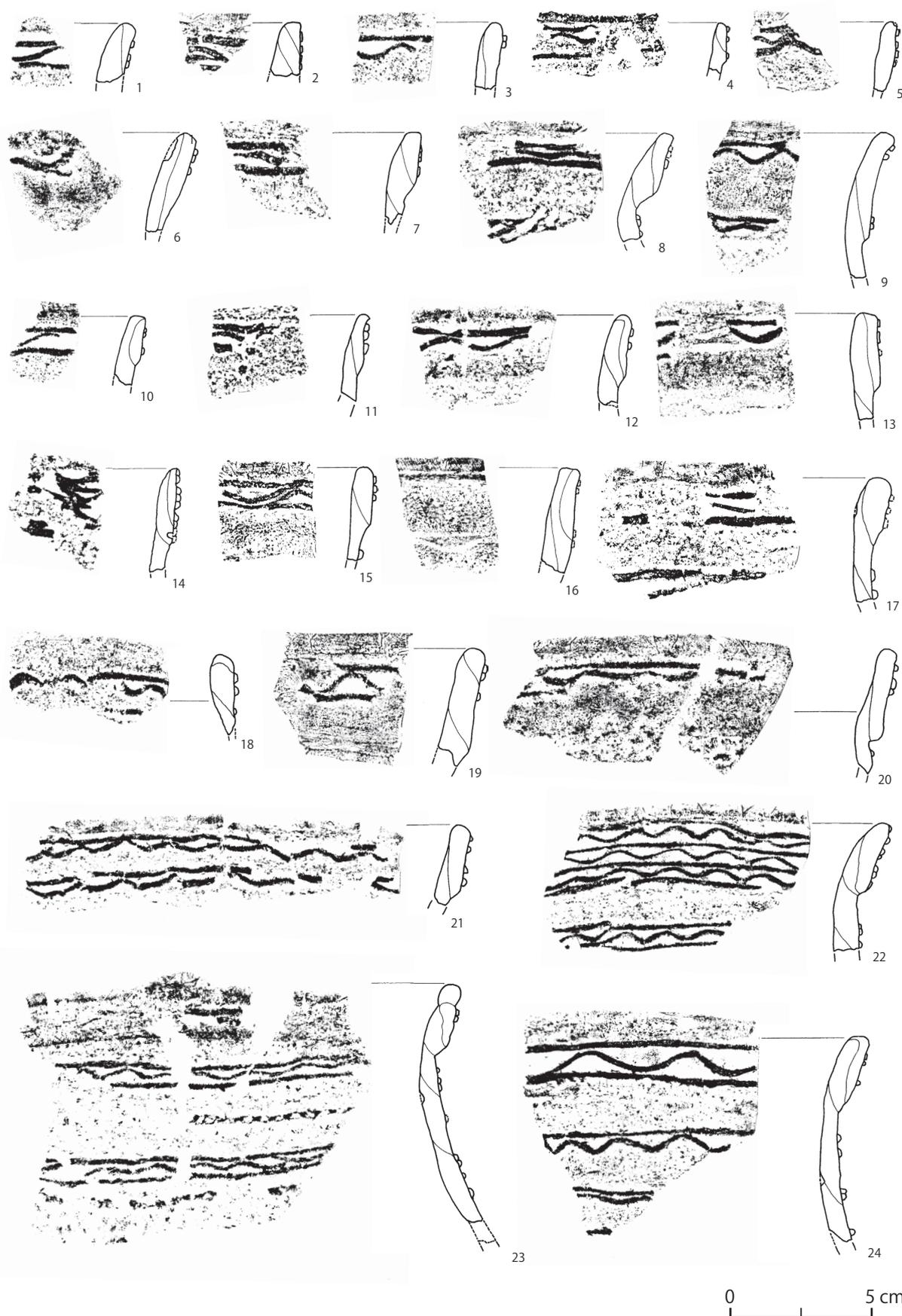
第28图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(1)



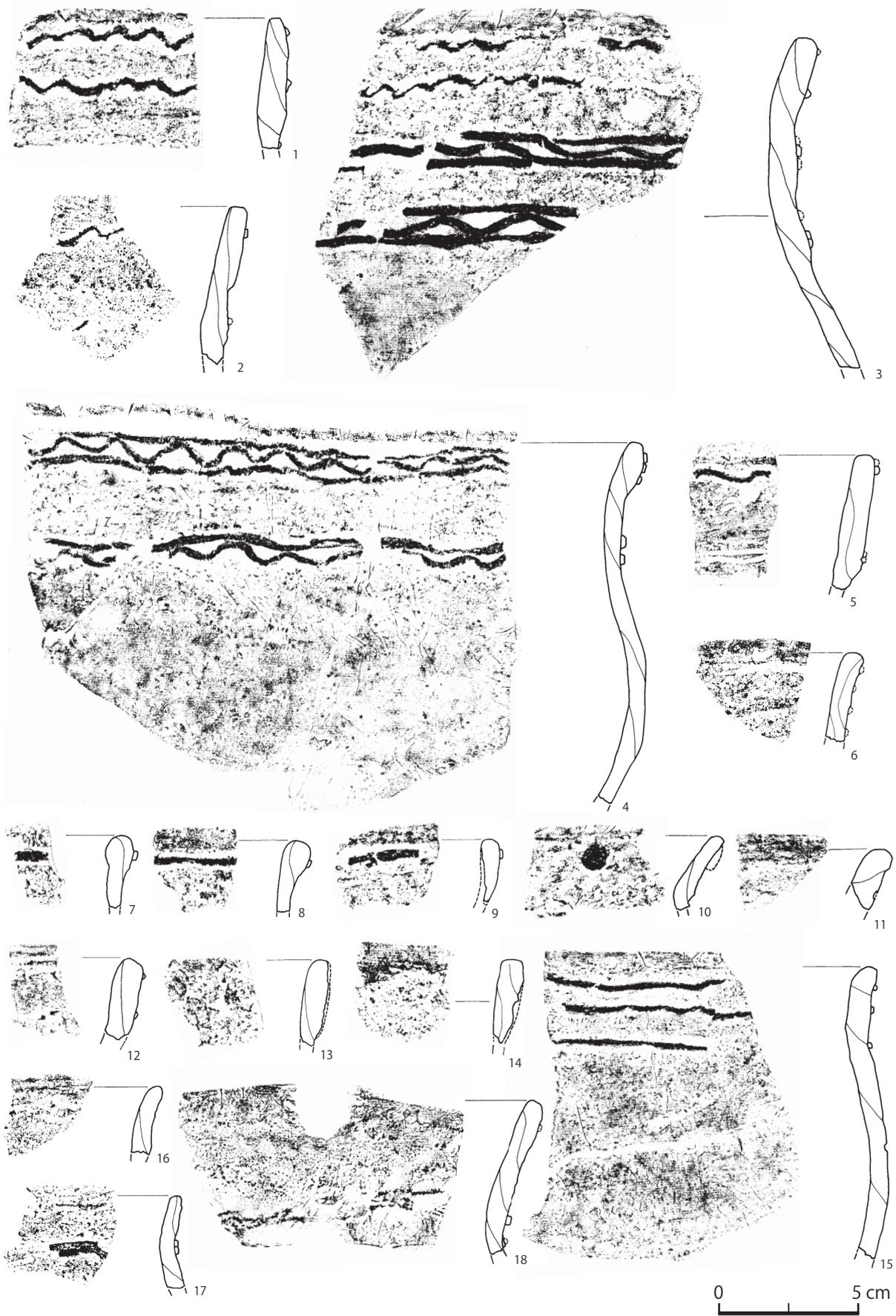
第29图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土土器(2)



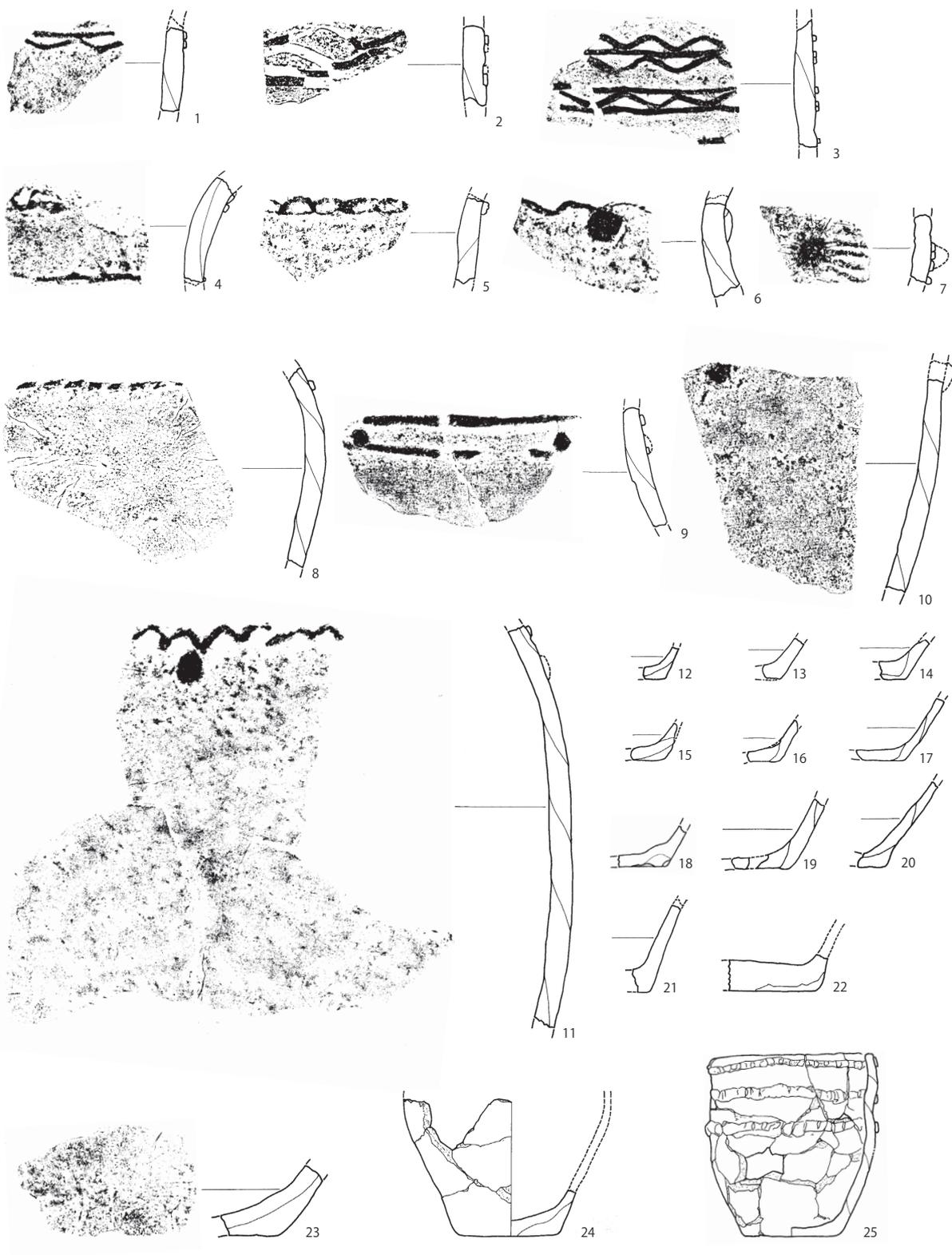
第30图 5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚 出土土器



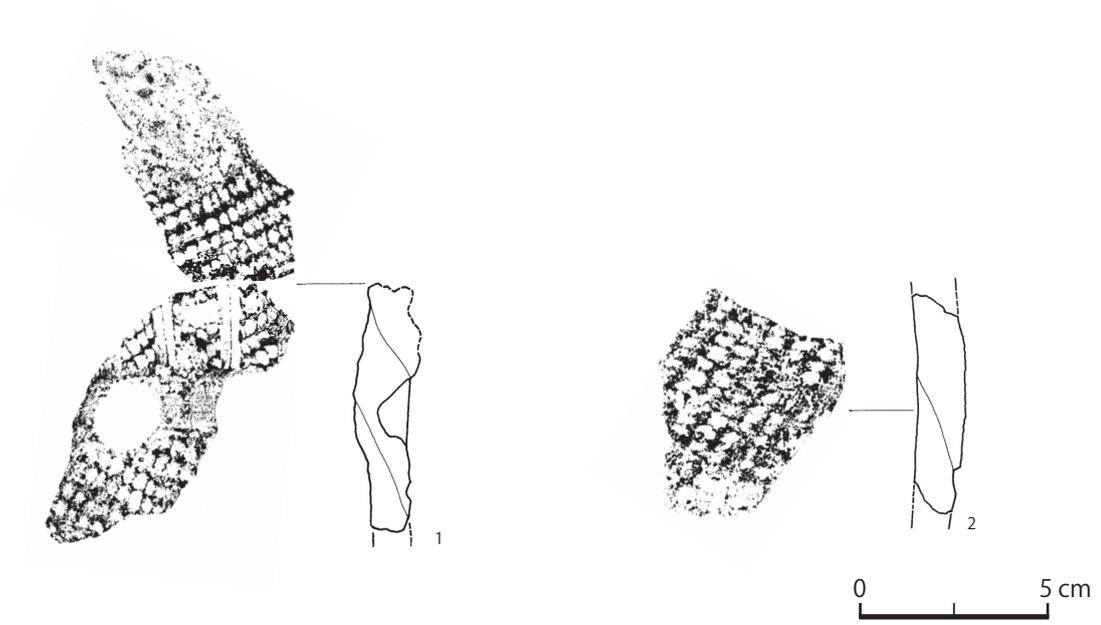
第31图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(1)



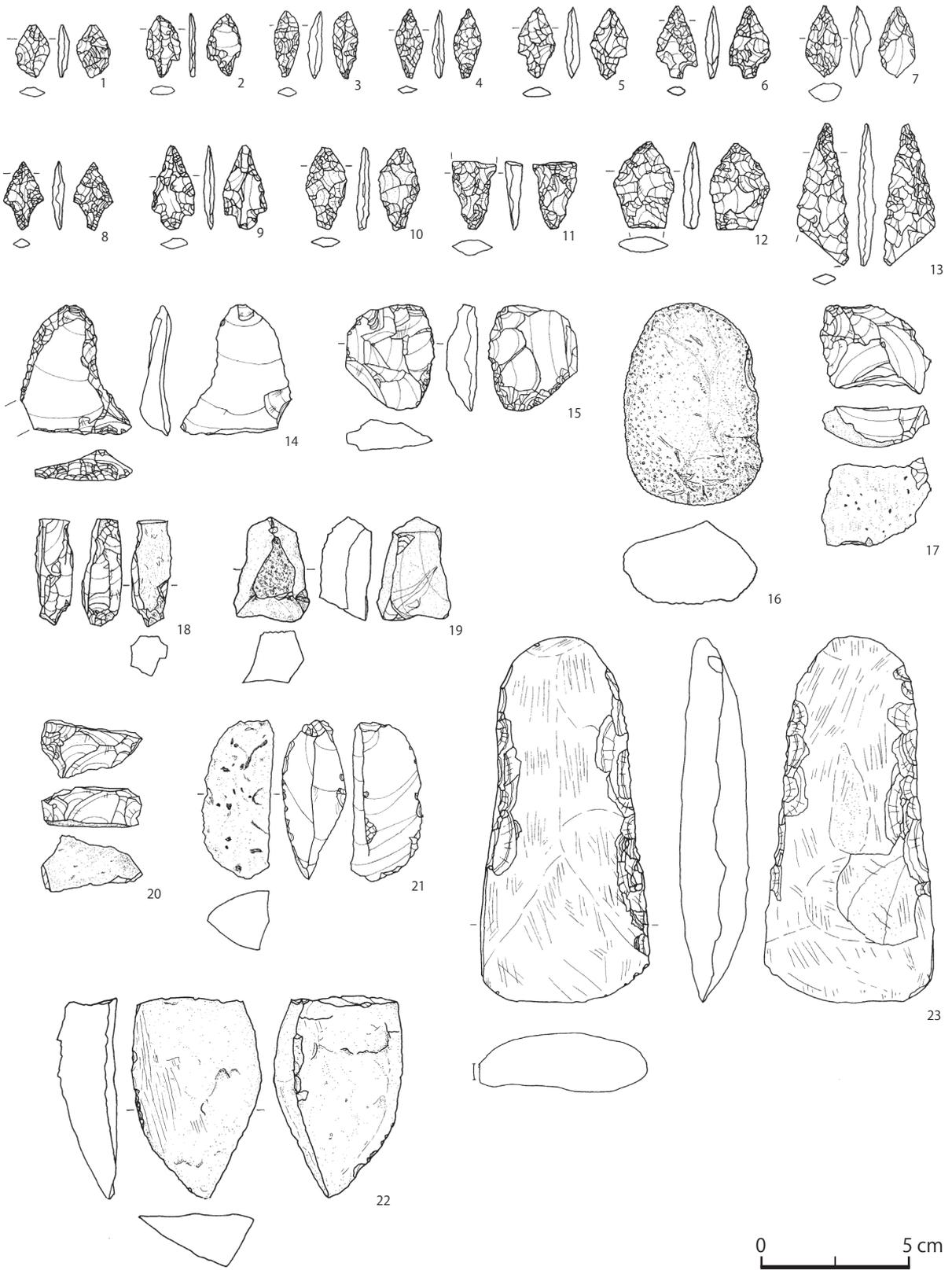
第32图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(2)



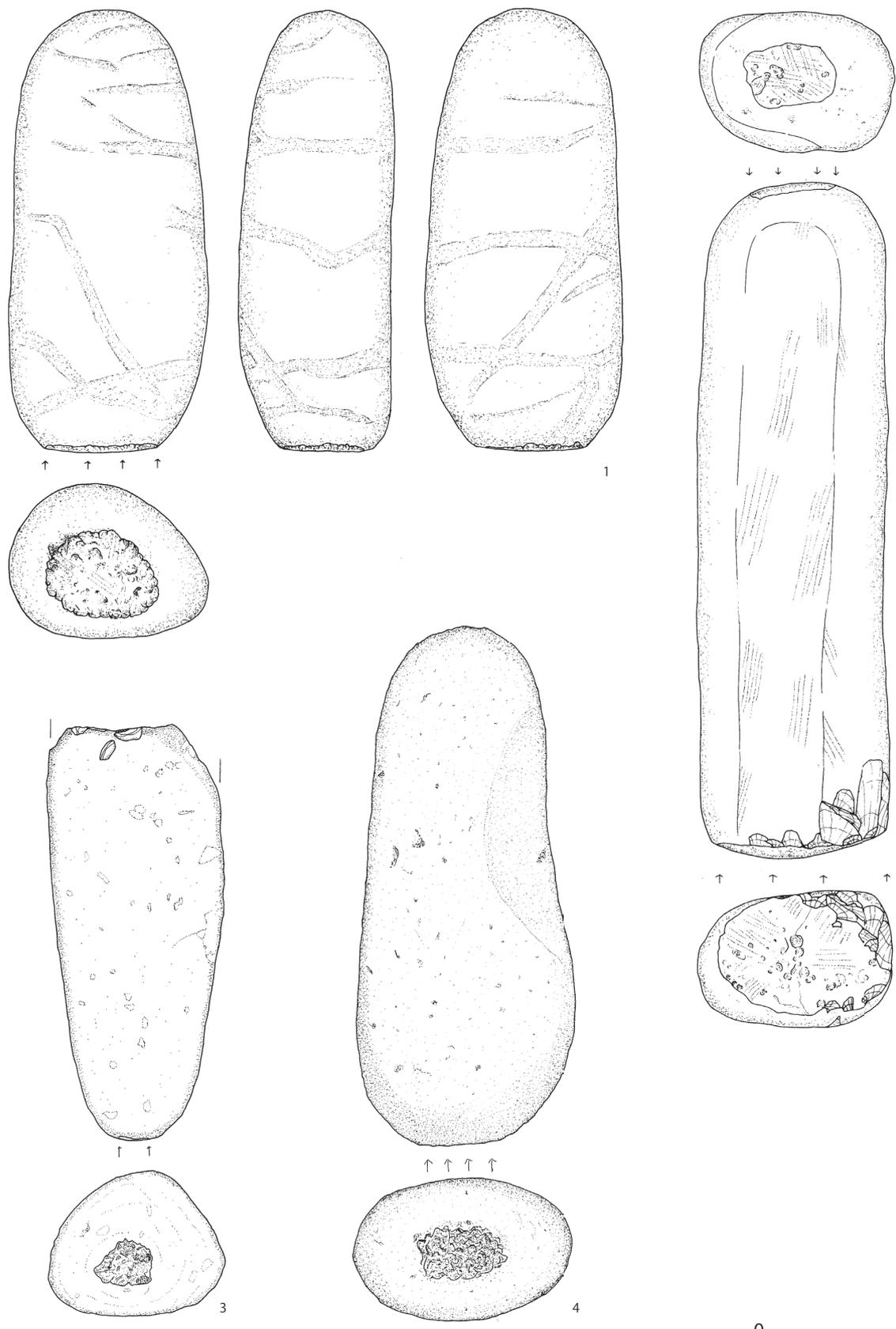
第33图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(3)



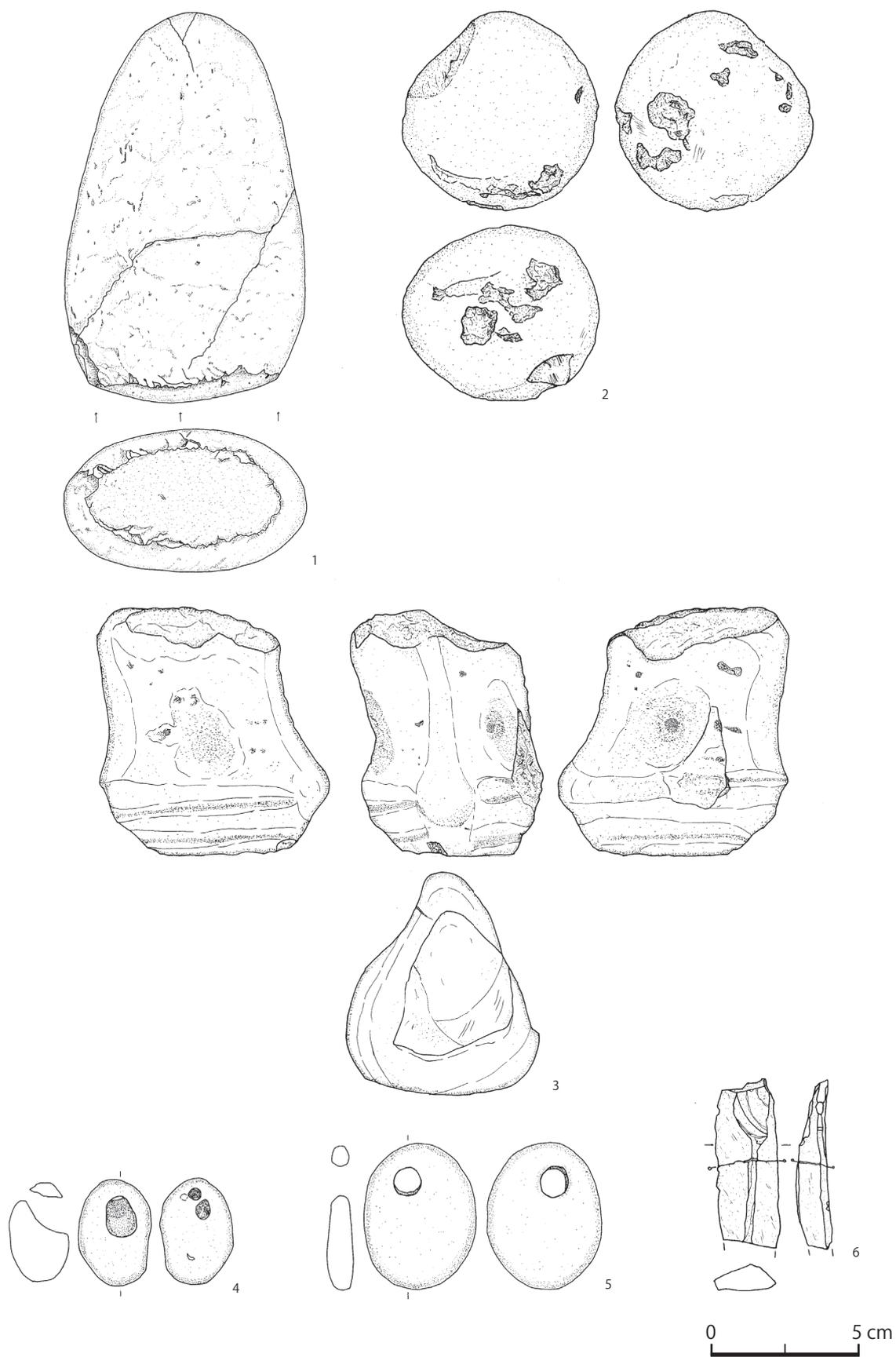
第34图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土土器(4)



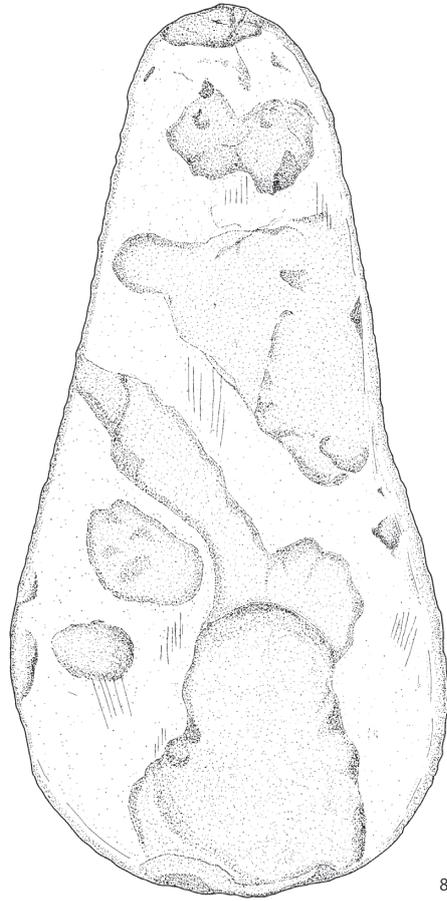
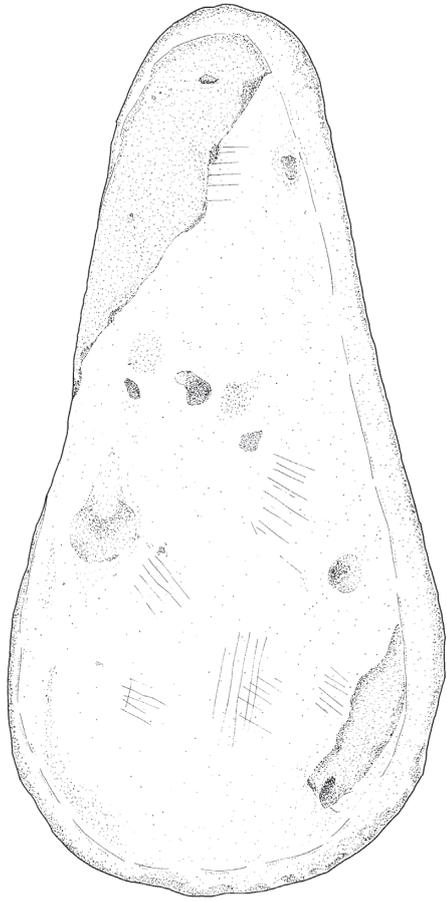
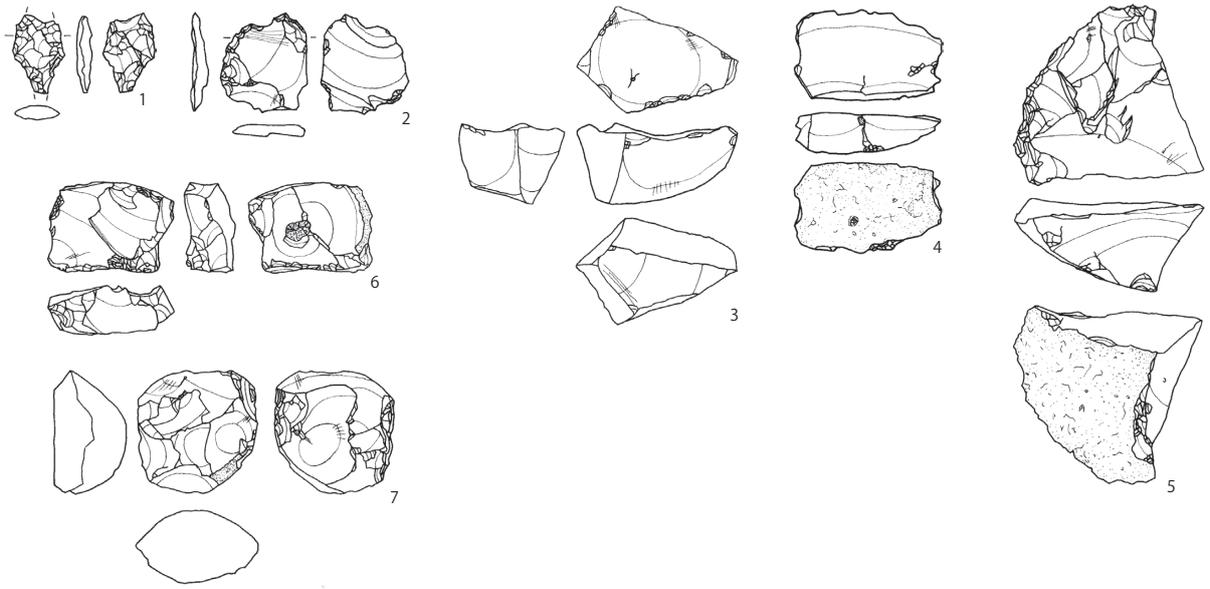
第35图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(1)



第36图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(2)

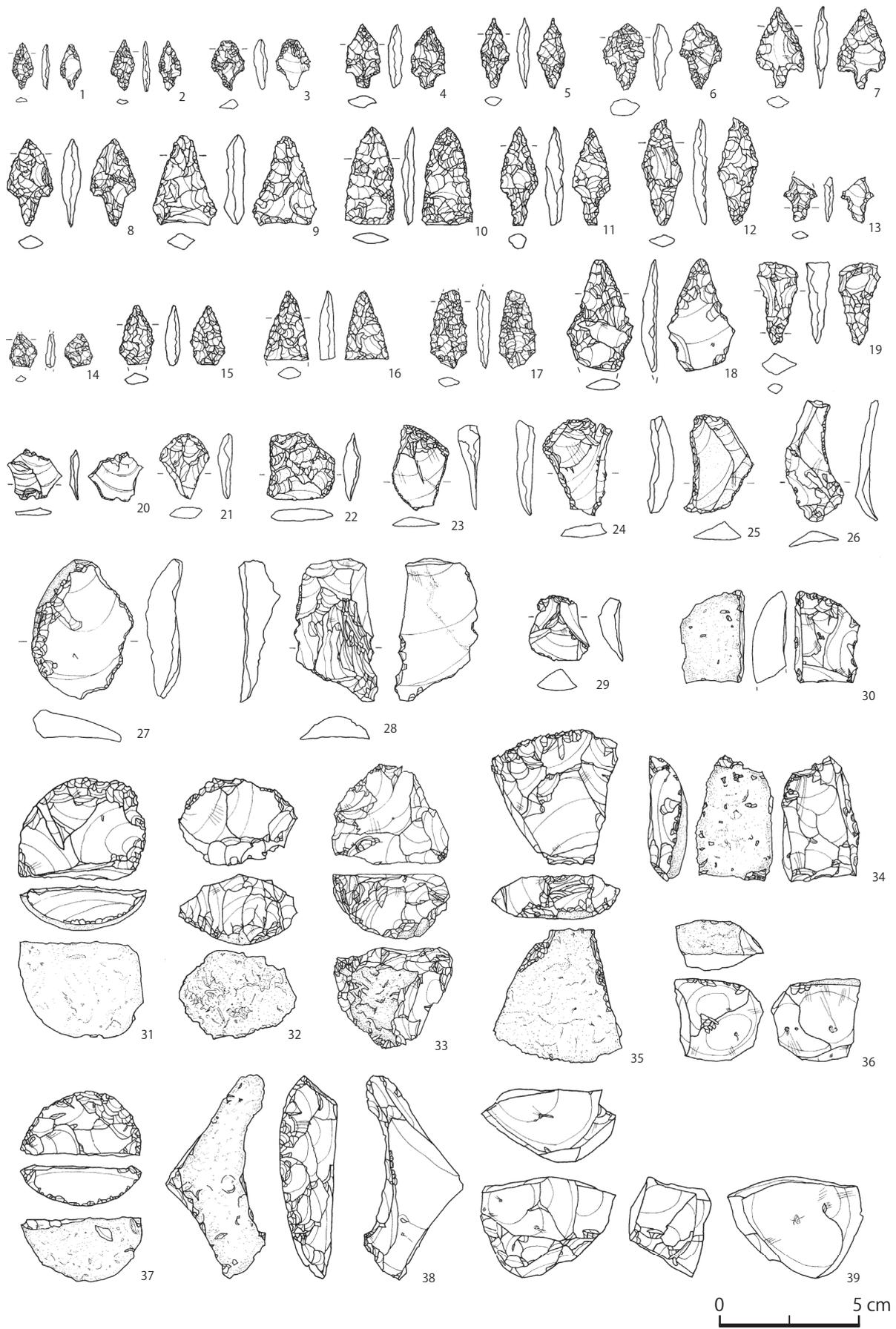


第37图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土石器(3)

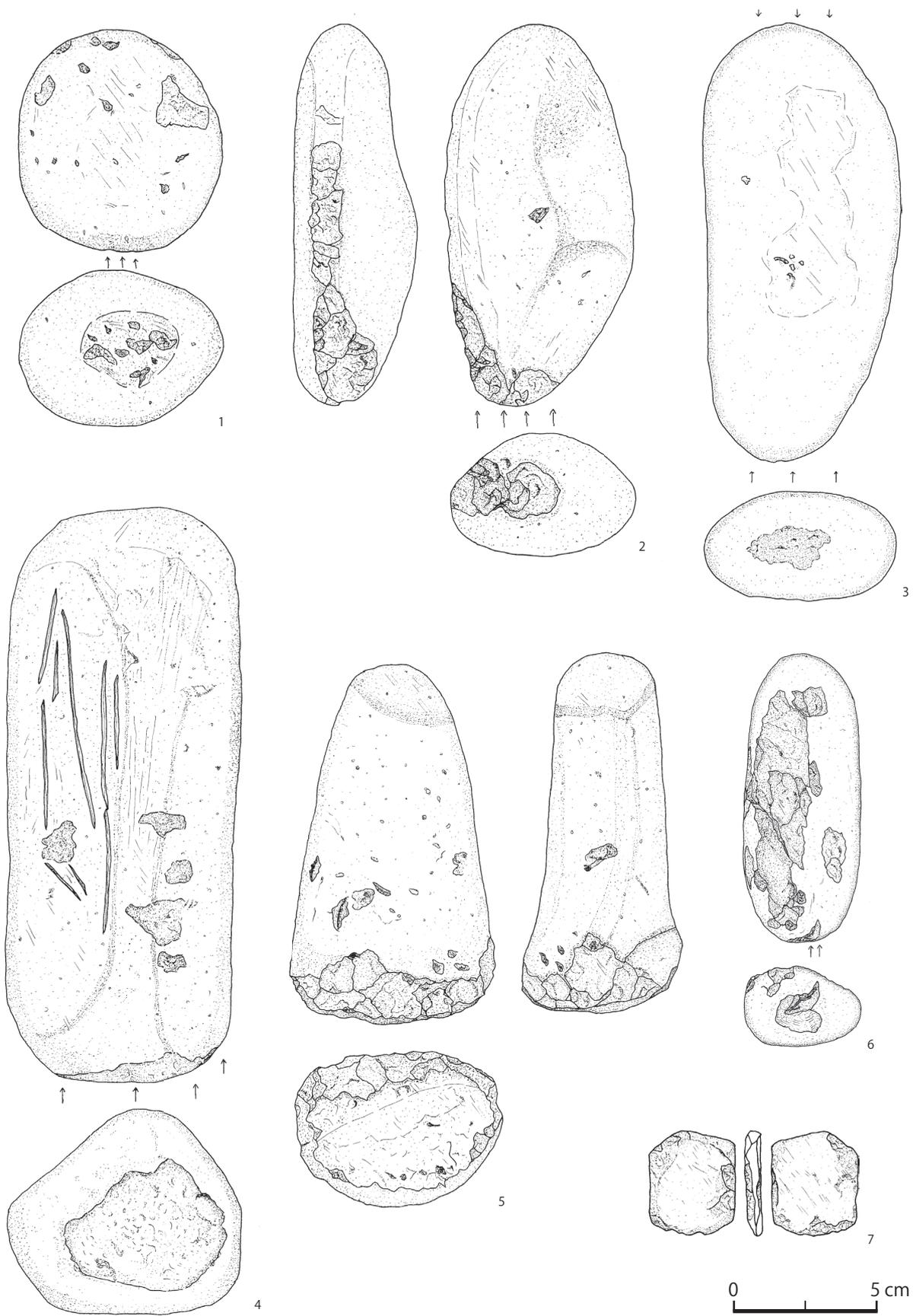


0 5 cm

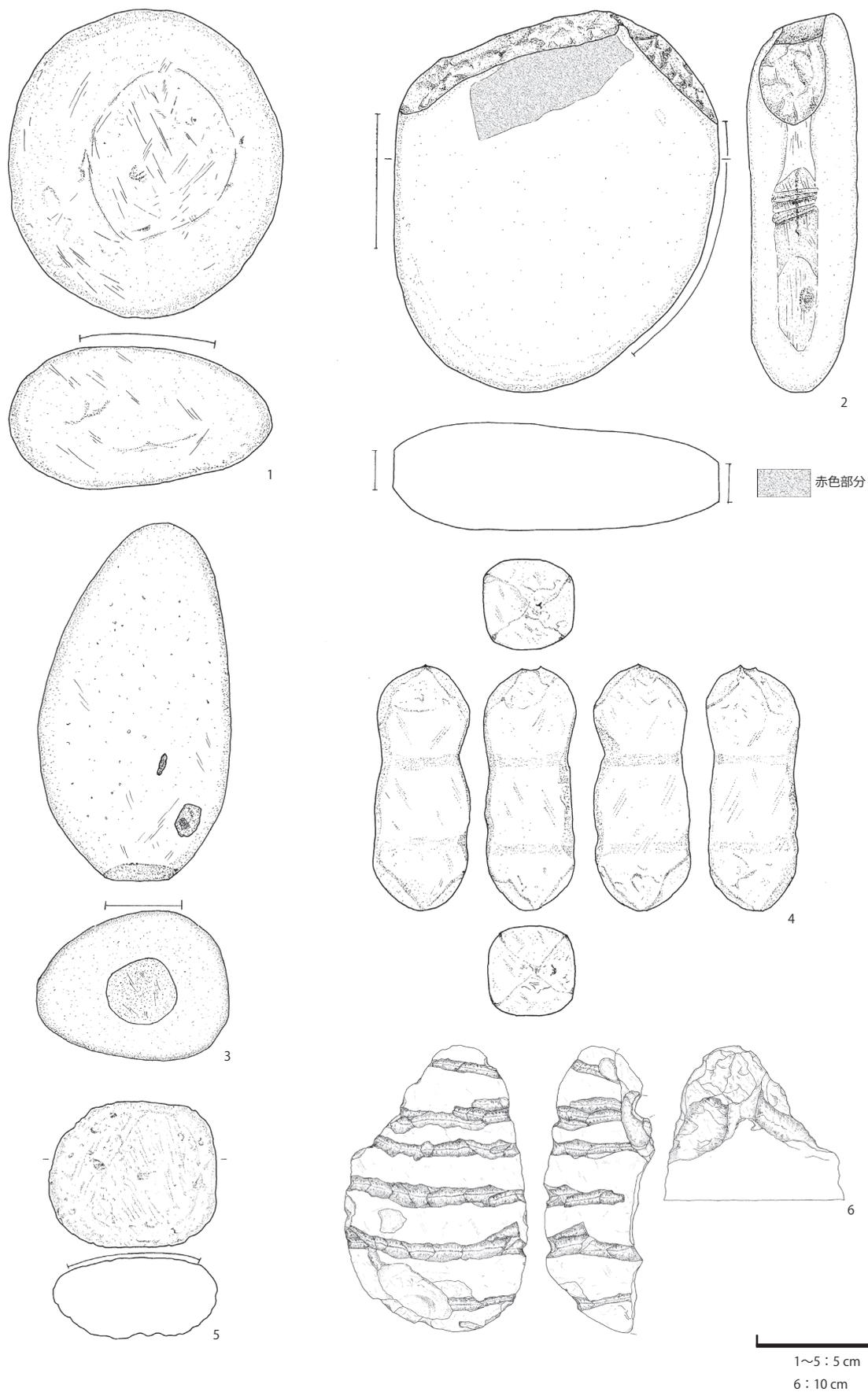
第38图 5号竖穴(TR5-Pit3)炉·圜炉裏 出土石器



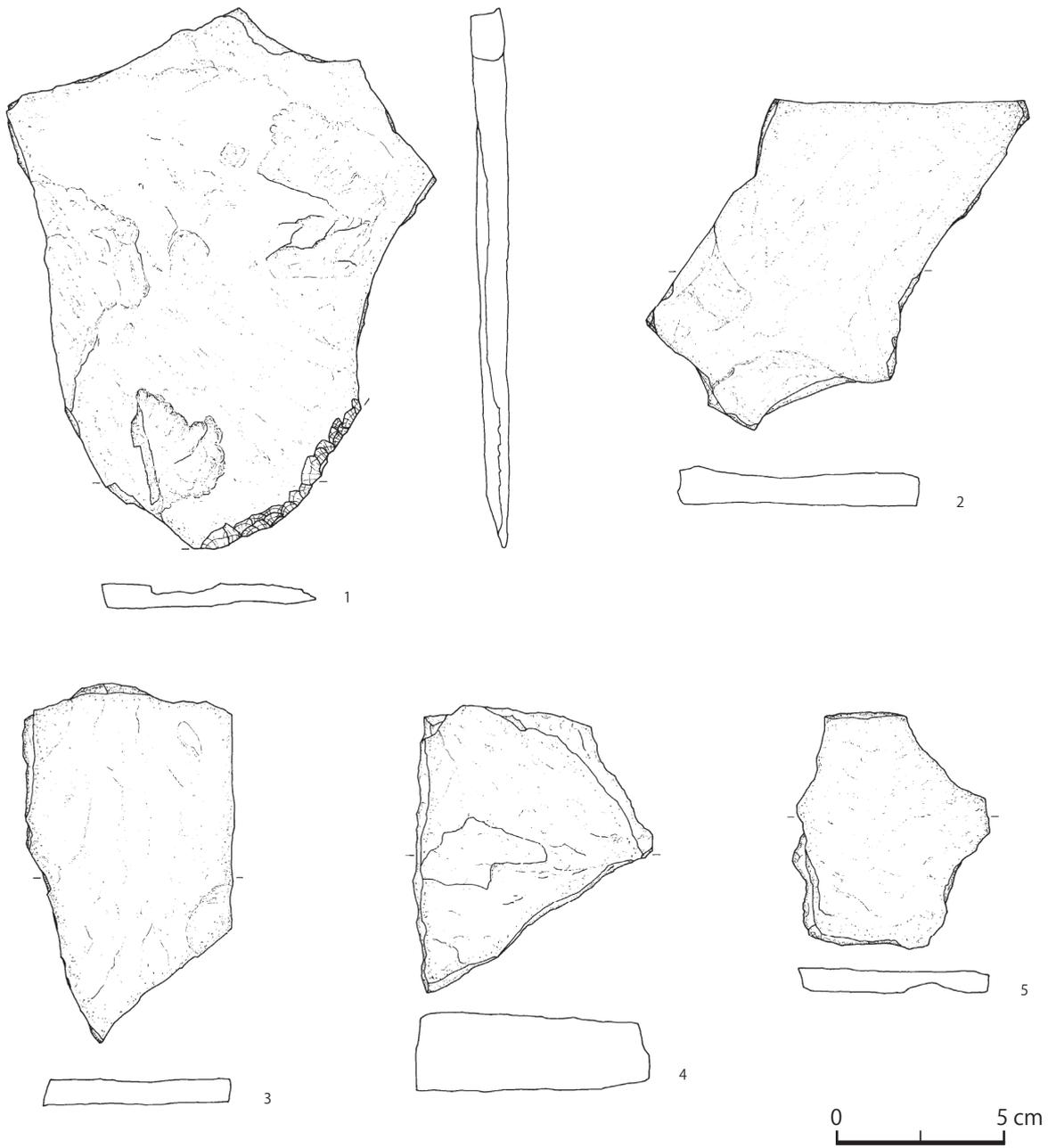
第39图 5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土石器 (1)



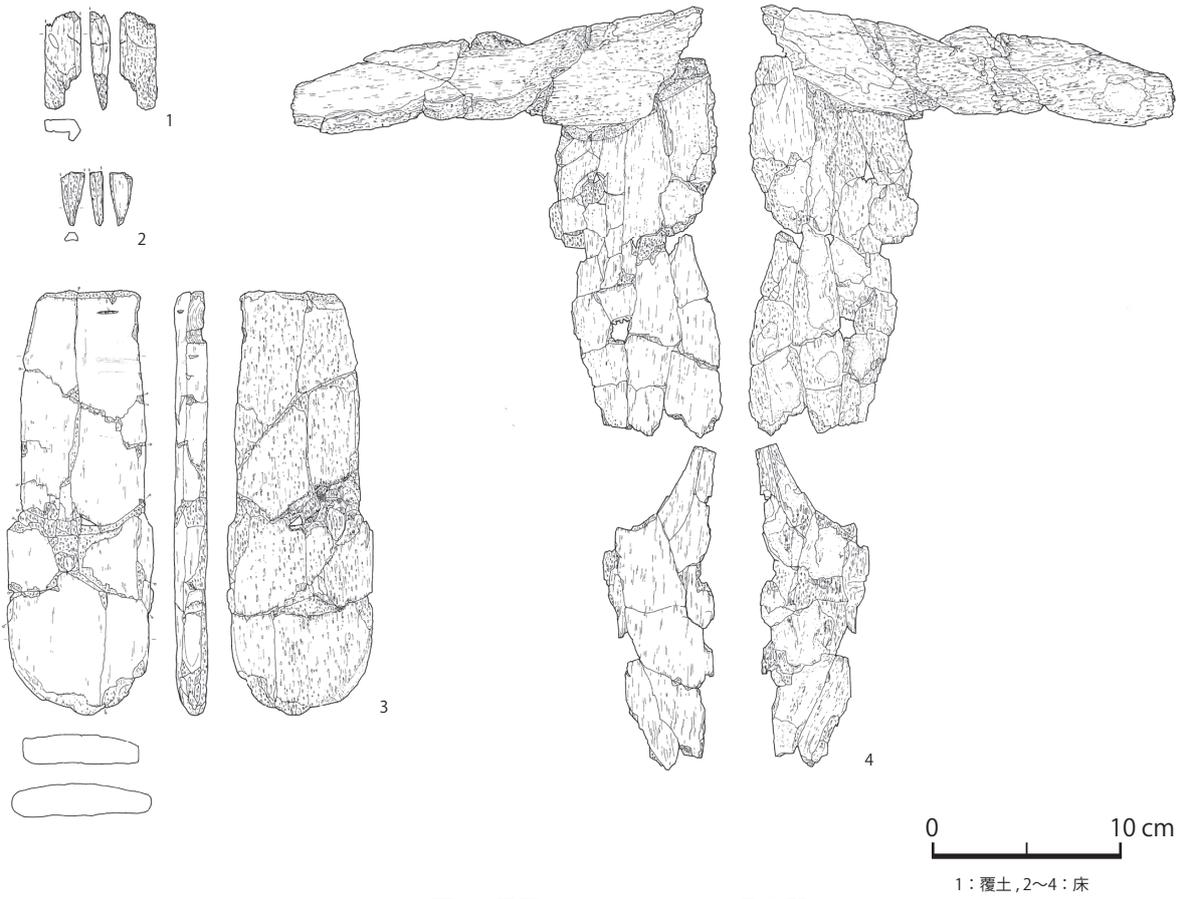
第40图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(2)



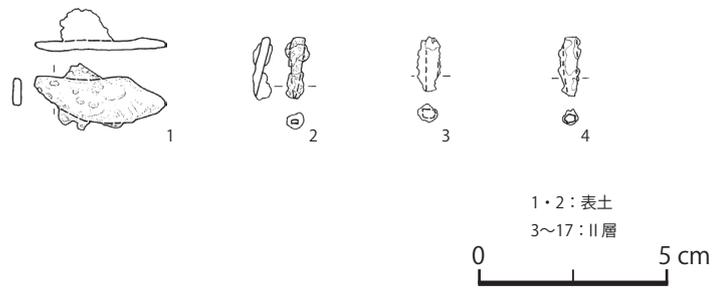
第41图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(3)



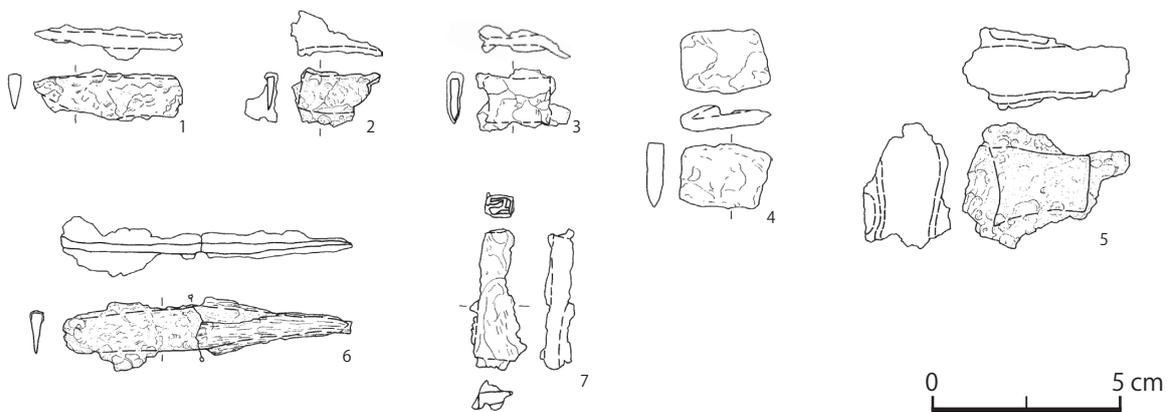
第42図 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土石器(4)



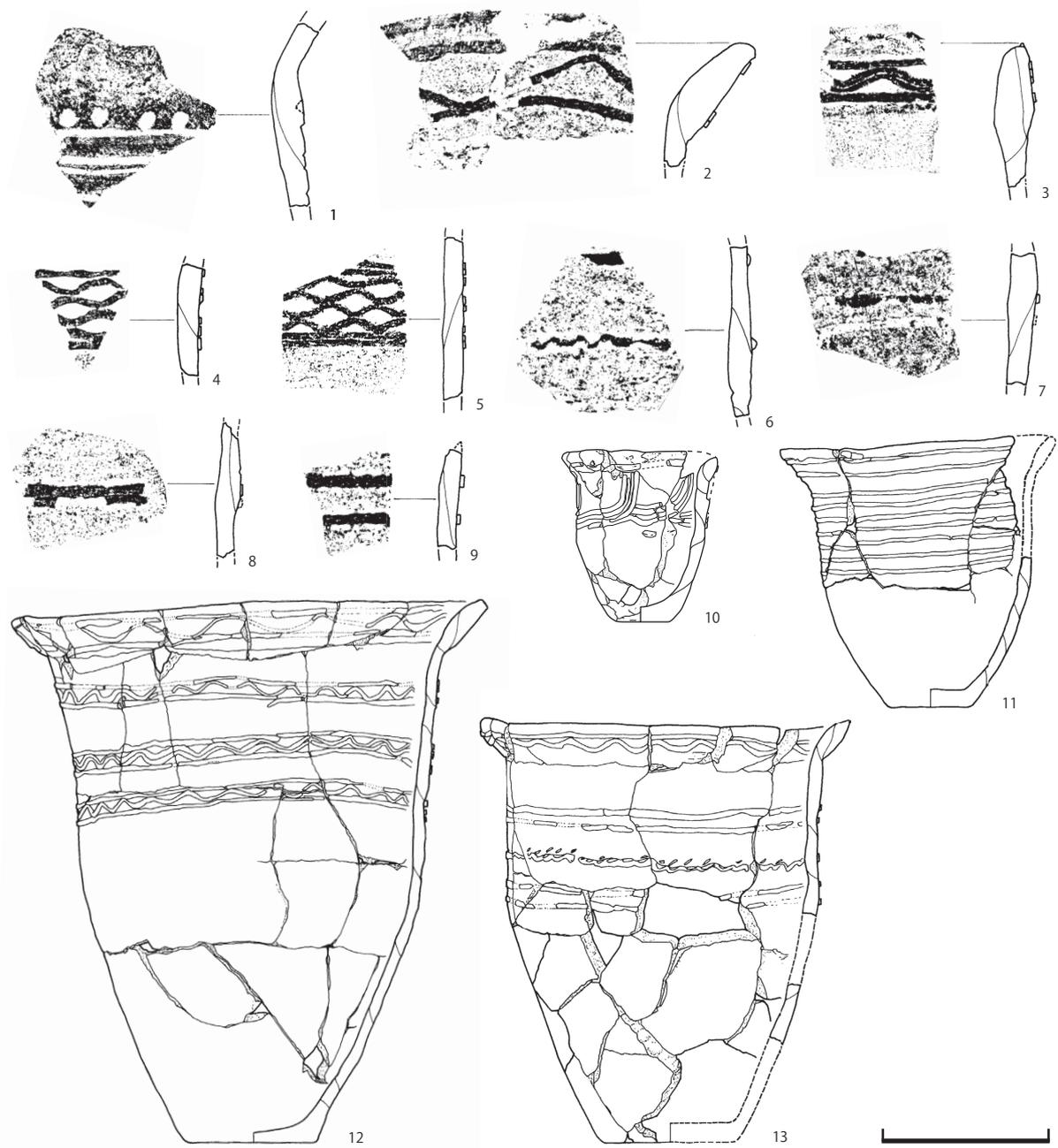
第43图 5号竖穴(TR5-Pit3)出土骨角器



第44图 5号竖穴(TR5-Pit3)床面 出土金属製品



第45图 5号竖穴(TR5-Pit3)覆土 出土金属製品



第46图 5号竖穴上层配石遺構 (TR5) 出土土器

本の紐状貼付文を施文し、頸部には口縁部へ迫り上がるような印象の紐状貼付文が連続して施文されている。11は中型のトビニタイ土器である。他の3個体と異なり、頸部は直立せずに底部へむかって緩やかにすぼまっている。文様は紐状貼付文による直線文のみで構成され、口縁部には2本配置し、口縁直下から間隔をあけて頸部から胴部へかけて7本が等間隔に施文されている。12は本遺跡で出土したトビニタイ土器の中で最も大容量のものである。肥厚する口縁には波線幅の広い3本単位貼付文が施文され、頸部から胴部にかけては上下に3本単位貼付文を、その間に2重波線文を直線文で挟んだ4本1単位の紐状貼付文が配置されている。13は12に次ぐ容量を有している。文様は肥厚する口縁部に直線文と波線文の2本1単位の紐状貼付文を施し、胴部にはひねりによる爪形の残る紐状貼付文の上下にやや間隔をあけて2本ずつ直線文が配置されている。

#### 4. 23号竪穴 (TR7-Pit6) 出土遺物

(土器：第47図)

床面の魚骨集中からは小破片ではあるがⅢ群e類に分類されるオホーツク土器が出土している。一方、覆土からはオホーツク土器底部(2)のほか、続縄文土器(3)や縄文中期土器(4)も出土している。また、(3)は口唇部に突起を有し、口縁部に2本の微隆起と斜行縄文が施されている。

(骨角器：第48図)

覆土中から出土した鳥骨製の刺突具である。アホウドリの上腕骨の一端を斜めに研磨して尖らせたものである。

#### 5. 22・23号竪穴上層廃棄層 (TR7) 出土遺物

(土器：第49図)

廃棄層から出土した土器はすべてオホーツク土器である。Ⅲ群e類土器が主体であるが、刻文を有するⅢ群b類土器(20)や沈線文を有するⅢ群c類土器(19)も出土している。本遺跡からの沈線文系オホーツク土器の出土例は19のみである。文様は先の尖った工具による沈線であり、施文後の器面調整により若干沈線が埋まりかけている。胎土は他のⅢ群土器と同じである。

(石器：第50図)

廃棄層から出土した石器では、主に石鏃が多く、刃部調整の粗いものが目につく。2は被熱している。

(骨角器：第51図)

廃棄層中から出土した骨角器である。1・2は開窩式の銚頭であり、欠損品ではあるが索溝部分や縄を通す孔が残存している。3は小型の彫像であり、フクロウを思われる彫刻が施されている。目やくちばしだけでなく、翼部分にも放射状に刻線がつけられている。残存部の直径30 mm、厚さはわずか3.6 mmと華奢な作りである。

4は鳥骨の先端部を斜めに切断した骨鏃である。5は骨針であり、針穴の上部には糸通りを良くするための溝がもうけられている。8は骨匙の欠損品と推察され、歯クジラの歯のセメント質年輪が観察できる。4本のスリット状の隆起には水平方向の刻みが施され、匙のくびれ部分からスリット部分にかけて縁に櫛歯状の加工が残存している。また、厚さが約1.6 mmと極端に薄く加工されている。6・7は鯨骨を尖端加工し、9・10は原材と思われる。11は円盤状製品である。

(金属製品：第52図)

廃棄層からは2点の金属器が出土している。第52図1は刀子であり、切先部分を欠損している。2は調査区の壁際から出土した神功開寶である。神功開寶は765(天平神護元)年初鑄で、皇朝十二銭の3番目に発行された貨幣である。銭文ははっきりしており、字体は「功」字の作りが刀になりノの部分の長い「長刀」、「開」字を隸書にする「隸開」であり、「寶」字の貝がやや小振りである。外縁外径は24.51 cmと標準的な大きさであるが、縁厚1.06 cm、内厚0.37 cmと非常に薄いという特徴がある。また、その影響か重量が2.19 gと大変軽いことも注目される。皇朝十二銭の出土はオホーツク文化の遺跡では初例であるため、その意義については4章総括の中で述べることにする。

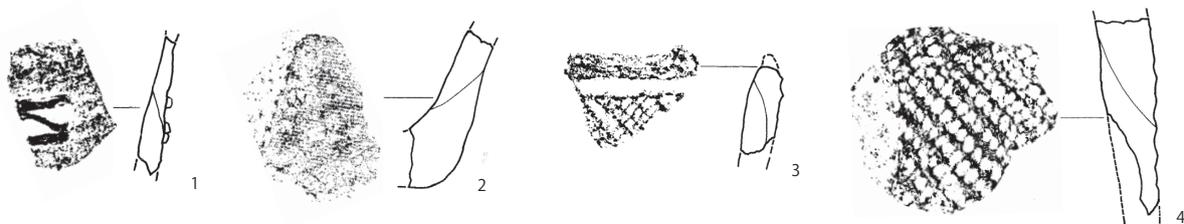
#### 6. 1号墓 (TR4-Pit1) 出土遺物

(土器：第53図)

1~3は覆土中から出土したオホーツク土器である。3は完形品であり、出土状況から被葬者の頭部に被せた被甕と推察される。文様は3本単位貼付文を口縁部から3段配置するもので、Ⅲ群e類に分類される。器面は黒色を呈し、煮こぼれの炭化物が内外面に付着している。また、縄文中期のV群b類土器も1点出土している。

(石器：第54図)

覆土出土の石器である。出土している剥片石器の多くは石鏃である。7の泥岩製の扁平のすり石は側縁部や長



1: 床, 2~4: 覆土

2: 10 cm

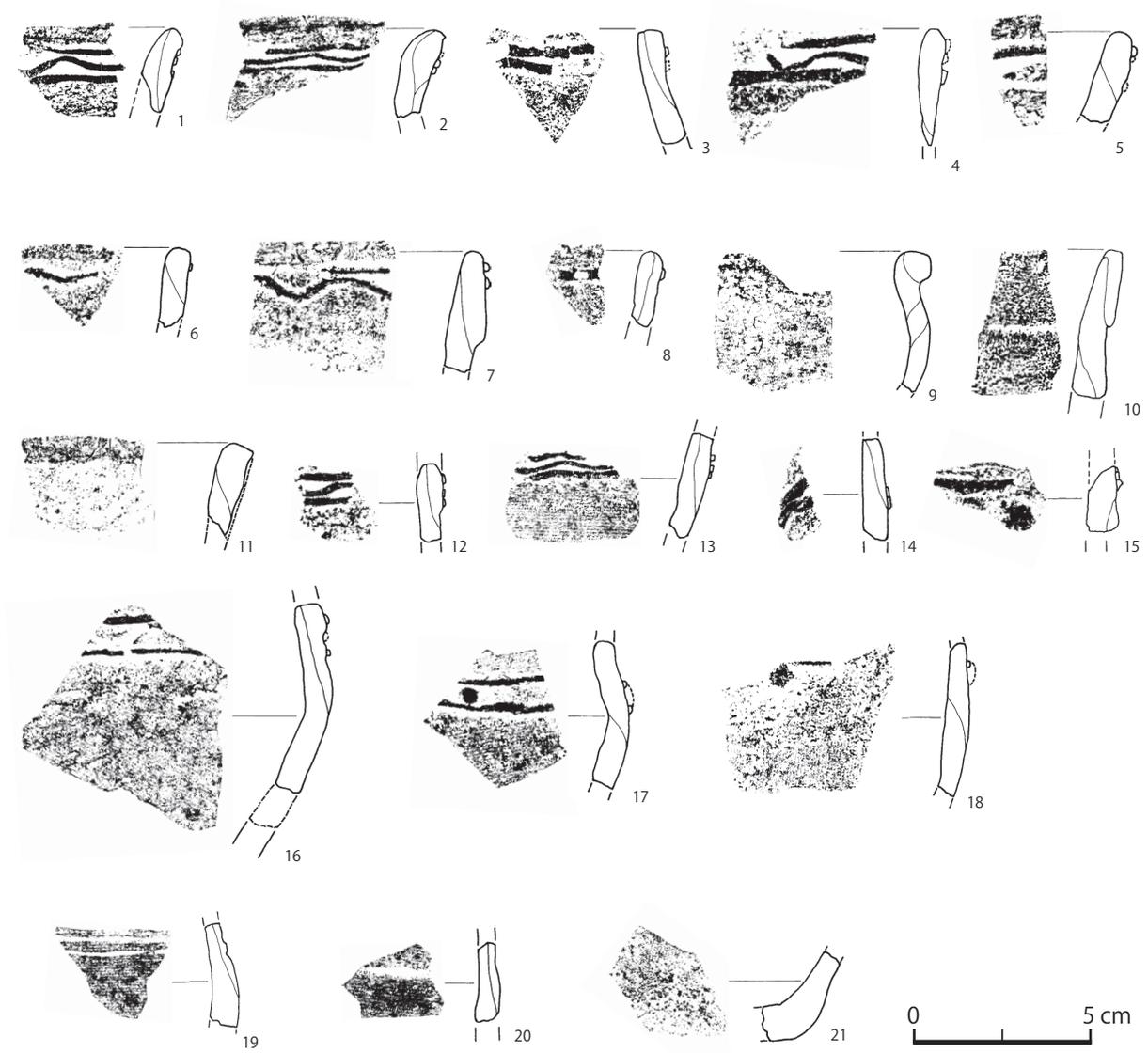
1·3·4: 5 cm

第47图 23号竖穴(TR7-Pit6)出土土器

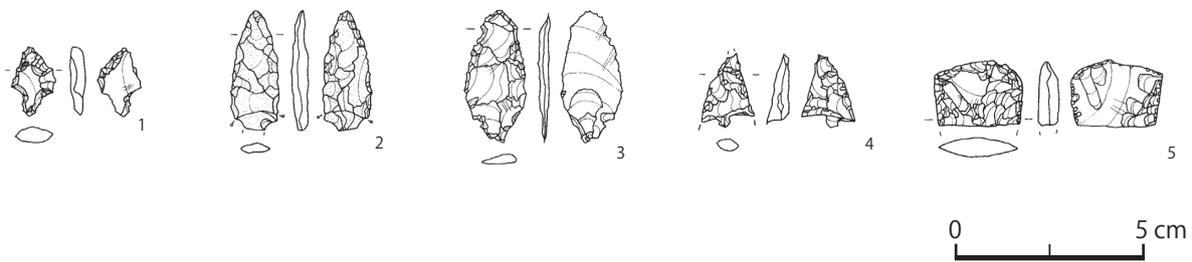


0 5 cm

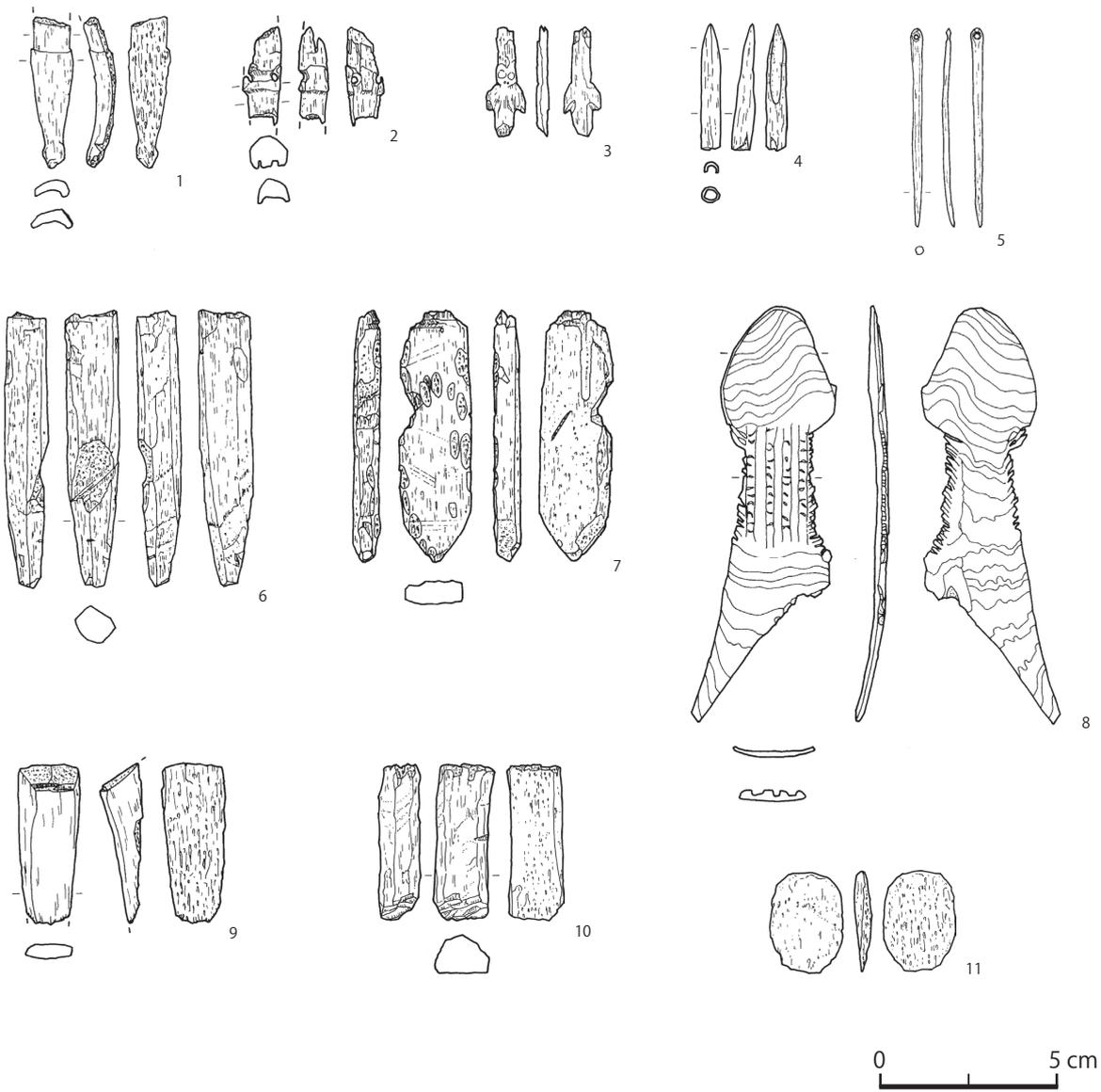
第48图 23号竖穴(TR7-Pit6)出土骨角器



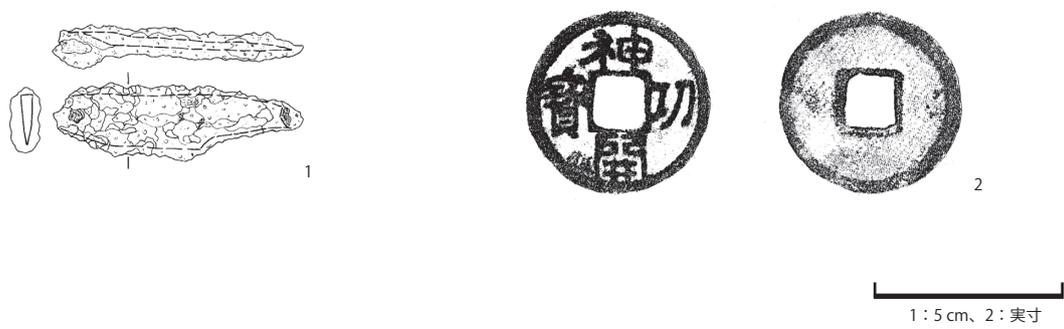
第49图 22·23号竖穴上層废弃層(TR7)出土土器



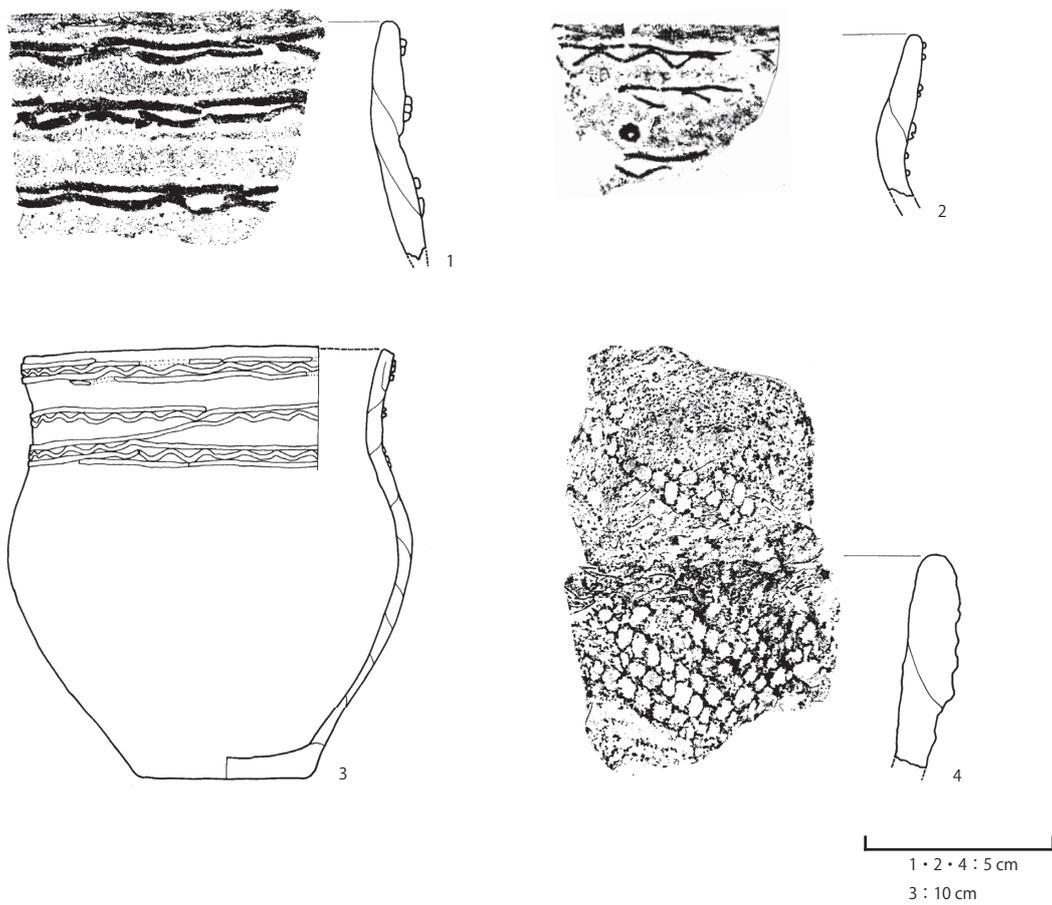
第50图 22·23号竖穴上層废弃層(TR7)出土石器



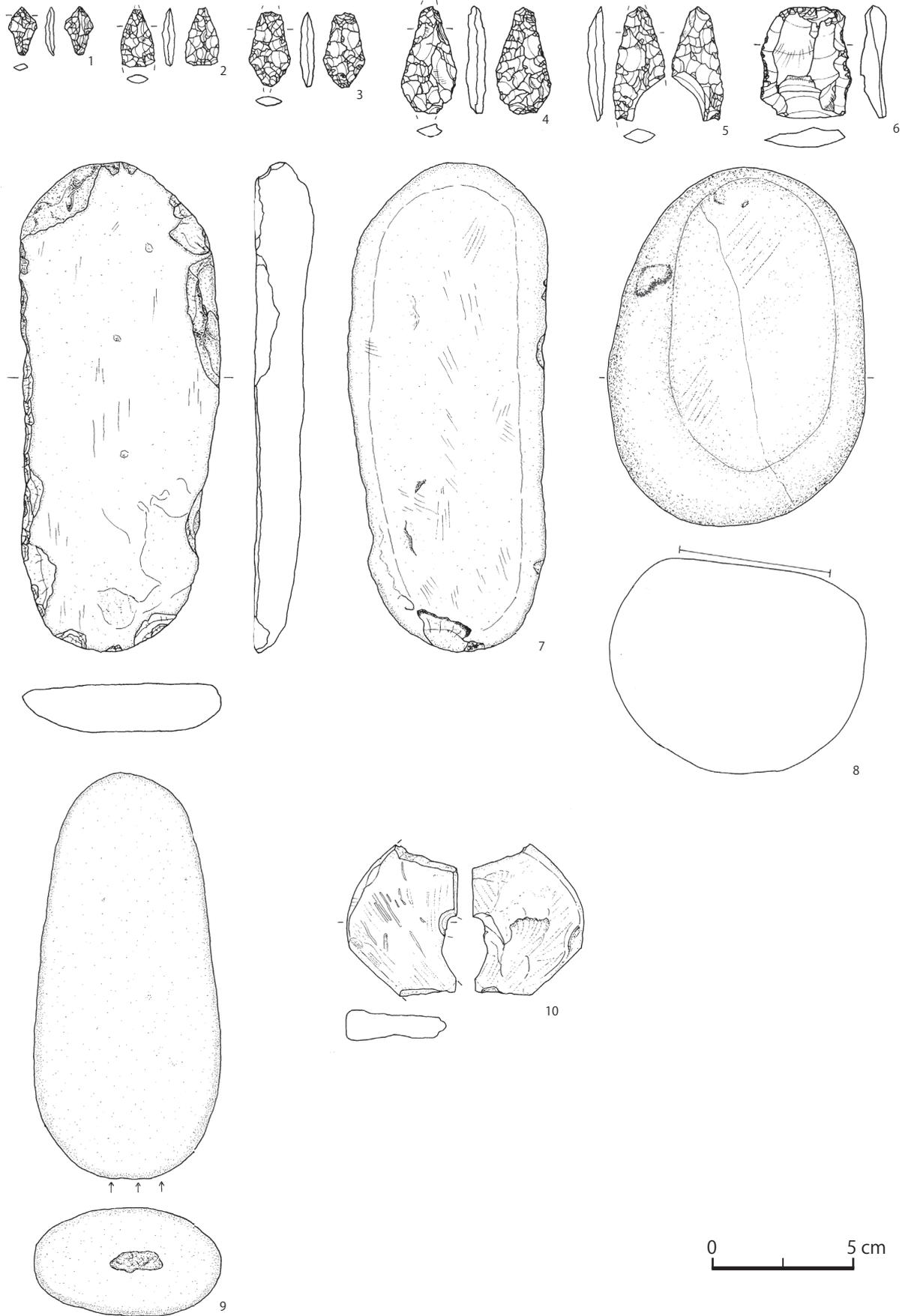
第51图 22·23号竖穴上層廃棄層 (TR7) 出土骨角器



第52图 22·23号竖穴上層廃棄層 (TR7) 金属製品



第53图 1号墓 (TR4-Pit1) 出土土器



第54图 1号墓(TR4-Pit1)出土石器

軸端部に打痕調整が見られる。擦痕は観察していないが、土を掻く石鍬などの用途も考えられる。10は泥岩製の有孔石製品で中央に穿孔が観察できる。側縁部を含め全体に研磨されている。

(金属器：第55図)

覆土中からは2点の鉄製品が出土している。第32図1は刀子の茎部分であり、片側には骨製の柄（鹿角か）が残存し、中央に目釘孔もみとめられる。2は鉄針であり、両端が欠損している。

## 7. 2号墓 (TR5-Pit4) 出土遺物

(土器：第56図)

覆土中から4点のオホーツク土器が出土した。1と4は人骨（歯）に近接して出土した個体である。文様は均整のとれていない紐状貼付文によるもので、口縁部から3本単貼付文、工具により凹凸が付けられた3本単貼付文、直線文と波線文を交互に施文した5本1単位の貼付文が配置されている（1）。出土位置や胎土・焼成から1・4は同一個体と推察されるが、直接接合はしない。

(石器：第57図)

覆土出土の石器である。出土している石器は全て石核状フレイクである。3の形状はみかんの房に類似し、特徴的である。

(金属器：第58図)

覆土中から刀子が出土している。1片は積石直下の坑上から出土し、残りの2片はやや離れた北側から出土しているがそれぞれ接合した。棟部がやや湾曲している。

(繊維製品：第3章4節写真1～6)

2号墓の積石の直下から炭化した織物製品が出土した。出土時は同一破片であったが、取り上げの際に分離したため2点として取り上げた。いずれも平織組織の断片であり、非常に緻密に織られている。その他、本遺物に関する詳細な分析結果は第3章4節を参照されたい。

## 8. 土坑 (TR4-Pit2a) 出土遺物

(土器：第59・60図)

第59図はPit2aの底面出土土器である。一般的な直線文と波線文の単位貼付文だけでなく（1・2）、紐状貼付文に工具で刺突を施して鎖状にしたもの（3）が底面から出土している。また、小破片ではあるがⅡ群c類土器が出土している点には留意したい。文様は縦の沈線を施した後に横の沈線を施文しており、胴部の格子状沈線

文と推察される。第60図は覆土出土土器である。1は強く外反した口縁と平坦な貼付文が特徴的なⅡ群b類土器である。その他はⅢ群土器であるが、4は短い粘土紐を十字に配置することで一種の意匠としており、類似する土器片は他の遺跡からも出土しておらず、独創的な文様である。

(石器：第61図)

第61図4はPit2a底面出土、他は覆土中より出土している。この中からも石核状フレイクが出土している。同図5の安山岩製のたたき石は球状の一端に打痕が観察できた。

(金属器：第62図)

Pit2aの覆土から刀子1点が出土している。第45図4と同じく、切先は折れ曲がった状態である。

## 9. 土坑 (TR4-Pit2b) 出土遺物

(土器：第63図)

Pit2bの覆土および底面出土土器である。底面からはⅢ群e類のオホーツク土器が出土しており、本遺構に伴うものと推察される。また、1点ではあるが縄文中期の土器片も出土している。

(石器：第64図)

第64図はPit2b覆土出土である。1は石鍬であり、被熱している。4は側縁部全面に刃部調整を施したラウンドスクレイパーである。

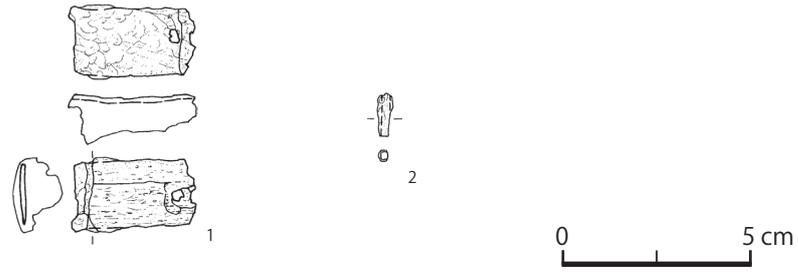
## 10. 配石遺構 (TR6-Pit5) 出土遺物

配石遺構に明確に伴うものを判別することが困難なため、Ⅱ層中の配石遺構範囲内から出土した遺物をすべて抽出し、本節で紹介することとした。

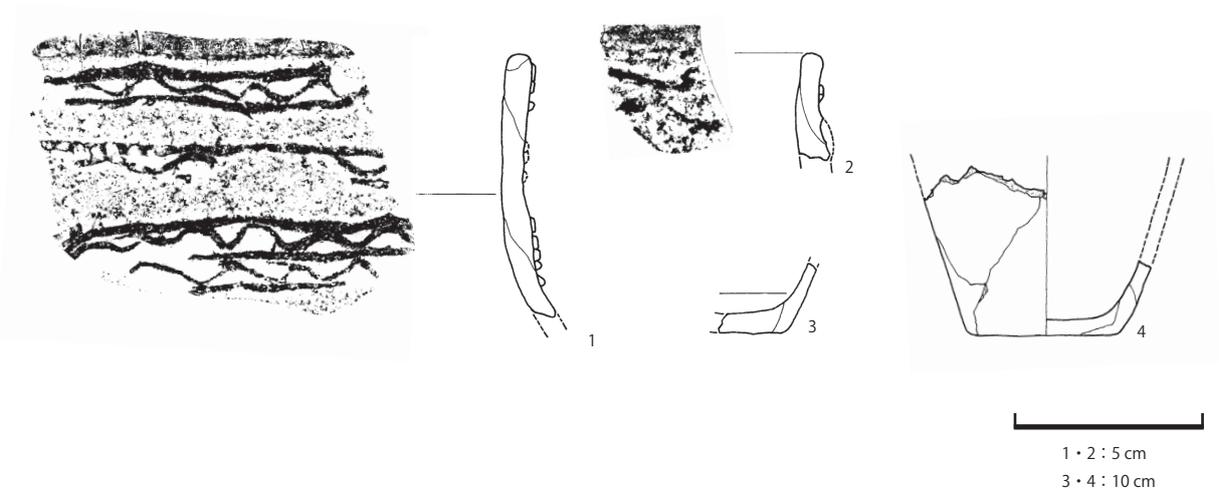
(土器：第65～68図)

配石遺構が構築されたⅡ層中から出土した土器である。大部分はオホーツク土器で構成されるが、擦文土器（第65図1～3）やトビニタイ土器（第65図4・5）もわずかに確認された。復元可能であった第65図5はPit5の周辺から出土した個体である。口縁部は緩く外反し、胴部が張り出さずに底部へかけてすぼまる器形であることから、Ⅱ群a類に分類した。また、底部外面には凹凸があり、器体も元々傾いた作りであるため、平坦な場所では自立することができない。

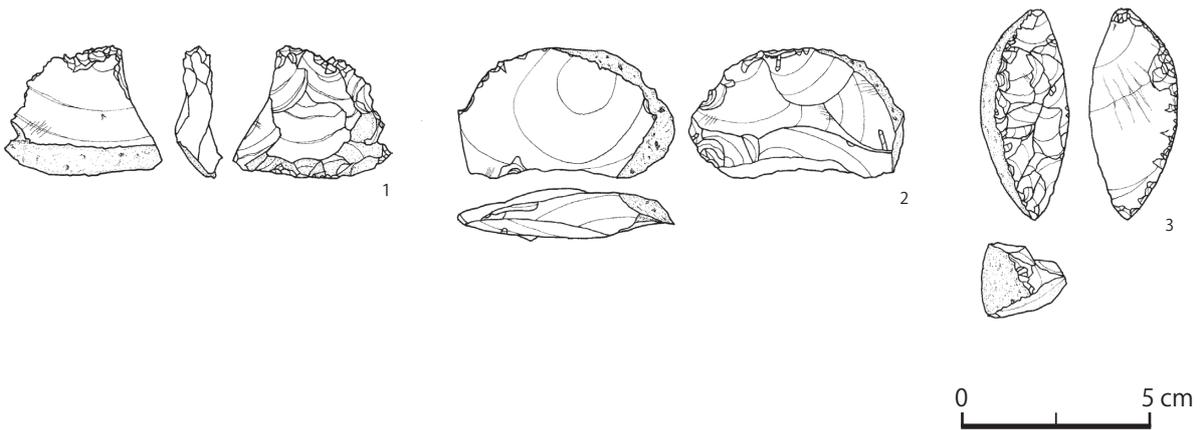
第66・67図はすべてオホーツク土器である。他の遺構同様、Ⅲ群e類主体であるが第67図9はⅢ群b類に分類



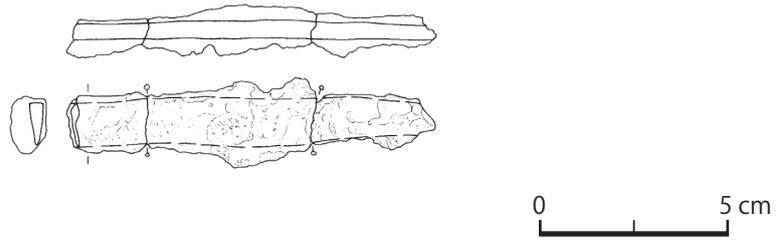
第55图 1号墓(TR4-Pit1)出土金属製品



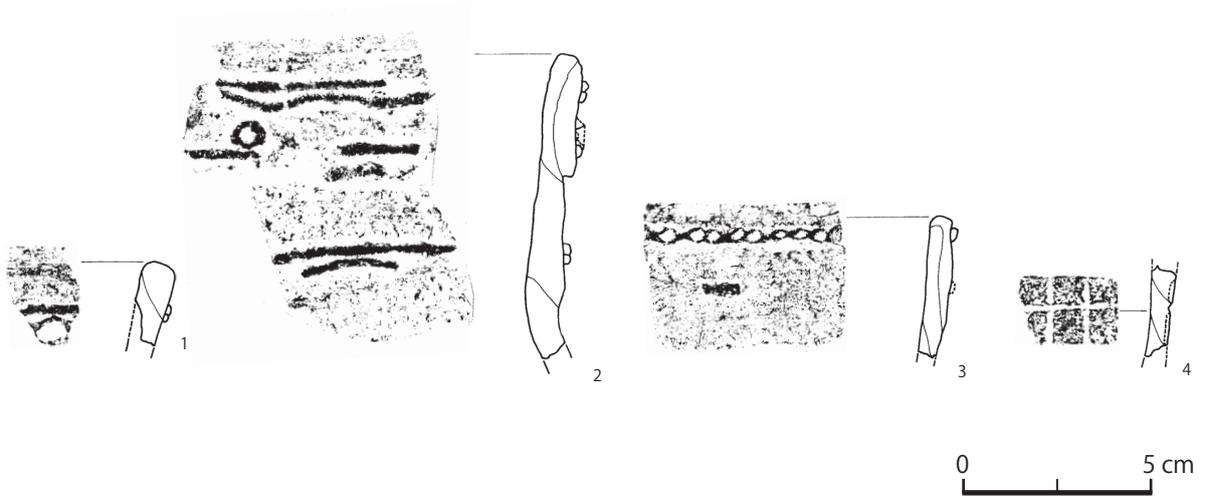
第56图 2号墓(TR5-Pit4)出土土器



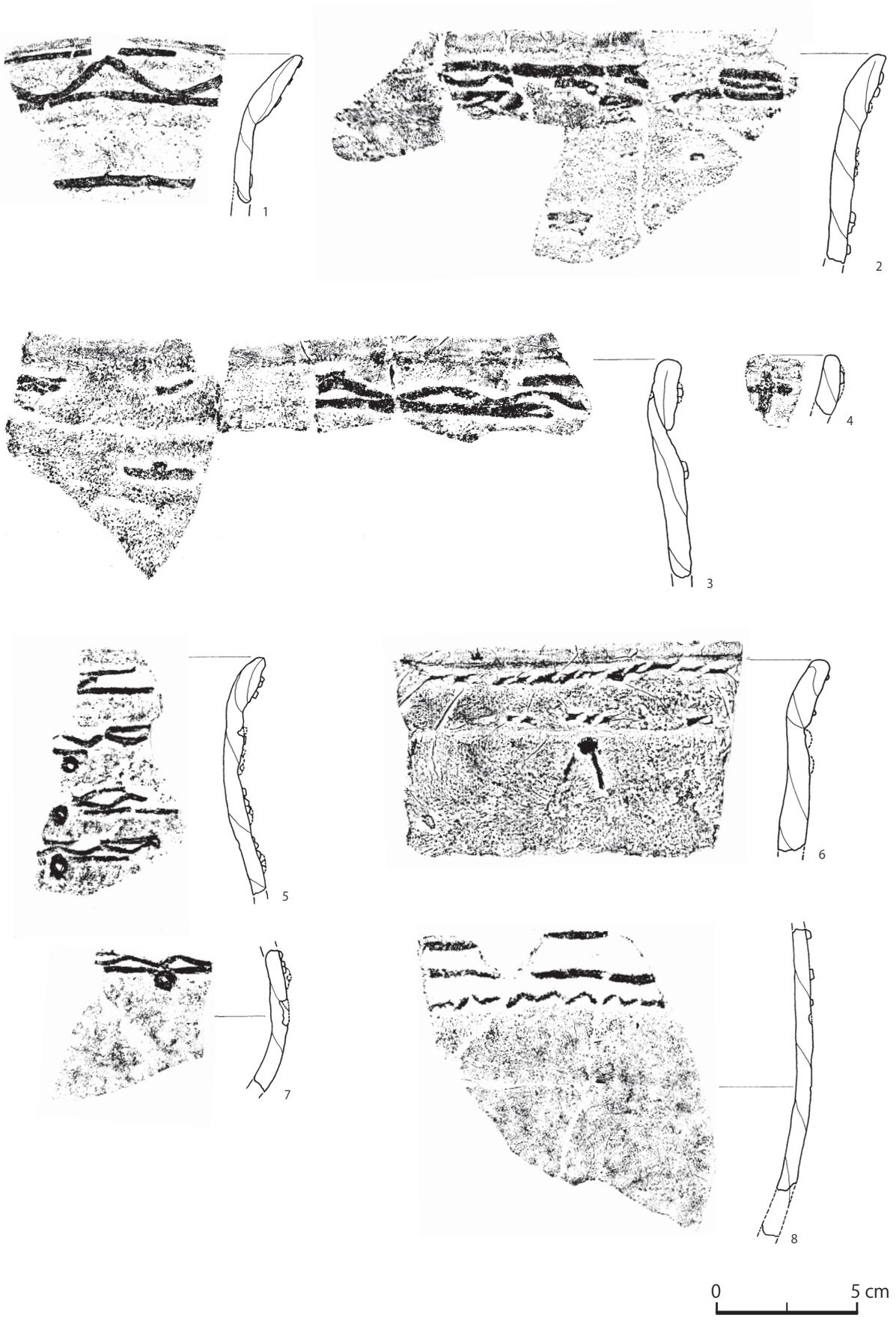
第57图 2号墓(TR5-Pit4)出土石器



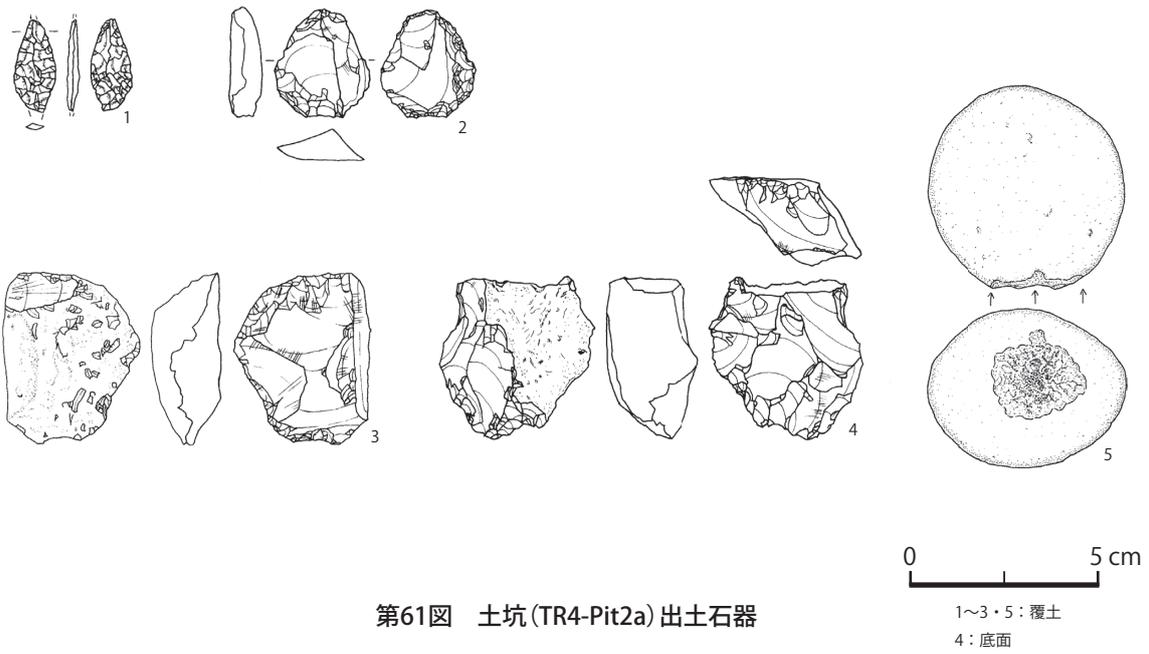
第58图 2号墓(TR5-Pit4)出土金属製品



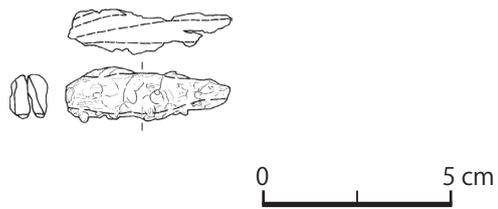
第59图 土坑(TR4-Pit2a)床面 出土土器



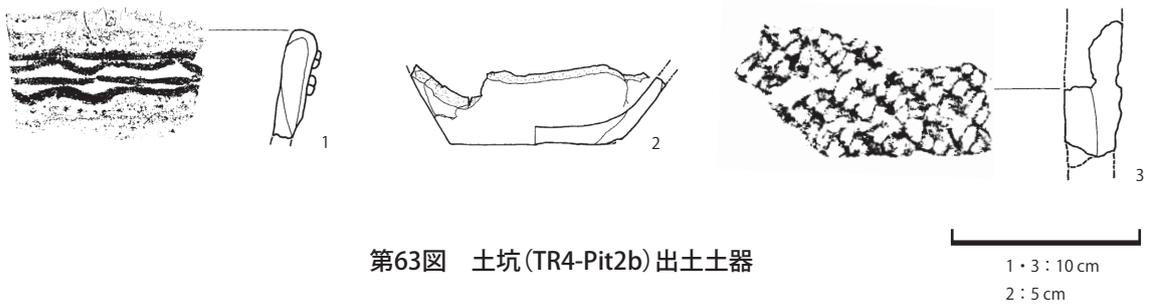
第60図 土坑(TR4-Pit2a)覆土 出土土器



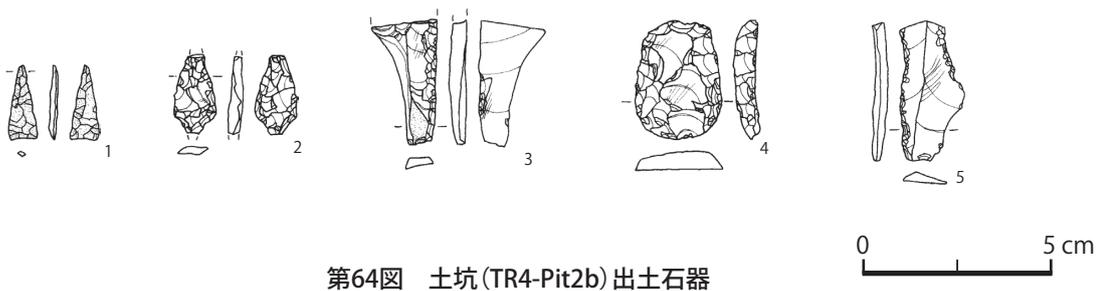
第61图 土坑 (TR4-Pit2a) 出土石器



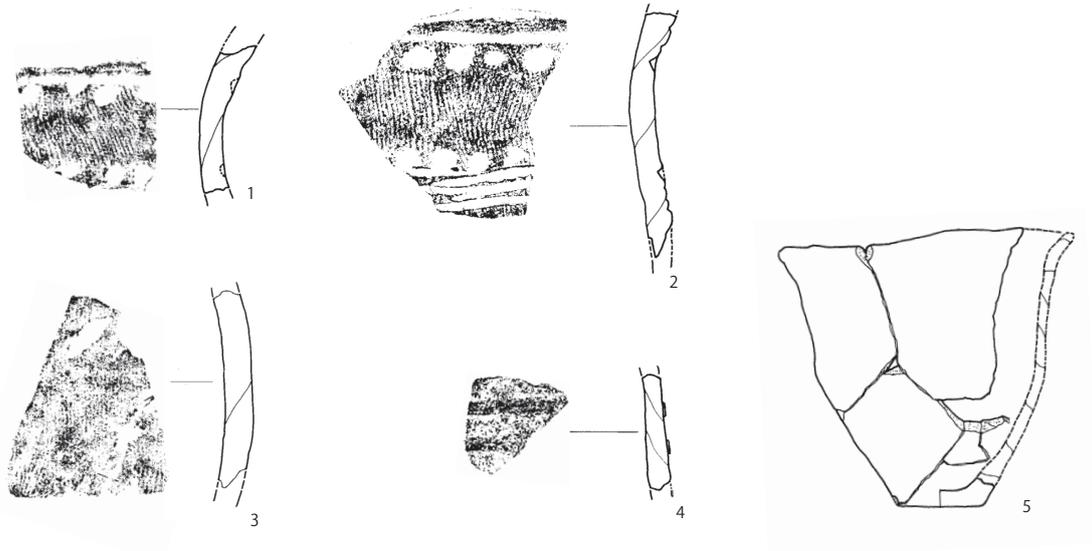
第62图 土坑 (TR4-Pit2a) 出土金属製品



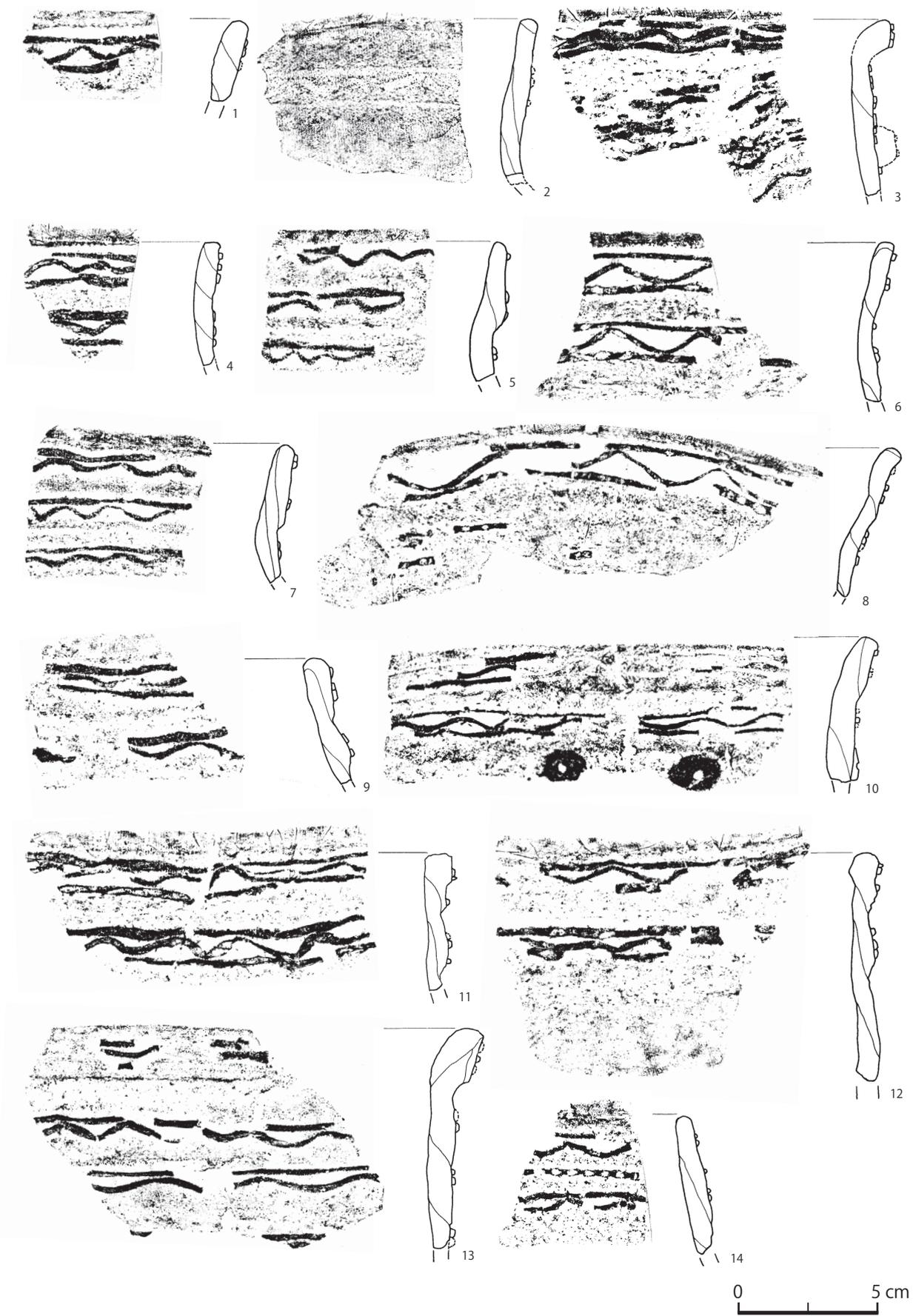
第63图 土坑 (TR4-Pit2b) 出土土器



第64图 土坑 (TR4-Pit2b) 出土石器



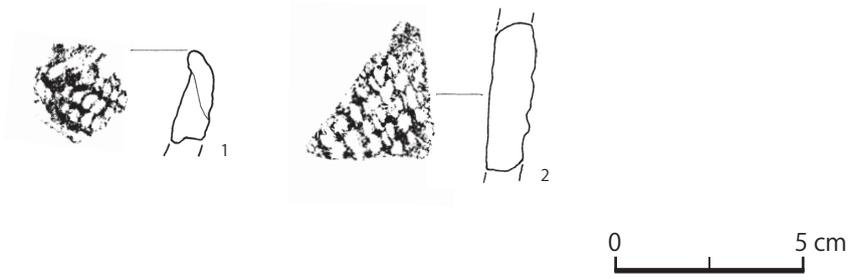
第65図 配石遺構(TR6)出土土器(1)



第66图 配石遺構(TR6)出土土器(2)



第67図 配石遺構(TR6)出土土器(3)



第68図 配石遺構(TR6)出土土器(4)

され、オホーツク文化刻文期に相当する。胎土はやや荒い砂粒を多く含んでおり他のⅢ群土器とは異なる。一方、復元可能であった第67図21は器高約18cmと中型であり、断面平坦な紐状貼付文が螺旋状に施文されることからⅢ群e類に分類される。3本単位貼付文を上下に配置し、その間に直線と波線を交互に5本配置した単位貼付文を配置した文様構成となっている。器面は黒色を呈し、胴部下半は縦位のナデ成形がなされている。また、配石中からは第68図の縄文土器片も出土している。

(石器：第69～71図)

第69図～第71図は配石遺構が構築されたⅠ～Ⅱ層中から出土した石器である。第69図1～20は石鏃で、1のように粗雑な調整のものもあれば、20のように押圧剥離による微細剥離痕が観察できるものもある。5の将棋駒形石鏃は被熱している。

第70図40～44、第71図45～47はすり石と、たたき石である。44や46のように擦り面に打痕が見られるものや、42や47のように擦り面のみのものがある。たたき石も含め、元としている石の大きさには大小はあるが、ほぼ棒状の石材を利用する点では共通している。第70図39～44、第71図45～47のうち、39は砂岩製、40は硬質頁岩製で、それ以外は安山岩製である。

(骨角器：第72図)

配石遺構が構築されたⅡ層中から出土した鯨類骨の骨角器である。用途は不明であるが断面D字型になるよう加工を施し、先端部には3条の刻線が認められる。

## 11. 遺物集中 (TR6) 出土遺物

(土器：第73図)

Ⅱ層下部～Ⅲ層上面で出土したもので、すべてⅢ群土器である。唯一文様の分かる個体(1)は口縁部と底部を欠いた大甕である。出土時の状況から1と4は同一個体であるが直接接合はしなかった。文様は1本の波線を2本の直線で挟んだ3単位貼付文であり、Ⅲ群e類に分類される。本遺構に伴う土器に口縁部が含まれず、底部が多く存在することには留意すべきである。

(骨角器：第74図)

遺物集中に伴う骨角器である。1は骨斧である。1段のくびれによって柄部と刃部に区別され、基部に突起を有する。2は釣針の接続部を欠損しているがU字形の組み合わせ式釣針軸と推察する。残存部には糸掛け用の溝が片面のみ掘られている。

## 12. Ⅰ・Ⅱ層出土遺物

(土器：第75・76図)

第75図はTR4のⅠ・Ⅱ層出土土器である。TR5と同様にⅢ群e類土器を主体とするが、1点のみⅢ群b類土器が出土している(9)。文様は横長レンズ状の爪形刻文を口縁部の下半に2段配置し、互い違いになるよう連続施文している。

第76図はTR5のⅠ・Ⅱ層出土土器である。3本単位貼付文を複段配置したⅢ群e類土器を主体とするが、中には粒状貼付文を施文する例もみられる(10・11・13)。

(石器：第77～79図)

第77図1～4はTR4のⅠ層出土石器である。4は非常に小さなプラットフォームから微小剥片を剥ぎ取っている痕跡が見られる。同図5～20はTR4のⅡ層出土のものである。この中には石鏃が多いが、5～7の粗雑な刃部調整のものもある一方、8～14のように全面に微細調整を行なっているものなどもある。中でも8の石鏃は将棋駒形からひし形へと変化の過程を示すと考えられる良い資料である。19は砂岩製の砥石で全面を研磨している。

第78図1～5はTR7のⅠ層出土石器である。2は基部調整途中の石鏃未製品である。

第79図1～4はTR5のⅡ層出土石器である。1は側縁部に微細な刃部調整を施している石鏃である。4は安山岩製の石錘で長軸方向に1条の溝が見られる。形状はいびつである。

(骨角器：第80図)

TR7のⅠ層から出土した骨角器である。1は丸みを帯びたヘラ状製品の一部と推察される。先端部は使用により摩滅している。2は鹿角製の刺突具である。

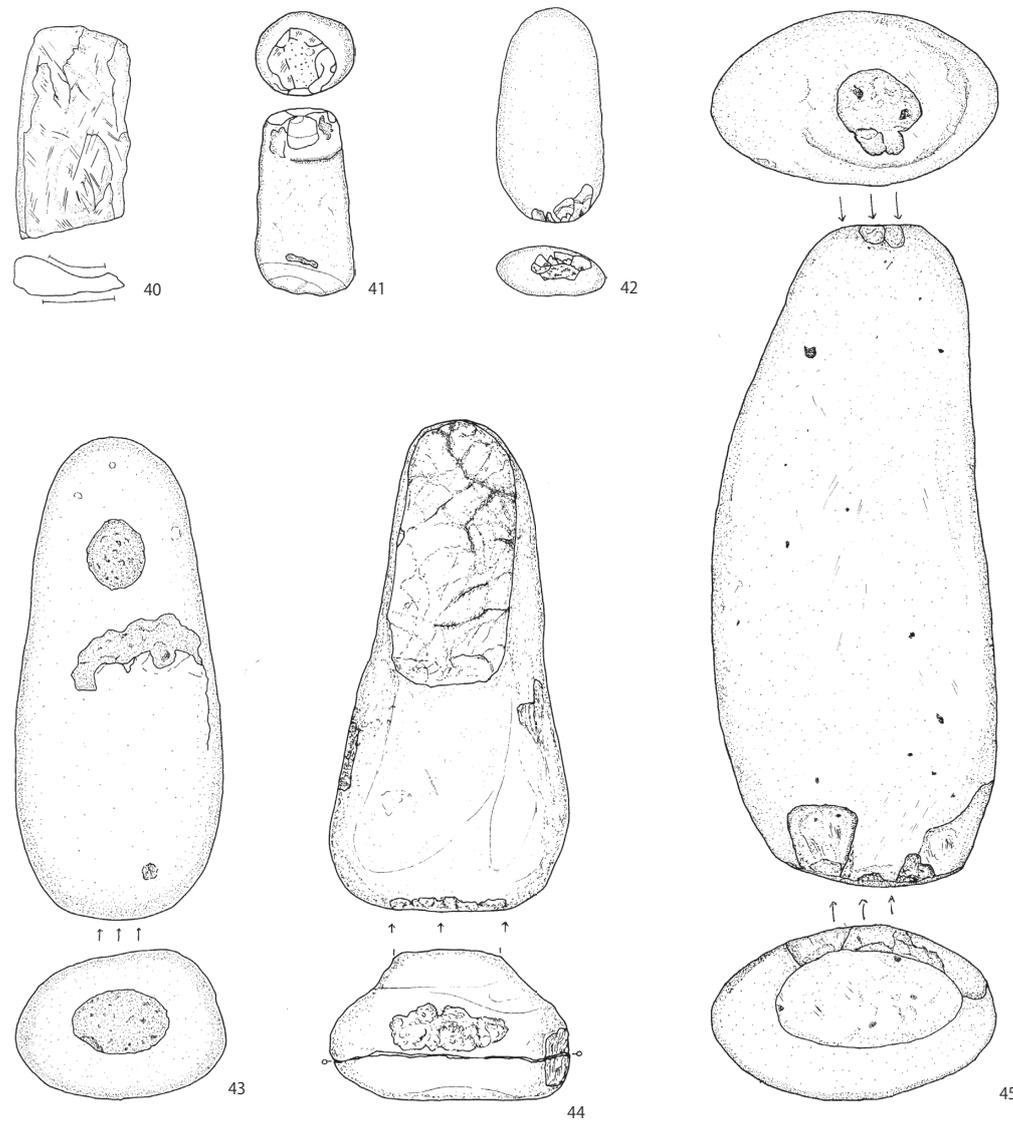
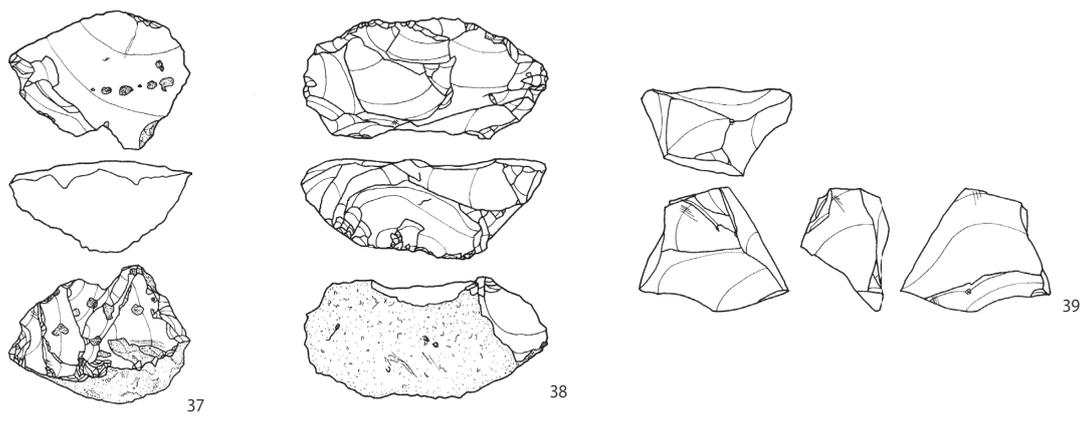
(金属器：第81・82図)

第81図1はTR4のⅠ層から出土した鉤状の鉄製品である。トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点の9c号床面から出土したものより小さく、釣針としての機能も考えられる。2は不明鉄片である。刀子の刃部とも考えられるが、非常に薄いため不明鉄片とした。

第82図はTR5のⅡ層中から出土した刀子である。1の刀子は刃部先端と茎尻を欠損している。2は比較的小型の刀子で茎尻を欠損している。3は柄口に金具が巻かれており、斜里町の須藤遺跡から出土したトビニタイ文化期の刀子に類似する。

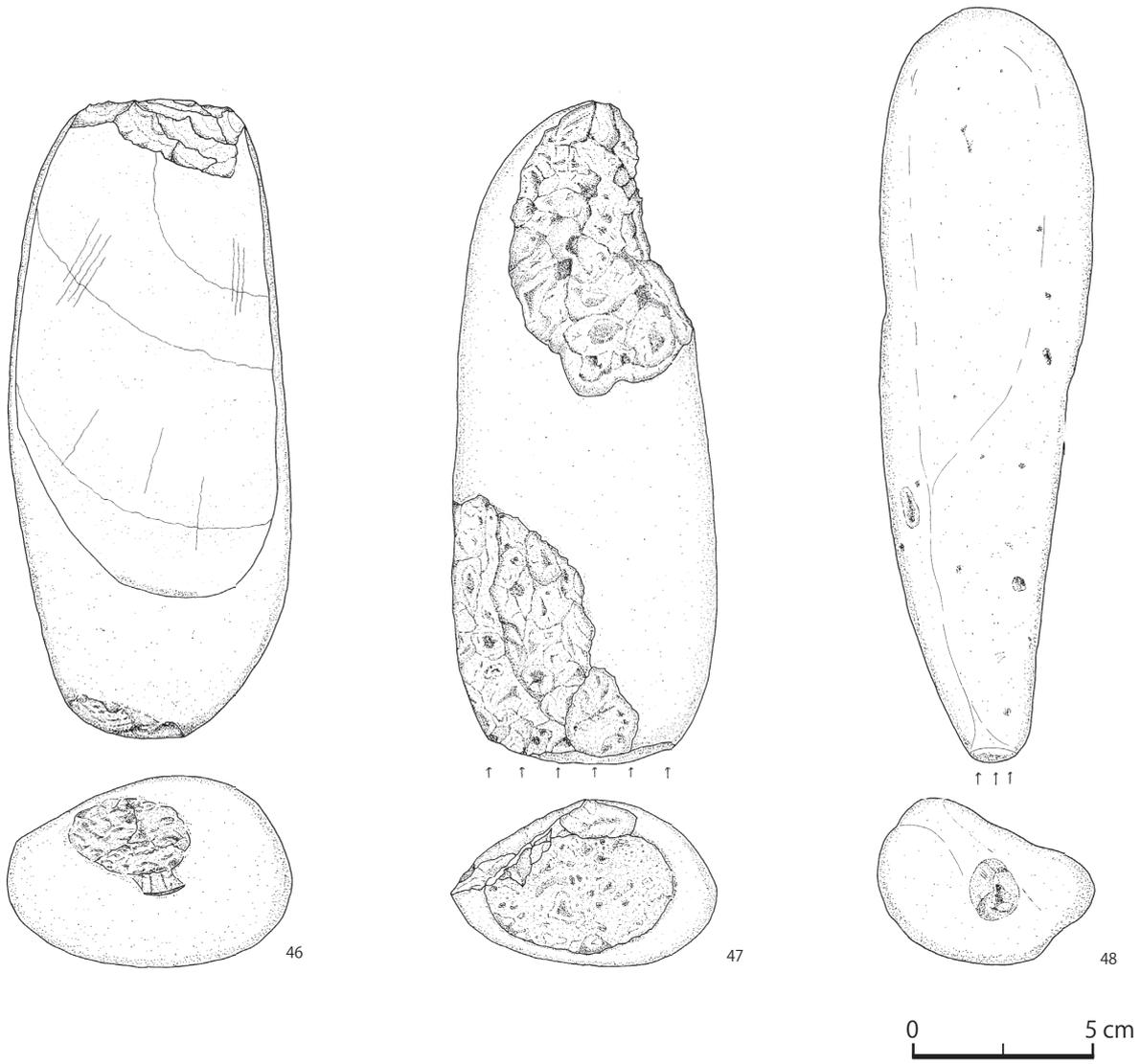


第69图 配石遺構(TR6)出土石器(1)

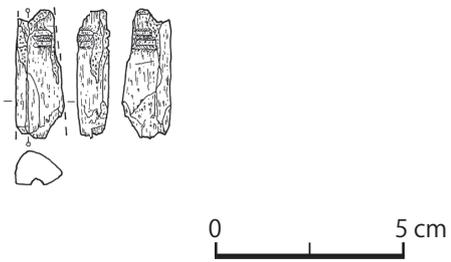


0 5 cm

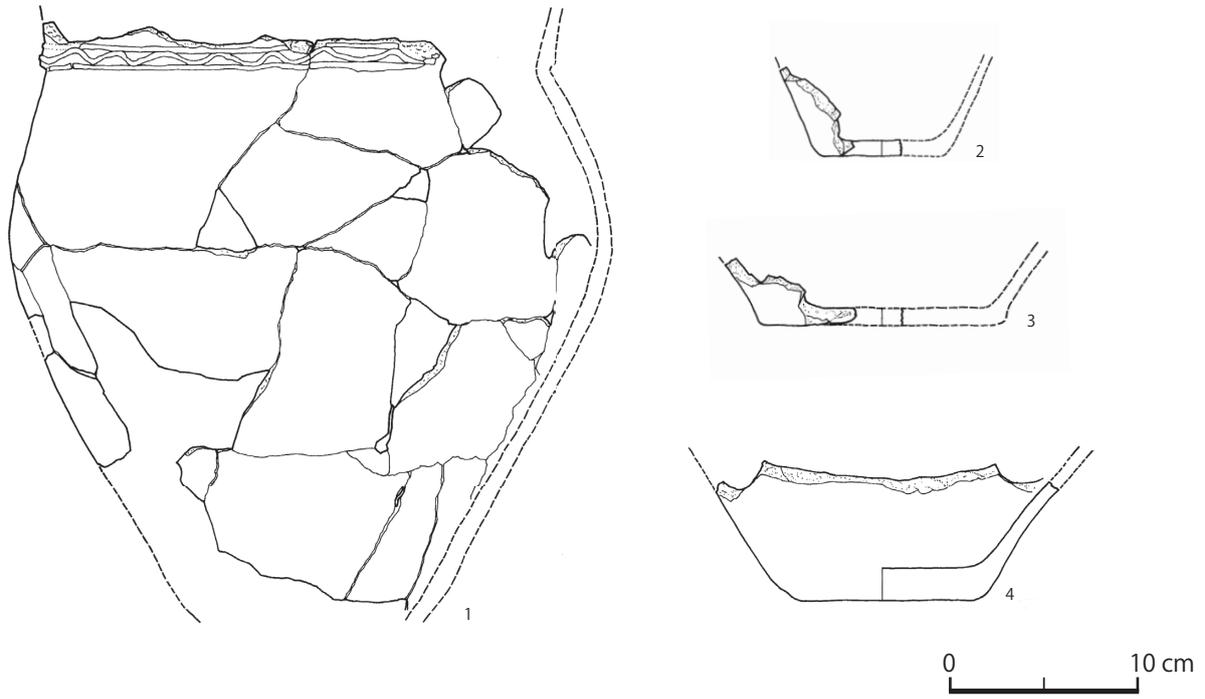
第70図 配石遺構(TR6)出土石器(2)



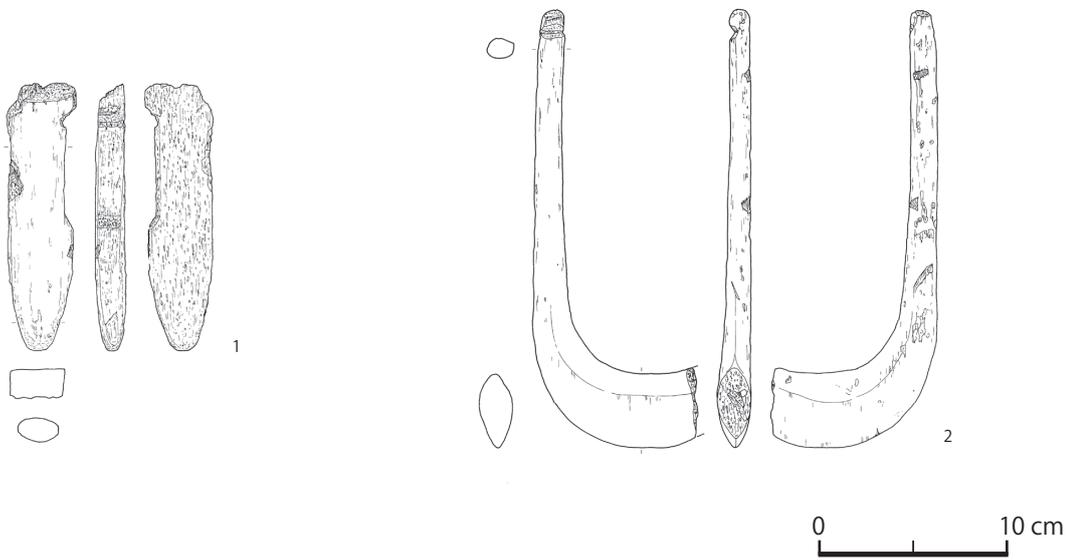
第71図 配石遺構(TR6)出土石器(3)



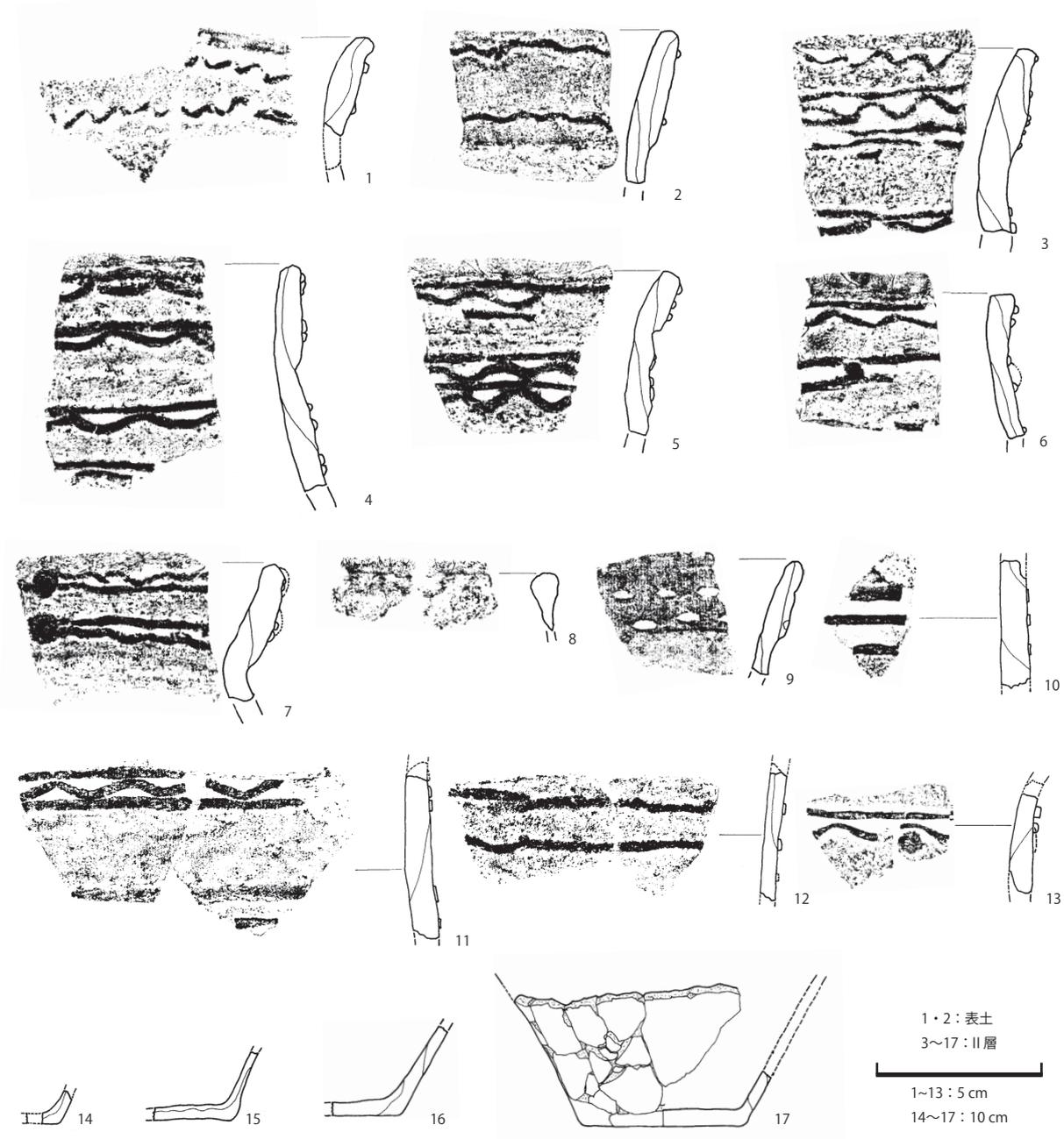
第72図 配石遺構(TR6)出土骨角器



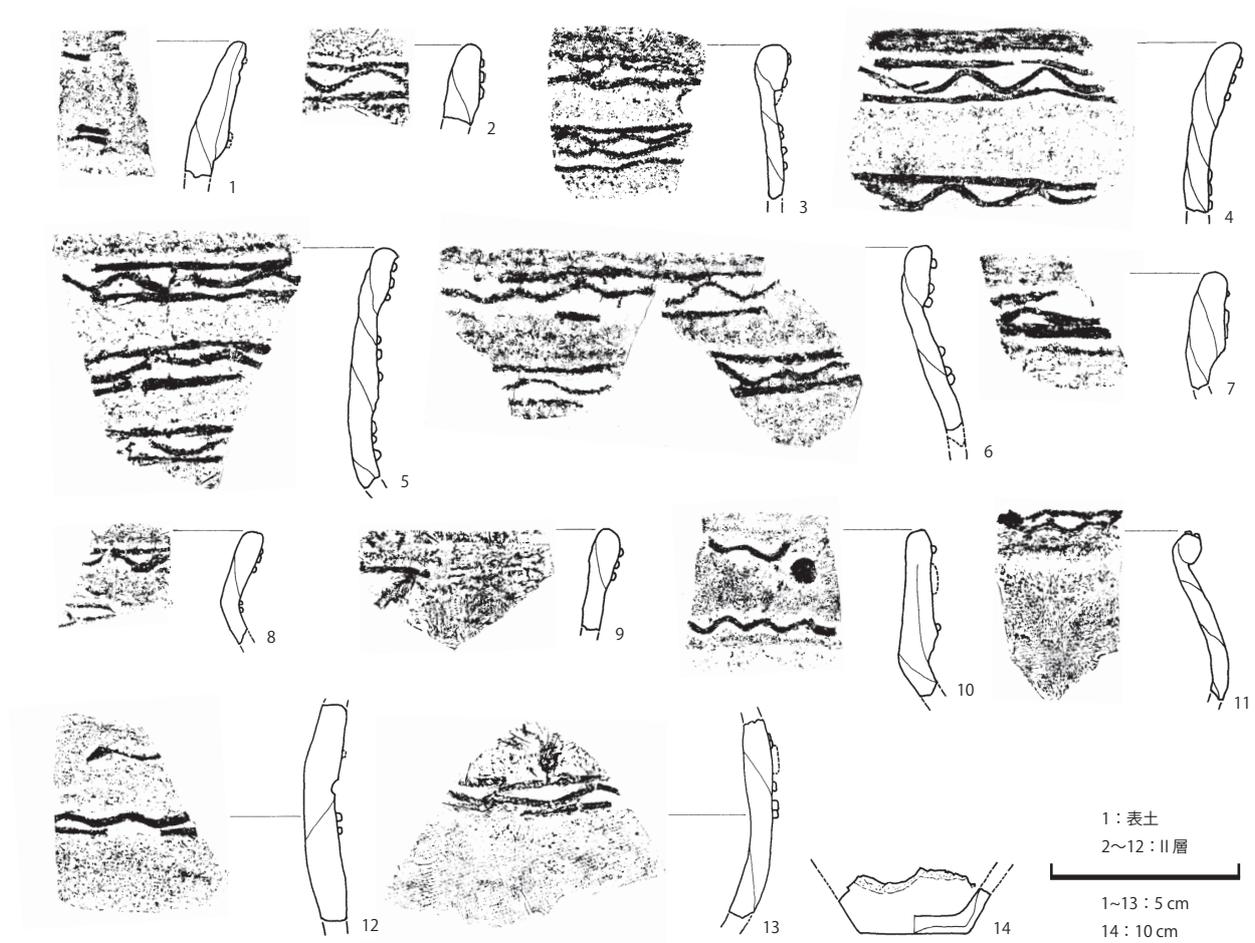
第73図 遺物集中(TR6)出土土器



第74図 遺物集中(TR6)出土骨角器

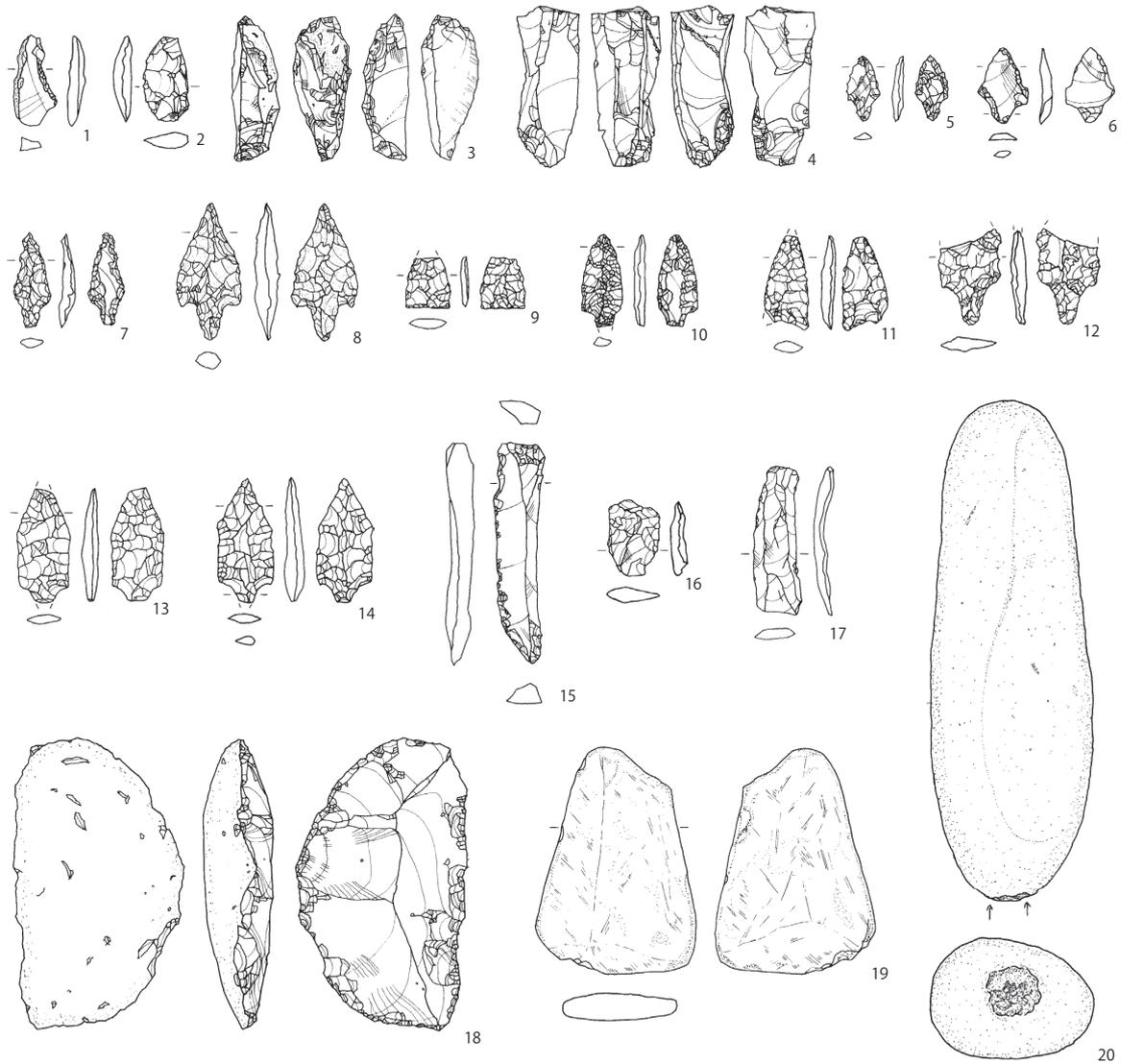


第75図 I・II層出土土器(TR4)



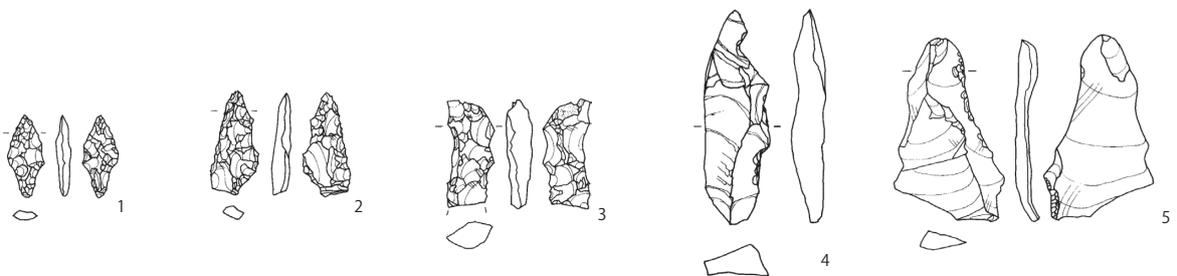
第76図 I・II層出土土器(TR5)

TR4\_ I層・II層



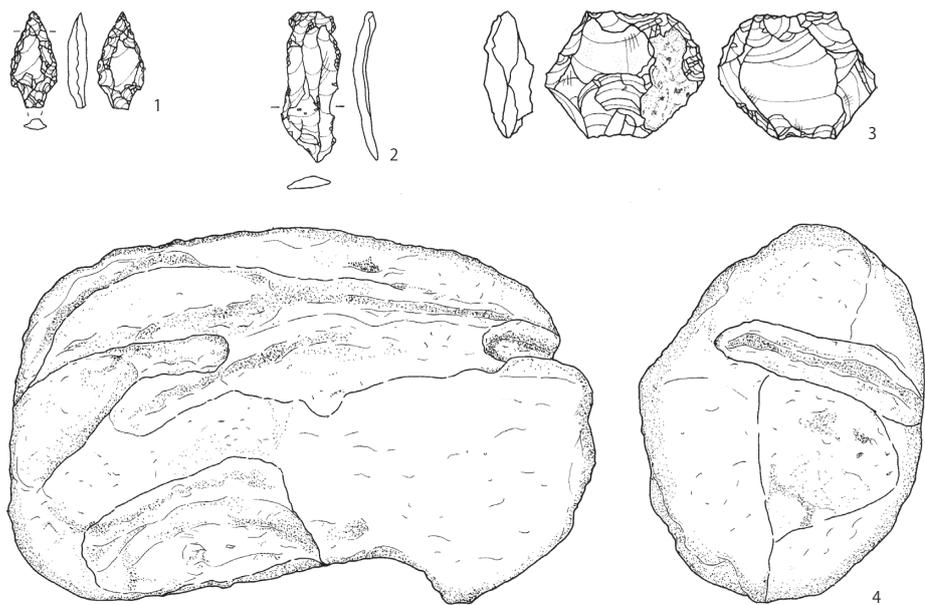
第77図 I・II層出土石器(TR4)

1~4 : 表土  
5~20 : II層



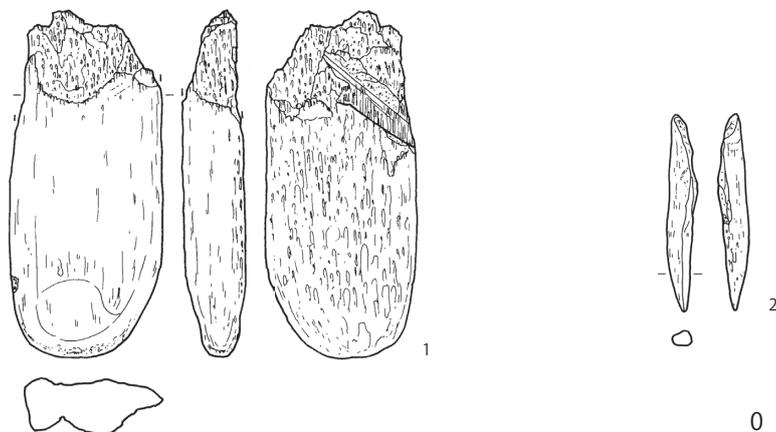
第78図 I層出土石器(TR7)

1・3・4 : 表土  
2・5 : 攪乱



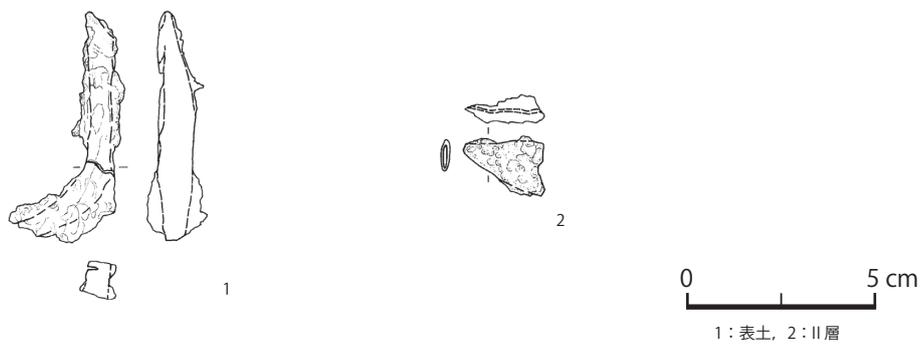
第79图 II層出土石器 (TR5)

0 5 cm



第80图 I層出土骨角器 (TR7)

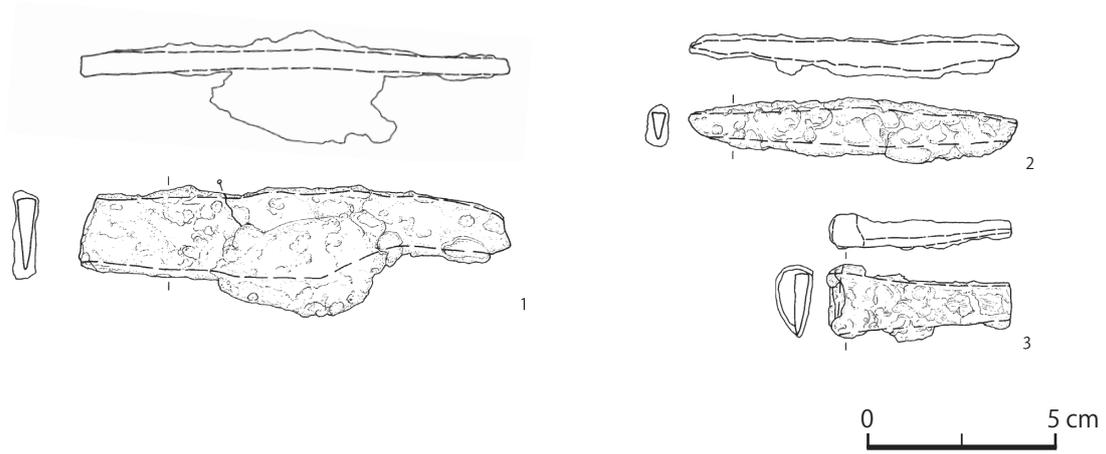
0 5 cm



第81图 I層出土金属製品 (TR4)

0 5 cm

1: 表土, 2: II層



第82図 II層出土金属製品(TR5)

### 13. III層出土遺物

(土器：第83図)

TR4のIII層出土土器である。III群e類土器が主体であるが、刻文が施文されたb類土器（4・9）など時期差があるものが含まれている。その他、斜行縄文や羽状縄文が施文されたV群b類の縄文中期土器も出土している（11・12）。

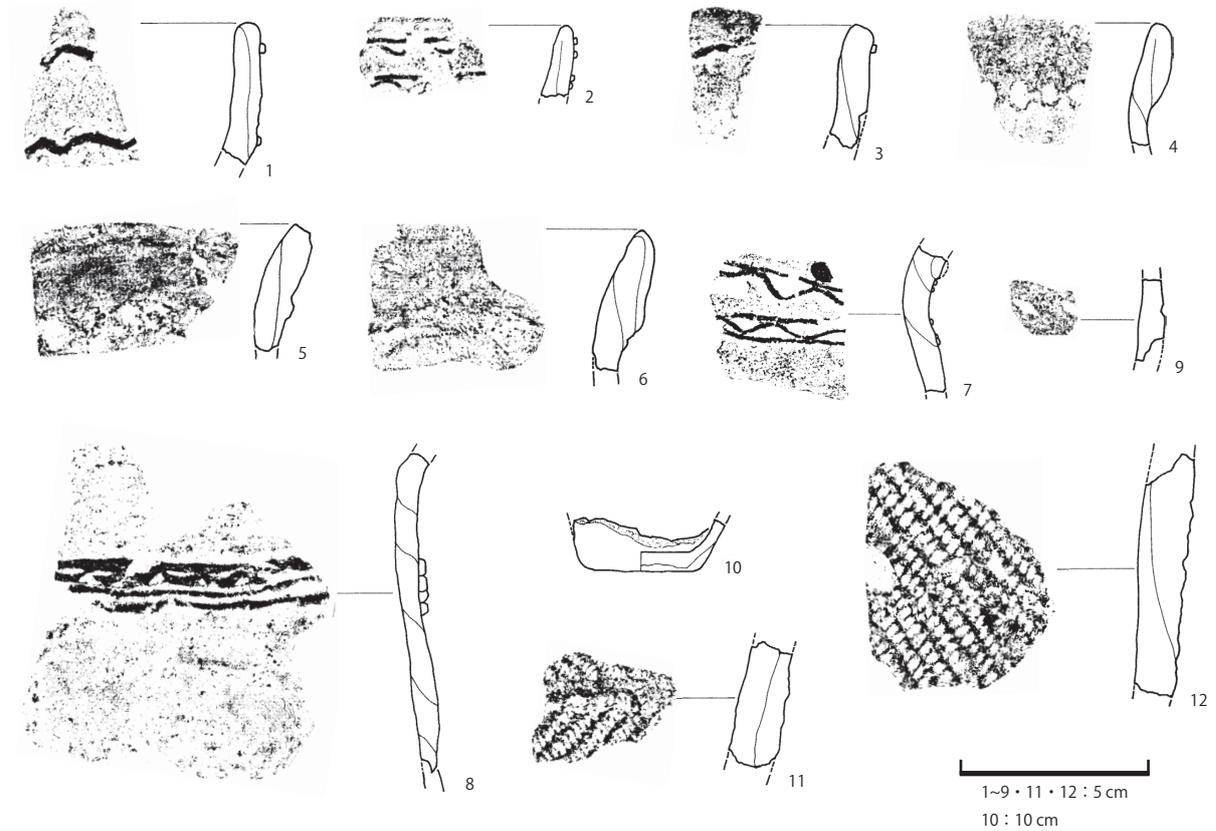
(石器：第84図)

第84図はTR4のIII層出土石器である。3は逆刺の位置がずれており、銚先のようなものを意識したのであろうか。5のリタッチドフレイクは比較的大型で、石材は硬質頁岩を利用している。

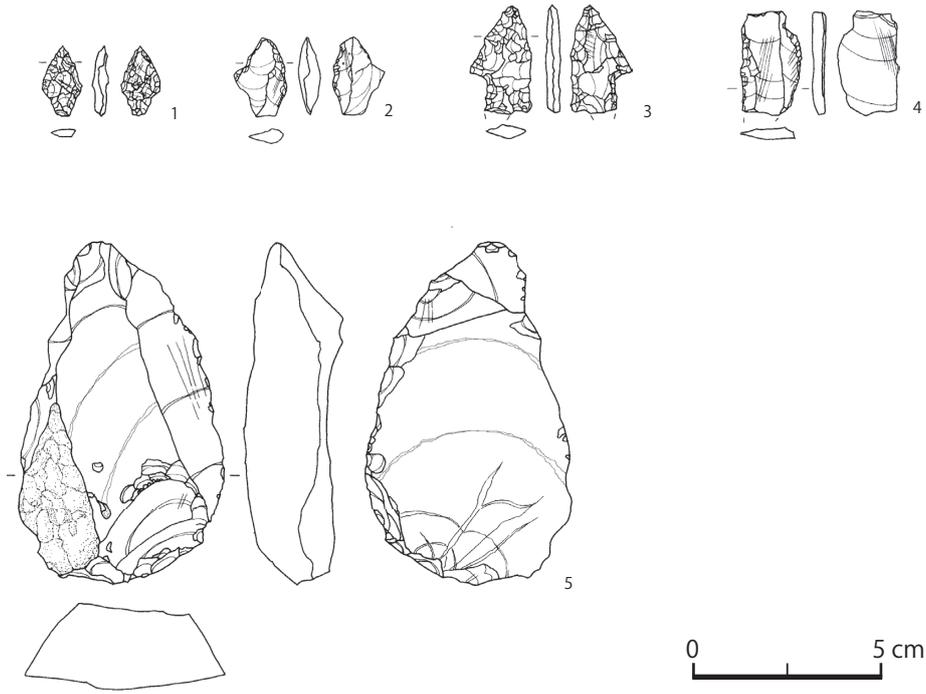
(骨角器：第85図)

TR4のIII層から出土した鯨骨製の骨斧である。刃部はやや湾曲する片刃で、幅広に作られている。

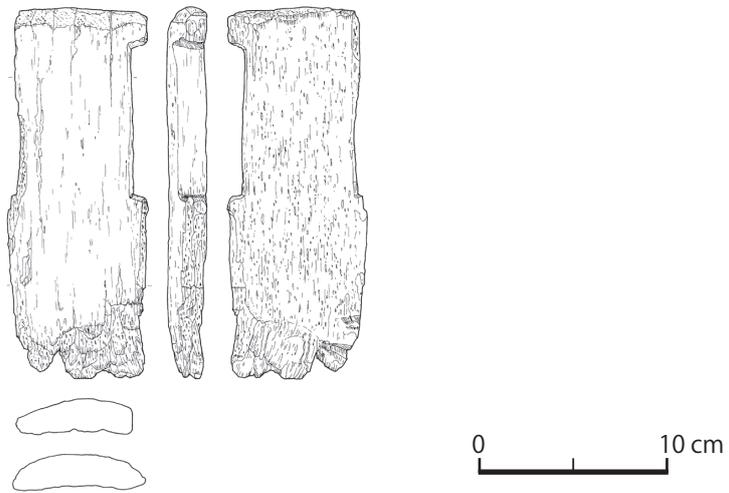
(平河内毅、松田功)



第83図 III層出土土器(TR4)



第84図 III層出土石器 (TR4)



第85図 III層出土骨角器 (TR4)

表2. 出土土器観察表

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
28	1	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(1H・1H/3P・3P)				1.2	
28	2	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(1H・1H/3P・3P)				1.1	
29	1	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				0.9	
29	2	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.1	
29	3	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.1	
29	4	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
29	5	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P・2P)				0.8	突帯あり
29	6	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				1.1	
29	7	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P/2P)				0.7	
29	8	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・2P)				0.7	
29	9	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・3P)				1.1	
29	10	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(6P・粒状・2P)				0.8	
29	11	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(粒状)				0.7	
29	12	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/3P・3P)				0.9	
29	13	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.0	
29	14	TR5	5号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~底部	貼付文(3P/3P+粒状・1K)	—	5.1	10.4	0.6~1.1	螺旋技法
30	1	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群f類	頸部~底部	—	—	6.9	—	0.7	
30	2	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群f類	胴部~底部	—	—	6.8	—	1.1	
30	3	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P・3P)	16.5	6.9	19.1	0.5~1.1	螺旋技法
30	4	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/1P・3P・2P)	25.8	8.8	25.9	0.6~2.3	螺旋技法
30	5	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P+粒状・3P)	11.1	5.9	12.7	0.4~1.0	螺旋技法
30	6	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P・13P)	11.3	7.7	20.0	0.5~0.8	
30	7	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/3P・3P・1H)	28.5	10.6	24.5	0.6~1.2	螺旋技法
30	8	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/1H・3P)	32.3	11.3	40.8	0.7~1.3	螺旋技法
30	9	TR5	5号竪穴	床面(骨塚)	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(15P+粒状・5P+粒状・12P)	9.9	6.7	18.8	0.4~0.8	
31	1	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.0	
31	2	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
31	3	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
31	4	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・1P)				0.5	
31	5	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
31	6	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.0	
31	7	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.1	
31	8	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P・3K)				1.1	
31	9	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+2P)				0.8	
31	10	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
31	11	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.6	
31	12	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
31	13	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
31	14	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(9P)				0.7	
31	15	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
31	16	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.0	貼付文全て剥落
31	17	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P・2P)				1.1	
31	18	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・1P)				0.8	
31	19	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				1.0	
31	20	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/1P)				0.9	
31	21	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.1	
31	22	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(7P/3P)				1.0	
31	23	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/3P・1K・3P・1K)				0.9	突帯あり
31	24	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/2P・2P・1P)				1.0	
32	1	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				1.0	
32	2	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1H/1H)				0.9	貼付文1条剥落
32	3	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(1P・1P/3P・3P)				1.0	
32	4	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/2P)				0.8	
32	5	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.0	貼付文3条剥落
32	6	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				0.7	貼付文全て剥落
32	7	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P)				0.9	
32	8	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(1P)				0.9	
32	9	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
32	10	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないLe類	口縁部	貼付文(ボタン状)				0.7	
32	11	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.9	表面風化
32	12	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(不明)				1.1	貼付文大部分剥落
32	13	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.8	表面風化
32	14	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.6	表面風化
32	15	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(1P・1P/1P)				0.8	
32	16	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	—				0.9	表面風化
32	17	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.6	
32	18	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・1P)				0.9	口縁部貼付文3条剥落

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
33	1	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P)				0.7	
33	2	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(4P)				0.7	
33	3	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・3P)				0.8	
33	4	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P・1P)				0.8	
33	5	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1C)				0.7	
33	6	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状)				0.9	
33	7	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(4P・粒状)				0.6	
33	8	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1K)				0.6	
33	9	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状・1P)				0.6	
33	10	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(粒状)				0.6	
33	11	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状)				0.8	
33	12	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.8	
33	13	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.9	
33	14	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.2	
33	15	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.7	
33	16	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6	
33	17	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6	
33	18	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.8	
33	19	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.7	
33	20	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.9	
33	21	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.6	
33	22	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				2.1	
33	23	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				1.5	
33	24	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—		6.4		1.4	
33	25	TR5	5号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群d類	完形	貼付文(1P/1P・1P)	10.7	6.0	12.2	0.5~1.2	
34	1	TR5	5号竪穴	覆土	縄文	V群b類	口縁部	外面:LR+RL,縦平行沈線,円形文 内面:LR				1.5	
34	2	TR5	5号竪穴	覆土	縄文	V群b類	胴部	LR,すり消し帯				1.1	
46	1	TR5	上層配石遺構	覆土	擦文	I群	頸部	刺突,横走沈線4条				0.7	
46	2	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	口縁部	貼付文(3P)				1.2	
46	3	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	口縁部	貼付文(4P)				1.1	
46	4	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(6P)				0.7	
46	5	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(8P)				0.6	
46	6	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P・1H・1P)				0.7	
46	7	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(2P)				0.7	
46	8	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P・1P)				0.7	
46	9	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P・1P)				0.7	
46	10	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(1P/4P)	9.0	3.2	10.1	0.6~1.6	
46	11	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(2P/7P)	—	4.8	16.2	0.6~1.2	
46	12	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(3P/3P・3P・3P)	28.2	7.6	32.5	0.6~1.2	
46	13	TR5	上層配石遺構	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	完形	貼付文(2P/1P+1P・1P・1P+1P)	21.7	—	25.1	0.6~1.4	
47	1	TR7	23号竪穴	床面	オホーツク	Ⅲ群e類	頸部	貼付文(3P)				0.7	
47	2	TR7	23号竪穴	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.8	
47	3	TR7	23号竪穴	覆土	縄文	Ⅳ群	口縁部	突起,すり消し帯,RL縄文				0.9	
47	4	TR7	23号竪穴	覆土	縄文	V群b類	胴部	RL縄文				1.3	
49	1	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
49	2	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
49	3	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.8	
49	4	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.5	
49	5	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
49	6	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P)				0.7	
49	7	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				1.0	
49	8	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1K)				0.7	
49	9	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.5	
49	10	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.8	
49	11	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群f類	口縁部	不明				0.8	表面風化
49	12	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P)				0.6	
49	13	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P)				0.7	
49	14	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P)				0.7	
49	15	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・粒状)				0.7	
49	16	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P)				0.7	貼付文1条剥落
49	17	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状・1P)				0.6	
49	18	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・粒状)				0.6	
49	19	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群c類	胴部	沈線文(横3条)				0.7	
49	20	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群b類	胴部	刻文(横)				0.5	
49	21	TR7	上層廃棄層	廃棄層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.9	
53	1	TR4	1号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P/2P)				1.1	

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
53	2	TR4	1号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P・ボタン状/2P)				1	
53	3	TR4	1号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/2P・3P)	19.4	8.7	23.2	0.5~1.2	螺旋技法
53	4	TR4	1号墓	覆土	縄文	V群b類	口縁部	RL縄文				1.4	
56	1	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3K・5P)				0.6	
56	2	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・1P)				0.6	
56	3	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部					1.0	
56	4	TR5	2号墓	覆土	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6~1.0	
65	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	擦文	I群	頸部	外面:横走沈線,刺突,縦ナデ 内面:横ナデ				0.7	
65	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	擦文	I群	頸部	外面:横走沈線,刺突,縦ナデ 内面:横ナデ				0.7	
65	3	TR6	配石遺構	Ⅱ層	擦文	I群	胴部	外面:縦ナデ 内面:横ナデ				0.7	
65	4	TR6	配石遺構	Ⅱ層	トビニタイ	Ⅱ群b類	胴部	貼付文(1P+1P)				0.5	
65	5	TR6	配石遺構	Ⅱ層	トビニタイ	Ⅱ群a類	口縁~底部	無文	15.5	4.2	14.7	0.6~0.8	
66	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
66	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.6	貼付文全て剥落
66	3	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/8P・1P) (8Pの下に貼瘤状)				0.6	
66	4	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.7	
66	5	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+2P/2P)				0.8	
66	6	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3C/3C)				0.6	
66	7	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+2P/2P)				0.8	
66	8	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3C/3C)				0.5	
66	9	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.8	
66	10	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・ボタン状)				0.9	
66	11	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.7	
66	12	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3C/3C)				0.7	
66	13	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/2P・2P・2P)				0.8	
66	14	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+1K+2P)				0.8	
67	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.5	
67	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.7	
67	3	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(2K・5P・縦長貼付文・3P)				0.5	口縁部に工具による凹凸あり
67	4	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~胴部	貼付文(3P/3P)				0.8	
67	5	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(2K)				0.6	
67	6	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(1K+2K・貼瘤状)				0.8	
67	7	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(縦長貼付文・2K)				0.7	
67	8	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁~頸部	貼付文(2P+1K/2P)				1.0	
67	9	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群b類	口縁部	刻文(縦)				1.1	
67	10	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(1P+1P)				0.8	
67	11	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(1P+3P)				0.9	貼付文2条剥落
67	12	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・3P)				0.6	
67	13	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.7		0.6	
67	14	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.5		0.7~1.0	
67	15	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.5		0.7	
67	16	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.7~1.8	
67	17	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.7~1.1	
67	18	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				1.0	
67	19	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		7.3		0.8~1.2	
67	20	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		6.7		0.7~1.3	
67	21	TR6	配石遺構	Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	完形	貼付文(3P/5P・3P)	17.0	8.5	17.7	0.5~1.9	螺旋技法
68	1	TR6	配石遺構	Ⅱ層	縄文	V群a類	口縁部	LRとRLの絡条体圧痕文				0.8	
68	2	TR6	配石遺構	Ⅱ層	縄文	V群b類	胴部	RLR縄文				0.9	羅臼式
59	1	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P)				0.9	
59	2	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・ボタン状+1P/2P)				1.1	
59	3	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1C・1P)				0.8	
59	4	TR4	土坑(2a)	底面	オホーツク	Ⅱ群b類	胴部	沈線文(縦・横の順に施文)				0.7	
60	1	TR4	土坑(2a)	覆土	トビニタイ	Ⅱ群b類	口縁部	貼付文(3P/1P)				1	
60	2	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・2P)				0.9	
60	3	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・2P)				1.1	
60	4	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(十字)				0.8	
60	5	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・3P・3P) (頸~胴部は3P下にボタン状)				1	
60	6	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群d類	口縁部	貼付文(1K・1K/粒状から2P垂下)				1	
60	7	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P+ボタン状)				0.8	
60	8	TR4	土坑(2a)	覆土	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・1P・1H)				0.7	
—1	1	TR4	土坑(2b)	底面	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(4P)				0.8	

図	番号	調査区	遺構名	層位	時期	分類	残存部位	文様(口縁部/頸部~胴部)	口径 cm	底径 cm	器高 cm	器厚 cm	備考
一	2	TR4	土坑(2b)	底面	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	—				0.6~1.0	
一	3	TR4	土坑(2b)	底面	縄文中期	V群b類	胴部	RL縄文				1.3	
73	1	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	頸部~胴部	貼付文(3P)				0.7~1.1	
73	2	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.5~0.7	
73	3	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.6~1.0	
73	4	TR6	遺物集中	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		9.9		0.7~1.7	
76	1	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				1.0	
76	2	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.8	
76	3	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/4P)				0.9	
76	4	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.7	
76	5	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P・3P)				0.7	
76	6	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/3P)				0.5	
76	7	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.9	
76	8	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
76	9	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P)				0.7	
76	10	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P+粒状・1P)				0.9	
76	11	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(2P+粒状)				0.6	貼付文は口唇上
76	12	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	頸部	貼付文(2P・2P)				1.0	貼付文1条剥落
76	13	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P・粒状・3P)				0.6	
76	14	TR5	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	底部	不明		5.4		0.9	
75	1	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1K・1K)				0.9	
75	2	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				0.9	
75	3	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(1P・5P/2P)				1.2	
75	4	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P/2P・2P)				0.7	
75	5	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(3P/4P)				0.8	
75	6	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P/2P+粒状・1P)				0.6	
75	7	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P+粒状・2P+粒状)				1.0	
75	8	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.8	
75	9	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群b類	口縁部	刻文(横)				0.8	
75	10	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・1P・1P)				0.8	
75	11	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(3P・2P)				0.8	
75	12	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	胴部	貼付文(1P・1P)				0.5	
75	13	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(2P・粒状)				0.6	
75	14	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.8	
75	15	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.5~0.9	
75	16	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.9	
75	17	TR4	遺構外	表土・Ⅱ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明		9.7		0.6~0.9	
83	1	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P・1P)				0.7	
83	2	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	口縁部	貼付文(2P・2P)				0.6	
83	3	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群dないしe類	口縁部	貼付文(1P)				0.8	
83	4	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群b類	口縁部	刻文(縦)				0.8	
83	5	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				0.9	
83	6	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群a類	口縁部	無文				1.1	
83	7	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(粒状・2P・3P)				0.8	
83	8	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群e類	胴部	貼付文(1P+1K+2P)				0.6	
83	9	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群b類	胴部	刻文(斜)				0.7	
83	10	TR4	遺構外	Ⅲ層	オホーツク	Ⅲ群f類	底部	不明				0.5~1.0	
83	11	TR4	遺構外	Ⅲ層	縄文中期	V群b類	胴部	RLとLRの羽状縄文				1.2	
83	12	TR4	遺構外	Ⅲ層	縄文中期	V群b類	胴部	LR縄文				1.1	

註)オホーツク土器の文様要素は熊本2012に準じた。

数字は貼付文の本数、Cは鎖状(chain)、Kは刻み(kizami)、Hは貼付文にひねり(Hineri)、Pは施文を行わない(Plain)例である。

表3. 出土石器観察表

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
35	1	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(柳葉形:Y)	I a	1.8	1.15	0.4	0.6	黒曜石	先端部欠け・幅広
35	2	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(ひし形:H)	I b	2.1(1.5/0.6)	1.2	0.2	0.52	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺、鏃身部微細調整のみ
35	3	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(Y)	I a	2.25	0.8	0.5	0.76	黒曜石	左右非対称
35	4	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.35(1.8/5.5)	0.95	0.4	0.66	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺やや不明瞭
35	5	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.4(1.65/0.75)	1.2	0.5	1.04	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺片側不明瞭
35	6	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.4(2.0/*0.4)	1.3*	0.5	1.1	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺一部欠
35	7	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(Y)	I a	2.4	1.2	0.6	1.31	黒曜石	基部側細部調整粗雑
35	8	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.3(1.4/0.9)	1.3	0.4	0.8	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
35	9	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(将棋駒形:K)	I d	2.8(2.3/0.5)	1.4	0.4	1.08	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端・基部調整あり
35	10	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.7(1.85/*0.85)	1.3	0.4	1.11	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、焼け、逆刺やや不明瞭
35	11	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)?	I b	*2.3	1.5	0.6	1.33	黒曜石	鏃身部欠け、焼け、欠損品
35	12	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(H)	I b	2.9(1.7/*1.2)	2	0.55	2.85	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、銚先鏃の可能性あり
35	13	TR5	5号竪穴	床面	石鏃(三角形:S)	I c	4.3	1.7*	0.6	3.23	黒曜石	基部一部欠、銚先鏃の可能性あり
35	14	TR5	5号竪穴	床面	スクレイパー	IV d	4.3	3.3	0.95	9.86	黒曜石	3つの側縁部に調整あり
35	15	TR5	5号竪穴	床面	リタッチドフレイク	V a	3.5	2.9	10.5	11.7	黒曜石	細部調整
35	16	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	6.7	4.4	2.6	13.5	黒曜石	焼けて発泡している
35	17	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	2.8	3.5	1.4	16.73	黒曜石	原石面あり
35	18	TR5	5号竪穴	床面	石核	VI b	3.6	1.35	1.3	6.82	黒曜石	原石面あり
35	19	TR5	5号竪穴	床面	フレイク	V b	3.3	2.1	1.7	11.2	黒曜石	焼けて発泡している
35	20	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	3.35	1.85	1.4	8.29	黒曜石	原石面あり、焼けている
35	21	TR5	5号竪穴	床面	石核状フレイク	VI c	5.3	2.3	2.1	23.87	黒曜石	原石面あり
35	22	TR5	5号竪穴	床面	リタッチドフレイク	V a	6.7	4.15	1.9	31.1	泥岩	微細調整あり
35	23	TR5	5号竪穴	床面	石斧	VII b	12.2	5.1	1.85	222	角閃石	両刃、側縁打撃調整あり
36	1	TR5	5号竪穴	床面	すり石	X a	14.8	6.6	5.05	750	安山岩	打痕後、すり石利用。紐状痕跡あり
36	2	TR5	5号竪穴	床面	すり石	X a	22.5	6.3	4.65	1100	安山岩	打痕後、すり石利用。長軸両端にあり
36	3	TR5	5号竪穴	床面	たたき石	VIII a	14.1	5.8	4.9	514	安山岩	長軸一端に打痕
36	4	TR5	5号竪穴	床面	たたき石	VIII a	17.4	7.3	4.85	840	安山岩	長軸一端に打痕
37	1	TR5	5号竪穴	床面	すり石	X c	13.4	8.2	5.1	809	安山岩	打痕後、すり石利用。長軸一端
37	2	TR5	5号竪穴	床面	たたき石	VIII c	6.25	6.5	5.8	325	安山岩	球形、数カ所に打痕あり
37	3	TR5	5号竪穴	床面	くぼみ石状すり石	IX a	81.5	61	76	410	安山岩	くぼみ2箇所、長軸面に擦り痕
37	4	TR5	5号竪穴	床面	有孔石製品	a	3.5	2.45	1.95	12.2	泥岩	貫通孔1つ、垂飾?
37	5	TR5	5号竪穴	床面	有孔石製品	a	4.9	3.8	0.95	12.8	泥岩	貫通孔1つ、垂飾?
37	6	TR5	5号竪穴	床面	すり石状石製品?	X d	5.7	2.05	0.9	9	硬質頁岩	剥片素材を利用したもの、側縁と稜部に擦面あり
38	1	TR5	5号竪穴	炉	石鏃(K)	I d	1.95(*1.1/*0.85)	1.35	0.4	1.11	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
38	2	TR5	5号竪穴	炉	リタッチドフレイク	V a	2.55	2.3	0.4	2.08	黒曜石	縁辺一部に細部加工あり
38	3	TR5	5号竪穴	炉	石核	VI b	4.2	2.75	2	18.7	黒曜石	残核の可能性あり
38	4	TR5	5号竪穴	炉	フレイク	V b	2.3	3.7	1.05	9.5	黒曜石	原石面あり
38	5	TR5	5号竪穴	炉	石核状フレイク	VI c	4.5	4.6	2.3	39.3	黒曜石	原石面あり
38	6	TR5	5号竪穴	炉	石核状フレイク	VI c	2.3	3.1	1.2	12	黒曜石	微細剥離痕あり
38	7	TR5	5号竪穴	炉	石核状フレイク	VI c	3.2	3.2	1.9	21.7	黒曜石	原石面あり、微細剥離痕あり
38	8	TR5	5号竪穴	炉	すり石	X b	23.6	11.1	2.1	760	安山岩	鏃状工具の可能性あり、灰掻き用具
39	1	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.65(1.25/0.4)	0.8	0.3	0.26	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面調整縁辺部の一部のみ、逆刺やや不明瞭
39	2	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	18(1.25/0.55)	0.8	0.3	0.25	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺片側欠損
39	3	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.8(1.05/0.75)	1.2	0.5	0.65	黒曜石	(鏃身部/茎部)裏面先端部のみ調整、逆刺明瞭
39	4	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(K)	I d	2.25(1.7/*0.55)	1.2	0.5	1.11	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺明瞭
39	5	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.5(1.3/1.2)	1	0.4	0.74	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺やや不明瞭
39	6	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.35(*1.5/0.85)	2	6.05	1.33	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、先端部再調整、逆刺明瞭
39	7	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.9(2.2/0.7)	1.7	0.5	1.25	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
39	8	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	3.05(1.95/1.1)	1.6	0.6	2.1	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
39	9	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(S)	I c	3.1	2.2	0.7	3.51	黒曜石	基部両端部に調整あり
39	10	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(S)	I c	3.5	1.7	0.5	2.47	黒曜石	鏃身縁辺部緩やかな曲線
39	11	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	3.5(2.3/1.2)	1.3	0.6	2.18	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺明瞭
39	12	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	3.8(2.0/1.8)	1.3	0.5	2.07	黒曜石	(鏃身部/茎部)、逆刺やや不明瞭
39	13	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.6(*0.7/0.9)	1.2	0.3	0.37	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺明瞭
39	14	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	1.1(*0.9/*0.2)	0.9	0.4	0.31	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
39	15	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.1(1.75/*0.35)	1.1	0.5	0.97	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
39	16	TR5	5号竪穴	覆土	銚先鏃?	I	2.45	1.55	0.6	1.66	黒曜石	基部欠損品
39	17	TR5	5号竪穴	覆土	石鏃(H)	I b	2.8(*2.3/*0.5)	1.3	0.45	1.48	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺やや不明瞭
39	18	TR5	5号竪穴	覆土	銚先鏃(H)?	I b	3.85(*1.2/2.65)	2.25	0.5	3.9	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、逆刺あり、鏃身部欠損
39	19	TR5	5号竪穴	覆土	ドリル	II	2.9	1.5	0.8	2.84	黒曜石	棒状の形態、刃部断面ひし形
39	20	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	1.8	1.7	0.3	0.67	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	21	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	2.35	1.7	0.5	1.64	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	22	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	2.4	2.3	0.6	2.65	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	23	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	3	1.8	0.8	2.84	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	24	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	3.4	2.25	0.65	4	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	25	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	3.5	2.05	0.8	5.34	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	26	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	V a	4.35	1.7	0.5	2.41	黒曜石	縁辺一部に二次調整

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
39	27	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	Va	5	3.5	1.15	16.42	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	28	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	Va	4.9	2.8	1.3	13.75	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	29	TR5	5号竪穴	覆土	リタッチドフレイク	Va	2.25	1.9	0.7	2.8	黒曜石	縁辺一部に二次調整
39	30	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.3	2.25	1.2	9.74	黒曜石	原石面あり
39	31	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.6	4.4	1.6	27.91	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	32	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.15	4.2	2.55	27.82	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	33	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	3.6	4.15	2.3	28.11	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	34	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	4.35	2.7	1.85	19.6	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	35	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	4.8	4.5	1.6	36.28	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	36	TR5	5号竪穴	覆土	フレイク	Vb	2.8	3	1.8	19.3	黒曜石	原石面あり
39	37	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	2.3	4.2	1.35	14.4	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	38	TR5	5号竪穴	覆土	石核状フレイク	VIc	7.1	2.85	2	39.08	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
39	39	TR5	5号竪穴	覆土	石核	VIb	3.6	4.7	2.6	43.4	黒曜石	不明瞭なプラットフォーム
40	1	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIc	7.6	7	5.3	425	安山岩	球形数カ所に打撃痕あり
40	2	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIb	13.8	6.6	4.5	525	安山岩	打痕は長軸端部から側縁部にあり
40	3	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIb	15.05	6.5	3.7	641	安山岩	長軸両端に打撃痕、平坦面に磨き調整あり
40	4	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xa	20.1	7.9	7.1	1760	安山岩	打痕後、すり石として利用。線条痕跡あり
40	5	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xa	12.5	7.1	5.5	510	安山岩	打痕後、すり石として利用。
40	6	TR5	5号竪穴	覆土	たたき石	VIIIa	11.2	4.4	3.4	287	安山岩	被熱による剥落あり
40	7	TR5	5号竪穴	覆土	砥石	XI	3.6	3	0.6	6.37	泥岩	打痕後研磨調整、全体に研磨面がある
41	1	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xb	10.4	9.1	4.95	686	安山岩	扁平面に擦痕あり
41	2	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xb	12.3	10.9	3.55	804	安山岩	赤色顔料?付着あり、側縁部に擦痕と線条痕あり
41	3	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xa	12	6.45	5.1	600	安山岩	長軸の一端に擦痕あり
41	4	TR5	5号竪穴	覆土	両頭調整石製品	c	8.2	3.1	3.2	111.18	砂岩	長軸両端を尖らせ、体部2箇所に括れを作る
41	5	TR5	5号竪穴	覆土	すり石	Xb	4.9	5.6	2.95	87.74	安山岩	扁平面に擦痕あり
41	6	TR5	5号竪穴	覆土	有孔有溝石錘	XIIa	19	12.1	6.7	810	砂岩	有孔石錘、6条の溝を有する。長軸側で半裁している
42	1	TR5	5号竪穴	覆土	ナイフ	IIIb	16.5	12.7	1	236.02	玄武岩	剥片端部に刃部を有する、鉄平石を利用
42	2	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	9.8	11.2	1.2	139.63	玄武岩	鉄平石原岩
42	3	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	10.75	6.2	1.2	97.3	玄武岩	鉄平石原岩
42	4	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	8.55	7.05	2.4	175	玄武岩	鉄平石原岩
42	5	TR5	5号竪穴	覆土	板状レキ	Vb	7.1	5.8	0.7	45.85	玄武岩	鉄平石原岩
50	1	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(H)	Ib	1.75(1.15/0.6)	1.1	0.35	0.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁部調整、左右非対称
50	2	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(H)	Ib	3.1(2.9*/0.2)	1.2	0.45	1.7	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、焼けている
50	3	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(H)	Ib	3.3(2.8/0.5)	1.4	0.2	1.5	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁部調整、裏面調整なし、未製品
50	4	TR7	上層廃棄層	廃棄層	石鏃(?)	I	1.45	1.3	0.55	0.7	黒曜石	基部欠損、銛先鏃の可能性もあり
50	5	TR7	上層廃棄層	廃棄層	ナイフ	IIIa	1.75	2.3	0.5	2.6	黒曜石	両面調整
54	1	TR4	1号墓	覆土	石鏃(H)	Ib	1.7(0.7/1.0)	1	0.3	0.37	黒曜石	(鏃身部/茎部)、基部が長い
54	2	TR4	1号墓	覆土	石鏃(H)	Ib	2(1.9*/0.1)	1.2	0.35	0.89	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
54	3	TR4	1号墓	覆土	石鏃(H)	Ib	2.65(1.65*/1.0)	1.45	0.5	1.67	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
54	4	TR4	1号墓	覆土	石鏃(Y)	Ia	3.8	1.9	0.7	3.79	黒曜石	先端部再加工あり
54	5	TR4	1号墓	覆土	銛先鏃	Ic	4.3	1.9	0.7	4.74	黒曜石	銛先鏃の可能性あり
54	6	TR4	1号墓	覆土	リタッチドフレイク	Va	3.9	3.1	0.75	8.82	黒曜石	長軸両側縁部に加工あり
54	7	TR4	1号墓	覆土	石鏃状すり石	Xb	15.95	6.35	1.95	276	泥岩	先端部及び側縁部に打痕あり、平坦面に擦痕あり
54	8	TR4	1号墓	覆土	すり石	Xc	12.65	9.1	7.35	1290	安山岩	擦面1箇所
54	9	TR4	1号墓	覆土	たたき石	VIIIa	14.35	6.5	3.85	610	安山岩	長軸一端に打痕
54	10	TR4	1号墓	覆土	有孔石製品	b	5.25	3.9	1.05	13.6	泥岩	中央に1つの穿孔、円板状製品
57	1	TR5	2号墓	覆土	石核状フレイク	VIc	3.4	4.05	1	10.99	黒曜石	焼けている、原石面あり、細部剥離あり
57	2	TR5	2号墓	覆土	石核状フレイク	VIc	3.3	5.6	1.3	22.9	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
57	3	TR5	2号墓	覆土	石核状フレイク	VIc	5.6	2.3	2	20.72	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
61	1	TR4	土坑(2a)	覆土	石鏃(Y)	Ia	2.4	1.1	0.3	0.76	硬質頁岩	先端・基部に再加工あり
61	2	TR4	土坑(2a)	覆土	リタッチドフレイク	Va	2.85	2.5	0.9	5.29	黒曜石	長軸両側縁部に加工あり
61	3	TR4	土坑(2a)	覆土	石核状フレイク	VIc	4.5	3.6	1.8	30.3	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
61	4	TR4	土坑(2a)	底面	石核	VIb	4.3	4.1	2.4	31.82	黒曜石	原石面あり、明瞭なプラットフォームなし
61	5	TR4	土坑(2a)	覆土	たたき石	VIIIc	53	51	44	165.19	安山岩	球形、一端に打痕あり
64	1	TR4	土坑(2b)	覆土	石鏃(S)	Ic	1.9	0.8	0.2	0.23	黒曜石	焼けている
64	2	TR4	土坑(2b)	覆土	石鏃(H)	Ib	2.1(*1.7*/0.4)	1.1	0.4	0.84	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、先端・基部欠損
64	3	TR4	土坑(2b)	覆土	ナイフ	IIIa	3.25	1.75	0.5	1.92	黒曜石	側縁部に刃部あり
64	4	TR4	土坑(2b)	覆土	スクレイパー	IVa	3.15	2.3	0.6	4.61	黒曜石	ラウンドタイプ
64	5	TR4	土坑(2b)	覆土	リタッチドフレイク	Va	3.65	1.7	0.4	1.85	黒曜石	微細調整あり
69	1	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	1.6(1.0/0.6)	1.6	1.6	1.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)、鏃身部微細加工
69	2	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	2.2(1.6/0.6)	0.95	0.3	0.5	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面一部のみ細部調整
69	3	TR6	配石遺構	II層	石鏃(Y)?	Ia	2.2(*2.05/0.15)	1.45	0.45	1.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、鏃身部欠損
69	4	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	2.4(1.4/1.0)	1.15	0.3	0.8	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面一部のみ細部調整
69	5	TR6	配石遺構	II層	石鏃(K)	Id	3.5(2.5/1.0)	1.7	0.5	2	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端部微細調整、焼けている
69	6	TR6	配石遺構	II層	石鏃(K)	Id	4.6(3.4/1.2)	1.55	0.55	3.3	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端部微細調整
69	7	TR6	配石遺構	II層	石鏃(?)	I	1.3	1.05	0.3	0.4	黒曜石	基部欠損
69	8	TR6	配石遺構	II層	石鏃(H)	Ib	1.4(1.25*/0.15)	0.95	0.3	0.4	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
69	9	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	1.35	1.3	0.2	0.4	黒曜石	基部欠損
69	10	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.2(1.8/*0.4)	1.4	0.35	0.9	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	11	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	1.5	1.5	0.4	0.9	黒曜石	鏃身部欠損、未製品
69	12	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I a b	2.9(*2.7/*0.2)	1.85	0.55	2.1	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	13	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	2.15	1.2	0.45	1.2	黒曜石	先端・基部欠損
69	14	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.5(*1.5/1.0)	1.35	0.35	1	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、一部微細調整あり
69	15	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(?)	I	2.15	1.25	0.5	1.9	黒曜石	先端部欠損、未製品
69	16	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	3(*1.9/1.1)	1.1	0.4	1.2	チャート	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	17	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	3.35(*2.7/0.65)	1.65	0.4	2.3	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
69	18	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	3	1.75	0.45	2.2	黒曜石	基部一部欠損
69	19	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	3.65	1.8	0.6	3.4	黒曜石	先端部一部欠損
69	20	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	5.2(5.2/*0)	1.25	0.45	2.8	硬質頁岩	(鏃身部/茎部)*=欠け、細身の基部欠損
69	21	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ドリル	Ⅱ	2.15	0.9	0.45	0.7	黒曜石	棒状の形態、刃部断面ひし形
69	22	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	4	1.65	0.75	5.3	黒曜石	両面調整
69	23	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	1.35	2.35	0.5	1.7	黒曜石	両面調整、刃部の多くが欠損
69	24	TR6	配石遺構	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	1.4	1.5	0.25	0.8	黒曜石	側縁部調整、欠損品
69	25	TR6	配石遺構	Ⅱ層	スクレイパー	Ⅳd	2.4	3.8	0.4	4.7	黒曜石	ミックスタイプ
69	26	TR6	配石遺構	Ⅱ層	スクレイパー	Ⅳb	2.25	2.65	0.65	4	黒曜石	原石面あり、側縁部のみ調整、欠損品
69	27	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.2	2.6	1.25	8.9	黒曜石	原石面あり
69	28	TR6	配石遺構	Ⅱ層	フレイク	Ⅴb	1.7	2.05	1	4.8	黒曜石	多面体状の剥片
69	29	TR6	配石遺構	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	3.9	2.55	1.2	14.9	黒曜石	原石面あり、縁辺一部に二次調整
69	30	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.9	2.75	2.05	20	黒曜石	原石面あり
69	31	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	4.15	3.25	1.9	24.5	黒曜石	原石面あり、焼けている
69	32	TR6	配石遺構	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	3.3	2.3	0.5	4.3	黒曜石	縁辺一部に二次調整
69	33	TR6	配石遺構	Ⅱ層	フレイク	Ⅴb	5.45	2.8	1.7	20.6	黒曜石	多面体状の剥片
69	34	TR6	配石遺構	Ⅱ層	フレイク	Ⅴb	5.3	2.6	1.6	21.7	黒曜石	多面体状の剥片
69	35	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	5.4	3.4	1.85	24.8	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
70	36	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.5	4.55	2.4	30.4	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
70	37	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	2.95	6.4	2.45	45.6	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
70	38	TR6	配石遺構	Ⅱ層	石核	Ⅵb	3.2	3.9	2.2	21.5	黒曜石	残核
70	39	TR6	配石遺構	Ⅱ層	砥石	X I	5.55	2.95	1.1	16.9	砂岩	研磨面が抉れている
70	40	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	4.9	2.5	2.2	40.3	硬質頁岩	長軸一端に擦痕、円柱型に表面を擦っている
70	41	TR6	配石遺構	Ⅱ層	たたき石	X b	5.65	3.15	1.25	24.9	安山岩	長軸一端に打痕
70	42	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	12.8	5.4	3.9	39.7	安山岩	長軸一端に擦痕、浅い窪みあり
70	43	TR6	配石遺構	Ⅱ層	たたき石	Ⅷa	12.95	6.3	3.9	31.0	安山岩	長軸一端に打痕
70	44	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	17.35	7.1	4.4	88.0	安山岩	長軸両端に打痕と擦痕
71	45	TR6	配石遺構	Ⅱ層	たたき石	Ⅷa	17.7	7.75	4.3	88.2	安山岩	長軸両端に打痕、一端に擦痕
71	46	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	18.35	7.3	4.6	77.3	安山岩	長軸一端に擦痕
71	47	TR6	配石遺構	Ⅱ層	すり石	Xa	20.8	5.9	4.6	64.6	安山岩	長軸一端に擦痕
77	1	TR4	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	2.55	1.15	0.45	0.08	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	2	TR4	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	2.4	1.2	0.5	1.3	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	3	TR4	遺構外	I層	石核状フレイク	Ⅵc	4.05	1.6	1.25	7.29	黒曜石	原石面あり、細部剥離あり
77	4	TR4	遺構外	I層	石核	Ⅵa	4.4	1.9	1.7	13.4	黒曜石	プラットフォーム1面有り
77	5	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	1.8(1.2/0.6)	0.95	0.3	0.29	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁部調整
77	6	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.1(1.65/0.45)	1.35	0.3	0.58	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁・基部調整
77	7	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.6(2.0/0.6)	1	0.4	0.71	黒曜石	(鏃身部/茎部)、裏面側縁部のみ調整
77	8	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	3.8(2.8/1.0)	1.8	0.7	2.95	黒曜石	(鏃身部/茎部)、先端部微細調整
77	9	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	1.35	1.25	0.25	0.38	黒曜石	先端部欠け
77	10	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.5(2.05/*0.45)	1.1	0.3	0.87	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、微細調整あり
77	11	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(S)	I c	2.45	1.2*	0.4	1.01	黒曜石	先端部・基部欠け
77	12	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(K)	I d	2.3(*1.2/1.1)	1.7	0.4	1.5	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、鏃身部先端欠損
77	13	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(K)	I d	3.25(*2.85/*0.4)	1.55	0.5	2.01	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
77	14	TR4	遺構外	Ⅱ層	石鏃(K)	I d	3.35(2.85/*0.5)	2	0.55	1.98	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
77	15	TR4	遺構外	Ⅱ層	ナイフ	Ⅲa	6.05	1.3	0.8	4.68	黒曜石	先端部加工、側縁一部に刃こぼれあり
77	16	TR4	遺構外	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	2.1	1.35	0.45	1.3	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	17	TR4	遺構外	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	4.24	1.35	0.3	1.94	黒曜石	縁辺一部に二次調整
77	18	TR4	遺構外	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	7.95	4.7	1.9	69.4	黒曜石	原石面あり、微細調整があり削り器として使用?
77	19	TR4	遺構外	Ⅱ層	砥石	X I	6	4.2	1	18.73	砂岩	全面に調整痕あり
77	20	TR4	遺構外	Ⅱ層	たたき石	Ⅷa	138.5	45	35	300	安山岩	長軸一端に打痕あり
78	1	TR7	遺構外	I層	石鏃(H)	I b	2.2(1.3/0.9)	0.85	0.35	0.6	黒曜石	(鏃身部/茎部)、鏃身部微細調整
78	2	TR7	遺構外	I層	石鏃(H)?	I	2.7(2/0.7)	1.15	0.45	1.2	黒曜石	(鏃身部/茎部)、基部調整途中の未製品
78	3	TR7	遺構外	I層	ドリル	Ⅱ	2.75	1.1	0.75	2.4	黒曜石	刃部欠
78	4	TR7	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	5.6	1.7	0.9	6.7	硬質頁岩	縁辺一部に二次調整
78	5	TR7	遺構外	I層	リタッチドフレイク	Ⅴa	4.75	2.85	0.45	3.9	黒曜石	縁辺一部に二次調整
79	1	TR5	遺構外	Ⅱ層	石鏃(H)	I b	2.5(1.9/*0.6)	1.2	0.5	1.21	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、鏃身部微細加工
79	2	TR5	遺構外	Ⅱ層	リタッチドフレイク	Ⅴa	4	1.9	0.4	2.06	黒曜石	縁辺一部に二次調整
79	3	TR5	遺構外	Ⅱ層	石核状フレイク	Ⅵc	3.4	4.15	1.25	13.95	黒曜石	原石面あり、両端部に微細剥離痕あり

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
79	4	TR5	遺構外	Ⅱ層	石錘	XⅡ b	9.4	15.4	7.3	1350	安山岩	長軸1条溝
84	1	TR4	遺構外	Ⅲ層	石鏃(H)	I b	1.9(1.2/*0.7)	1.05	0.4	0.58	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け
84	2	TR4	遺構外	Ⅲ層	石鏃(H)	I b	2.1(1/1.1)	1.35	0.6	0.94	黒曜石	(鏃身部/茎部)、側縁一部微細調整、未製品?
84	3	TR4	遺構外	Ⅲ層	石鏃(H)	I b	2.45(1.4/*1.05)	1.6	0.4	1.51	黒曜石	(鏃身部/茎部)*=欠け、左右の逆刺の位置にズレあり、銚先石鏃?
84	4	TR4	遺構外	Ⅲ層	リタッチドフレイク	Va	2.25	1.6	0.35	1.78	黒曜石	縁辺一部に二次調整
84	5	TR4	遺構外	Ⅲ層	リタッチドフレイク	Va	9	5.35	2.4	111.84	硬質頁岩	縁辺一部に二次調整

表4. 出土骨角器観察表

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
43	1	TR5	5号竪穴	覆土	へら状製品	鯨骨	50	18	10	
43	2	TR6	5号竪穴	床	不明	海獣骨	29	12	6	
43	3	TR7	5号竪穴	床	骨斧	鯨骨	226	76	18	先端及び背面を中心に被熱・黒色化
43	4	TR8	5号竪穴	床	不明	鯨骨	400	84	28	一部被熱・黒色化
48	—	TR7	23号竪穴	覆土	刺突具	鳥骨	16	37	14	アホウドリ上腕骨(L)近位部～骨幹部
51	1	TR7	上層廃棄層	廃棄層	銚頭	海獣骨	43	12	5.5	開窩式
51	2	TR7	上層廃棄層	廃棄層	銚頭	海獣骨	28	11	9	開窩式
51	3	TR7	上層廃棄層	廃棄層	彫像	海獣骨	30	11	3.6	フクロウと思しき彫刻あり
51	4	TR7	上層廃棄層	廃棄層	骨鏃	鳥骨	36	6	6	
51	5	TR7	上層廃棄層	廃棄層	骨針	鳥骨?	56	3	2	
51	6	TR7	上層廃棄層	廃棄層	未製品	鯨骨	77	15	12	
51	7	TR7	上層廃棄層	廃棄層	未製品	鯨骨	72	20	8	
51	8	TR7	上層廃棄層	廃棄層	骨匙	鯨歯	117	33	4	マッコウクジラか?
51	9	TR7	上層廃棄層	廃棄層	原材	鯨骨	45	17	12	
51	10	TR7	上層廃棄層	廃棄層	原材	鯨骨	43	14	11	
51	11	TR7	上層廃棄層	廃棄層	円盤状製品	海獣骨	28	20	4	
72	—	TR6	配石遺構	Ⅱ層	不明	鯨骨	35	12	8	先端部に3条の刻線あり、銚頭か?
74	1	TR6	遺物集中	Ⅱ層	骨斧	鯨骨	142	34	16	
74	2	TR7	遺物集中	Ⅱ層	釣針軸	鯨骨	232	88	18	U字型組合せ式釣針軸、糸掛溝あり
80	1	TR7	遺構外	I層	へら状製品	鯨骨	92	41	16	
80	2	TR7	遺構外	I層	刺突具	鹿角	53	7	5	
85	—	TR4	遺構外	Ⅲ層	骨斧	鯨骨	196	73	20	

表5. 出土鉄製品計測値一覧

図	番号	調査区	遺構名	層位	器種	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
44	1	TR5	5号竪穴	床	刀子	鉄	34	14	3	欠損
44	2	TR5	5号竪穴	床	針	鉄	16	2	1	欠損
44	3	TR5	5号竪穴	床	針	鉄	13	4	3	欠損
44	4	TR5	5号竪穴	床	針	鉄	15	3	3	欠損
45	1	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	39	13	3	欠損
45	2	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	23	11	3	欠損
45	3	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	18	14	3	欠損
45	4	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	24	17	4	欠損
45	5	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	28	21	3	欠損
45	6	TR5	5号竪穴	覆土	刀子	鉄	76	14	3	欠損
45	7	TR5	5号竪穴	覆土	棒状製品	鉄	35	14	5	欠損
52	1	TR7	22・23号竪穴上層廃棄層	廃棄層	刀子	鉄	61	16	3	欠損
55	1	TR4	1号墓	覆土	刀子	鉄	33	19	3	欠損
55	2	TR4	1号墓	覆土	針	鉄	12	3	3	欠損
58	—	TR5	2号墓	覆土	刀子	鉄	96	14	4	欠損
62	—	TR4	土坑(2a)	覆土	刀子	鉄	44	12	4	欠損
81	1	TR4	—	I層	鉤状製品	鉄	60	26	7	欠損
81	2	TR4	—	II層	不明破片	鉄	22	16	2	欠損
82	1	TR5	—	II層	刀子	鉄	114	24	5	欠損
82	2	TR5	—	II層	刀子	鉄	86	10	7	欠損
82	3	TR5	—	II層	刀子	鉄	48	17	3	欠損、金具有り

表6. 神功開竇計測値

図	番号	調査区	遺構名	層位	外縁外径 (mm)	外縁内径 (mm)	縁幅比	内郭外径 (mm)	内郭内径 (mm)	孔径比	縁厚 (mm)	内厚 (mm)	量目 (g)
52	2	TR7	22・23号竪穴上層廃棄層	廃棄層	24.51	20.6	0.09	8.38	6.39	0.31	1.06	0.37	2.19



# 第3章 各種分析

## 第1節 チャシコツ岬上遺跡出土オホーツク土器・トビニタイ土器の編年試案

### 1. はじめに

本稿では、チャシコツ岬上遺跡から出土したオホーツク土器とトビニタイ土器の型式編年について考察する。あわせて、試案に止まるものではあるが、他の遺跡の出土資料を含めた北海道東部オホーツク貼付文系土器全体の型式編年についても考察を試みてみたい。

### 2. 既出の編年からみた評価

#### 1) 熊木編年によるオホーツク土器の評価

最初に、本遺跡出土のオホーツク土器について、筆者によるオホーツク土器編年（熊木2009、熊木2018）を適用した場合の評価をまとめてみたい。

a) IV群（口縁部に紐状の貼付文系文様を有する土器）以外の土器

第75図9、及び第83図4は口縁部肥厚帯を有し、口縁部に刻文系文様を有する土器であり、熊木編年ではI群に該当する。第67図9も口縁部に刻文系文様を有する土器であるが、口縁部肥厚帯は突帯状になるようであり、おそらく貼付文期に位置づけられるとみられる。ほかに、破片資料ではあるが口縁部が無文になるとみられる土器が数点ある（第83図6、第67図1、第49図10など）。これらは熊木編年のIII群土器（口縁部が無文の土器）に該当する可能性が高い。

b) IV群a類土器（単位が1本単独で、かつ施文を有する貼付文を有する土器：貼付文期前半）

第60図6と、第33図25は、確実に熊木編年IV群a類と言える土器である。ほかに、口縁部のみ破片であるため不確実ではあるが、第75図1、第67図5及び7もIV群a類に該当する可能性が考えられる。

c) IV群b類土器（施文のない貼付文、または2本以上で1単位となる意匠の貼付文を有する土器：貼付文期後半）

本遺跡から出土したオホーツク土器は、上記a) b)を除き、ほぼ全てこのグループに該当する。すなわち出土したオホーツク土器の大部分はIV群b類であることになる。

#### e) オホーツク土器全体の評価

以上、熊木編年を適用してみると、本遺跡出土オホー

ツク土器の大多数はIV群b類、すなわち貼付文期後半に位置づけられる。わずかに出土しているIV群a類以前の土器の存在をどのように解釈するかは難しいが、少なくとも確実に遺構に伴うものは確認されていない。以上の出土状況から本遺跡の形成時期について推察するならば、貼付文期前半以前には利用が極めて低調であり、貼付文期後半から竪穴住居等の遺構が形成されたと解釈することができよう。

#### 2) 榊田編年によるオホーツク土器の評価

オホーツク貼付文期後半の土器に関しては、最近、榊田朋広が編年を試みている（榊田2016）。この榊田編年を本遺跡出土のオホーツク土器に適用した場合の評価についても記しておこう。なお、榊田編年では「文様構成」が重要な指標の一つになっているが、これは破片資料では同定が難しいため、完形土器を中心に考察する。

#### a) TR5-5号竪穴床面及び骨塚の出土土器

完形土器を含むまとまった資料としては、本遺跡TR5-5号竪穴床面及び骨塚の出土土器がある。この資料のうちの、完形土器と文様構成の全体がわかる破片について、まずは検討しよう。榊田編年の「トーサムポロR-1群1類」に該当するのは、第28図1、第29図14、第30図9の3点である。「トーサムポロR-1群2類」には、第28図2、第30図4及び同6の3点が該当する。「トーサムポロR-1群3類」には、第29図12、第30図3、同5、同7、同8の5点が該当する。

本遺構の出土土器は、上記のように1類・2類・3類の三者を含む構成となっている。これは榊田のいう「様相②」に該当することから、本遺構は榊田編年の「貼付文期後半1段階」に位置づけられることになる。

#### b) その他の完形土器

ほかに、本遺跡から出土した完形土器としては、第53図3と、第67図21の2点があるが、これらはいずれも榊田編年の「トーサムポロR-1群3類」に該当する。

#### c) 破片資料

a) b) の資料以外の、本遺跡各トレンチから出土したオホーツク土器の破片資料についてみると、「トーサムポロR-1群」の1類・2類・3類の各資料が含まれているように思われる。その中でも、TR6-配石遺構（II

層)では3類がやや多くなるようである。しかしながら、破片資料では同定が困難であるため、TR6-配石遺構を含む各トレンチの出土土器について「トーサムポロR-1群」各類の出土割合を定量的に示すのは困難である。

#### e) オホーツク土器全体の評価

以上、榊田編年を適用した場合、本遺跡のTR5-5号竪穴床面及び骨塚出土資料は「貼付文期後半1段階」に該当する。遺跡全体の形成時期について榊田編年を適用して評価した場合には、トーサムポロR-1群3類の出土がやや多い点が注目される。すなわち、「貼付文期後半2段階」に確実に該当するような遺構は確認されていないものの、本遺跡は「貼付文期後半1段階」から「貼付文期後半2段階」にかけて形成され、さらに後述のように「トビニタイ1式期」まで連続的に利用されていたと考えてよいであろう。

#### 3) 榊田編年によるトビニタイ土器の評価

次に、本遺跡から出土したトビニタイ土器について、榊田による最新の編年(榊田2016)を適用して評価してみよう。オホーツク土器と同様、破片資料では文様構成等の同定が難しいので、完形土器を中心に検討する。

#### a) TR5-配石遺構の出土土器

本遺構から出土した完形土器4点(第46図10-13)について、榊田による分類を適用すると、10と12は「トビニタイ式土器2群」、11は「トビニタイ式土器3群」、13は「トビニタイ式土器4群」となる。榊田編年では2群と3群は「トビニタイ1式」、4群(と5群)は「トビニタイ2式」となるので、本遺構の出土土器はトビニタイ1式と2式の両者を含んでいることになる。

このような出土状況に対する評価は少し難しいが、本遺構の時期をトビニタイ1式から2式への移行期と解釈するのも不可能ではない。ただし、榊田が検討した遺構一括資料の例(榊田2016:表50)を見る限り、トビニタイ2群と4群の共伴例は確認されていないようである。本遺跡調査時の所見によれば、配石遺構の完形土器群は竪穴覆土内の同一面からまとめて出土しており、廃棄の同時性は高いと判断できる。この点は榊田編年と些か矛盾することになり、本遺構から出土したトビニタイ土器を型式編年上どのように位置づけるのか、検討の余地が残ることになる。

#### b) その他の資料

完形土器以外の出土資料としては、a)と同じTR5-配石遺構から出土した第46図2・4~9や、第60図1があ

る。いずれも破片資料であり同定は難しいが、全て「トビニタイ1式」もしくは「2式」に該当するもので、「トビニタイ3式」や「4式」の資料は含まれていないとみられる。

#### c) トビニタイ土器全体の評価

以上、榊田編年を適用してみると、本遺跡出土のトビニタイ土器は「トビニタイ1式」を中心に「2式」を含む構成となっており、「トビニタイ3式」と「4式」は確認できなかった。オホーツク土器の検討結果とあわせて本遺跡の形成時期について評価すると以下になる。すなわち、本遺跡は「貼付文期後半1段階」から「貼付文期後半2段階」、さらに「トビニタイ1式」期まで連続的に利用され、「トビニタイ2式」から「3式」にかけての時期になると利用がほぼ断絶したと考えられよう。

### 3. 道東部オホーツク貼付文期の土器の細別試案

#### 1) 竪穴住居跡等一括出土資料の分類

続いて、本遺跡の出土資料を含めた道東部のオホーツク貼付文期の土器(熊本編年で言うIV群a類・IV群b類)について、これらの土器が竪穴住居跡等からまとめて出土した例の内容から細別編年を検討してみたい。

貼付文期に相当する道東部の竪穴住居跡等の一括資料の各例について、熊本編年の各群の構成比に基づいて分類すると、以下のような区分が可能である。

組成a): 熊本編年IV群a類と、それに加えてI群~III群の土器も多く含む一方で、IV群b類をほとんど、あるいは全く含まない例。

組成b): I群~III群の土器をほとんど、あるいは全く含まない一方で、IV群a類とIV群b類の両者を含む例。

組成c): I~III群やIV群a類をほとんど含まず、ほぼIV群b類のみからなる例。

もっとも、竪穴一軒あたり10個体を超えるような一括資料の例はそれほど多くないため、構成比を定量的に示すことは難しく、組成の分類は感覚的なものに止まらざるを得ないのが現状である。それを踏まえた上で、以下に各組成の内容について確認してみよう。

#### 2) 組成a) について

組成a)の例としては、オンネモト遺跡I号竪穴(増田ほか1974)、栄浦第二遺跡9号竪穴オホーツク上層遺構(藤本編1972)の資料がある。また、川西遺跡10

号竪穴（青柳編1995）や柴浦第二動物骨集積1（武田編1995）の例は、IV群b類土器を含む点に問題があるが、組成a）に含めてよいかもしい。他に、ウトロ海岸砂丘遺跡1号竪穴（駒井編）の例は一括とみてよいか疑問が残るが、組成a）に近いと見ることも可能である。

これらは熊本編年で言う沈線文期後半から貼付文期前半にかけての型式変遷のあり方をよく示す資料と考えられる。詳細は熊本2018で論じたのでここでは省略する。

### 3) 組成c) の内容と「重畳パターン」の文様構成

組成b) については後述することにして、先に組成c) の内容に注目してみよう。

組成c) の例としては、トーサムポロ遺跡R-1地点1a号・2号・6号・7号・13号の各竪穴（前田・山浦編2004）、二ツ岩遺跡1号・2号・3号の各竪穴（野村ほか1982）、チャシコツ岬下B遺跡Pit2・Pit3の各竪穴（松田ほか2002）がある。これらの例は熊本編年Ⅲ群土器（口縁部が無文の土器）を含む例はあるものの、IV群a類は含んでおらず、ほぼIV群b類のみからなる一括資料である。本遺跡のTR5-5号竪穴床面の出土土器もこのグループに含めて良いと考えられる。

これら組成c) に含まれる土器の特徴を組成b) のそれと比較すると、IV群a類の有無のほかに、組成c) にのみ含まれる特徴的な土器があることがわかる。それは、3本一組の貼付文（直線+波線+直線）を一単位とする文様意匠が、水平に3単位以上重畳する、という文様構成を有する土器である（図1-1）（注1）。このような文様構成を「3本重畳パターン」として設定しよう。

3本重畳パターンの具体例を見てみよう。本遺跡TR5-5号竪穴で言うと、第29図12、第30図3、同5の3点がこのパターンに該当する。なお、第30図4や同7もこれに近い文様構成と言えるが、これらは3本重畳パターンに含めず、単位となる文様意匠（直線+波線+直線）のみを正確に繰り返している例だけを、この重畳パターンとして扱うこととする（注2）。

なお、文様意匠の重畳という観点からすると、2本一組の貼付文（直線+波線）を1単位とする意匠を、3単位以上重畳する例もある（図1-2）。これは「2本重畳パターン」として3本重畳パターンと区別する。この2本重畳パターンの土器は組成b) とc) の両方で認められる。詳細は後述する。

話を組成c) の土器の内容に戻すと、組成c) に含まれる土器の特徴としては、上記の3本重畳パターンに加え

て、以下の二点が認められるように思われる。第一点は、貼付文に対する「なで付け」の増加である。貼付文の表面をなで付けることによって貼付文の断面が方形を呈するようになった例が、組成b) よりも多いことが予想できる。第二点は、付加的な文様の減少である。組成c) に含まれる土器では、器面を横環する文様意匠（直線や波線等）以外の、ボタン状貼付文や粒状貼付文等の付加的な装飾が、組成b) のグループよりも少ない傾向にあるとみられる。

しかしながら、現状では以上二点の特徴について定量的な把握ができていないので、これらが細別の指標となるか否かの評価は今後の課題としておこう。

### 4) 組成b) の内容

次に組成b) の例であるが、これは組成a) と組成b) 以外の一括資料がほぼ全て該当することになり、例数は最も多くなる。代表的な例としては、松法川北岸遺跡12号・13号の各住居址（涌坂編1984）、トコロチャシ跡遺跡1号外側・1号内側・2号の各竪穴（駒井編1964）、トコロチャシ跡遺跡オホツク地点7a号竪穴（熊本・國木田編2012）、常呂川河口遺跡15号竪穴（武田編1996）、柴浦第二遺跡25号竪穴骨塚（武田編1995）、川西遺跡8号竪穴（青柳編1995）などの一括資料がある。なかでも、一括性が高く、含まれる個体数も多い常呂川河口遺跡15号竪穴の例は良好な資料といえる。その内容は以下のようにまとめられよう。

- ①熊本編年Ⅰ群～Ⅲ群の土器を全く含まない。
- ②全体の約7割がIV群b類で、残りの約3割がIV群a類という構成比になる。
- ③2本重畳パターンの例が少数認められる。3本重畳パターンに近い例もあるが、厳密な意味での3本重畳パターンとなる例は認められない。

常呂川河口15号竪穴以外の例をみても、2本重畳パターンは組成b) と組成c) の両方に認められるが、3本重畳パターンは組成b) の中には存在せず、組成c) にのみ認められる。組成a) には2本や3本の重畳パターンは存在しないので、このような重畳パターンは、組成b) の段階で2本のもので出現し、続いて組成c) の段階で3本のもので出現する、という順で変化してゆくと考えられよう。

### 5) 組成b) の細別について

組成b) に分類される各出土例の内容には変異があるが、上記の点などからすると、IV群a類の占める比率

や、2本重畳パターンの出現率などを指標として細別が可能であるようにも思われる。具体的には、IV群a類の構成比が多いほど古く、2本重畳パターンの出現率が高いほど新しいと仮定できる。そのような視点から組成b)の各例の内容を検討してみると、以下の点が注目される。

①IV群a類のみで構成される確実な例はなく、ほぼ全ての例でIV群b類が伴う(注3)。

②IV群a類の構成比が比較的高い例として、松法川北岸遺跡12号住居址、トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7a号竪穴、栄浦第二遺跡25号竪穴骨塚の各例があるが、松法川北岸12号やトコロチャシ7a号は2本重畳パターンを含む一方で、栄浦第二25号骨塚は同パターンを含んでいない(注4)。

③川西遺跡の各竪穴の組成を見ると、例えば2号竪穴におけるIV群a類の構成比は常呂川河口15号の例よりもやや少なく、その点からすると川西遺跡は常呂川河口15号よりもやや新しい時期まで存続していたと見られるが、覆土出土等の資料を含めた遺跡全体の出土資料の中に2本重畳パターンは確認できない。

①の状況からすると、組成b)の初期から2本重畳パターンが存在する可能性は否定できないことになる。さらに②と③からすると、2本重畳パターンは時期差、すなわち組成b)の後半段階から2本重畳パターンが出現する、というよりも、地域差、すなわち常呂川付近を境としてその西側ではこのパターンの分布が低調となることを示しているようにも見える。しかしながら、2本重畳パターンの土器は道北部の枝幸町目梨泊遺跡(佐藤編1994)でも多数確認されており、単純に地域差と見なすのは難しい。

以上、現状では組成b)の細別は難しいため(注5)、ここではその可能性のみを示唆しておくことにしたい。

#### 6) 貼付文期の細別試案

以上の検討から、道東部貼付文期の細別編年試案についてまとめると、以下のようになる。

①組成a)～c)の内容から、以下の細別が仮設できる。

組成a)：沈線文期後半から貼付文期前半への移行期

組成b)：貼付文期前半

組成c)：貼付文期後半

②土器の型式変遷としては、熊木編年のⅢ群以前→IV群a類→IV群b類という過程が想定できるが(熊木

2018)、前述のように、現状ではIV群a類が単独で存在するようなあり方は確認できていない(注6)。

③組成b)の各例について、現状では細別は困難であるが、IV群a類の構成比や「2本重畳パターン」の出現を指標としてさらなる細別が設定できる可能性がある。

④組成c)、すなわち貼付文期後半の指標としては、IV群a類の消失と、「3本重畳パターン」の出現がある。

## 4. 編年試案に基づく本遺跡出土資料の再検討

### 1) 型式編年の再検討

前節の編年試案に基づいて、本遺跡出土のオホーツク土器を再度検討してみよう。本遺跡の出土資料は、TR5-5号竪穴出土資料をはじめとして、全体が組成c)、すなわち貼付文期後半の内容に概ね一致することになる。ただし、わずかではあるが熊本編年IV群a類土器等も出土しており、遺構に伴う例は未確認であるものの、本遺跡の利用は少なくとも組成b)の時期、すなわち貼付文期前半には始まっていたと考えられる。

一方、今回の編年試案の視点からTR5-配石遺構出土のトビニタイ土器を再評価してみると、3本重畳パターンの文様構成を示す例(第46図12)があることが注目される。3本重畳パターンの文様構成が貼付文期後半のオホーツク土器からトビニタイ土器へと引き継がれている点は、両者の型式変遷過程を評価する上で非常に興味深い。

ちなみに、本稿で言う「重畳パターン」は、榊田編年の土器属性の分類では「トビニタイ型文様構成b)」に相当すると考えられる。筆者はこの「重畳パターン」を「トビニタイ型文様構成b)」から独立させ、別の属性として扱うことで、貼付文期後半のオホーツク土器からトビニタイ土器への型式編年が理解しやすくなると思う。すなわち、「重畳パターン」を除いた「狭義のトビニタイ型文様構成b)」(本遺跡では第46図10がこれに相当する)の確立をもって、トビニタイ土器の成立とする案を提起したい(注7)。

### 2) 周辺の遺跡との関係

本遺跡周辺のオホーツク文化の遺跡について、出土土器を確認してみると、ウトロ遺跡(松田編2011a)では十和田式から熊本編年IV群b類までの全ての型式がまわって出土しており、それに加えてわずかな量ではあるがトビニタイ土器(榊田編年の1式もしくは2式)も出土している。しかし、報告書の掲載資料を見る限り、3

本重畳パターンの土器は全く出土していない。これはウトロ遺跡と本遺跡の時期差を示すものであり、また遺跡立地や集落の変遷過程を考える上でも非常に興味深い。

一方、チャシコツ岬下B遺跡では、わずかな量ではあるが刻文系土器（熊本編年I群）が出土しており、この時期から利用が開始されているようである。竪穴住居跡は組成b）、すなわち貼付文期前半の例（松田編2011b：Pit4）と、組成c）、すなわち貼付文期後半の例の（松田編2002：Pit2及びPit3）両者が確認されており、岬上遺跡よりも一段階古くから集落が形成されていたとみられる。

## 5. おわりに 「オホーツク貼付文期の土器の型式変化と「重畳パターン」

本遺跡から出土したオホーツク土器は、前述の組成c)の内容を典型的に示す数少ない資料であり、オホーツク文化貼付文期の型式細別を設定する上で重要な出土例であることが明らかになった。さらに本稿では「3本重畳パターン」の文様構成という分類を設定し、それを本遺跡等の資料に適用することで、この文様構成が貼付文期の細別の指標となることを示した。

この「重畳パターン」が出現する過程を、オホーツク貼付文期の土器の型式変化の中に位置づけてみた場合、どのような説明が可能になるであろうか。ここでは型式変化の過程について、以下のような視点を提供してみたい。

重畳パターンではないIV群b類土器の文様構成を見ると、特に組成b)に含まれる資料では、重畳パターンのような「単純な文様パターンの繰り返し」が意図的に避けられている例が多いことに気付く。すなわち、一見、単位文様を重ねているように見える資料でも、各単位の意匠がそれぞれ異なるように注意深くデザインされ、配列されている資料が多い。これに対し、組成c)に含まれる資料では、重畳パターンの例はもとより、それ以外の資料でも、文様構成が「単位文様の繰り返し」に近くなっている例が増えてくる。このような見方が正しいとすれば、オホーツク貼付文系土器の文様構成は以下のような変遷過程を辿ると理解できることになる。すなわち、IV群a類からIV群b類にかけての時期に文様構成と意匠が繁縟化し、続くIV群b類の後半段階になると、「同じパターンの繰り返し」という形で文様構成が単純化する、という変化である。

かつて筆者はオホーツク貼付文系土器の型式変化につ

いて、「1単位中の貼付文の本数」と「1個体全体の貼付文の量」の両方が増加してゆく過程を想定した（宇田川・熊本編2001：85）。現在でもこの指摘は大筋では正しいと考えているが、本稿ではこれに加えて「文様構成の単純化」という変化が生じていることを指摘しておきたい。この単純化が、貼付文期の細別を設定する上での指標の一つとなることを、本稿では示してきたわけである。

紙幅等の都合により、本稿では他の遺跡の内容等についてデータを示すことができなかった。本稿の編年はあくまで試案であり、近い将来に再論したいと考えている。

（熊本俊朗：東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

## 注

- (1)ただし、本文に例示した組成c)の一括資料の全例で「3単位重畳パターン」が認められるわけではなく、二ツ岩遺跡2号竪穴のようにこの文様構成の土器を含まない例も存在するようである。
- (2)ただし、3本重畳パターンの認定においては、単位となる3本の意匠に付加された粒状の貼付文については、その存在を考慮しないことにする。
- (3)松田川北岸遺跡1号竪穴の例はIV群a類単独の構成に該当する可能性があるが、出土点数が3点のみであることから、評価は保留しておく。
- (4)ただし、栄浦第二遺跡で2本重畳パターンの土器が全く出土していないわけではなく、破片資料であるため不確実ではあるが、少数の例（藤本編1972：Fig.263-7、武田編1995：第45図-2など）が確認されている。
- (5)編年の方法としては、2本重畳パターンの出現を指標とする方法のほかに、常呂川河口遺跡15号竪穴例におけるIV群a類の構成比（全体の約3割）を基準として、IV群a類の比率がそれ以上となる例を古段階、それ以下の例を新段階とする、というような細別が設定できるようにも思われる。ただし常呂川河口遺跡15号竪穴のように良好な一括資料は出土例が少なく、この基準を適用した分類は現状では難しい。
- (6)熊本2018では、「貼付文期前半」をIV群a類土器のみからなる段階として設定したが、この段階は組成b)のような内容が常態になるとみた方が、資料の実態に近いのかもしれない。ただし、IV群a類が単独で

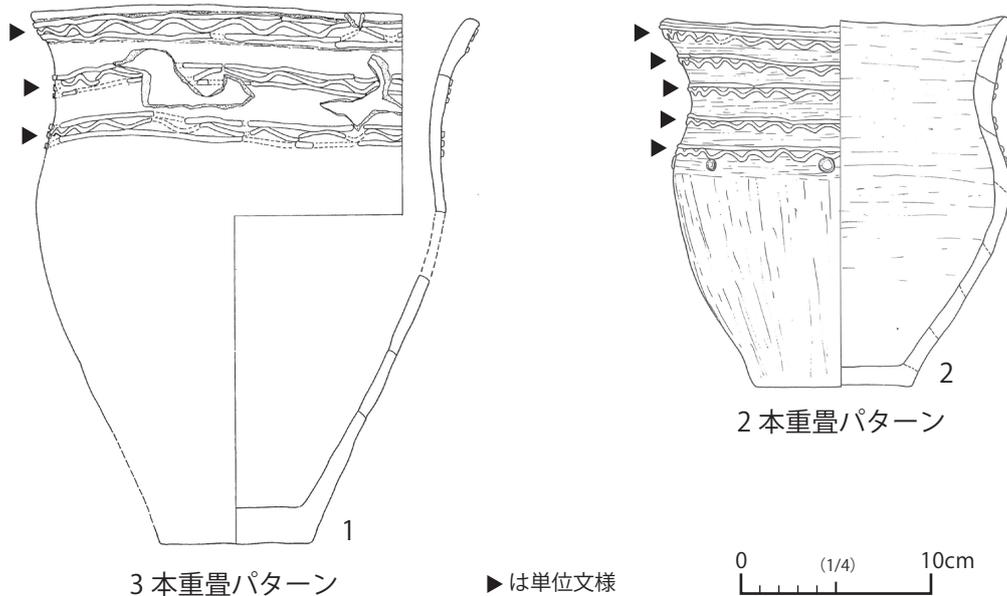
存在する可能性は皆無ではないので、結論は留保しておきたい。

(7)ただし、貼付文期後半のオホーツク土器の中にも、「狭義のトビニタイ型文様構成b」に相当するような意匠の例が存在する。本遺跡の例で言えば、第15図TR5-5号骨塚-8、第19図TR6-配石遺構Ⅱ層(3)-22がそれに該当しよう。しかし、このような例はこの時期の資料全体の中では稀な存在であり、「狭義のトビニタイ型文様構成b」が普及するトビニタイ1式期とは様相が異なることを指摘しておきたい。

### 引用文献

青柳文吉編. 1995. 『湧別町川西遺跡』北海道立北方民族博物館  
 宇田川洋・熊木俊朗編. 2001. 『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科  
 熊木俊朗. 2009. 「オホーツク土器の編年と各遺構の時期について」. 『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会. pp.303-319  
 熊木俊朗. 2018 (印刷中). 『環オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター  
 熊木俊朗・國木田大編. 2012. 『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科考古

学研究室・常呂実習施設  
 駒井和愛編. 1964. 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡下巻』東京大学文学部  
 榎田朋広. 2016. 『擦文土器の研究』北海道出版企画センター  
 佐藤隆広編. 1994. 『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会  
 武田 修編. 1995. 『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会  
 武田 修編. 1996. 『常呂川河口遺跡(1)』常呂町教育委員会  
 野村 崇ほか. 1982. 『二ツ岩』北海道開拓記念館  
 藤本 強編. 1972. 『常呂』東京大学文学部  
 前田 潮・山浦 清編. 2004. 『根室市トーサムポロ遺跡R-1地点の発掘調査報告書』北地文化研究会  
 増田精一ほか. 1974. 『オンネモト遺跡』東京教育大学文学部  
 松田 功編. 2002. 『チャシコツ岬下B遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会  
 松田 功編. 2011a. 『ウトロ遺跡』斜里町教育委員会  
 松田 功編. 2011b. 『チャシコツ岬下B遺跡発掘調査報告書』斜里町教育委員会  
 涌坂周一編. 1984. 『松法川北岸遺跡』羅臼町教育委員会



1：トーサムポロ遺跡 R-1 地点 1号竪穴 (前田・山浦編 2004：Fig.9-2)  
 2：松法川北岸遺跡 12号住居址 (涌坂編 1984：第17図1)

第1図 「重畳パターン」の文様構成

## 第2節 チャシコツ岬上遺跡から出土した石器の分析

### 1. はじめに

オホーツク文化期の遺跡は主として道北から道東地域のオホーツク海沿岸に広く分布するが、他の時代・時期が複合する遺跡が多く単独集落の報告例が少ない。このことから、住居や墓などの遺構出土遺物に比べ石器組成は曖昧になり、同時期のものか、他時期のものか判断し難くなっている。

本稿ではチャシコツ岬上遺跡の石器の特性について、他のオホーツク文化期の遺跡と比較することのほか、石鏃に利用される形状と石材の差異や石核状フレイクの存在にも着目し分析してみた。

### 2. 方法

チャシコツ岬上遺跡の石器の特性に焦点を当てるのが第一義であることから、オホーツク文化期全期ではなく、チャシコツ岬と同時期、すなわちオホーツク文化後期から終末期に限定し、さらに地域も道北から道東地域で、まとまった石器が確認されている遺跡に絞った。選定した遺跡は道北地域では、枝幸町目梨泊遺跡、道東地域オホーツク管内では、北見市トコロチャシ跡遺跡群、網走市二ツ岩遺跡、斜里町チャシコツ岬上遺跡、根室管内では、羅臼町松法川北岸遺跡、根室市トーサムポロ遺跡R-1地点及び、弁天島遺跡である。ただし、石鏃については石鏃出土量が多い目梨泊遺跡（以下、目梨とす

る）、松法川北岸遺跡（以下、松法とする）、弁天島遺跡（以下、弁天とする）とチャシコツ岬上遺跡（以下、チャシコツとする）から遺跡の特性分析を試みた。分析にあたり、内山（1998年）、前田（2009年）の分類を参考に石鏃の形状を大まかに、柳葉形、ひし形、三角形、将棋駒形の4つのタイプに分けた（図-1）。

各遺跡の石鏃サンプル数は目梨泊遺跡2,083点、松法川北岸遺跡871点、弁天島遺跡319点、チャシコツ岬上遺跡92点である。

以下、各遺跡の石器並びに地形的な特徴を示す。

#### 1) チャシコツ岬上遺跡の概要と石器組成

チャシコツ岬上遺跡は、標高は50mを越す三方を海に囲まれた岬状地形の海岸段丘面上に立地している。段丘上の平坦面には31軒の住居や土壇墓、廃棄層などが確認されており、知床半島西側の拠点集落と言える。調査は第4次まで行われ、1軒の住居跡、2基の墓壇などを検出し、多種の石器を確認している。オホーツク期に比べ僅かな数量ではあるが縄文、擦文、トビニタイ期の土器片が確認されていることから、全ての石器がオホーツク文化期の所産であるとは断言できないが、現地調査での感触ではオホーツク文化期のものが主体になっているものと考えられる。

石器組成：剥片石器では石鏃が多く、次いで石核様の円レキ面を残すもの（石核状フレイクと仮称した）であ

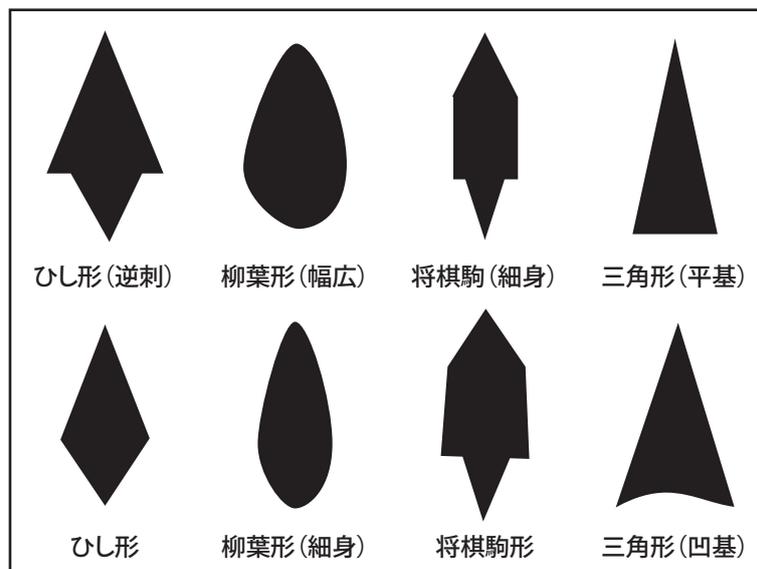


図1 石鏃の形状

る。定型的な刃部加工を伴ったナイフ、スクレイパーは少なく、不規則な微細調整が見られるリタッチドフレイクが目立つ。レキ石器では、棒状または扁平、円レキの長軸端部を利用した、安山岩製のたたき石、すり石が最も多い。数は少ないが石斧、石錘や有孔石製品も確認されている。全面に研磨面のある砥石も僅かに見られる。図示していないが、調整痕等の見られない球状あるいは海岸に見られる淘汰された円レキのほか、板状のレキなども比較的多く確認されている。

#### 2) 枝幸町目梨泊遺跡の石器組成

目梨泊遺跡は、標高20m前後の海岸段丘上の崖面側に立地し、15軒を超える住居跡と50基をはるかに超える土壌墓群、その他の遺構が構築されている道北地域の拠点集落遺跡である。調査は第3次まで行われ、6軒の住居跡、48基の土壌墓などを調査し多数の石器を確認している。縄文や擦文、土師器など僅かに出土するが、主体はオホーツク期の遺物である。

石器組成：剥片石器では圧倒的に石鏃が多く、大きさや器形タイプも様々なものが多い。ナイフ、スクレイパーも僅かに出土するが母岩となる石核・原石なども顕著ではなく、意欲的に製作しているのではなく前時代の再利用品と推察する。レキ石器では錘石が多く、同じ安山岩製の石材を用い形状も特徴的である。砥石やすり石、たたき石も多く見られる。環状石製品や有孔石製品も確認されている。

#### 3) トコロチャシ跡遺跡群の石器組成

トコロチャシ跡遺跡群は、トコロチャシ跡遺跡ならびにオホーツク地点、トコロチャシ南尾根遺跡の3つの遺物高密度箇所を総称しており、標高は約15~20mの河岸段丘上に立地している。南尾根遺跡を除く2地点からは10軒以上の住居や土壌墓が確認されている。調査は1960年の第1次調査から第10次調査まで行われ、10軒の住居跡や多数の土壌墓などを調査し、多数の石器を確認している。縄文早期からアイヌ期まで利用されており、オホーツク文化期以外の石器も多数混在している。

石器組成：剥片石器では圧倒的に石鏃が多く、大きさや器形タイプも様々なものが多い。ナイフ、スクレイパーの出土量は比較的多いが、報告書に記載のある石核とされるものから製作されたとは考え難く、前時代の再利用品か混入遺物と推察する。石核とする円礫面を残すものも比較的多く見受けられる。レキ石器では石斧が比較的多い。くぼみ石やすり石、砥石などは、円レキとい

うより角張った石が多く使用されている。たたき石は少ない。チャシ岬上遺跡でも見られた球状のレキが散見される。石錘や有孔石製品も僅かだが確認されている。

#### 4) ニツ岩遺跡の石器組成

ニツ岩遺跡は、標高45mの海岸段丘上の崖面側に立地し、6軒の住居跡から成る比較的小規模な遺跡である。この内、3軒の住居が調査され種々の石器を確認している。だが、住居址埋土中の遺物には縄文や続縄文期なども混在していることから、全ての石器がオホーツク文化期の所産であるとは言い難い。

石器組成：剥片石器では石鏃が多く、中でも有茎が多く、20~30ミリの長さを集約される。ナイフやスクレイパーも比較的多いが、トコロチャシ跡遺跡と同様、前時代のもの再利用ないしは混入と推察される。レキ石器ではたたき石や砥石が多く、石錘や石斧は少ない。有孔石製品はすべての住居から確認されている。

#### 5) 松法川北岸遺跡の石器組成

松法川北岸遺跡は、河川と海岸との堆積作用により形成された標高5m程の低位の沖積面上（砂丘地）に立地している。住居や土壌墓数に関しては把握されていないが、調査により15件の住居跡が確認され、この内、オホーツク文化期のものは11軒と報告されている。遺構内外より数多くの石器を確認している。ただし、縄文、続縄文、トビニタイ期の遺物が確認されていることから、遺構内外を含め石器がオホーツク文化期単独のものとは言えない。

石器組成：剥片石器では石鏃が圧倒的に多く、ナイフ・スクレイパーも僅かではあるが確認できる。石核様の円レキ面を残すものも見られる。レキ石器では石斧や錘石、砥石（有孔のものも含め）が比較的多く見られる。安山岩製のたたき石も確認されている。板状のレキなども僅かに確認されている。環状、円盤状の有孔石製品も確認されている。

#### 6) トーサムポロ遺跡R-1地点の石器組成

トーサムポロ遺跡R-1地点は、オホーツク海とトーサムポロ湖の湖口との境界にある標高10m程の西側から張り出した台地上に立地している。13軒の竪穴住居からなる集落遺跡である。この内、道路工事によりすでに住居の半分が破壊されている2軒のほか、もう2軒の計4軒が調査され、多くの石器が確認されている。オホーツク文化期を主とした集落遺跡である。近年の調査で縄文

期の遺構や擦文期などの遺物も検出されている。

石器組成：剥片石器では石鏃が圧倒的に多く、ナイフ・スクレイパーは極めて少ない。レキ石器は非常に多く、中でもたたき石、すり石は多数確認できる。多くは縦長の円レキを利用している。錘石も比較的多く見られる。石斧は少ない。

#### 7) 弁天島遺跡の石器組成

弁天島遺跡は、オホーツク海側に面する根室港の外に浮かぶ小島で、標高10m程の平坦面に集落が作られている。14軒の竪穴住居と数多くの土壙墓などからなる集落遺跡である。住居跡はほぼ調査が完了し、多くの石器が確認されている。オホーツク文化期を主体としているが、続縄文、擦文期の土器も確認されている。

石器組成：剥片石器では石鏃が圧倒的に多く、ナイフ・スクレイパーは少ない。レキ石器は非常に多く、中でも縦長の円レキを利用したたたき石、すり石は多数である。石斧やくぼみ石、錘石も比較的多く見られる。有孔円盤状石製品も確認されている。

### 3. 結果と考察

#### 1) オホーツク文化期後期の石鏃について

##### ① 石鏃の形状について

チャシコツ岬上遺跡の石鏃はどちらかと言えば、粗雑なものが多く、図2を見ると、ひし形に特化している。一方で、目梨泊遺跡や松法川北岸遺跡、弁天島遺跡では比較的形の整ったひし形、将棋駒形が多く違いが見られる。では、両者の違いはどこにあるのか。そこで将棋駒形と呼称した鏃身部が五角形の石鏃を選び、目梨泊遺跡やトコロチャシ跡遺跡、松法川北岸遺跡、弁天島遺跡などから製作過程を観察し、一つの仮説を立ててみた。

将棋駒形石鏃はオホーツク文化期中期の刻文期以降の遺跡から顕著に見られる。また、オホーツク文化期の典型的な石鏃の一つと言える。製作過程だが、1.まず縦長の剥片を母岩から取る。できるだけ両側縁幅が平行で、比較的長いものを剥ぎ取る。2.基部の位置決定は剥片の状況を勘案した上で両側縁部に調整剥離を入れる。先端部は三角形になるように作り出す。3.最後に基部調整をし、五角形状に象る。このように製作したものが使用の過程で、先端部が欠損すると鏃身部の先端部調整を行い、刃部が徐々に短小化し、最終的にひし形へと変化していく。基部欠損の場合は、三角形石鏃（大型のものは銛先鏃）としての利用法に変えるのか、あるいは、残っ

た鏃身部側を削り再度基部調整をして短小化させ、最終的には先端部欠損と同様、ひし形へと変化させる。端的に言えば、先端部であろうが基部側の欠損であろうが最終的には多くの場合、ひし形の形状に落ち着くのではないかということである。つまり、チャシコツの粗雑なひし形石鏃はオホーツク文化期の石鏃の最終形態とみなすことができる。このことは、オンネモト遺跡（前田1974）、二ツ岩遺跡（野村他1982）ですでに報告されているように有茎石鏃は「地域的差ではなく貼付文土器の使用者に一般的な現象である」と、つまり、地域を問わずオホーツク文化後期の特徴であることを示すものであり、今回の結果もこのことを補完する結果となっている。

さらに柳葉形の石鏃を観察すると、刃部の細部調整が顕著であるものが多く、このような製作技術を有する人々が粗雑な刃部剥離調整の石鏃を作っているとは到底考えられない。そう考えると、どこからか持ち込まれたものと考えの方が説得力を有する。図-3の石材を見ると黒曜石製のものが多いのだが、弁天島遺跡や松法川北岸遺跡では、頁岩やジャスパー、チャートを利用したものも多い。色は赤や白、灰色、グリーンなど多様である。もちろん、生業の中でも使われたのだろうが、一方では、儀礼や副葬品などといったものに使われている可能性もある。残念ながら、チャシコツ岬上遺跡の住居跡、土坑墓などからこのような石材は発見されていない。これら様々な形状や石質の石鏃にも交流や交易を示すヒントが隠されているはずであり、石鏃製作址遺跡を始め、それを見つけ出す作業をこの先も行わなければならない。

##### ② 石鏃に利用される石材について

各遺跡出土の石鏃を観察すると、石材については明確な違いが見られた（図3）。すなわち、知床半島を境にオホーツク海北側の斜里や網走側と南側の羅臼や根室側とで違いがあり、北側の遺跡では黒曜石が90%を占めるのに対し、南側は60%程度に止まり、その他の頁岩やジャスパー、チャート、安山岩が30%以上を占めていることである。なお、弁天島出土のチャートに関しては、全てではないもののジャスパーの可能性が高く（資料実見の結果）、頁岩とジャスパーとで占められているものと考えられる。

以上、まとめるとチャシコツ岬上遺跡をはじめ、各遺跡から出土する有茎石鏃、強いては、ひし形という形状

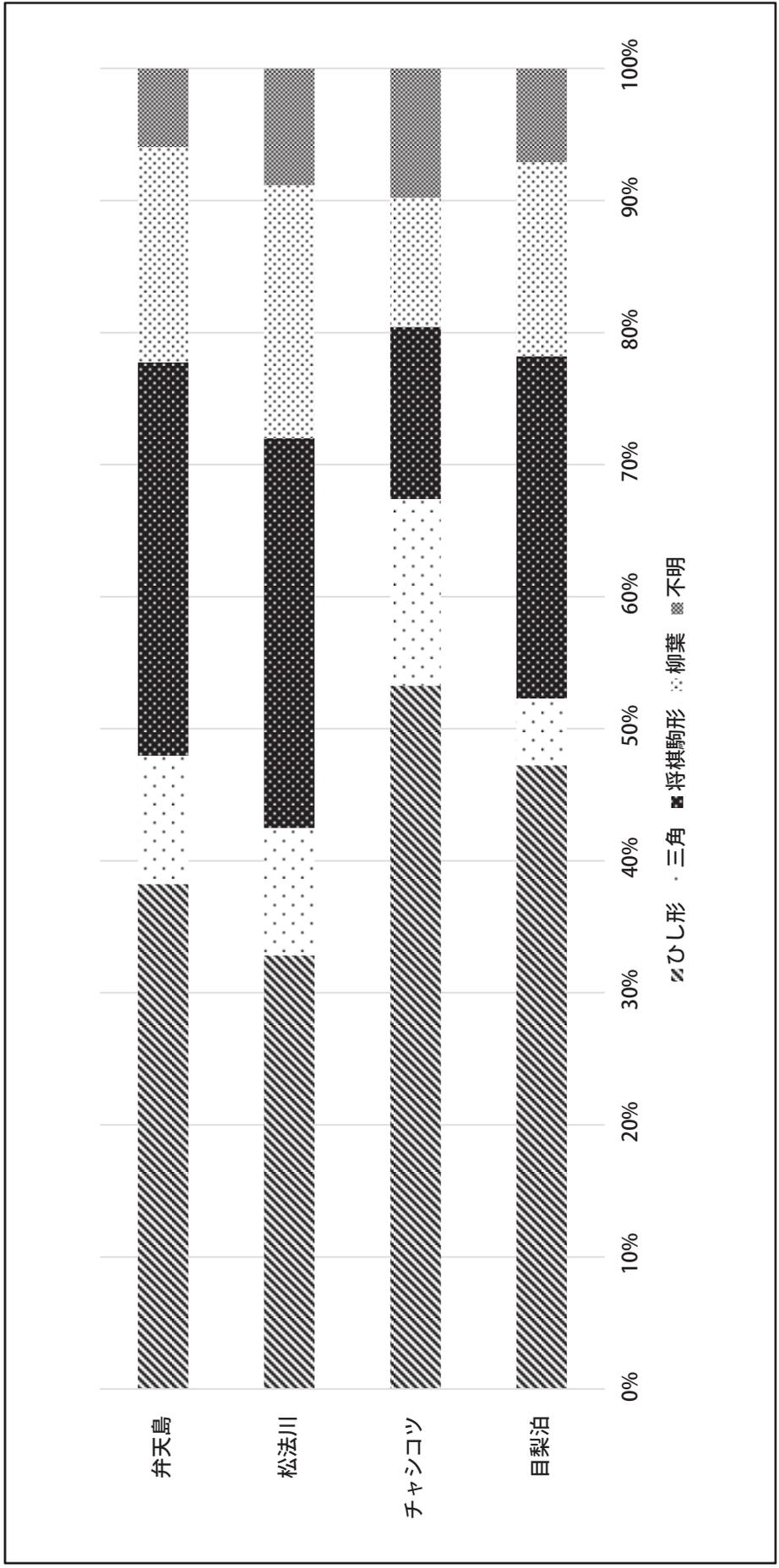


図2 各遺跡出土石鏃の形状

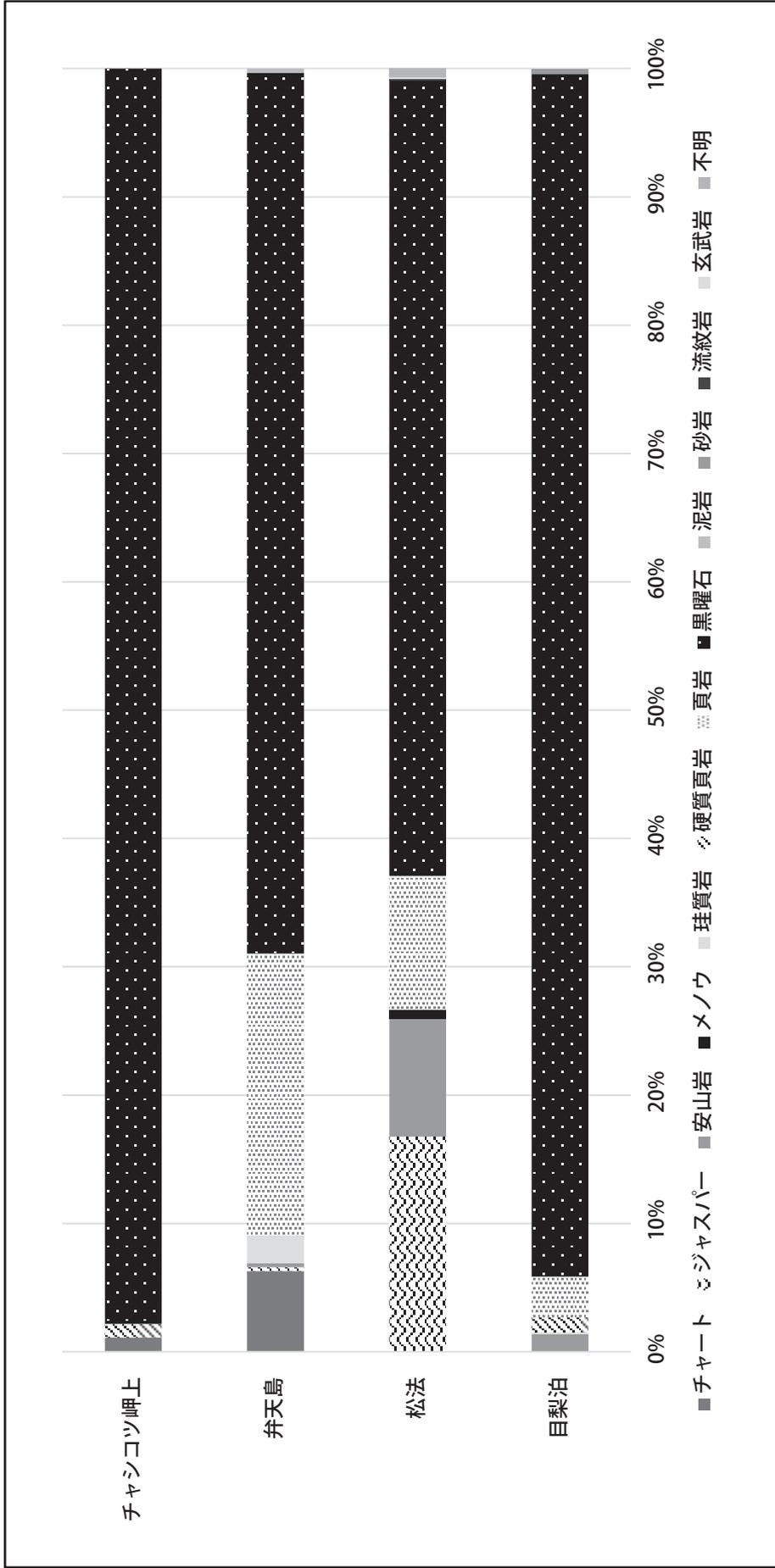


図3 各遺跡出土石鏃の石材

はオホーツク文化後期の典型例であることと、石材は知床半島を境に異なることが判明した。

#### 2) チャシコツ岬上遺跡の特性を示す石器

チャシコツ岬上遺跡を特徴付ける石器に、石核状フレイクとした円レキ原石面を残した黒曜石がある。トコロチャシ跡遺跡では石核として報告され、他の遺跡でも僅かな出土の報告例はあるが、当遺跡ほど顕著ではない。この石核状フレイクを観察すると、微細な剥離があるもの、あるいは、全く剥離が見られないものなど様々で、石核としての利用ならば、石鏃や小さな剥片石器くらいしか作ることができない3~5cmほどの大きさのものばかりである。当遺跡では剥離調整が雑な石鏃やリタッチドフレイクがあり、このようなものに利用されていたのかもしれない。

#### 3) 石器における遺跡特性の不明確化の要因について

ここでは石器の分類から遺跡の特性が顕著に示せない要因について、各遺跡のナイフやスクレイパー、石核、石斧の出土例から推察してみた。

スクレイパーやナイフの製作には原石や石核から剥ぎ取られた比較的大きな剥片が必要である。チャシコツ岬上遺跡を筆頭に各遺跡出土の石核を見ると、前述の円レキを利用した粗末な石核様のもの（石核状フレイクと仮称したもの）が主体で、ナイフ製作に必要な大きさの剥片を取ることはできず製作したとは考え難い。石斧も同様で、製作するには形の整った石から研磨する技術とそれを丹念に磨き上げる時間が必要となる。つまり、オホーツクの人々が縄文や続縄文文化期と同等の技術を有し製作したと考えるより、遺構などの建築のため地層を掘削時に出土した前時代の石器を恣意的に使用したと考える方がリーズナブルなのである。交易という手段が確立されていた中で生活するオホーツク人は、積極的に石器を作り出そうとはせず、利用できるものはうまく活用しようとする精神がこの時期の人々には培っていたのではないだろうか。結局、レキ石器も含め石器の器種構成や出土量が多岐に及ぶ遺跡は、前時代の遺跡が近くにあるか否かが大きな要件となり石器の寡多を左右している可能性が考えられる。チャシコツ岬上遺跡のように前時代の遺跡密度が極端に低いところでは、器種構成や出土量が貧乏な一方、目梨泊遺跡やトコロチャシ跡遺跡、二ツ岩遺跡のように遺跡密度が高い遺跡では器種構成、出土量とも豊富である。

このように前時代の遺跡密度が高い遺跡と低い遺跡と

があることにより、石器の量並びに種類に差が生じ、遺跡の特性を見つけ出すことが難しくなっているのではないだろうか。可能であれば、今後は遺跡密度を測る基準を設けた上で、検証し遺跡の特性を探していく必要があるだろう。

## 4. おわりに

以上のことをまとめると、チャシコツ岬上遺跡から確認された石器の組成自体は、他の同時期の遺跡と比べて大きくかけ離れてはいないが、その中でも1.円レキを利用した石核状フレイクが多く見つかっており、粗雑な石鏃やリタッチドフレイクなどが目につくこと。2.利尻島杓形岬周辺からの搬入品と考えられる玄武岩（杓形溶岩）製板状レキが出土したことは、北方との交流・交易があった可能性を示しており、当遺跡は知床半島北側の交易拠点の一つである可能性が十分に考えられること。3.知床半島を境にして北側の斜里・網走方面と南側の羅臼・根室方面とで黒曜石製石鏃の割合が異なるものの、オホーツク文化後期の遺跡では有茎石鏃が多くこの時期の典型例と考えられ、さらに当遺跡では有茎石鏃の中でもひし形石鏃が多く、オホーツク文化後期以降へ続く石鏃形態を示しているものと考えられること。

これらのことから、チャシコツ岬上遺跡はオホーツク文化後期以降の遺跡の特徴を示す典型例となるものと考えられる。

（松田功：斜里町立知床博物館）

## 引用文献

- 内山真澄. 1998. 続縄文期における石鏃の変化. 時の絆-石附喜三男先生を偲ぶ-道を辿る. 石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会
- 野村 崇・山田悟郎. 1983. 第VI章総括-3.出土遺物の検討. 二ツ岩遺跡. 北海道開拓記念館研究報告第7号. 北海道開拓記念館
- 前田 潮. 1974. 第V章5節出土遺物の検討. オンネモト遺跡. 根室市教育委員会
- 前田 潮. 2009. 根室市弁天島遺跡14号竪穴の発掘調査-オホーツク文化貼付文期の大型住居址. 北地文化研究会

## 第3節 チャシコツ岬上遺跡から出土した神功開寶の成分分析

### 1. 研究の経緯

函館工業高等専門学校（以下、函館高専と略称する）には、埋蔵文化財研究会があり、学生たちが携帯型の蛍光X線分析装置を用いて、知内町出土の涌元古銭の成分分析を継続して行っている（中村ほか2009）。中村が顧問の一人だが、分析装置に係わる指導については、小林が行っている。また小林には、青銅銭貨の鍍の分析値から内部の組成を推定するという業績がある（小林・中村2016）。

今回、チャシコツ岬上遺跡から出土した神功開寶の成分分析を、これまでの筆者らの研究同様の携帯可能な元素分析装置で行うことで、様々な古銭に関する過去のデータとの比較が可能になる。さらに、市立函館博物館が所蔵する志海苔古銭には、神功開寶が4枚含まれており（野村・中村2012）、これと比較することで神功開寶としての比較が可能になる。しかしながら、志海苔古銭は、2003年に重要文化財に指定されており、他機関へ移しての分析は困難だが、携帯型の分析装置であるため、市立函館博物館で測定をすることができる。

### 2. 神功開寶の測定

チャシコツ岬上遺跡から出土した神功開寶の測定は、斜里町立知床博物館の松田功氏に資料を持参していただき、函館高専の携帯型蛍光X線分析装置Niton XL3tにより、非接触で古銭の表面を2点、裏面を2点の計4点について測定した。さらに、志海苔古銭として、市立函館博物館の収蔵庫に保管されている3枚の神功開寶でも同様に行った。この3枚の神功開寶は、志海苔01、志海苔02、志海苔03とした。なお、今回の装置の測定条件では、イオウは検出できない。市立函館博物館での測定にあたっては、小林貢学芸員の協力をいただいた。また図1の写真提供は、市立函館博物館である。

### 3. 測元素分析結果と考察

表1に蛍光X線分析による銅Cu、スズSn、鉛Pb、鉄Fe、アンチモンSb、銀Agの元素濃度を示した。元素の合計が100%になっていないのは、0.1%以下の濃度でセレンSeなど微量濃度の元素が分析されていることによる。しかし、測定限界付近で定量性に疑問があるため今

回の検討では除外した。

古代銭貨を網羅的に分析した斎藤努氏は、古代銭貨に対する金属組成分析の結果を以下①～④のようにまとめている（斎藤ほか2002: 21）。

- ① 主要な成分は銅、スズ、鉛の3元素であり、このほかに鉄、ヒ素、アンチモン、イオウなどが含まれ、1%以下の濃度ながら銀を含むものもわずかに存在する。
- ② 銅、スズ、鉛で3元プロットを行うと、スズが数%以上含まれているのは初期の4銭種であり、富壽神寶以降の銭貨のほとんどでスズの濃度は1%以下である。
- ③ 鉛の濃度は、鑄造の時期が下るほど高くなる傾向がみられるが、最後に発行された軋元大寶でもすべてが鉛銭となるわけではない。
- ④ 12銭種のうち和同開珎、萬年通寶、神功開寶の初期3銭種には鉄が数%含まれているが、平安時代に発行された隆平永寶以降の銭貨にはほとんど含まれない。

これらの①～④が今回の神功開寶でも当てはまるかを検討するには、銅鋳石の製錬プロセスや青銅の鑄造プロセスの理解が助けとなる。初期の製錬は、奈良時代に採掘されている山口県の長登銅山のように、自然銅や製錬の容易な赤銅鉱や孔雀石などの酸化銅系の鉱物が用いられていたと推定される。たとえば、長登銅山でも産出していた酸化銅Cu<sub>2</sub>Oを主成分とする赤銅鉱は、木炭（炭素）とともに強熱すると、Cu<sub>2</sub>O+C→2Cu+COとして製錬される。鉱物中に存在する不純物の鉄分は、製錬過程で酸化鉄のスラグ（カラミ）として分離される。

一方、青銅の鑄造は、銅、スズ、鉛を所定量加え、高温で溶融させ、鑄型に流し込むことで行う（鑄込み）。スズは銅の融点を下げ、銅と合金化して色、高強度化、展延性などがコントロールできる。鉛は銅とは合金化や融点の低下ももたらさないが、溶融金属（湯）の流動性を向上させる。したがって、複雑な造形物や、刻印を鮮明にするなど、鑄型の隅々まで湯をいきわたるための流動性まで低下させるために鉛濃度は重要である。

斎藤氏の①に対応して、今回の神功開寶でも、主成分は銅と鉛さらにはスズである。また、不純物の鉄、アンチモン、銀が検出された。これらの不純物は銅鋳石に一

表1 神功開寶の成分分析の結果 (%)

チャシコツ	表・上	表・下	裏・上	裏・下	平均
銅Cu	71.8	76.0	75.4	73.8	74.2
スズSn	2.3	2.2	2.6	2.7	2.5
鉛Pb	19.9	16.2	15.7	16.9	17.2
鉄Fe	3.7	3.9	3.5	3.9	3.7
アンチモンSb	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3
銀Ag	0.3	0.3	0.3	0.4	0.3
計	98.3	98.8	97.8	98.1	98.2

志海苔01	表・上	表・下	裏・上	裏・下	平均
銅Cu	83.6	77.7	76.5	76.7	78.6
スズSn	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5
鉛Pb	10.7	16.2	10.0	10.8	11.9
鉄Fe	4.3	4.8	12.1	10.9	8.0
アンチモンSb	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
銀Ag	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2
計	99.5	99.5	99.5	99.4	99.5

志海苔02	表・上	表・下	裏・上	裏・下	平均
銅Cu	64.9	67.3	71.0	73.2	69.1
スズSn	3.1	1.8	2.1	1.6	2.2
鉛Pb	28.0	28.9	21.8	22.9	25.4
鉄Fe	2.9	1.1	4.3	1.5	2.4
アンチモンSb	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2
銀Ag	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1
計	99.3	99.3	99.4	99.4	99.4

志海苔03	表・上	表・下	裏・上	裏・下	平均
銅Cu	42.8	66.3	42.7	66.6	54.6
スズSn	4.3	2.5	4.2	2.6	3.4
鉛Pb	41.9	25.0	42.0	24.8	33.4
鉄Fe	8.7	5.1	8.9	4.9	6.9
アンチモンSb	0.4	0.3	0.4	0.3	0.4
銀Ag	0.3	0.0	0.2	0.0	0.1
計	98.5	99.2	98.5	99.2	98.9

一般的に含まれるので、特にこれらを分離する意図の反応を組み込まない当時の製錬では、鋳物の純度に応じて残存するであろう。神功開寶では鉄が2%~8%検出されているが、筆者らがこれまで測定してきた永楽通寶（1402年初鑄）など、中世の一括出土銭に多く含まれる銭貨には、鉄が1%以上含まれるものはまれであることとは対照的である。1400年代になると、酸化銅としての資源はかなり枯渇して、黄銅鋳CuFeS<sub>2</sub>などの硫化鋳にシフトしていったと推定される。また、酸化銅は黄銅鋳などが地表に露出して酸化されて生成したものであり、酸化銅の資源を求めて深く掘り進んでいくと、硫化鋳に分布が変わってくる。1400年ころには、中国ですでに硫化鋳に対応させた製錬が行われており、原理的には今日の製錬と同じく鉄をスラグとして分離する反応

が明確に意図されて組み込まれているので、鉄濃度は低くできたであろう。ちなみに、硫化鋳で、酸化銅と同じ製錬方法をとった場合、銅中の硫黄や鉄の濃度はかなり高くなるはずである。

銀が検出されたのは、銅鋳石にはごくわずかに銀や金などの貴金属を含むが、当時ごく微量であるためその存在にも気づかず、貴金属の分離は行われていないためである。したがって、銀は、鋳石中の濃度に依存して古銭中に残存するとも考えられる。言い換えれば、貴金属濃度の分析は、鋳石の産地の推定につながる可能性もある。

②に関して、志海苔01は、スズは平均して0.5%であり、他の3枚に比べ少ない。スズは鋳石の不純物ではなく、強度や色をコントロールするために、任意の量添加するものである。中国戦国時代の「周礼考工記」には、すでに青銅の性質をコントロールするための銅とスズの標準混合比や、炎の色を見分けて行う鑄造方法などが記述されている。このように、スズの量は重要な要素なので、志海苔01でスズ濃度が低いことは、古銭の鑄造技術の未熟さによるばらつきが考えられる。しかしながら、経年による錫イオンの溶出も否定できない。スズが少ないため、図1に示したように、文字部分の緑青は鮮やかである。

③に関して、鉛は銅とは合金化せず、スズとは合金化する。志海苔01のようにCu>>Snの場合、鉛は合金化するSn元素が少ないため、冷却過程で偏析する。志海苔01で鉛のばらつきが大きいのはこのためであろう。しかしながら、今回の試料はどれも相対的に鉛が多いので、すべての古銭で場所による鉛のばらつきは大きい。

④に関して、斎藤氏らは平安時代に発行された銭貨には鉄がほとんど含まれない原因は、製錬技術の進歩によると考えている。実際、鉄の含有量は、当時の鑄造に用いていた木炭などの量、空気を送風するなどでの酸素濃度をコントロールする技術、炉内の温度分布、製錬途中での鉄の分離作業の熟練度など技術的に確立・改善すべき点は多かったと思われる。斎藤氏の主張のように、この技術が時代を経て熟練・改良されたということは考えられる。しかしながら、原料鋳石の鉄濃度の影響も考慮する必要があると思われる。したがって、同時代の神功開寶の中で、志海苔03で鉄が平均して7.1%と他に比べ2倍程度比べて高いのは、当時の技術水準の中で作業者の製錬時の不手際、あるいは用いた製錬銅が、鉄分が多

い低品位の鉱石から作られたものであったことなどが考えられる。

図1に示した神功開寶の腐食の程度は志海苔03>02>01である。この腐食メカニズムは古銭内での異種金属の接触による溶出反応であるが、今のところ、今回の金属分析値から明確な関連付けはできていない。

#### 4. 結論と今後の展望

以上のように、チャシコツ岬上遺跡と志海苔古銭の神功開寶の成分分析の結果は、スズや鉄の比率から見て、これまでの古代銭貨の分析結果と同じ傾向の結果であった。函館高専の埋蔵文化財研究会が調査を続けている涌元古銭から、2枚のベトナム銭が発見されている。1枚は天福鎮寶（984年初鑄）であり、もう1枚は日本初の発見である開泰元寶（1324年初鑄）である。志海苔古銭には、21枚の天福鎮寶が含まれている。これらの分析から、天福鎮寶には0.82%から4.32%の鉄が含まれているのに対し、開泰元寶の鉄は0.31%と低いことが



図1 神功開寶：志海苔01～03（左：表、右：裏）

わかった（中村2011，中村・高橋2012）。このような鉄の含有率の低下に着目すると、あるいは日本の皇朝十二銭と同様に、ベトナムでも製錬技術の進歩が見られたのかもしれない。さらには同時代の銅精錬において、ベトナムでは特に鉄含有量の少ない原料鉱石が用いられていたことなども考えられ、アジアの金属製錬の技術史を考える上でも、興味深い。

（小林 淳哉：函館工業高等専門学校 物質環境工学科）

（中村 和之：函館工業高等専門学校 一般人文系）

#### 引用文献

小林淳哉・中村和之.2016.「緑青の発生した古銭の表面組成から内部組成の推定」『出土銭貨』36号。

斎藤努・高橋照彦・西川裕一.2002.『古代銭貨に関する理化学的研究－「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析』日本銀行金融研究所。

中村和之・高橋直樹ほか.2009.「知内町涌元古銭の調査－第1報」『出土銭貨』29号

中村和之.2011.「本邦初出土のベトナム銭『開泰元寶』」『歴史と地理』650号。

中村和之・高橋直樹.2012.「北海道で見つかった本邦初出土のベトナム銭古銭『開泰元寶』について」『出土銭貨』31号。

野村祐一・中村和之.2012.「南北海道古銭とベトナム銭『開泰元寶』の発見－志海苔古銭と涌元古銭－」『考古学ジャーナル』626号。

三辻利一・円尾好宏・大鎌淳正.1978.「古代銅コインのケイ光X線分析（第2報）－古銭材質の年代変化－」『古文化財教育研究報告』7巻、pp.21-32。



## 第4節 チャシコツ岬上遺跡出土炭化繊維遺物の分析

### 1.はじめに

本稿は、斜里町立知床博物館が2015年におこなった発掘調査で出土した炭化繊維遺物の分析報告である。当該遺物は、道東におけるオホーツク文化後期～終末期(1230±20BP)に比定される2号墓(Pit4)西側部分の積石の下から出土した織物断片で、われわれは2016年10月に科学研究費助成事業・基盤研究(B)「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」(研究代表者:佐々木史郎/26300041)の調査の一環として、知床博物館で資料調査をおこない、さまざまな分析を試みた。なお、当該遺物の資料番号は【2693-1】と【2693-2】で、以下では【2693-1】を遺物A、【2693-2】を遺物Bと表記する。

### 2.炭化繊維遺物の分析

出土した炭化繊維遺物2点を対象とし、目視および実体顕微鏡とデジタルカメラ(Stemi 2000-CS, ZEISS社製; D5500, NIKON社製; TG-4, Olympus社製)による観察と高解像度画像撮影をおこない、さらに画像処理ソフトによるサイズの計測をおこなった。いずれの資料も微小であるとともに発掘段階での保存処理が不完全な状態であったことから、分析はかなり困難であったが、以下に分析結果の要点を表にまとめ、欄外に項目ごとの補足事項を記す。なお、両資料ともに平面体ではなく、表面に起伏や捻れがあることから、本研究による計測値はおおよその値である。加えて炭化による収縮の影響を受けていることから、測定値は炭化前の値とは異なることも付記しておく。

表.炭化繊維遺物AおよびBの分析結果

	遺物A【2693-1】	遺物B【2693-2】
大きさ(概略寸法)	8.5 mm × 15.5 mm	13.5 mm × 22.5 mm
遺物の現況	炭化物	炭化物
遺物の実体	織物断片	織物断片
織物組織	平織組織	平織組織
織密度(概数値)	タテ糸24本×ヨコ糸17本/10 mm	タテ糸24本×ヨコ糸18本/10 mm
糸の種類(糸の構成形体)	単糸	単糸
糸の素材	靱皮繊維	靱皮繊維
タテ糸の太さ(概数値)	317-518 μm	260-360 μm
ヨコ糸の太さ(概数値)	209-252 μm	237-351 μm
タテ糸の撚りの方向	S撚り	S撚り
ヨコ糸の撚りの方向	S撚り	S撚り
タテ糸の撚糸強度	甘撚り	甘撚り
ヨコ糸の撚糸強度	甘撚り	甘撚り
タテ糸を構成する繊維幅(概数値)	16-51 μm	19-63 μm
ヨコ糸を構成する繊維幅(概数値)	22-52 μm	17-45 μm
糸績み技術	不明	不明

#### 炭化繊維遺物の分析結果に係わる補足

##### 大きさ

遺物Aと遺物Bの表に記した数値について遺物Aは写真3、遺物Bは写真4の状態にもとづくタテ軸とヨコ軸の長さのおおよその寸法である。

#### 遺物の現況

遺物Aと遺物Bの現況は、ともに完全な炭化物と見られる。これらが出土した2号墓は、チャシコツ岬上遺跡5号竪穴の焼失住居址北側の隣接地で、知床博物館の平河内毅学芸員によると、出土当初、遺物Aと遺物Bは一

体のものであったが取り上げたさいに分離したとのことである。

### 遺物の実体

遺物Aと遺物Bの実体はともに微小な織物断片である。なお、これらは腰機で織られた織物の断片と見られ、腰機を使用して織られた織物では、一般に表面にあらわれるタテ糸は中央部が膨らみを持った状態を呈し、ヨコ糸はほぼ一定の太さで直線状を呈する。したがって、遺物Aと遺物Bの拡大画像である写真5と写真6では、ともに垂直方向にほぼ平行にあらわれている糸がタテ糸、水平方向にほぼ平行にあらわれている糸がヨコ糸と考えられる。

### 織物組織

遺物Aと遺物Bはいずれも平織組織の織物断片である。また、この織物断片は、タテ糸とヨコ糸のあいだにほとんど空隙がなく、目の詰まった状態で織られている。

### 織密度

遺物Aと遺物Bの織密度の数値は、ともに10mm間隔におけるタテ糸の本数とヨコ糸の本数であり、両資料ともに非常に高い密度を示している。ただし、いずれの遺物も炭化によって収縮していることから、炭化以前の織密度（タテ糸とヨコ糸の本数/10mm）は表に記した数値よりも小さくなる。

### 糸の種類（糸の構成形体）

遺物Aと遺物Bのタテ糸とヨコ糸の構成形体は、いずれも繊維束をひとまとめにして1本に撚り合わせた単糸である。

### 糸の素材

遺物Aと遺物Bの糸の素材は靱皮繊維である。北海道から出土した繊維遺物のうち、とくに平織組織の織物の素材については、これまでに北斗遺跡（釧路市）や豊里遺跡（豊富町）から出土した繊維遺物についての分析<sup>1)</sup>があり、アイヌ民族が使用してきた素材と異同のない結果が出ている。したがって、遺物Aと遺物Bの糸の素材も、オヒョウ (*Ulmus laciniata*)、シナノキ (*Tilia japonica*)、ハルニレ (*Ulmus davidiana*)、オオバボダイジュ (*Tilia maximowicziana*)、ツルウメモドキ (*Celastrus orbiculatus Thunb.*)、エゾイラクサ (*Urtica platyphylla*)、ミヤマイラクサ (*Laportea cuspidata*)、ムカゴイラクサ (*Laportea bulbifera*) などのいずれかであろうと想定されるが現段階では識別できていない。

### タテ糸とヨコ糸の太さ（概数値）

遺物Aと遺物Bのタテ糸とヨコ糸はともにヨコ糸よりもタテ糸のほうが太く、相互の数値は近似値の範囲内にある。ただし、いずれの遺物も炭化によって収縮していることから、炭化以前のタテ糸とヨコ糸の実際の太さは表に記した数値よりも大きくなる。

### タテ糸とヨコ糸の撚りの方向

遺物Aと遺物Bのタテ糸とヨコ糸の撚りの方向は、ともにS撚りである。

### タテ糸とヨコ糸の撚糸強度

遺物Aと遺物Bのタテ糸とヨコ糸の撚糸強度は甘撚りである。また、タテ糸については繊維の方向が同一方向に並んでいないことから、一定した撚糸強度ではないようであるが、ヨコ糸の撚糸強度が一定か否かについては不明である。

### タテ糸とヨコ糸を構成する繊維幅（概数値）

遺物Aと遺物Bのタテ糸とヨコ糸を構成する繊維の幅は、ともにヨコ糸よりもタテ糸のほうが太い。ただし、靱皮繊維を素材とした糸で、遺物Aと遺物Bのようにはっきりとした繊維幅が確認できるという例は、きわめて稀であり、遺物Aと遺物Bのタテ糸とヨコ糸は、ともに夾雑物をほぼ完全に除去した繊維を撚り合わせて糸がつくられたことを示している。なお、いずれの遺物も炭化によって収縮していることから、炭化以前の繊維幅は表に記した数値よりも大きくなる。

### 糸績み技術

靱皮繊維の糸は、一般に績む（細く裂いた繊維を撚り繋ぐ）ことによって糸づくりがおこなわれてきた。ただし、北海道のアイヌ民族のもとで継承されている靱皮繊維を糸素材とした平織組織の織物では、細く裂いた靱皮繊維の端を結び合わせた糸がタテ糸やヨコ糸として使われている。一方、北海道の考古資料のうちには、結び合わせた糸で織られた資料は、これまでに確認できておらず、いずれの資料も績んだ糸を使用して織られたものと想定される。したがって、遺物Aと遺物Bはともに糸の両端を結び合わせた形跡がないことから、績んだ糸を使用して織られたと推定されるものの、資料自体が微小であることから、績んだ糸で織られたか否かということについては不明とした。

## 3. 遺物Aと遺物Bの特異性

交叉織組織 [吉本 2013: 21] のうちに包括される平

織組織、綾織組織、縹子織組織の織物のうちで、平織組織の織物は、もっとも基本となる織物である。北海道における靱皮繊維を糸素材とした交叉織組織の織物と想定される考古資料としては、これまでに平織組織の織物の断片が知られているのみで、それらの資料としては、目梨泊遺跡（枝幸町）のオホーツク文化期の資料（写真7）、トビニタイ遺跡（羅臼町）のトビニタイ文化期の資料（写真8）、北斗遺跡の擦文文化期の資料（写真9）、豊里遺跡の擦文文化期の資料（写真10）がある<sup>2)</sup>。したがって、チャシコツ岬上遺跡から出土した遺物Aと遺物Bは、それらの類品として位置づけられる資料であり、目視観察以前の段階で写真を見たさいにはさほど珍しい資料とは思われなかった。しかし、目視観察をおこない、その後に分析を進めてみると、遺物Aと遺物Bは織密度がきわめて高いことと、靱皮繊維が驚くほどにきれいに取り出された上で糸づくりがおこなわれているということでは、他にほとんど類例を見ない稀有の資料ということがあきらかになってきた。ちなみに、織密度については、チャシコツ岬上遺跡の遺物Aの織密度がタテ糸24本×ヨコ糸17本/10mmで、遺物Bの織密度がタテ糸25本×ヨコ糸18本/10mmであり、先にとりあげた他の遺跡の資料のうちでは、目梨泊遺跡の織密度が8本×8本/10mm、北斗遺跡の織物断片の織密度が12本×10本/10mm、豊里遺跡の織密度が14本×14本/10mmということで、遺物Aと遺物Bの織密度はともに突出した高い数値を示している<sup>3)</sup>。

#### 4.おわりに

本稿ではチャシコツ岬上遺跡から出土した遺物Aと遺物Bの分析結果を提示したが、「炭化繊維遺物の分析」の項の冒頭でも指摘しているように、発掘段階での保存処理が不完全で、樹脂強化によって繊維遺物と土や石粒が固着し、かなりの部分で織り目の目詰まりもひきおこしている。しかし、これらの炭化繊維遺物は「遺物Aと遺物Bの特異性の項」で述べているように、織密度がきわめて高密度であることや、靱皮繊維が驚くほどにきれいに取り出してから撚り合わせて糸にしていることでは、他に類例を見ない稀有の資料である。したがって、今後においては樹脂を溶解・溶脱してクリーニングをおこなったうえで、あらためて適切な保存処理をほどこされることが望まれる。

なお、末尾となるが、本稿の執筆にあたって、写真の

提供をいただいた平川善祥氏、斜里町立知床博物館、写真の使用許可をいただいた枝幸町教育委員会、釧路市埋蔵文化財調査センター、旭川市博物館、ならびに繊維遺物の出土事例や保存処理にかかわる助言をいただいた北海道博物館の右代啓視氏、北海道埋蔵文化財センターの田口尚氏に深甚の謝意を表す。

吉本 忍：国立民族学博物館名誉教授

宮地 鼓：国立アイヌ民族博物館設立準備室研究員

#### 註

- 1) 北斗遺跡出土繊維遺物については〔伊藤 2005〕の分析があり、豊里遺跡の遺跡出土繊維遺物については本稿の分析報告に係る科研「北方寒冷地域における織布技術と布の機能」プロジェクトでの分析がある。
- 2) トビニタイ遺跡出土繊維遺物のうちに「平織り、綾織りのいずれのものも認められる」〔駒井 1964:139, PL67-8〕と報告されている繊維製品のうち、綾織りとされていると見られる資料は、綾織組織の織物ではなく、平織組織の織物が歪んだ状態で出土した遺物であると考えられる。
- 3) トビニタイ遺跡の資料については観察調査をおこなっていないことから織密度の計測値は不明である。

#### 文献

- 伊藤美香・小原奈津子・松田猛. 2005. 「出土繊維鑑別のための基礎研究-北斗遺跡出土炭化繊維と炭化させた現存植物繊維の比較-」.『考古学と自然科学』第51号. 日本文化財科学会
- 枝幸町教育委員会. 1994. 『目梨泊遺跡-一般国道238号枝幸町斜内改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-』. 枝幸町教育委員会
- 駒井和愛編. 1964. 『オホーツク海沿岸知床半島の遺跡』 下巻. 東京大学文学部
- 吉本忍. 2013. 『世界の織機と織物』. 国立民族学博物館



写真1. 遺物Aと遺物Bが出土した2号墓の発掘現場  
(矢印は遺物の出土地点) 知床博物館提供

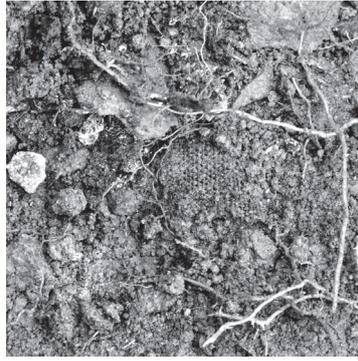


写真2. 出土直後の遺物A (写真中央部)  
知床博物館提供

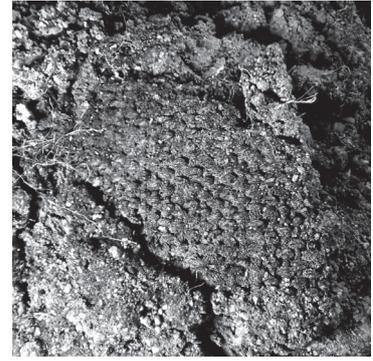


写真3. 出土直後の遺物A  
知床博物館提供



写真4. 遺物B

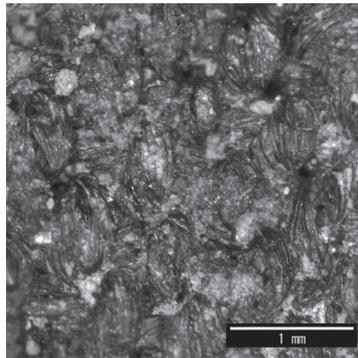


写真5. 遺物A (部分拡大画像)

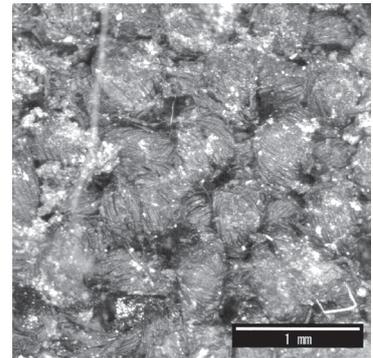


写真6. 遺物B (部分拡大画像)

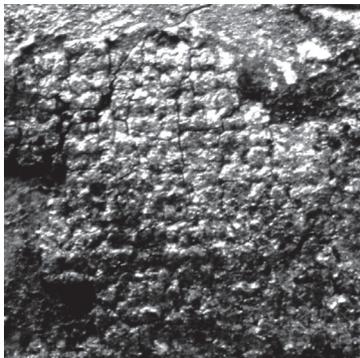


写真7. 目梨泊遺跡出土の土器の胴部に付着した  
平織組織の炭化織物断片 平川善祥氏提供



写真8. トビナイ遺跡出土の平織組織の炭化織物断片  
(『オホーツク海沿岸知床半島の遺跡』下巻より転載)

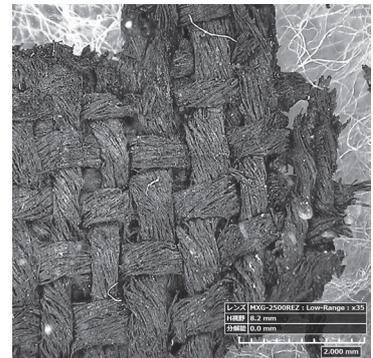


写真9. 豊里遺跡出土の平織組織の炭化織物断片  
旭川市博物館蔵

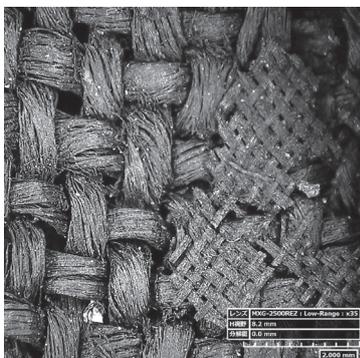


写真10. 北斗遺跡出土の平織組織の炭化織物断片  
(画像右側は平織組織の絹織物断片の炭化物)  
釧路市埋蔵文化財調査センター蔵

## 第5節 チャシコツ岬上遺跡における樹種同定結果業務報告

### 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、木材構造から概ね属レベルの同定が可能である。また木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能である。

本報告では、チャシコツ岬上遺跡より出土した炭化材の樹種を同定し、当時の木材利用と周辺植生について検討する。

### 2. 試料と方法

試料は、5号竪穴住居の床、覆土、周溝より出土した炭化材30点である。試料の詳細を結果とともに表1に記す。

樹種同定は、以下の方法で行った。試料を割り折りして新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の断面を作製し、落射顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって50～1000倍で観察した。同定は、木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

### 3. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の基本三断面の顕微鏡写真を写真図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。なお、No.827、830、832は劣化が激しく試料が粉化するなどが起こり、同定を行うことが難しかった。

#### 1) イチイ *Taxus cuspidata* Sieb. et Zucc. イチイ科 No. 645、659、687、761、780、793

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、仮道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴からイチイに同定される。イチイは北海道、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で通常高さ10～15m、径50～100cmに達する。材は緻密で弾力性が強く、器具、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

#### 2) モミ属 *Abies* マツ科 No.446、641、642、646、654、655、819、820、825、828、831、833、3539、3540

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、数珠状末端壁が見られる。放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の特徴からモミ属に同定される。日本に自生するモミ属は、モミ、ウラジロモミ、シラビソ、オオシラビソ、トドマツがある。モミ以外は亜寒帯種であり、冷涼な北海道ではトドマツが豊富である。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

#### 3) 針葉樹 conifer No.795

横断面、放射断面、接線断面共に保存状態が悪く、針葉樹の特徴を示すが、それ以上の同定は困難であった。本試料は、劣化しており、焼きぶくれおよび灰化が進んでおり、細部の観察ができない部分が多い。

#### 4) クルミ属 *Juglans* クルミ科 No.6、644

大型で丸い道管が、単独あるいは2～数個放射方向に複合してまばらに散在する散孔材である。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。軸方向柔細胞が多少波打ちながら、短接線状に1列に並び、網状柔組織をつくる傾向がある。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織はほとんどすべて平伏細胞からなるのだが、ときおり上下の縁辺にいくぶん大きい方形細胞が見られ、1～3細胞幅である。

以上の特徴からクルミ属に同定される。クルミ属にはオニグルミ、ヒメグルミがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15～30m、径70～90cmである。材は耐朽性、保存性は低いが、狂いが少なく韌性に富んでいて、建築、器具、彫刻など広く用いられる。

#### 5) コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 No.445

年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減

表1 チャシコツ岬上遺跡：5号竪穴住居における炭化材同定結果

通し	調査区	No.	層位	結果 (学名/和名)		備考
1	TR5	6	床	<i>Juglans</i>	クルミ属	
2	TR5	274	床	<i>bark</i>	樹皮	
3	TR5	445	床	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節	
4	TR5	446	床	<i>Abies</i>	モミ属	
5	TR5	641	床	<i>Abies</i>	モミ属	
6	TR5	642	床	<i>Abies</i>	モミ属	
7	TR5	644	床	<i>Juglans</i>	クルミ属	
8	TR5	645	床	<i>Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.</i>	イチイ	
9	TR5	646	床	<i>Abies</i>	モミ属	
10	TR5	647	床	<i>bark</i>	樹皮	
11	TR5	654	床	<i>Abies</i>	モミ属	
12	TR5	687	床	<i>Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.</i>	イチイ	柱穴19
13	TR5	761	周溝南1	<i>Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.</i>	イチイ	
14	TR5	786	床	<i>broad-leaved tree</i>	広葉樹	
15	TR5	796	床南1	<i>bark</i>	樹皮	
16	TR5	824	床西1	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	
17	TR5	825	周溝西1	<i>Abies</i>	モミ属	
18	TR5	826	床西3	<i>Ulmus</i>	ニレ属	
19	TR5	827	床西4	<i>Unknown</i>	不明	劣化による粉化
20	TR5	828	周溝西4	<i>Abies</i>	モミ属	
21	TR5	829	周溝南1	<i>bark</i>	樹皮	
22	TR5	830	床南3	<i>Unknown</i>	不明	劣化
23	TR5	831	周溝東1	<i>Abies</i>	モミ属	
24	TR5	832	周溝東3	<i>Unknown</i>	不明	劣化
25	TR5	833	周溝東4	<i>Abies</i>	モミ属	
26	TR5	3534	覆土	<i>Cercidiphyllum japonicum Sieb. et Zucc.</i>	カツラ	
27	TR5	3539	覆土	<i>Abies</i>	モミ属	
28	TR5	3540	覆土西3	<i>Abies</i>	モミ属	
29	TR5	819	床	<i>Abies</i>	モミ属	
30	TR5	820	床	<i>Abies</i>	モミ属	柱12

1	TR5	780	覆土	<i>Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.</i>	イチイ	柱10
2	TR5	700	床	<i>bark</i>	樹皮	
3	TR5	793	床	<i>Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.</i>	イチイ	
4	TR5	794	床	<i>bark</i>	樹皮	
5	TR5	655	床	<i>Abies</i>	モミ属	
6	TR5	795	床	<i>conifer</i>	針葉樹	
7	TR5	659	床	<i>Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.</i>	イチイ	柱1

少する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

#### 6) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 No.826

年輪のはじめに中型から大型の道管が1～3列配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は多数複合して花束状、接線状、斜線状に比較的規則的に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性放射組織型で、1～5細胞幅ぐらいである。

以上の特徴からニレ属に同定される。ニレ属にはハルニレ、オヒョウなどがあり、北海道、本州、四国、九州、沖縄に分布する落葉の高木である。材は器具、旋作、薪炭などに用いられる。

#### 7) カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 No.3534

小型で薄壁の角張った道管が、単独ないし2～3個複合してかなり密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～40本ほどである。放射組織は異性放射組織型で、2細胞幅である。道管内にチロースが多数存在する。

以上の特徴からカツラに同定される。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmであるが、大きいものは高さ35m、径2mに達する。材は軽軟で靱性があり加工しやすく、建築材などに用いられる。

#### 8) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 No.824

年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管がほぼ単独で1～3列配列する環孔材である。孔圏部外では、小型でまわり厚壁の道管が単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では翼状から連合翼状である。道管の穿孔は単穿孔である。内部にはチロースが著しい。放射組織は同性放射組織型で、1～3細胞幅である。

以上の特徴からトネリコ属に同定される。トネリコ属

にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運動道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

#### 9) 広葉樹 *broad-leaved tree* No.786

道管が存在する。道管と放射組織が存在する。道管と放射組織が存在する。

以上の特徴から広葉樹に同定される。なお本試料は、燃焼が著しく劣化しており、焼きぶくれおよび灰化が進み細部の観察ができない部分が多い。

#### 10) 樹皮 *bark* No.274、647、700、794、796、829

師部柔細胞、師部放射柔細胞が見られる。

以上の特徴から樹皮に同定される。

#### 11) 不明 *unknown* No.827、830、832

これらの試料は、灰化が進み劣化が著しく、木材の形質の観察が難しく同定に至らなかった。

## 4. 所見

同定の結果、チャシコツ岬上遺跡の5号竪穴住居の炭化材は、モミ属14点、イチイ6点、クルミ属2点、コナラ属コナラ節1点、ニレ属1点、カツラ1点、トネリコ属1点、針葉樹1点、広葉樹1点、樹皮6点、不明3点であった。

モミ属が最も多く、床、覆土、周溝から出土している。No.820は柱穴から出土している。材は耐朽性・保存性は低い、軽軟なため加工が容易である。スギやヒノキが自生しない北海道では、針葉樹材としてモミ属が多用される傾向がある。そのため、北海道においては縄文時代以降モミ属が利用されており、その用途は建築部材から楔、箸など広範である。なお、モミ属の中でも北海道に豊富なトドマツに関してはエゾマツと同様に多用されることから、アカエゾマツに対してクロエゾマツと呼ばれている。イチイは床、覆土、周溝から出土している。No.659、687、780は柱穴から出土している。材は緻密で狂いが生じにくく、耐朽性・保存性が高く、加工は容易である。また、弾力性に富むことからアイヌではイチイを弓の用材としている。イチイのアイヌ語名の「クネニ」は、「弓になる木」の意味を持つ。イチイは大木が少なく、大きな板や長く太い角材を得にくい、建築材としての利用は少ない。しかし、柱穴から出土しているものがあることから、当時本遺跡周辺では建築材とし

て利用可能な大きさのイチイが採取できたと考えられる。クルミ属は床から出土している。材は強さ中庸で保存性が低いが、木理通直で狂いが少なく粘り気が強く切削・加工は容易である。北海道の報告例としては柱、桁、梁、杭、櫓などが見られる。コナラ属コナラ節は床から出土している。材は強靱で弾力に富み、建築材としても用いられる。ニレ属は床から出土している。ニレ属の内、ハルニレは重硬、オヒョウは強さ中庸で、アキニレはあまり強い材とは言えない。また、切削性や寸法安定性は不良で、色艶は冴えない。カツラは覆土から出土している。材は木理通直で節その他の欠点は少ない。軽軟均質で耐朽性・保存性は低いが、切削・加工が極めて容易である。狂いが少なく、刳物など漆器の木地に広く用いられる。トネリコ属は床から出土している。材は概して強靱かつ堅硬である。従曲性に富み、割裂は容易である。カツラと同様に容器の木材としてよく利用される。樹皮としたものは、いずれも木材の同定に必要な特徴点の観察ができなかったため、樹皮までの同定に留まった。なお、針葉樹、広葉樹、不明と同定したものは劣化が著しかったため、特徴の観察が難しく、それ以上の同定に至らなかった。

モミ属（主にトドマツ）、イチイ、コナラ属コナラ節（ミズナラなど）は亜寒帯や冷温帯に分布する樹木である。

また、イチイは陰湿な溪谷や緩斜地を好み、コナラ属コナラ節（ミズナラなど）、ニレ属、クルミ属、カツラ、トネリコ属は沢沿いや湿原などの水湿のある低地や谷間に好んで生育する。これらの樹木は当時本遺跡周辺に分布していたと考えられ、遺跡南部の高原や山地などの近隣地域よりもたらされたものと考えられる。なお、周囲に多く生育していたため手に入れやすく、加工が容易であったモミ属（トドマツ）、イチイを建築材として選定したと推測される。

（株式会社 古環境研究所）

#### 参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久 .2012. 木の考古学 . 雄山閣 .449p.  
佐伯浩・原田浩 .1985. 針葉樹材の細胞 . 木材の構造 . 文永堂出版 .pp.20-48.  
佐伯浩・原田浩 .1985. 広葉樹材の細胞 . 木材の構造 . 文永堂出版 .pp.49-100.  
島地謙・伊東隆夫 .1988. 日本の遺跡出土木製品総覧 . 雄山閣 .296p.  
山田昌久 .1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成 . 植生史研究特別第 1 号 . 植生史研究会 .242p.

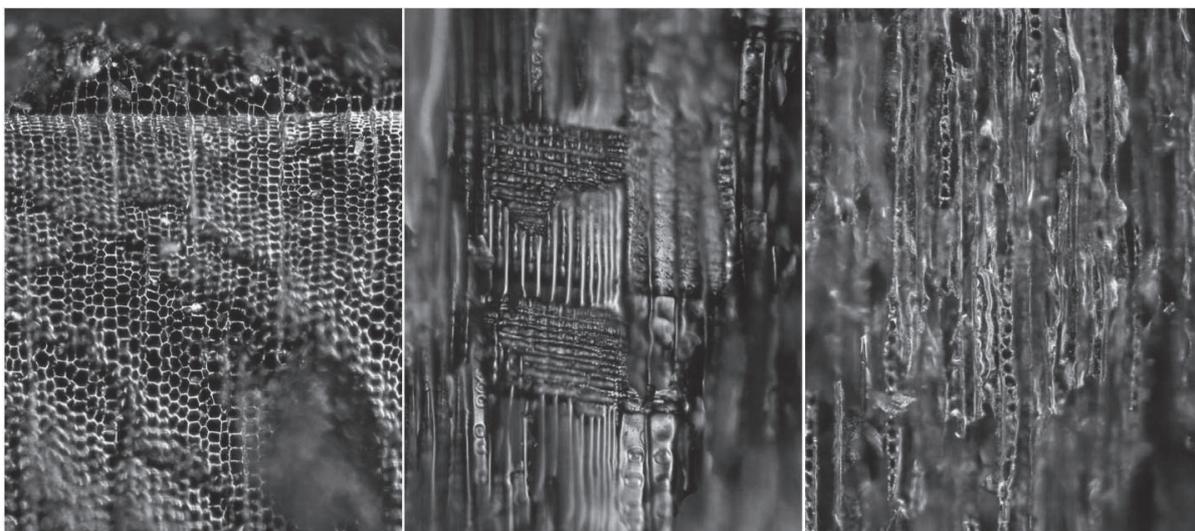
チャシコツ岬上遺跡の木材 I



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
イチイ TR5 No.645 床

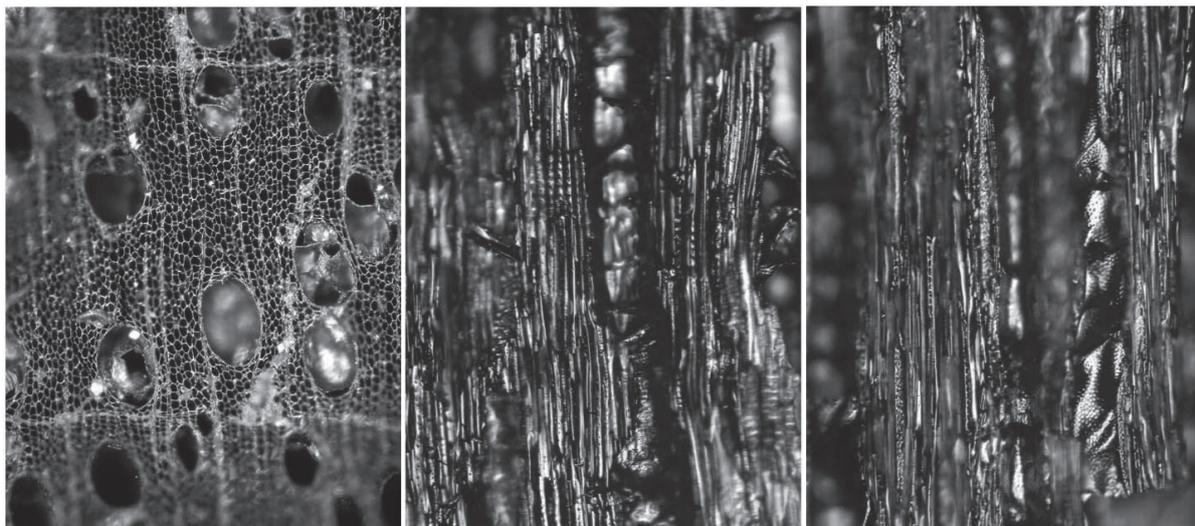


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
モミ属 TR5 No.641 床

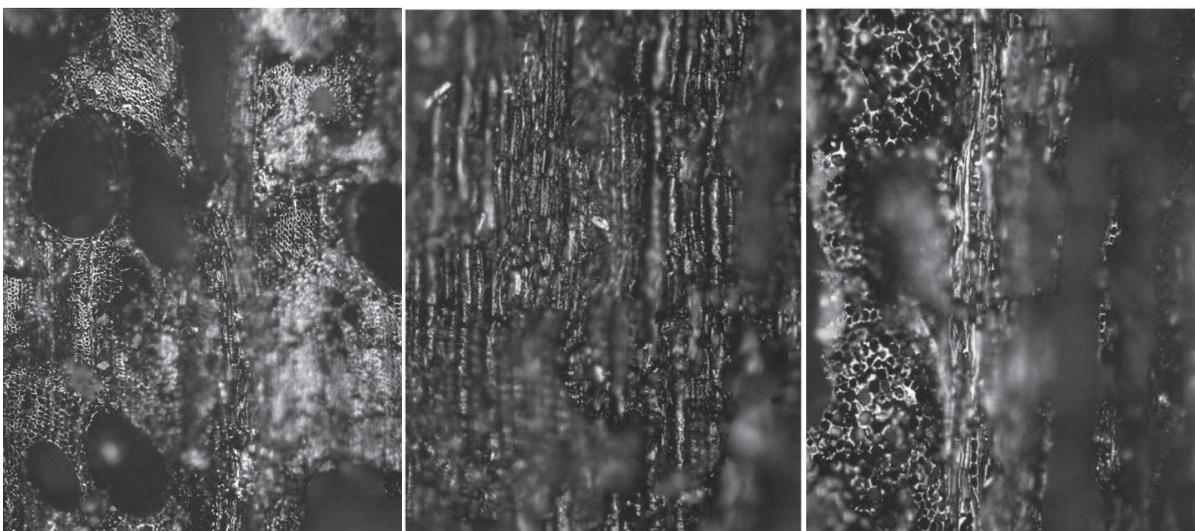


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
モミ属 TR5 No.646 床

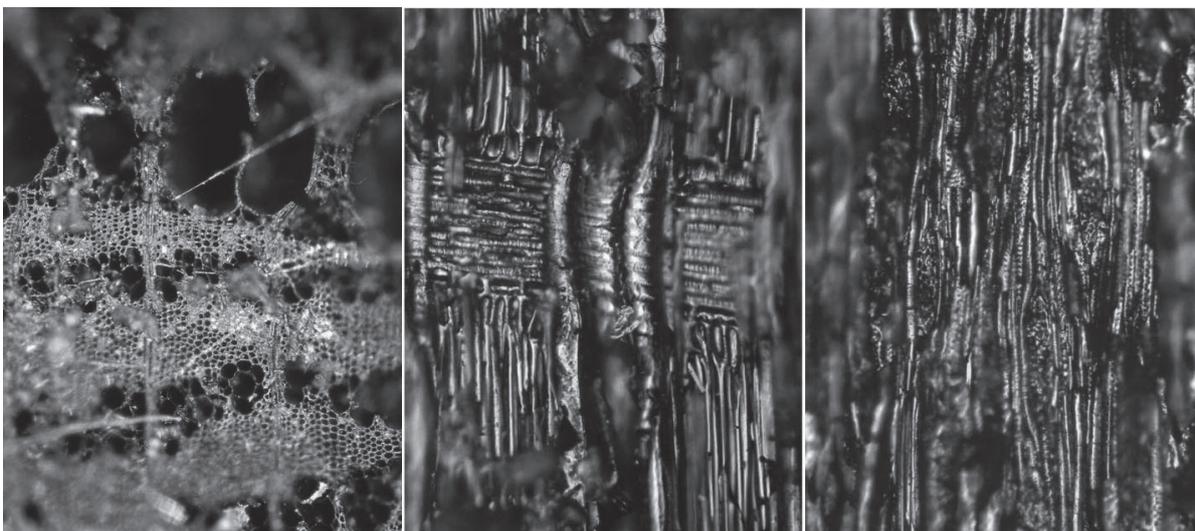
チャシコツ岬上遺跡の木材 II



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 クルミ属 TR5 No.6 床

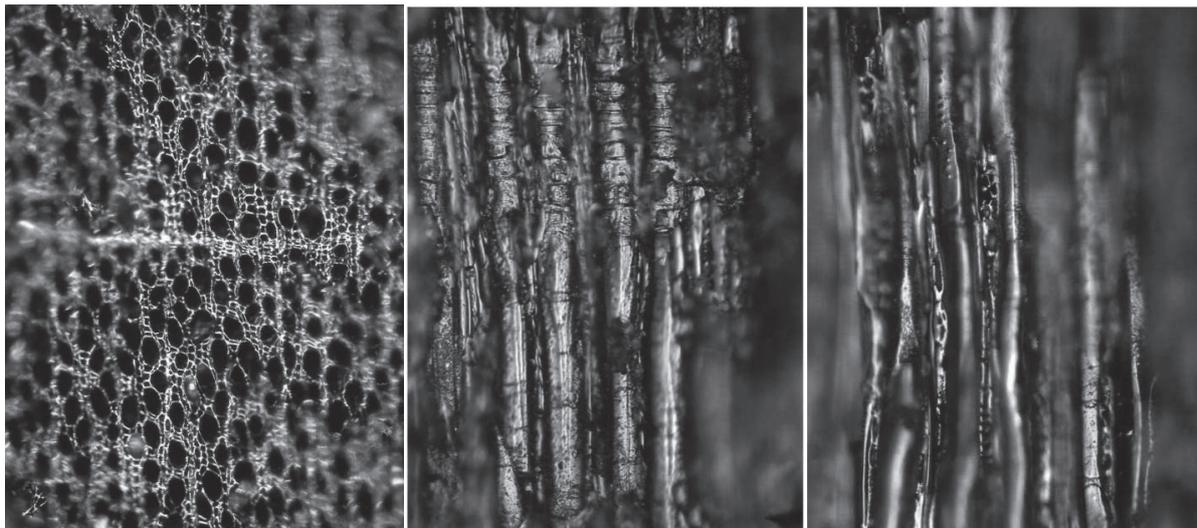


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 コナラ属コナラ節 TR5 No.445 床

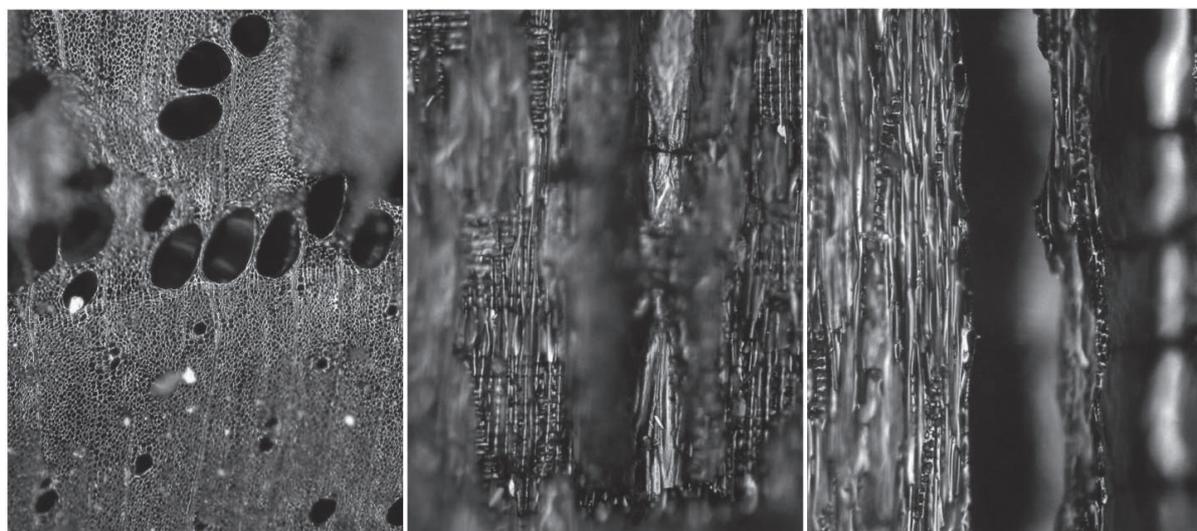


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 ニレ属 TR5 No.826 床西3

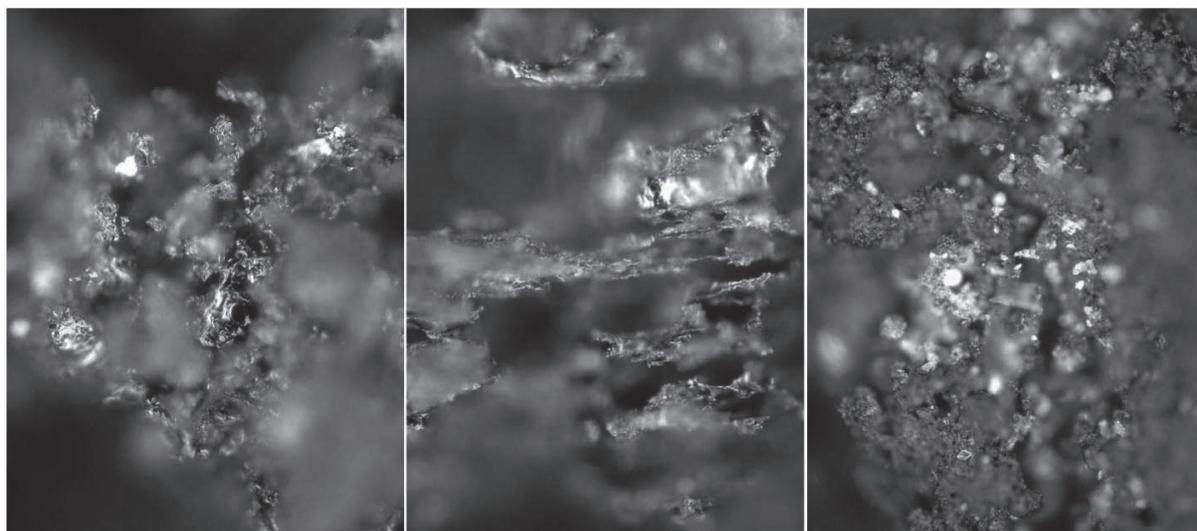
チャシコツ岬上遺跡の木材 III



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 カツラ TR5 No.3534 覆土



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 トネリコ属 TR5 No.824 床西1



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm  
 樹皮 TR5 No.274 床



## 第6節 チャシコツ岬上遺跡の放射性炭素年代測定及び14C年代に基づくオホーツク文化の暦年代

### 1. はじめに

チャシコツ岬上遺跡の発掘調査では、オホーツク文化貼付文期の遺構が検出された。オホーツク文化貼付文期の土器と共に植物遺体が出土し、土器に付着した炭化物も確認された。植物遺体や土器付着炭化物を試料としてオホーツク文化貼付文期の暦年代を明らかにする目的で放射性炭素年代測定を行った。さらに、既存の放射性炭素年代測定例を集成し、オホーツク文化の暦年代について考察した。

### 2. チャシコツ岬上遺跡における放射性炭素年代測定の試料と方法

表1に、測定試料の情報、調製データを示す。

試料が採取された遺構の時期は、いずれもオホーツク

文化貼付文期である。トレンチ4のPit1（1号墓）では、土器内面付着炭化物（PLD-31209）と炭化したクルミ属の核（PLD-35384）が採取された。トレンチ5の5号竪穴住居跡では、炭化材（部位不明）が3点（PLD-31210・34128・34129）が採取された。同じトレンチ5の積石墓では炭化したクルミ属の核（PLD-34130）が採取された。トレンチ7の廃棄層では、炭化種実（PLD-35385）が採取された。同じトレンチ7のPit5（23号竪穴）魚骨集中では、炭化種実（PLD-35386）が採取された。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

表1 チャシコツ岬上遺跡の測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-31209	位置：トレンチ4 遺構：PIT1（1号墓） 層位：覆土（被せ糞） 遺物No.910 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本e群	種類：土器付着炭化物 時期：オホーツク式土器（貼付文） 付着部位：内面 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-31210	位置：トレンチ5 遺構：5号竪穴住居跡 層位：覆土（上層遺構中：旧PIT3） 遺物No.860 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本e群	種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-34128	位置：トレンチ5 遺構：5号竪穴住居跡 器種：柱 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本e群	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-34129	位置：トレンチ5 遺構：5号竪穴住居跡 器種：柱 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本e群	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-34130	位置：トレンチ5 遺構：積石墓 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本e群	種類：炭化種実（クルミ属、核） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35384	位置：トレンチ4 遺構：Pit1（1号墓） 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本e群	種類：炭化種実（クルミ属、核） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35385	位置：トレンチ7 遺構：廃棄層 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本d～e群	種類：炭化種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）
PLD-35386	位置：トレンチ7 遺構：Pit5（23号竪穴）魚骨集中 備考：オホーツク文化、貼付文、藤本d～e群	種類：炭化種実 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N,水酸化ナトリウム：1.0N,塩酸：1.2N）

### 3. チャシコツ岬上遺跡における放射性炭素年代測定の結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した14C年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代 (yrBP) の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が

5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、および半減期の違い (14Cの半減期 $5730 \pm 40$ 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、 $1\sigma$  暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$  暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 4. 既存の14C年代集成

オホーツク文化の暦年代を14C年代に基づき整理するために、チャシコツ岬上遺跡以外について、オホーツク式土器と共伴した試料 (炭化材や炭化種実などの植物遺

表2 チャシコツ岬上遺跡の放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PLD-31209	-22.85 $\pm$ 0.20	1601 $\pm$ 20	1600 $\pm$ 20	414-433 cal AD (20.9%) 490-532 cal AD (47.3%)	405-475 cal AD (45.5%) 484-536 cal AD (49.9%)
PLD-31210	-25.80 $\pm$ 0.19	1246 $\pm$ 20	1245 $\pm$ 20	695-703 cal AD (6.6%) 708-746 cal AD (50.4%) 764-773 cal AD (11.2%)	682-779 cal AD (83.3%) 791-829 cal AD (7.0%) 837-865 cal AD (5.1%)
PLD-34128	-26.07 $\pm$ 0.19	1214 $\pm$ 19	1215 $\pm$ 20	771-779 cal AD (7.3%) 790-831 cal AD (35.1%) 837-867 cal AD (25.8%)	723-740 cal AD (6.6%) 767-884 cal AD (88.8%)
PLD-34129	-26.43 $\pm$ 0.20	1216 $\pm$ 19	1215 $\pm$ 20	770-779 cal AD (8.7%) 790-829 cal AD (34.3%) 838-866 cal AD (25.2%)	721-741 cal AD (8.5%) 766-883 cal AD (86.9%)
PLD-34130	-24.21 $\pm$ 0.19	1231 $\pm$ 21	1230 $\pm$ 20	715-744 cal AD (26.6%) 766-778 cal AD (11.8%) 791-807 cal AD (9.7%) 812-827 cal AD (7.4%) 840-863 cal AD (12.8%)	690-749 cal AD (35.9%) 761-880 cal AD (59.5%)
PLD-35384	-27.83 $\pm$ 0.11	1222 $\pm$ 18	1220 $\pm$ 20	726-738 cal AD (9.5%) 768-779 cal AD (10.7%) 791-829 cal AD (28.1%) 838-865 cal AD (19.9%)	715-744 cal AD (16.2%) 765-883 cal AD (79.2%)
PLD-35385	-31.46 $\pm$ 0.12	1219 $\pm$ 18	1220 $\pm$ 20	730-736 cal AD (4.5%) 769-778 cal AD (9.7%) 791-828 cal AD (31.7%) 839-865 cal AD (22.3%)	720-742 cal AD (11.4%) 766-882 cal AD (84.0%)
PLD-35386	-30.05 $\pm$ 0.14	1443 $\pm$ 20	1445 $\pm$ 20	605-640 cal AD (68.2%)	578-650 cal AD (95.4%)

体)や土器付着炭化物の14C年代を集成し(表3)、最新の較正曲線であるIntCal13により暦年代へ較正した。

集成の対象としたのは、同位体分別効果の補正を行っている14C年代である。同位体分別効果の補正を行っていない14C年代は集成の対象から除外した。同位体分別とは、化学変化の際に起こる同位体比の変化である。たとえば、大気中の二酸化炭素が光合成により植物の体内に取り込まれ固定される過程で、二酸化炭素中の炭素同位体比と植物体内の炭素同位体比は異なった値となる。さらに、同じ植物でも、C3植物とC4植物では、光合成の回路が違うために、体内の炭素同位体比は異なる。同位体分別により炭素12に対する炭素14の比が変化するために、試料中の炭素14の存在比は経過年数のみにより変化するわけではない。そのため、同位体分別効果を補正した上で14C年代を算出する必要がある。具体的には、年数の経過で変化しない炭素12に対する炭素13の比を用いる。炭素12に対する炭素13の比は、標準試料からの偏差(千分率)で、 $\delta 13C$ として示される。 $\delta 13C$ が-25‰になるように炭素同位体比を規格化することで、14C濃度も補正できる。同位体分別効果の補正はかつて行われていなかった。もし、同位体分別効果を補正しなければ、同時代のC3植物とC4植物でも、14C年代に100年以上の差が生じうる。補正が行われていなくとも、試料種が同定され記載されていれば、その種の試料の代表的な $\delta 13C$ を用いて、同位体分別効果を補正できる。しかし、単に炭化物や木炭としか記載されていない測定結果が多く、代表値を用いた同位体分別効果の補正は断念した。同位体分別効果の補正を行った14C年代に限定したため、結果として、集成された14C年代は、2000年代以降にAMS法で測定された値が多くを占めるようになった。

また、集成した14C年代のうち、土器付着炭化物の14C年代を暦年代較正の対象から除外した。土器付着炭化物を除外した理由は次のとおりである。臼杵塾と坂本稔(臼杵・坂本, 2004)は、オホーツク式土器の内外面に付着する炭化物が、同じ遺構から出土した植物遺体に比べて数百年古い14C年代を示す点を明らかにした。臼杵塾と坂本稔は、土器付着炭化物の14C年代が古いのは、土器付着炭化物が海産物に由来するために海洋リザーバー効果が表れたためとする解釈を示している。問題は、土器での煮炊き内容物が焦げたと考えられる内面付着炭化物だけではなく、主に燃料材由来の煤と予想さ

れる外面付着炭化物も内面と同じように古い14C年代を示している点であり、外面付着炭化物であっても、煮炊き内容物の口縁からの吹きこぼれや器壁を通じた染み出しを考慮しなければならない。さらに、問題を複雑にするのは、土器で煮炊きされる食物が陸産物と海産物の混合である可能性である。海産物に100%由来する炭化物であれば、海洋リザーバー効果の補正が可能である。しかし、海産物と陸産物が混合していると、海産物の割合が高いほど、海洋リザーバー効果が大きく表れ、14C年代は古くなる。海産物と陸産物の混合物の14C年代を補正するためには、海産物と陸産物の混合比を正確に推定する必要がある。ただし、正確な混合比の推定は容易ではない。一般に、土器付着炭化物は、土器の使用により生じた痕跡と考えられ、土器使用時と土器付着炭化物の14C年代との同時性が期待される点で、土器型式の暦年代を知る上で良好な試料である。しかし、オホーツク文化の暦年代を14C年代に基づいて論ずる上では、土器付着炭化物は試料としてふさわしくない。

さらに、集成したものの、伴う土器の詳細が不明瞭な試料も暦年代較正の対象から除外した。

集成した14C年代を、最新の陸産物用較正曲線であるIntCal13で暦年代へ較正した。

## 5. オホーツク文化の暦年代

チャンコツ岬上遺跡での貼付文期の測定例と既存のオホーツク文化各時期の14C年代を暦年代へ較正し、比較のために図化した。土器付着炭化物以外で時期が明瞭な測定例に限定したところ、貼付文期の測定例が多くなり、貼付文期以外の時期は測定例が少ない。そのため、貼付文期以外は参考に留めておくべきである。それぞれの時期について、図に基づいて記すと、概ね次のとおりである。

十和田式～刻文期(2例) 2～4世紀

刻文期(2例) 6～7世紀

沈線文併行期(1例) 7～8世紀

貼付文期(18例) 7～9世紀

## 6. 課題

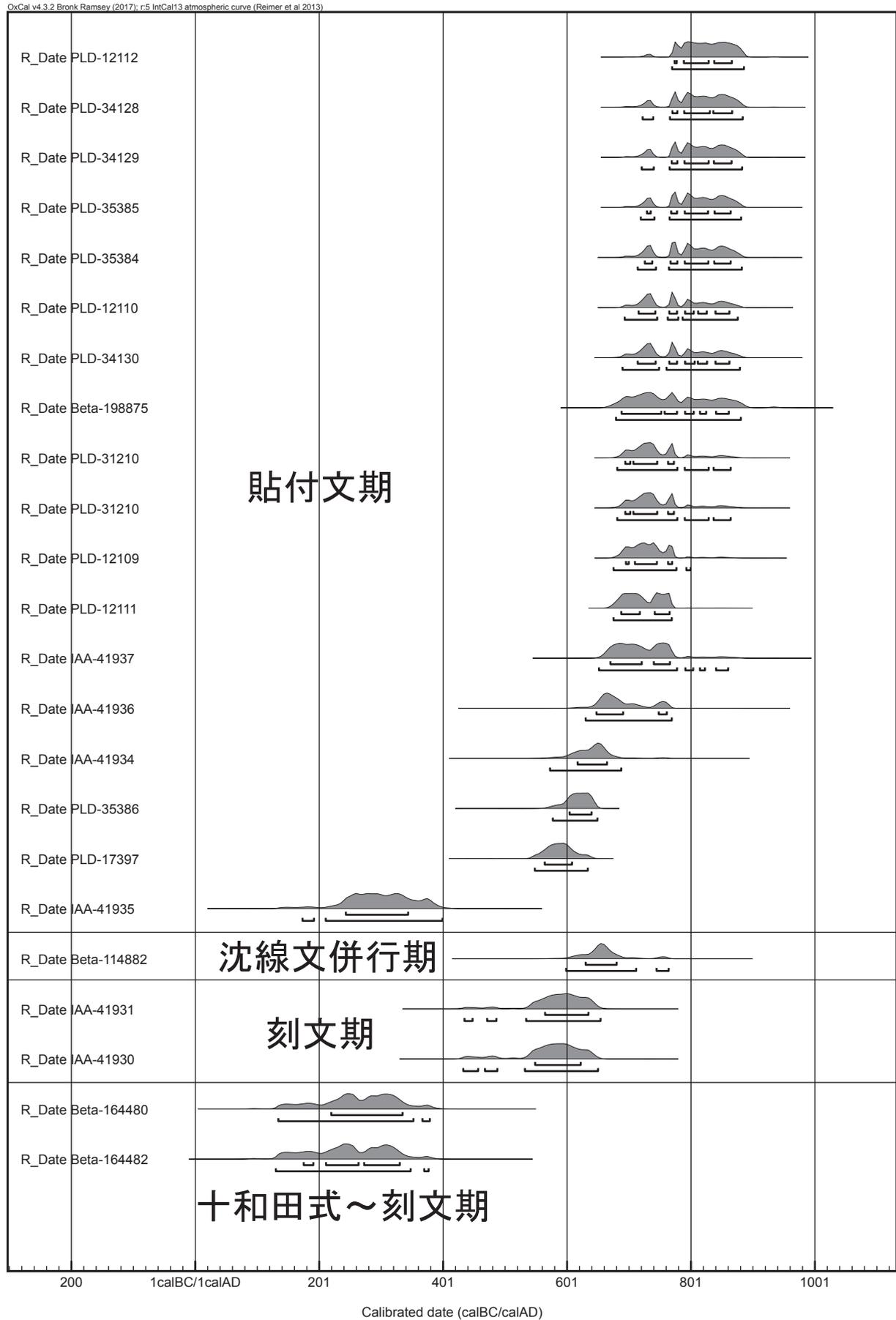
今後の課題を挙げ、まとめに代えたい。

第1に、試料選択の問題である。土器付着炭化物は、海洋リザーバー効果の影響により、古い年代が得られる

表3 オホーツク文化の14C年代集成

時期	時期備考	所在	遺跡	遺構	測定機関コード
貼付文	藤本e群	北見市	トコロチャシ跡遺跡	8号竪穴	PLD-12109
貼付文	藤本e群	北見市	トコロチャシ跡遺跡	8号竪穴	PLD-12110
貼付文	藤本d～e群	北見市	トコロチャシ跡遺跡	9号竪穴(9b号)	PLD-12111
貼付文	藤本d～e群	北見市	トコロチャシ跡遺跡	9号竪穴(9c号)	PLD-12112
刻文	藤本b群	網走市	モヨロ貝塚	9号竪穴床面	IAA-41928
刻文	藤本b群	網走市	モヨロ貝塚	9号竪穴床面	IAA-41929
刻文	藤本b群	網走市	モヨロ貝塚	9号竪穴c/d区骨塚2	IAA-41930
刻文	藤本b群	網走市	モヨロ貝塚	9号竪穴c/d区骨塚2	IAA-41931
貼付文	藤本e群	雄武町	雄武川尻遺跡	1号竪穴床面	IAA-41932
貼付文	藤本e群	雄武町	雄武川尻遺跡	1号竪穴床面	IAA-41933
貼付文	藤本e群	雄武町	雄武川尻遺跡	1号竪穴床面	IAA-41934
貼付文	藤本e群	雄武町	雄武川尻遺跡	1号竪穴床面	IAA-41935
貼付文	藤本e群	雄武町	雄武川尻遺跡	1号竪穴埋土	Beta-198875
貼付文	藤本d～e群	羅臼町	相泊遺跡	1号住居址床面SP58	IAA-41936
貼付文	藤本d～e群	羅臼町	相泊遺跡	1号住居址床面SP58	IAA-41937
貼付文	藤本d～e群	羅臼町	相泊遺跡	1号住居址床面	IAA-41938
貼付文	藤本d～e群	羅臼町	相泊遺跡	1号住居址床面	IAA-41939
貼付文	藤本d～e群	羅臼町	相泊遺跡	1号住居址床面	IAA-41940
貼付文	藤本d～e群	羅臼町	相泊遺跡	1号住居址床面	IAA-41941
貼付文?		斜里町	チャシコツ岬下B	PIT1竪穴住居貼床面	Beta-162191
貼付文?		斜里町	チャシコツ岬下B	PIT1竪穴住居床面焼土	Beta-162192
貼付文?		斜里町	チャシコツ岬下B	PIT1竪穴住居床面焼土	Beta-162193
貼付文?		斜里町	チャシコツ岬下B	PIT1竪穴住居床面	Beta-162194
沈線文系併行		斜里町	トーツル沼1	PIT3竪穴床面	Beta-114882
十和田?		奥尻町	青苗砂丘遺跡	H-1住居址床面	Beta-164481
十和田～刻文		奥尻町	青苗砂丘遺跡	貝塚	Beta-164482
十和田～刻文		奥尻町	青苗砂丘遺跡	H-1住居址床面	Beta-164480
刻文?		奥尻町	青苗砂丘遺跡	H-2炉跡	Beta-174461
刻文?		奥尻町	青苗砂丘遺跡	H-3炉跡	Beta-174462
貼付文	藤本e群	斜里町	チャシコツ岬上	PIT1覆土(被せ糞)	PLD-31209
貼付文	藤本e群	斜里町	チャシコツ岬上	5号住居覆土(上層遺構:旧PIT3)	PLD-31210
貼付文	藤本e群	斜里町	チャシコツ岬下B	PIT4床直	PLD-17397
刻文?	藤本b群?	斜里町	カモイベツ	9号址炉	PLD-12368
刻文?	藤本b群?	斜里町	カモイベツ	9号址内集石	PLD-12369
刻文?	藤本b群?	斜里町	カモイベツ	8号址炉	PLD-12370
貼付文?	藤本d群?	斜里町	カモイベツ	19号址炉C	PLD-12371
刻文?	藤本b群?	斜里町	カモイベツ	20号址炉A	PLD-12372
貼付文?	藤本d群?	斜里町	カモイベツ	20号址炉B	PLD-12373
貼付文?	無文	斜里町	ボンシュマトカリベツ1	PIT17焼土	PLD-17398
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,OH-3,F-10,焼土	IAAA-112587
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,B-1,III層	IAAA-112588
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,P-2,骨層	IAAA-120930
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,P-129,骨層	IAAA-120931
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,F-5,焼土	IAAA-120932
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,F-6,焼土	IAAA-120933
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,OH-3,F-10,焼土	IAAA-120934
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,B-1,III層	IAAA-120935
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,FB-1,III層	IAAA-120936
オホーツク文化		根室市	トーサムポロ湖周辺竪穴群	A地区,FB-2,III層	IAAA-120937

図1 オホーツク文化の暦年代



傾向がある。土器との共伴関係が確実な試料に限定されるが、植物遺体や草食動物などを選択するのが望ましい。さらに植物遺体であれば、種実、葉、草本など単年生、あるいは材ならば最終形成年輪や樹皮などを選択するのが望ましい。材の場合、外側の年輪と内側の年輪とで得られる年代には差が現れる。

第2に、貼付文期以外の時期に関する測定例の蓄積である。鈴谷式、十和田式、刻文期、沈線文期、トビニタイ式に伴う良好な試料の測定を継続的に行っていく必要がある。

(中村賢太郎：パレオ・ラボAMS年代測定グループ  
(株式会社パレオ・ラボ))

#### 引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. .2009. Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), pp337-360.
- 中村俊夫.2000.放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」.pp3-20.日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J..2013. IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), pp1869-1887.
- 東京大学大学院人文社会系研究科.2012.トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点.380p.東京大学大学院人文社会系研究科.
- 右代啓視.2003.オホーツク文化の土器・石器・骨角器. 野村崇・宇田川洋編「新北海道の古代2 続縄文・オホーツク文化」.pp134-161.北海道新聞社.
- 白杵勲・坂本稔.2005.試料の分析と年代の検討. 白杵勲・出穂雅実編「科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代平成16年度研究成果報告書」.pp4-11.札幌学院大学人文学部.
- 白杵勲・出穂雅実編.2005.「化学研究費補助金基盤研究(B)(2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代.平成16年度研究成果報告書」.50p.札幌学院大学人文学部.

## 第7節 チャシコツ岬上遺跡から検出された人骨

チャシコツ岬上遺跡は北海道斜里町ウトロ市街地から斜里町市街地に約2km南西に進んだオホーツク海に突き出た海岸段丘上に立地している遺跡である。今回、当遺跡から出土された歯を各歯種に特徴的な解剖形態と照らし合わせて歯種の同定を行い、また同一個体のもと思われる乳歯、永久歯よりこの個体が死亡したと思われる時期を推定した。

出土歯は完璧に形が保存されているものから形が崩れているものまで様々であった。まず全ての歯を99.5%エタノールで洗浄後、後者に関してはビュットバル（ビニル系合成樹脂）とアセトン（有機溶媒）を用いて可能な限り修復した。その後、すべての歯を99.5%エタノールで洗浄した。一般的な歯の解剖形態と出土歯を照らし合わせた結果、19個の歯の歯種を同定した。

### TR4 Pit 1覆土 1000 (図1)

上顎の左右の第一小白歯、左の第一、第二大白歯、おそらく左第三大白歯、下顎では、左の第一、第二大白歯が同定できる。第一大白歯でも、歯の摩耗はとても弱く、年齢は20歳に達していたかどうか、くらいであろう。

う蝕やエナメル質減形成は見られない。

### TR5 Pit 4覆土 2825歯 (図2)

下顎の左右第二乳白歯、左中切歯、左右側切歯、左右第一小白歯、左右第一大白歯並びに左第二大白歯、上顎の右犬歯及び右第一大白歯が同定できた。この永久歯に特徴的なのは、歯冠部が完全に形成されており、歯根部が2~3mm程度形成されている点であった。上記の永久歯の形成段階は一般的に4歳（±1歳）の幼児にみられるものであり、この個体は4歳程度で死亡したと推定することができる。

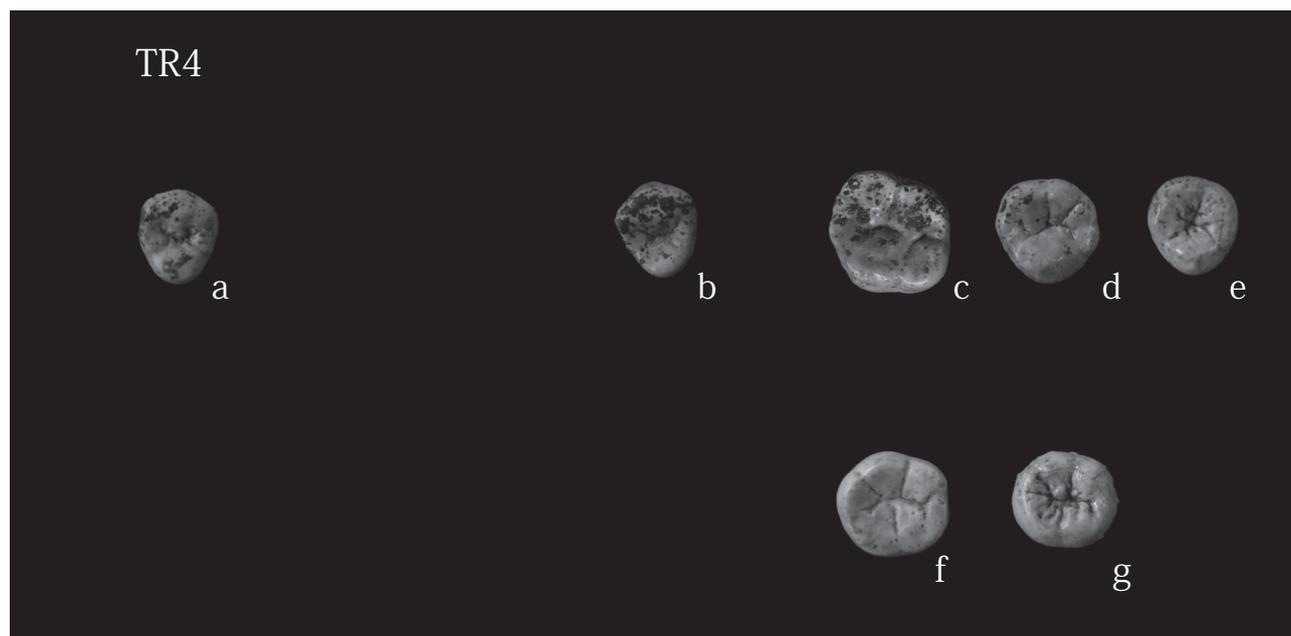
### TR7 B1 No.8 (図3)

上顎の右側乳中切歯である。生え替わりの際に抜けたものとも思われるので、個体の同定、年齢は不明とおきたい。

(石田肇・當山武知：琉球大学大学院医学研究科人体解剖学講座)

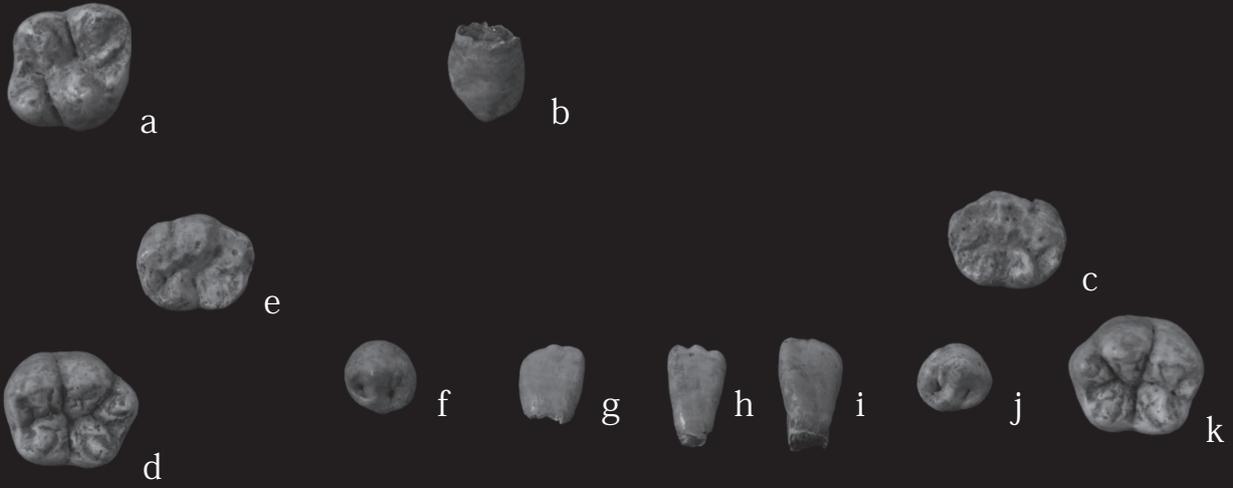
### 参考文献

- White TD. 2000. Human Osteology 2nd ed. Academic Press, San Diego.  
リッケン・C・シャイド. ガブリエラ・ワイス. 2015. ウォールフェルの歯科解剖学図鑑 第8版. ガイアブックス.東京.



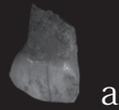
a.上顎右側第一小白歯 b.上顎左第一小白歯 c.上顎左側第一大白歯 d.上顎左側第二大白歯  
e.上顎左側第三大白歯 f.下顎左側第一大白歯 g.下顎左側第二大白歯

TR5



a.上顎右側第一大臼齒 b.上顎右側犬齒 c.下顎左側第二乳白齒 d.下顎右側第一大臼齒 e.下顎右側第二乳白齒  
f.下顎右側第一小白齒 g.下顎右側切齒 h.下顎左側中切齒 i.下顎左側切齒 j.下顎左側第一小白齒 k.下顎左側第一大臼齒

TR7



a.上顎右側乳中切齒

## 第8節 チャシコツ岬上遺跡の動物遺体

### 1. はじめに

チャシコツ岬上遺跡からは、5号竪穴 (TR5-Pit3)、22・23号竪穴上層廃棄層(TR7)を中心に多量の動物遺体が発掘・採集された。破片総数(NISP同定資料数)にして21,500点以上を数えるそれらは、ほぼ脊椎動物遺体のみで構成されていると考えて差し支えない。慶應義塾大学所蔵の現生骨格標本群と照合の結果、魚類19分類群、鳥類9分類群、哺乳類18分類群を同定するに至った(表1)。以下、出土コンテキスト毎に概要を記しておく。

### 2. 1号墓(TR4-Pit1)・2号墓(TR5-Pit4)出土遺体

1号墓(TR4-Pit1)・2号墓 (TR5-Pit4)の覆土中には、魚骨を中心とする少量の動物遺体が含まれていた。表2には最小1mm目の篩を用いて抽出された資料の内訳を示した。種類と部位を同定できた資料の数は、1号墓が20点、2号墓24点と大差ない。また、全て被熱資料で構成され、ともにニシン科の資料を主体的に含んでいた点も、両墓壙の出土遺体に共通する特徴と言える。

### 3. 5号竪穴 (TR5-Pit3)出土遺体

5号竪穴 (TR5-Pit3)の覆土、床面、骨塚からは、総計1,993点に及ぶ被熱した動物遺体が出土した。表3には同定した分類群ごと同定資料数(NISP)と最小個体数(MNI)を示した。同表からも読み取れる通り、ヒグマ、

エゾクロテン、キタキツネ、アザラシ科には、わけでも多くの資料を確認することができた。同定資料数(NISP)にして最多の556点を数えたヒグマ遺体については、その大半が骨塚Aと床面から発見され、2歳未満の仔グマに由来する資料を含まず、出土部位の主体が掌先、足先の部位(中手骨・中足骨・指骨等)で占められていた点の特筆に値する(図1・2)。また、エゾクロテンやキタキツネなど中型陸獣遺体が骨塚B・C出土資料にも含まれていたのに対し、本種の遺体が骨塚Aに偏在していたことも興味深い。同定した資料の内訳は表4~14を参照されたい。なお、本竪穴の出土遺体には、破損が著しく、目までの同定にすら至らなかった骨片も多数含まれていたため、出土コンテキスト毎、乾燥重量を計測し、表15にその集計値も示した。

### 4. 配石遺構 (TR6-Pit5)出土遺体

配石遺構(TR6-Pit5)から出土した動物遺体のうち、種類と部位を同定できた遺体は総計62点、うち18点が被熱した資料に当たる(表16)。破損が著しく、目までの同定にも至らなかった遺体については、表17に乾燥重量を示した。ヒグマ遺体については、遊離歯が目立ち、左下顎第二・第三大臼歯にそれぞれ成獣2個体分に由来する資料を確認した。また、イルカ類の椎骨も目立ち、鯨骨には金属器によるカットマークも観察することができた。

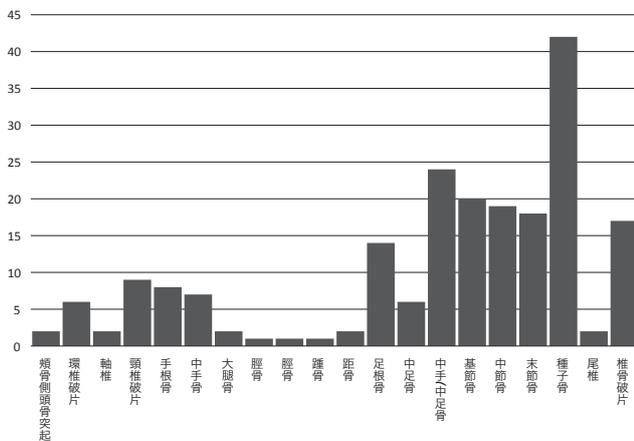


図1 5号竪穴骨塚A出土ヒグマ遺体の部位組成(NISP=203)

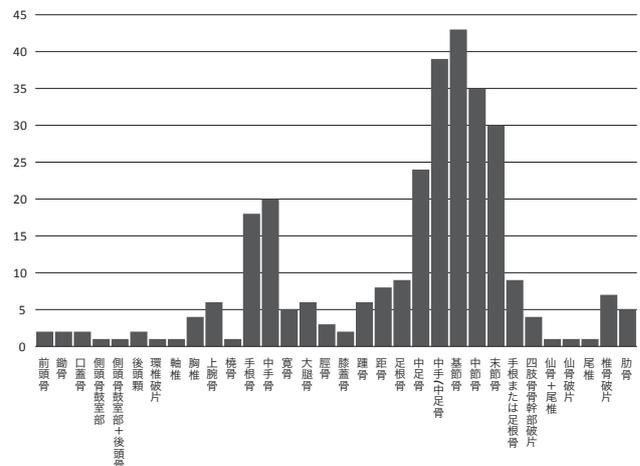


図2 5号竪穴床面出土ヒグマ遺体の部位組成(NISP=299)

## 5.22・23号竪穴上層廃棄層出土遺体

22号竪穴と23号竪穴の間隙を中心に堆積した廃棄層には、魚骨を主体とする夥しい量の脊椎動物遺体が含まれていた。貼付文土器が製作・使用された比較的短期間に堆積したとみられる同廃棄層からは、発掘時50cm角の小区を単位に12本のコラムサンプル (A1~6・B1~6)が採取され、カット毎、室内で最小1mm目の篩を用いた遺体の抽出作業が実施された。その結果、採集され、種類と部位を同定するに至った資料は、総数19,288点を数える(表18)。主体を占めた魚類遺体には、体長70cmに及ぶヒラメ科・マダラ・サケ属から体長10cm台のニシン科・アイナメ属に到るまで大小様々な種の資料が含まれていた。回遊魚ではニシン科、タラ科、サケ属、根魚ではアイナメ属やカレイには、分けても多くの資料を確認するに至った。また鳥類、哺乳類の遺体も少なからず含まれていた。特にアザラシ科の遺体については同定資料数の総計が260点を数え、哺乳類遺体の主体を占めていた。同定した資料の内訳は表18~37に示した。なお、表38には同定に至らなかった破片の乾燥重量も示した。

## 6. 包含層出土遺体

I~III層に大別された包含層中からも少量の動物遺体が採集された。種類と部位を同定することができた遺体は20点、うち8点が被熱した資料であった。それらの内訳と、破砕が著しく同定に至らなかった破片の乾燥重量は、表39に示す通りである。

## 7. むすび

以上、チャシコツ岬上遺跡から出土した動物遺体群について出土コンテキスト毎に概要を述べた。ほぼ脊椎動物資料のみからなる動物遺体が出土することは、道東部オホーツク文化集団の遺跡群にあって決して珍しくない。既報資料群と同様、本遺跡の動物遺体群も、彼らのウニ類・貝類への依存度が道北部オホーツク文化集団に比べ遥かに低かったことを示す証左となろう。また、本遺跡から出土した脊椎動物遺体群には、海域から内水域・陸域に至る多様な動物種に由来する資料が含まれていた。海産魚類や鱈脚類に加え、ヒグマをはじめとする野生陸獣の資料を多数含む点も、道東部オホーツク文化遺跡群から出土する動物遺体群に共通する特徴に他ならない。

もともと、野生陸獣にあって本遺跡において纏まった量の資料が得られたのは、ヒグマを除けば、エゾクロテンやキタキツネを挙げられるに過ぎず、エゾシカに至ってはその遺体をほとんど確認できなかった。既に別稿で指摘した通り、北海道東部のオホーツク文化集団は、貼付文土器[藤本d群(藤本1966)]を製作・使用し始めた後期以降に、盛んにエゾシカを捕獲し、その遺体を住居内の骨塚に安置するようになった様子が窺える(cf.佐藤2004, 2009)。それだけに、本遺跡からエゾシカ遺体のごく僅かしか出土しなかったことは特筆に値しよう。

また、大型陸獣遺体では、5号竪穴におけるヒグマ遺体の出土状況も興味深い。先述した通り、同竪穴では、骨塚Aよりヒグマ遺体が掌先・足先を構成する部位を主体に構成されていた。もとより、同骨塚がコの字状貼り床開口部の外側、所謂「入口部」と呼ばれる位置に設けられていることに鑑みれば、そこにヒグマの頭骨に由来する部位のごく僅かしか確認されない点自体は、これまでの発掘事例とも矛盾しない(cf. 佐藤2004)。しかしながら、竪穴内の全域が発掘されたにも関わらず、5号竪穴では、コの字状貼り床の短編外側、所謂「奥壁部」に骨塚が発見されなかったという。

周知の通り、過去の発掘事例から、オホーツク文化集団は一律に「奥壁部」にヒグマの頭骨を主体的に安置する習慣を保持していたことが示唆されている。しかも、道東部沿岸域のオホーツク文化遺跡群にあっては、これまで同一竪穴住居内に複数の骨塚を備えた竪穴住居跡も少なからず確認・報告されてきたものの、それらにも「奥壁部」の骨塚を欠く例は知られていない。それだけに、「入口部」のみに骨塚が設けられ、そこにヒグマの掌先・足先の部位を主体的に集積されていた本5号竪穴の遺体出土状況は特異な事例として注目に値する。

道東部オホーツク文化遺跡群の既報資料と比べ、同定された分類群に特異性こそ認められないものの、本動物遺体群には上記の興味深い特徴も指摘できることを指摘し、小稿の結びとしたい。

(佐藤孝雄：慶應義塾大学)

(吉永亜紀子：日本動物考古学会)

## 引用文献

佐藤孝雄.2004.オホーツク文化の動物儀礼—その地域的・時期的特徴—。宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会(編), アイヌ文化の成立. 北海道出版企画セ

ンター, pp. 245-262.

佐藤孝雄.2009.骨塚から検出された動物遺体. 米村衛・梅田広大(編),史跡最寄貝塚史跡等・登録記念物保存修理事業発掘調査報告書.網走市教育委員会, pp.377-412.

藤本 強.1966.オホーツク土器について. 考古学雑誌51(4): pp. 28-24.

#### 付記

微細な魚骨や被熱した獣骨の小片に至るまで、丹念に資料を採取された発掘担当者の努力に敬意を表します。また、本出土動物遺体の整理作業にあたっては、高橋鵬成氏の協力も得ました。末文ながら記して感謝申し上げます。

表1 出土脊椎動物遺体の分類群

軟骨魚綱	Chondrichthyes	鳥綱	Aves	哺乳綱	Mammalia
ネズミザメ上目	Galeomorphi ord. indet.	アビ科	Gaviidae gen. indet.	エゾユキウサギ	<i>Lepus timidus ainu</i>
ネズミザメ	<i>Lamna ditropis</i>	キタアホウドリ属	<i>Phoebastria spp.</i>	エゾリス	<i>Sciurus vulgaris orientis</i>
ツノザメ目	Squaliformes fam. indet.	ミズナギドリ科	Procellariidae gen. indet.	ネズミ科	Muridae gen. indet.
<b>硬骨魚綱</b>	<b>Osteichthyes</b>	ウ属	<i>Phalacrocorax spp.</i>	ヒグマ	<i>Ursus arctos</i>
ニシン科	Clupeidae gen. indet.	カモ科	Anatidae gen. indet.	エゾタヌキ	<i>Nyctereutes procyonides albus</i>
ニシン	<i>Clupea pallasii</i>	チドリ目	Charadriiformes fam indet.	キタキツネ	<i>Vulpes vulpes schrencki</i>
イトウ	<i>Hucho perryi</i>	カモメ属	<i>Larus spp.</i>	エゾクロテン	<i>Martes zibellina brachyura</i>
サケ属	<i>Oncorhynchus spp.</i>	ウミスズメ科	Alcidae gen. indet.	イタチ属	<i>Mustela sp.</i>
ウグイ属	<i>Tribolodon sp.</i>	ウミガラス	<i>Uria aalge</i>	イタチ	<i>Mustela itatsi</i>
タラ科	Gadidae gen. indet.			トド	<i>Eumetopias jubatus</i>
マダラ	<i>Gadus macrocephalus</i>			ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i>
スケトウダラ	<i>Theragra chalcogramma</i>			キタオットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i>
メバル属	<i>Sebastes spp.</i>			アゴヒゲアザラシ	<i>Erignathus barbatus</i>
アイナメ属	<i>Hexagrammos spp.</i>			ゴマフアザラシ	<i>Phoca largha</i>
ホッケ属	<i>Pleurogrammus sp.</i>			ワモンアザラシ	<i>Phoca hispida</i>
カジカ科	Cottidae gen indet.			エゾシカ	<i>Cervus nippon yesoensis</i>
タイ科	Sparidae gen. indet.			クジラ目	Cetacea fam. indet
ウミタナゴ属	<i>Ditrema sp.</i>			マイルカ上科	Delphinoidea fam. indet.
ヒラメ科	Paralichthyidae gen. indet.				
カレイ科	Pleuronectidae gen. indet.				

表2 墓壙出土動物遺体

墓壙名	分類群	部位	点数
1号墓 (TR4-Pit1)	ニシン科	椎骨	13
	サケ属	椎骨	1
	タラ科	尾椎	1
	アイナメ属	尾椎	2
	魚類種不明	腹椎	1
	鳥類	尾椎	1
		胸椎	1
	海獣類焼骨破片2.3g・焼骨破片6.5g		
小計			20
2号墓 (TR5-Pit4)	サメ類	椎骨	1
	ニシン科	椎骨	18
	サケ属	遊離歯	1
		椎骨	1
	カレイ科	椎骨	1
	ウ属	上腕骨L	1
	鳥類種不明	上嘴破片	1
小計			24
計			44

表3 5号竪穴出土動物遺体の同定資料数(NISP)と最小個体数(MNI)

種名	出土位置		骨塚A		骨塚B		骨塚C		炉		周溝		柱穴		覆土	
	NISP	MNI														
ネズミザメ			1	1												
サメ類															5	1
ニシン科	26	1							663	13			1	1	62	2
イトウ	1	1														
サケ属	7	1	3	1			2	1	5	1			3	1	8	1
ウグイ属	1	1							2	1						
タラ科	6	1	1	1					4	2					3	1
メバル属	1	1			1	1										
カジカ科									1	1						
アイナメ属					2	1			29	2					7	1
カレイ科			3	1					3	1					1	1
魚類種不明	12		4						5						5	
アビ科	1	1														
ウ属	5	1	1	1											1	1
カモメ属									1	1						
ウミスズメ科	2	1														
ウミガラス	1	1														
鳥類種不明	13		7		1										6	
エゾユキウサギ	1	1														
エゾリス	2	1	1	1			4	1								
ヒグマ	307	5	203	3												
エゾタヌキ	2	2														
キタキツネ	36	4	8	1	28	2	1	1							3	1
エゾクロテン	140	13	46	5	5	1			3	1					16	2
イタチ属	30	2	24	1												
イタチ	16	3	2	1											2	1
中型陸獣	40				78		3								13	
トド	2	1														
ニホンアシカ	1	1														
キタオットセイ															1	1
アシカ科	3	1	1	1					3	1			1	1	3	1
アザラシ科	23	4	1	1					2	1	1	1			16	4
鰭脚類	1	1			1	3										
鯨類	1	1	1	1												

表4 5号竪穴出土魚類遺体

分類群	部位	床面	骨塚A	骨塚B	骨塚C	炉	柱穴	覆土	計
ネズミザメ	椎骨		1						0
サメ類	椎骨							5	5
ニシン科	角骨	L						1	1
	腹椎					18	1		19
	椎骨		26			645		61	706
イトウ	椎骨		1						0
サケ属	歯骨破片		1					1	1
	遊離歯		2			2			2
	椎骨		5	2		2	3	3	7
ウグイ属	第二椎骨					1			1
	腹椎					1			1
	尾椎		1						0
タラ科	基後頭骨		1						0
	副蝶形骨		1						0
	前上顎骨	L	1					1	1
		R					2		2
	主上顎骨	R	1						0
	歯骨		1						0
	尾椎					2			2
	椎骨		2					2	2
メバル属	椎骨		1	1				1	
カジカ科	歯骨	L				1		1	
アイナメ属	前上顎骨	R				2			2
	主上顎骨	L				1			1
	歯骨	L				2			2
	方骨	R						1	1
	腹椎				1	10		4	15
	尾椎				1	14		3	18
カレイ科	前上顎骨	L				1			1
	腹椎					1		1	2
	椎骨			3		1			1
種不明	歯骨	R	1						0
	椎骨		9	3		5		4	9
	棘		1						0
	方骨		1						0
	破片		1					1	1
計		54	12	3	2	712	4	92	813

表5 5号竪穴出土鳥類遺体

分類群	部位	左右	床面	骨塚A	骨塚B	炉	覆土	計	
アビ科	上腕骨	L	1					1	
ウ属	方形骨	L		1				1	
	上腕骨	R	1					1	
	尺骨	R	1				1	2	
	大腿骨	L	1					1	
	脛足根骨	L	1						1
R		1						1	
カモメ属	手根中手骨	L				1		1	
ウミスズメ科	尺骨	R	1					1	
	手根中手骨	R	1					1	
ウミガラス	上腕骨	L	1					1	
種不明	鳥口骨	L		1				1	
	上腕骨	R	1					1	
	手根中手骨	L		1				1	
	脛足根骨	R		1					1
				1					1
	趾骨		2	1				3	
	頸椎		1					1	
	胸椎		4	1	1			6	
	椎骨破片		1					1	
	破片		3	2				5	
計			22	8	1	1	1	33	

表6 5号竪穴出土エゾウサギ・エゾリス・エゾタヌキ遺体

種・出土位置	エゾウサギ	エゾリス			エゾタヌキ	計	
		床面	骨塚A	骨塚C			
環椎					2	2	
橈骨	L			1		1	
	R			1		1	
尺骨	L			1		1	
	R			1		1	
寛骨	R	1				1	
大腿骨	R	1				1	
距骨	L		1			1	
	R	1				1	
計		1	2	1	4	2	10

表7-1 5号竪穴床面出土ヒグマ遺体

部位		点数
前頭骨	R	1
前頭骨頬骨突起	L	1
鋤骨		2
口蓋骨	R	1
口蓋骨破片		1
側頭骨鼓室部	L	1
側頭骨鼓室部+後頭骨	R	1
後頭顆	L	1
	R	1
環椎破片		1
軸椎		1
胸椎		4
上腕骨	L	3
	R	2
上腕骨(若)	R	1
橈骨	R	1
寛骨(腸骨)	L	2
	R	1
寛骨(寛骨臼+坐骨)	L	1
寛骨(寛骨臼+腸骨)	R	1
大腿骨	L	4
大腿骨(大腿骨頭)	L	1
大腿骨(大転子)	L	1
脛骨	R	3
膝蓋骨	L	1
		1
踵骨	L	5
	R	1
距骨	L	7
	R	1
第一手根骨	L	1
第二手根骨	R	1
第三手根骨	L	3
	R	1
第四手根骨	L	2
	R	2
中間橈側手根骨	L	1
	R	2
尺側手根骨	L	1
	R	3

表7-2 5号竪穴床面出土ヒグマ遺体

部位		点数
副手根骨	R	1
第一中手骨	L	3
	R	3
第二中手骨	L	1
	R	2
第三中手骨	L	3
	R	1
第四中手骨	L	4
	R	2
第五中手骨	L	1
	R	1
第一足根骨	R	2
第二足根骨	R	1
第三足根骨	R	1
第四足根骨	L	1
	R	1
中心足根骨	L	1
	R	2
第一中足骨	L	2
	R	1
第二中足骨	R	3
第三中足骨	L	3
	R	1
第四中足骨	L	5
第五中足骨	L	5
	R	4
中手/中足骨		38
中手/中足骨(若)		1
基節骨		43
中節骨		35
中節骨(若)		1
末節骨		32
手根または足根骨		9
四肢骨骨幹部破片		4
仙骨+尾椎		1
仙骨破片		2
尾椎		4
椎骨破片		7
肋骨	L	2
		3
計		307

表8 5号竪穴骨塚A出土ヒグマ遺体

部位		点数
頬骨側頭骨突起	L	2
環椎破片		6
軸椎		2
頸椎破片		9
上腕骨骨頭破片左右不明		1
第一手根骨	R	1
第二手根骨	L	1
	R	1
第四手根骨	R	1
尺側手根骨	L	3
副中手骨左右不明		1
第一中手骨	R	1
第二中手骨	L	1
第三中手骨	L	1
第四中手骨	L	1
	R	1
第五中手骨	L	1
	R	1
大腿骨(遠位端内側顆破片)	L	1
脛骨(近位端外側顆破片)	R	1
脛骨左右不明(未癒合近位端破片)		1
踵骨	R	1
距骨	L	1
	R	1
第一足根骨	L	2
第二足根骨	L	1
	R	2
第三足根骨	R	2
第四足根骨	L	1
	R	2
中心足根骨	L	3
	R	1
第一中足骨	L	1
第二中足骨	R	1
第三中足骨	R	1
第四中足骨	L	1
	R	1
第五中足骨	R	1
中手/中足骨		24
基節骨		20
中節骨		19
末節骨		18
種子骨		42
尾椎		2
椎骨破片		17
計		203

表9 5号竪穴炉・柱穴・覆土出土ヒグマ遺体

部位		炉	柱穴	覆土	計
側頭骨鼓室部+後頭骨	R		1		1
蝶形骨筋結節部破片			3		3
基底骨				1	1
齒破片				1	1
推骨破片				1	1
第一手根骨	R			1	1
第二手根骨	R			1	1
中間橈側手根骨	R			1	1
脛骨	L			1	1
第三足根骨	L			1	1
第一中足骨	L			1	1
第二中足骨	L		1		1
	R			2	2
第三中足骨	R			1	1
第四中足骨	R			1	1
手根/足根骨			5	3	8
中手/中足骨			2	3	5
基節骨		2	2	3	7
中節骨				3	3
末節骨		1		3	4
尾椎				1	1
計		3	14	29	46

表10 5号竪穴出土キタキツネ遺体

部位		床面	骨塚A	骨塚B	骨塚C	覆土	計
後頭類	R					1	1
環椎破片		1					1
下顎骨	R					1	1
胸椎		1					1
肩甲骨	L	2					2
	R			2			2
上腕骨	L	4					4
	R	2		1			3
橈骨	L	3		1			4
尺骨	L	2					2
	R			1		1	2
橈側手根骨	L		1				1
	R			1			1
副手根骨	L		1				1
第4手根骨	L		1				1
手根骨	L		1	6	1		8
	R			2			2
第二中手骨	L	1		1			2
	R	1		1			2
第三中手骨	L	1					1
	R			1			1
第四中手骨	L	1					1
	R			1			1
第五中手骨	L	1		1			2
	R	1		1			2
寛骨	L	1		1			2
	R		1	1			2
大腿骨	L	1					1
	R			2			2
脛骨	L	2		1			3
	R	1		1			2
踵骨	L	4					4
	R	2		1			3
距骨	R			1			1
第二中足骨	L		1				1
第三中足骨	L	2	1				3
第四中足骨	L	1	1				2
足根骨	L	1					1
計		36	8	28	1	3	76

表11 5号竪穴出土エゾクロテン遺体

部位		床面	骨塚A	骨塚B	炉	覆土	計
頭頂骨+後頭骨	L		1				1
			1				1
切歯骨	L					1	1
上顎骨	L	1	1				2
	R	2	2				4
遊離上顎犬歯	R	1					1
下顎骨	L	8	5				13
	R	11	5		1	2	19
下顎骨関節突起	L		4		1		5
	R		4				4
下顎骨下顎角	R		1				1
下顎骨破片	L		1				1
			1				1
頬骨側頭突起部	L		2				2
	R		2			1	3
後頭骨+鼓室部	L		1				1
後頭顱	R	1					1
軸椎		2			1		3
頸椎破片		3					3
胸椎		4					4
肩甲骨	L	1	1				2
	R	1	1				2
上腕骨	L	5	2				7
	R	8					8
橈骨	L	3	1			1	5
	R	3	1				4
尺骨	L	5				1	6
	R	7				1	8
第一中手骨	L	1					1
	R	2					2
第二中手骨	L	1					1
	R	3					3
第四中手骨	L	1					1
	R	1	1				2
第五中手骨	L	1					1
	R	1					1
寛骨	L	1					1
寛骨臼+坐骨	L	1					1
	R	1					1
寛骨臼+腸骨	L	1				1	2
	R	3					3
大腿骨	L	10		1		1	12
	R	4	2	1			7
脛骨	L	13	1			1	15
	R	7	2				9
腓骨	R					1	1
踵骨	L	2	1			1	4
	R	4		1		1	6
距骨	L	2	1			1	4
	R	1				1	2
足根骨	L	1					1
第一中足骨	L	1					1
第二中足骨	L	1		1			2
	R	2					2
第三中足骨	L	1				1	2
	R	2					2
第四中足骨	L	1	1	1			3
	R	1					1
第五中足骨	L	1					1
	R	2					2
計		140	46	5	3	16	210

表12 5号竪穴イタチ・イタチ属遺体

分類群	部位	床面	骨塚A	覆土	計	
イタチ	側頭骨頬骨突起	L	1			1
		R	1			1
	側頭骨鼓室部	L	1			1
	後頭顱	L		1		1
	環椎		1			1
	軸椎		1			1
	上腕骨	L	2		1	3
		R	2			2
	橈骨	L	1			1
	尺骨	L	1			1
	大腿骨	L	2			2
	脛骨	L	3	1	1	5
	計		16	2	2	20
	イタチ属	上顎犬歯	L	1		
下顎犬歯		R	2			2
歯根部破片			10	15		25
大腿骨		L	1			1
脛骨		L	1			1
中手/中足骨			6			6
基節骨			4			4
中節骨			3			3
末節骨			1	9		10
尾椎			1			1
計			30	24		54

表13 5号竪穴出土種不明中型陸獣遺体

部位		床面	骨塚B	骨塚C	覆土	計
後頭顱	R				1	1
側頭骨鼓室部	R				1	1
下顎骨関節突起	L				1	1
頸椎破片		1				1
大腿骨破片	R	1				1
寛骨L	L	1				1
中手/中足骨		4	14		1	19
基節骨		7	16		1	24
中節骨		8	13		1	22
末節骨		3	14			17
指骨破片			2			2
頸椎		2	2			4
胸椎		2	2		1	5
腰椎		4	1		1	6
仙椎			1			1
尾椎		3	9		4	16
椎体		4	3	1		8
肋骨	L		1			1
	R			1	1	2
肋骨左右不明				1		1
計		40	78	3	13	134

表14 5号竖穴出土鰭脚類遺体

分類群	部位	左右	床面	骨塚A	骨塚B	炉	周溝	柱穴	覆土	計	
トド	上顎骨	L	1							1	
	脛骨	L	1							1	
ニホンアシカ <sup>♂</sup>	側頭骨下顎関節窩	R	1							1	
キタオットセイ	頭頂骨								1	1	
アシカ科	上顎骨	L				1				1	
	側頭骨鼓室部	L							1	1	
		R							1	1	
	後頭顆	L					1		1	2	
		R					1		1	2	
	臼歯破片		1							1	
	胸椎							1		1	
	上顎骨	R					1			1	
	肩甲骨	R	1							1	
	中手/中足骨			1						1	
尾椎		1							1		
アザラシ科	切歯骨	R							1	1	
	切歯骨+上顎骨	LR	1							1	
	上顎骨頬骨突起	R	1							1	
	口蓋骨	L	3								3
		R	1								1
	下顎骨筋突起破片			1						1	
	下顎骨関節突起	R							1	1	
	側頭骨頬骨突起	L					1			1	2
		R	3							3	6
	側頭骨鼓室部	R	1						4	5	
						1			1	2	
	蝶形骨		1							1	
	後頭顆	L							1	1	
			1							1	
	頭骨破片		1						1	2	
	上腕骨	L							1	1	
R		1							1		
上腕骨(幼)	R	1							1		
末節骨		1						1	2		
鰭脚類	指骨		2							2	
	頸椎		2							2	
	胸椎		1							1	
	尾椎		1							1	
	椎骨破片		1							1	
	頬骨		1							1	
鯨類	中手/中足骨		1							1	
	仙椎				1					1	
	尾椎				1					1	
	椎骨破片				1					1	
	肩甲骨	L		1						1	
	尾椎		2							2	
未癒合遊離椎頭/椎窩		1							1		
	計		34	3	3	5	1	1	20	67	

表15 分類群不明焼骨乾燥重量 (単位:g)

出土位置	計測対象		
	海獣類	大型哺乳類	破片
床面	26.7	9.6	156.6
骨塚B			17.8
骨塚C			5.2
炉	77.9		216.7
周溝	4.3		57.9
柱穴	11.9		37.6
覆土	3.1	0.9	22.8
計	123.9	10.5	514.6

表16 配石遺構出土動物遺体

分類群	部位	左右	点数
ニシン科	椎骨		1
魚類種不明	椎体		1
ウミガラス	上腕骨	L	1
鳥類種不明	方形骨	L	1
中型陸獣	基節骨		1
	尾椎		1
ヒグマ	上顎第三大白歯	L	1
	下顎犬歯	R	1
	下顎第一大白歯	L	1
	下顎第二大白歯	L	2
		R	1
	下顎第三大白歯	L	2
		R	2
臼歯破片		2	
アシカ科	側頭骨頬骨突起	L	1
	切歯骨	R	1
	上腕骨(トド♀級)	R	1
	尾椎		1
アザラシ科	口蓋骨	L	1
	側頭骨鼓室部	R	1
	下顎骨	R	1
	肩甲骨	R	3
	上腕骨	L	1
		R	1
	第一中足骨	L	1
	第二中足骨	L	1
	第五中足骨	R	1
末節骨		1	
鰭脚類	指骨		1
			4
イルカ類	椎骨椎体部		2
	腰椎		15
大型哺乳類	後頭顆破片		1
	肋骨骨幹部		1
		計	62

註: 本表および以下の表においてトーンのかけられた数値は被熱資料の点数を表す。

表17 配石遺構出土種不明骨片乾燥重量

計測対象	重量(g)
鯨類破片	1143.4
海獣類破片	211.4
大型哺乳類焼骨破片	93.0
破片	110.5
焼骨破片	490.7
計	2049.0

表18 22・23号竪穴上層廃棄層の同定資料数(NISP)

分類群		Grid												計
		A1	A2	A3	A4	A5	A6	B1	B2	B3	B4	B5	B6	
魚類	サメ類	6	6	2	1	1	1	16	1	6	2	4	2	48
	ニシン科	6,844	43	14	16		12	4,618	20	12	7		1	11,587
	イトウ	18	10	8	3	1	2	22	6	6	34	42	7	159
	サケ属	344	104	54	40		50	293	68	47				1,000
	ウグイ属	46	9	3	3		9	30	9	4	2	5		120
	タラ科	1,111	429	142	24	9	78	638	98	98	94	56	23	2,800
	メバル属	45	31	22	9	2	15	27	12	11	9	11	4	198
	アイナメ属	642	4	7	10	1	3	514	20	5	2	2	2	1,212
	ホッケ属	52	1		2			32	2					89
	カジカ科	18	9	12	4		8	15	11	10	3	2	1	93
	タイ科		1											1
	ウミタナゴ属	16	1					15	4		11	5		52
	ヒラメ科	11	11	7	2	1	6	20	3	4	6	2	4	77
	カレイ科	344	62	34	20		28	296	57	43	11	18	1	914
	不明	90	2	1	3		5	60	4	5		1	1	172
小計	9,587	723	306	137	15	217	6,596	315	251	181	148	46	18,522	
鳥類	アビ科				1					1				2
	キタアホドリ属	2												2
	ミズナギドリ属							1				1		2
	ウ属	2			1	1	1	2	1	1				9
	カモ科	1						1		1				3
	チドリ目		1								1			2
	カモメ属	3		2				2		1	1			9
	ウミスズメ科	5	3	1				1			1			11
	不明	26	7	2	2		9	25	7	3	4	2	1	88
	小計	39	11	5	4	1	10	32	8	7	7	3	1	128
哺乳類	エゾユキウサギ								1					1
	エゾリス	2							1					3
	ネズミ科	13					1	8	3	1	2			28
	ヒグマ	3	1		1			1	1	1	2	1		11
	エゾタヌキ	1					1				1	1		4
	キタキツネ	3	1				3		2	3		1		13
	エゾクロテン	2		2	3			3	3	1	1	2		17
	イタチ属	2			1									3
	アシカ科	4	8	1	3	1	1	5	1	1	4		2	31
	アザラシ科	37	24	29	15	6	16	64	22	13	23	9	2	260
	鳍脚類	49	27	9	8	3	6	56	8	10	16	7	1	200
	エゾシカ								1					1
	クジラ目	3	3	1		1		3	1	1	2		1	16
	マイルカ上科	4	1	1				2						8
	不明	9	2	3	1		1	12	5	1	7	1		42
小計	132	67	46	32	11	29	154	49	32	58	22	6	638	
計	9,758	801	357	173	27	256	6,782	372	290	246	173	53	19,288	

表19 22・23号竪穴上層廃棄層出土サメ類遺体

種類・部位 Grid・Cut		ネズミ ザメ 椎骨	ツノ ザメ類 背棘	小型サメ類	
				遊離歯	椎骨
A1	6				1
	8				1
	9				3
	12		1		
A2	2	1			2
	6				1
	7				1
	10				1
A3	5				1
	10		1		
A4	1				1
A5	5		1		
A6	3		1		1
B1	3				1
	5				3
	6		1		1
	8				1
	9				1
	11				2
	13				1
	14		1	1	
16		2		1	
B2	5				1
B3	1				1
	2				2
	3		1		
	5				1
	7				1
B4	1				1
	一括				1
B5	2				3
	4				1
B6	1				1
	4		1		

表20 22・23号竪穴上層廃棄層出土ウグイ属遺体

種類・部位 Grid・Cut		歯骨		下咽頭骨		角骨		主鰓蓋骨		第二 椎骨	腰椎	尾椎
		L	L	R	L	L	R					
A1	2										1	
	3											1
	5		1		1		2			2	2	3
	6								1	2	2	
	7	1										
	8								1			
	9										6	5
	10										1	3
	11										1	
	12		1				1				3	5
	15											1
16											1	
A2	3			1								
	4			1						1	1	
	6									1		
	7			1								
A2	8		1								2	
	2											1
	5			1								
A3	8		1									1
	1									1		
	7											1
A4	10									1		
	3		2	1								2
	4		1	1								1
B1	5									1		
	2										1	1
	3										1	3
	4									2	1	
	5		1									3
	6								1			
	7									3		
	8											3
	11										1	2
	13										1	1
	14									3	1	
15									1			
B2	3	1			1						1	
	4										1	
	5	1									1	
	6					1		1				
	一括						1					
	2		1									
B3	6										1	
	7											1
	8										1	
	一括											
B4	1											1
	一括											
B5	1											1
	2										1	1
	4											1

表21-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土ニシン科遺体

Grid・Cut	部位	主上顎骨		歯骨		舌顎骨		方骨		角骨		主鰓蓋骨		第一椎骨	第二椎骨	腹椎	椎骨		尾骨				
		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R										
A1	1																	5					
	2															2		49	4				
	3												1	1		2		57	8				
	4								1						9	1	3	2	1	123	12		
	5				1	1				1				1	10	1	1	13	5	435	36	5	
	6			2	1	1			4	1	2			1		3	1		19	1	611	52	2
	7				1	1		1	5	3		1	1		4	1	2	9		413	45	2	
	8					1			2						2			4	5	473	28	5	
	9				3	3			1		1				6			39	1	1006	49	7	
	10														1			4		359	18	3	
	11																3		16	3			
	12		1			1	5	1	1		1	1		1	1	2		10		666	32	6	
	13		1	1							1							7	6	235	1		
	14								1	1								5		109	2	1	
	15														1			14		176	5	1	
	16														4			60		1454	6	4	
A2	2					1				1													
	3																		3				
	4					1													2		3		
	5					1	1												4				
	6																		2		3		
	7					1													5		7		
	8																1		2		3		
	9					1																	
	13																			1			
A3	2																		2		2		
	5																		1		2		
	7																		1		1		
	8																		2		2		
	9																		1				
A4	1																		3		4		
	6																		2		2		
	7																		1				
	10																		1		2		
A6	1																		2		2		
	3															1			2				
	4		1											1							2		

表21-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土ニシン科遺体

部位 Grid・Cut	主上顎骨		歯骨		舌顎骨		方骨		角骨		主鰓蓋骨		第一 椎骨	第二 椎骨	腹椎	椎骨		尾骨		
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R								
B1	1												1		2		50	3	1	
	2														4	1	82	6		
	3	1	1	1					2	1			1	4	15	3	284	48	3	
	4	1	1	1			1	2	1	1	1		1	3	16	2	543	29	3	
	5			3		1		1						2	17		274	27	2	
	6													4	15	1	288	28	5	
	7														5		126	22	1	
	8													1	6	1	89	46		
	9													2	8	1	52	28		
	10							1	1						9		87	34		
	11							1			1			3	12	1	289	89	2	
	13	1	3	3				2	2	1	1			1	18	1	435	38	1	
	14			2			1							2	11		296	10		
	15	1				1			1	1				1	1	14	2	213	17	2
	16												1	8	51		763	1	5	
	B2	2																3		
3		1	2															1		
4		2	1														2			
5																	2			
6		1										1					4			
B3	1																1			
	5																1			
	7		1					1				1					5			
	8																2			
B4	1																1			
	一括																6			
B6	4																1			

表22-1 22・23号竪穴上層廃棄層出土イトウ・サケ属遺体

種類・部位 Grid・Cut	イトウ 椎骨	サケ属																				
		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		遊離歯	角舌骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨	主鰓蓋骨		擬鎖骨		椎骨		
		L	R	L	R	L	R		L	R	L	R	L	R	R	L	R	L	R			
A1	1	1																		2		
	3	1					1	1												18		
	4	2						5	1		1			1						7	1	
	5						2	8				1									18	
	6	2			1				2			1									22	
	7	3							3												15	
	8	1					1		5												20	
	9	1						1	4												54	
	10	1																				
	11	1						1	2				1	2							3	
	12	1		1					5	1					1						31	
	13							1	4												17	
	14	1							2												36	1
	15								1												27	
	16	3																			11	
	A2	1	1		1												1				2	
2		2																		11		
3		2	1					2			1									10		
4			1													1				4		
5		1			1			1	1											8		
6					1									1						6		
7		1			1			1	1		2									5		
8		2																	1	4		
10				1																3		
11		1									1						1			5		
12																		1		7		
13																				1		
16																					15	
A3		2	3	1											1	1				1	8	
	4	1																		2		
	3	2								1										2		
	5	1				1	1				1									8		
	6			1				1			1	2								6		
	7						2		3						1					2		
	8	1					1													4		
	9											1								1		
	A4	1	1																		5	
4							1													3		
6							1		1											9		
7		1							1											15		
10		1																		4		
A5	5	1																				
A6	1																			10		
	3	1		1		1								1						11	1	
	4																			9	9	
	5							1										1	1	1	1	
	6			1																1	1	
	一括	1																				

表22-2 22・23号竪穴上層廃棄層出土イトウ・サケ属遺体

種類・部位 Grid・Cut	イトウ		サケ属																					
	椎骨	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		遊離歯	舌顎骨		角舌骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	後側頭骨	擬鎖骨		椎骨		
		L	R	L	R	L	R		R	L	R	L	R	L	R	R				R	L		R	
B1	1	2						1														7		
	2	3						2														17		
	3	1	2		1		1		8													21		
	4	3	1				1		5													23		
	5	1					1	1	7												1	20	2	
	6	2				1			4														10	1
	7								4			1								1	1	1	11	
	8	2																					10	
	9																						1	
	9																1						4	
	10																						1	
	11	3		1	1			1	1									1			1		20	
	13	2			1				5			1											13	
	14	3						1	6			1		1	1								27	
	15																						16	6
	16								10														3	1
B2	1							1														11	1	
	2	2		2			1						1	1								7		
	3	2					1	1	1							1						8		
	4	1																		2		8		
	5																					5		
	6	1		2	1																	1	11	
	一括		1																					
B3	1			1			1	2														6		
	2				1	1		1														7		
	3	1																			1	1		
	4	1							1													2		
	5	1																				2		
	6										1											1		
	7	2	1					1														8		
	8	1							1													6		
	一括		1																					
B4	1	2			2									1								12		
	一括	9	1		2			3			1	1	1				1					9		
B5	1	2			1	1			1													10		
	2	1		1	1	1				1			1		1							11		
	4	1																			1	11		
	7	1																						
B6	1													1								3		
	4					1							1									1		

表23-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土タラ科遺体

標記 Grid/Cut	鋤骨	副蝶 形骨	基底 後頭骨	耳石	前上顎骨		主上顎骨		齒骨		舌顎骨		上舌骨		角舌骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		後側頭骨		第一 椎骨	腹椎	尾椎	尾骨	
					L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R					L
A1	1																														1
	2			1		1						1			1	1														2	5
	3		1			1	1											1	2		2	1	1							10	7
	4	1				2											1				2									5	1
	5		1			1	1	3			1	1		1	2														5	1	7
	6					1		3		2								1		1						1			5	17	
	7							3					1							1	1			1					9	2	
	8	1	1					1					1			1					1	1		1					5		
	9		1				1	1				1				1				1	1	1		1	1	1	1		10	9	
	10														1	1					1	1								3	5
	11		1		2		1	1	2						1	1				1	1		1				1	1	17	3	
	12	3	1		2		1				2	1	2		1		1		1		2	2	1						15	5	
	13		2				1																							3	6
	14	1					1				1																			10	16
	15	2	4		8		9	5	3	2	3	3	1	3	1			5	2	3	2			1	1	4	1	2	105	36	
	16	5	13		9		9	13	6	1	9	8	6		1	5	8	9	10	14	8	6	6	6	2	3	9	10	217	216	
A2	1							1													1									5	
	2	1	1				1														1					1			3		
	3						1					2					2			1								6	1	5	
	4	1			1			1				1				1	1									1	2		3	5	
	5	2	1			1	1	1		1		1								2			1	1				8	1	2	
	6	1			1						2	1	1						2	1	1		1						8		
	7		1		2		1				1	1	1			1										1		1	9	5	
	8				1		2	2			1			1													1		3	2	
	10												1											1						1	2
	11						1						2	2						2		1			1				1	4	2
	13	1	1		1		1				1	1				1	1	1	1	1		1	1						10	1	2
16	1	5		6		2	1		1	3	4	2		1	3	4	2	2	4	5	1	2	1			1	2	99	27		
一括		3		2		4	3	2	1	2				1	1	1	3	1	1	2								1	41	6	
A3	2	2	1			1	1			1										1	1					1	1		10	9	1
	3						1														1										
	4						1					1																	6	2	
	5	1	3		1			2	1			1	1		1	1	1			1						1			1	4	
	6		1		1						1	1				1				2	1								1	4	
	7								1												1			1	1					1	
	8	2	1					1													1								5	1	
	9				1																										
	10																													1	
11					1																				1				1		
13	1	1																											2		
一括	2	3		1		2	1	2	1	2				1			1		2	1								1	18	3	
A4	1						1																						6	4	
	6														1						1									1	
	7						1																						1		
	10				1							1								1						1			3		
A5	1	1									1										1								5		
	5																													1	
A6	1																				1										
	2						1	1				1										1							1	3	
	3		2	1		1		1	1		1	2				1			2		1				2	1	1	5	1		
	4	3	2			1		1				2				1				1				1				6	2	1	
	5													1		1				1	1					1			2		
	6						1				1																		1		
一括					1	1					1				1				1									8	1	1	

表23-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土タラ科遺体

種別 Grid-Cut	鋤骨	副蝶 形骨	基底 後頭骨	前上顎骨		主上顎骨		齒骨		舌顎骨		上舌骨		角舌骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		擬鎖骨	後側頭骨		第一 椎骨	腹椎	尾椎		
				L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R								
B1	1					1									1													4	1		
	2				1	1										1		3										10	4		
	3	2	1		2	1	1	1									1				1					1		13	4		
	4		1		2		1	1	1			1			1	4	1	2	1	1						1	1	13	6		
	5					1		1	1	1	1				1		1	1	2	1						1		12	5		
	6				2	1		2		1		2						1	1	1						1		6	5		
	7	1							1			2		1	1									1				4	5		
	8	1							1	1					1				1				1					5	3		
	9	1	1		1								1	1					1							1		1	6		
	11	1	1		1	1	1				1						2	3	1						1		1	17	13		
	13	1			1			2											1									9	6		
	14	3	1		1								1				1	2								1	1	12	6		
	15				1	1	2	1	1	1	1	1					1	1			1			1	1	3	1	37	3	5	1
	16	8	7		6	12			5	12	11		8	2	1	1	1	5	6	2	5	8	9	3	9	1	1	1	3	118	45
	B2	1				1		1				1							1	1									5	1	
		2				1	2	1	1				1							2									9	3	
3		1			1	1												2	1	1							2	5	7		
4							1	1			2				1													6	2		
5								1	1	1	1							3			1						2	1			
6												1				1			1	1						1		6	1		
一括					1	1		1										1		1					1			3	1		
B3	1				1									1	2			1	1								1	7	5		
	2	1	1		1													1	1									7	1	5	1
	3						1											2										1			
	4										1				2	1				1	1							3			
	5				1			1	1			1						1	1	1	1							1			
	6								1										1									2			
	7											1							1			1						5	1		
	一括																		3	1	1							5	6		
B4	1				1	1		1			1				1					1								5	5		
	一括		1		6		4	1	3	3	3	4			2	2	1	2	2	2	2	1	1		2	1	1	29	4		
B5	1				1				1										1						1			8	6		
	2	1			1				1	1					1	1		3	1			1				1		13	2		
	3																											1			
	4														1		1	1									1	3	1		
	7							1																				1			
B6	1										1					1			1									7	6		
	4				1							1					1						1					1			

表24-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土メバル属遗体

種類・部位 Grid・Cut	角骨		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		舌顎骨		角舌骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		上擬鎖骨		擬鎖骨	第一 椎骨	腹椎	尾椎	
	R	鋤骨	L	R	L	R	L	R	L	R	R	L	R	L	R	L	R	R	L	R	L						
A1	2																									2	
	3					1					1													1		2	
	4			1														1								2	
	5					1						1														1	
	6					1		1														1				2	
	7						1			1																1	
	8					1		1					1											1			
	9			1				1					1											1	3	2	
	10																	1									
	12				1									1		1										1	1
	15				1									1							1						1
A2	1			1					1				1											1		4	
	2				1			1																			
	3							1					1						1						2		
	4					1																				1	
	5					1		1																			
	6																									1	
	7	1									1															1	
	8				1			1																1	1	4	
	11																									1	
A3	2				1		1																			2	
	3									1																1	
	4											1					1									2	
	6																						1			1	
	8													1												1	
	9													1												1	
	11			1			1												1							3	
A4	1					1								1	1											3	
	6													1												1	
	7																							1			
	計					1								1	1	1									1	4	
A5	3							1																	1		
A6	1					1											1								1	3	
	3		1		1					1												1				2	
	5																					1				1	
	一括																									1	

表24-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土メバル属遺体

種類・部位 Grid・Cut	鋤骨	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		舌顎骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨	主鰓蓋骨		後側頭骨	第一 椎骨	腹椎	尾椎		
		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	R						
B1	1																				1	
	2																			2	2	
	3																	1			1	
	4									1	1	1		1								
	5		1	1																1	2	
	6																				1	
	7						1		1											2		
	8																			1		
	9															1					1	
	11														1							
	13												1									
	14																				1	
	B2	1																			1	
		2								1												
3		1								1				1						1	2	
4																					1	
5																				1	1	
一括													1									
B3	2	1																		1	1	
	4				1															1		
	6				1				1											1		
	8											1									2	
B4	1				1			1					1							2	1	
	一括				1														1	1		
B5	1				1	1		1					1							1	1	
	2											1				1				2	1	
B6	1											1									3	

表25-1 22・23号竪穴上層廃棄層出土アイナメ属・ホッケ属遺体

種類・部位 Grid・Cut	アイナメ属															ホッケ属							
	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		舌顎骨		方骨		角骨		主鰓蓋骨		第一椎骨	腹椎	尾椎	腹椎	尾椎				
	L	R	L	R	L	R	L	L	R	L	R	L	R										
A1	2							1								7		3			1		
	3				1	1										5		10	1				
	4														1	26			1				
	5	3	2		2		3			2			2		3	2	31		48	1	1	4	
	6				1		1				4	3	1	1	1		21		44	1	1	7	
	7	2	1		1	1				1						1	12		36			3	
	8	1				1									1	2	1	2	22	1			
	9		3	4	2					1		2	1			1	38		60		1	10	
	10		1														18		22	2	2	4	
	11		1		1											1	2		4	1	1		
	12		3	1						2	2				2	1		23		30		4	5
	13		1								1						4		11			4	
	14															1	8		8				
	15	1					1										4		20			4	
	16																9	1	23				
	A2	3																	1				
4																				1			
7														1				1					
8																		1					
A3	2								1									2					
	3																1						
	4																	1					
	8														1								
	11		1																				
A4	1																	3		1	1		
	6		1														1		3				
	7																1		1				
A5	3																1						
A6	3												1					1					
	5		1																				

表25-2 22・23号竪穴上層廃棄層出土アイナメ属・ホッケ属遺体

種類・部位 Grid・Cut	アイナメ属																ホッケ属						
	鋤骨	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		舌顎骨		方骨		角骨		主鰓蓋骨		第一椎骨	腹椎	尾椎	腹椎	尾椎			
		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R								
B1	1																3		9			1	
	2				1												1	1	4				
	3				1	1		1			1		2				2	13	1	29			1
	4	1	2	3	2	1	2	1					2	4			1	30	1	46		7	5
	5			1							1	1					2	11	1	33	1		1
	6				2					1	1			1			1	7		23		1	5
	7					1				1				1			1	4	1	10	1		1
	8					1	1			1							2	9		10	1		
	9																1	4		8	13	1	
	10																5	1	18				
	11		1			1	1	1									1	9		24	1		2
	13			1	3				1			1						12		41	2		3
	14				1	1	1				1							8		27			
	15																6		11	1		1	3
	16																		9				
	B2	1																2		1			
2			1							1							1		1				
3																							
4			1														2						
5											1								1		1		1
6																			2		2		
B3	1						1										1						
	2																			1			
	8		1																				
B4	一括									1													
B5	2																		1				
	4		1																				
B6	1						1																

表26 22・23号竪穴上層廃棄層出土カジカ科遺体

種類・部位 Grid・Cut	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		舌顎骨		角舌骨	方骨		角骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		上擬鎖骨		腹椎	尾椎	角骨 R	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				
A1	3					1													1				
	5					1						1					1						
	6																				1		
	7											1	1			1							
	8															1							
	9																			1			
	10																	1					
	12						1					1				1	2						
	16							1															
A2	5					1																	
	6																					1	
	7		1			1																2	
	11													1				1					
A3	2		1										1									2	
	3																					1	
	5											1										1	
	8																1	1				2	
A4	6																		1			1	
	10						1															1	
A6	3						1									1							
	4						1															2	
	5												1									1	
B1	4						1																
	5																					1	
	6																					1	
	7												1	1				1	1				
	9																1						
	11	1						1												1		1	1
	13							1															
B2	2																						
	3																					1	2
	4																						
	6																					1	
B3	1		2																				
	2																						
	3																					1	
	4																					1	
	5																					1	
	7	1																				1	
	8																					1	
B4	1																					2	
	一括																						
B5	1		1																				
	2																					1	
B6	2																					1	

表27 22・23号竪穴上層廃棄層出土  
タイ科・ウミタナゴ属遺体

種類・部位 Grid・Cut	タイ科		ウミタナゴ属		
	角骨		主上顎骨		椎骨
	R	L	L	R	
A1	2			1	
	9				5
	11				7
	12			1	2
A2	7	1			
	9			1	
B1	1				2
	3				1
	4		1	1	1
	5				2
	7			2	
	8			1	1
	9				1
B2	2			1	3

表28 22・23号竪穴上層廃棄層出土ヒラメ科遺体

種類・部位 Grid・Cut	主上顎骨		歯骨		角骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	擬鎖骨		腹椎	尾椎	尾鰭
	L	R	L	R	R	R	L	L	R			
	A1	4										
5				1								
6									1			
7		1										1
9												1
10											1	
12												2
A2	2											1
	4			1	1							1
	6										1	1
	7											2
	8										1	
	11											1
	12									1		
A3	2											1
	6											1
	7											1
	8											1
	11											1
	13											1
	一括											1
A4	1									1		1
A5	7			1								
A6	1											1
	2					1						
	3										1	
	4			1						1		
	一括					1						
B1	3									1		2
	5					1						2
	6										1	1
	7											1
	8											1
	9									1		
	11					1	1		1			2
	14											1
15										1		
B2	5										1	
	6											1
	一括											1
B3	2											1
	3										1	
	4									1		
	7									1		
B4	1											1
	一括			1		1					2	2
B5	1										2	
B6	1										1	1
	2											1
	5									1		

表29-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土カレイ科遺体

Grid・Cut	部位	前上顎骨		主上顎骨		歯骨	舌顎骨		方骨		角骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		擬鰓骨	第一 血管間棘	第一 椎骨	腰椎	尾椎	尾骨	
		L	R	L	R	L	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L						
A1	1																			3		1	
	2			2							1				1					6		5	
	3																			6		4	
	4						2													1		1	
	5										1			1					1	17		25	1
	6	2		1			1	3			1				1				1	5		9	4
	7											1								3		13	
	8						1													5		3	1
	9				1											1			1	31	1	33	
	10																			5		15	
	11									1										2			
	12	1	1				1	1	1		2								1	16		33	1
	13																			2		10	
	14							1												1		9	
	15																		1	13		12	1
	16						7													3		1	
A2	1																1		1				
	2							1						1								1	
	3							1	1	1									1	12		1	
	4			1		1									1					2		2	
	5			1														1		4		1	
	6												1	1						2			
	7											1							1		1	1	
	8			1								1						1	1	10		1	
	10									1										1		1	
	A3	2					1														6		2
3																				3		1	
4						1																1	
5																				3			
6																				3			
7																				1			
8																				4		1	
9																			1				
11					1		1														1		
13																					1		1
A4	1								1											10		1	
	4					1																	
	6			1					1											3			
	7																			2			
A6	1																					1	
	3											1	1	2						2			8
	4					1					1									4		4	
	5				1																	2	

表29-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土カレイ科遺体

部位 Grid・Cut	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		舌顎骨		角骨		方骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		擬鎖骨		第一 血管間棘	第一 椎骨	腹椎	椎骨	尾椎	尾骨		
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R										
B1	1																					2	1	2		
	2																						3		7	1
	3				2		1		2									1					26		18	
	4		1	1	1			1	1	2			1	2							2		6	19	25	
	5								1				2		1					1	1	3	3		16	
	6	1		1						1			2						1		1	1	6		14	
	7																						6		6	
	8								1														7		3	
	9																					1	1		3	
	10																								2	
	11							1	1	1					1						1		4		8	
	13				1																		9	12	12	
	14						1			1													2		6	
	15							1		1	1												7		10	1
	B2	1											1						1				7		2	
2								1		1	1					1				1				3		
3					1					1													3		1	
4								1						1							1		8		1	
5		1											1										3		3	
6											1	1		1					1		1				1	
一括																			1	1	1		3			
B3	1																			2		2		2		
	3							1	1	1			1							1			5		5	
	4																								2	
	5						1																1		1	
	6																				1		2			
	7																				1		4		1	
	8	1		1																	1		5			
	B4	1																					2		1	
一括																							6		2	
B5	1																					2		2		
	2				2				1														3		5	
	4																						1		2	
B6	1																					1				

表30 22・23号竖穴上層廃棄層出土種不明魚類遺体

Grid・Cut	部位	基底 後頭骨	副蝶 形骨	主上顎骨		角骨		方骨		上舌骨	後側頭骨	前上顎骨	遊離齒	方骨 L	腹椎	尾椎
				L	R	L	R	L	R							
A1	1															2
	4											1				
	5		1												7	10
	6		2									1			3	8
	7														2	3
	8															1
	8															1
	9														10	5
	9		4												1	2
	10														4	6
	12														1	3
	13														3	3
	16														1	5
	A2	2														
5																1
A3	2												1			
A4	7													2	1	
A6	3		1													2
	7															1
	一括														1	
B1	1														1	3
	3														1	4
	5															1
	6							1								6
	7						1								2	4
	8		1													
	9														1	8
	10							1								2
	11														5	5
	13														1	2
	14										1				1	6
15														1	1	
B2	2															3
	3				1											
B3	1								1							
	2		1													
	7															3
B5	2					1										
B6	4							1								

表31-1 22・23号竪穴上層廃棄層出土鳥類遺体

Grid	Cut	分類群	部位	点数
A1	1	種不明	胸骨	2
	3	種不明	胸椎	1
		ウミスズメ科	上腕骨R	1
		キタアホウドリ属	上腕骨R	1
	5	種不明	頸椎	2
		種不明	胸椎	1
		種不明	趾骨	1
	6	種不明	胸椎	3
		種不明	複合仙椎	1
	7	キタアホウドリ属	手根中手骨L	1
	8	種不明	胸椎	1
		カモ科	上腕骨L	1
		種不明	脛足根骨L	1
		種不明	趾骨	1
	9	種不明	胸椎	3
		ウ属	脛足根骨L	1
		ウミスズメ科	上腕骨L	1
		種不明	叉骨	1
	12	種不明	趾骨	2
		カモメ属	手根中手骨R	1
		カモメ属	大指基節骨R	1
		種不明	頸椎	1
	14	ウミスズメ科	上腕骨R	1
	15	ウミスズメ科	上腕骨L	1
		ウミスズメ科	上腕骨R	1
		種不明	頸椎	1
		種不明	胸椎	1
	16	ミズナギドリ科	手根中手骨R	1
		ウ属	上腕骨R	1
		カモメ属	尺骨R	1
		種不明	胸椎	1
	A2	種不明	複合仙椎	1
1		ウミスズメ科	大腿骨L	1
4		ウミスズメ科	上腕骨R	1
6		種不明	足根中足骨L	2
7		ウミスズメ科	足根中足骨L	1
8		チドリ目	肩甲骨L	1
		種不明	頸椎	1
9		種不明	尾椎	1
12		種不明	大指基節骨R	1
A3		4	ウミスズメ科	尺骨L
	5	カモメ属	脛足根骨L	1
	6	種不明	頸椎	1
	8	種不明	大指基節骨L	1
11	カモメ属	尺骨R	1	
A4	1	種不明	趾骨	1
	7	ウ属	脛足根骨R	1
	9	種不明	大腿骨L	1
	10	アビ科	烏口骨L	1
A5	1	ウ属	手根中手骨L	1
A6	2	ウ属	上腕骨R	1
	3	種不明	手根中手骨L	1
			大指基節骨L	1
			胸椎	1
			肋骨	2
	4	種不明	大指基節骨L	1
趾骨			1	
		頸椎	2	

表31-2 22・23号竪穴上層廃棄層出土鳥類遺体

Grid	Cut	分類群	部位	点数
B1	3	カモメ属	上腕骨R	1
		種不明	方形骨L	1
			方形骨R	1
	4	ミズナギドリ科	脛足根骨R	1
		カモ科	脛足根骨R	1
		種不明	方形骨R	1
			胸椎	2
			胸骨	1
			趾骨	2
	5	カモメ属	足根中足骨L	1
		ウミスズメ科	橈骨R	1
		種不明	上腕骨R	1
			手根中手骨L	1
			頸椎	1
	7	種不明	上腕骨L	1
	8	ウ属	胸椎	1
			趾骨	1
上腕骨R			1	
上腕骨L			1	
種不明	脛足根骨L	1		
	頸椎	1		
	肋骨	1		
9	種不明	足根中足骨R	1	
10	種不明	胸椎	1	
11	種不明	頸椎	1	
		胸椎	2	
14	ウ属	烏口骨R	1	
	種不明	頸椎	2	
B2	1	種不明	趾骨	1
	3	ウ属	上腕骨L	1
		種不明	趾骨	1
	5	種不明	趾骨	1
	6	種不明	手根中手骨L	1
		大指基節骨R	1	
	一括	種不明	頸椎	1
B3	1	ウ属	手根中手骨L	1
		カモ科	大腿骨L	1
		種不明	上腕骨L	1
	2	種不明	叉骨	1
	4	カモメ属	脛足根骨R	1
5	アビ科	烏口骨R	1	
	種不明	趾骨	1	
B4	一括	カモメ属	大腿骨R	1
		チドリ目	上腕骨L	1
		ウミスズメ科	上腕骨R	1
		種不明	上腕骨R	1
		叉骨	1	
		肋骨R	2	
B5	1	ミズナギドリ科	上腕骨R	1
	2	種不明	脛足根骨L	1
		胸椎	1	
B6	4	種不明	胸椎	1

表32-1 22・23号竪穴上層廃棄層出土陸獣遺体

Grid	Cut	種名	部位	左右	点数	
A	2	エゾタヌキ	踵骨	R	1	
	4	エゾクロテン	上腕骨	L	1	
		キタキツネ	橈骨	L	1	
	6	イタチ属	脛骨	R	1	
		ネズミ類	遊離切歯	不明	1	
		エゾリス	大腿骨	L	1	
	7	ヒグマ	基節骨	不明	1	
	9	中型陸獣	後頭顆	R	1	
	11	ヒグマ	基節骨	不明	1	
		ヒグマ	橈骨	R	1	
	12	テン	脛骨	L	1	
		エゾリス	上腕骨	L	1	
		キタキツネ	下顎遊離歯P4	R	1	
	14	キタキツネ	脛骨	R	1	
		ネズミ類	脛骨	R	1	
		ネズミ類	脛骨	R	1	
	15	ネズミ類	下顎骨	L	1	
		ネズミ類	下顎骨	R	1	
		ネズミ類	上顎切歯	R	1	
		ネズミ類	上腕骨	L	1	
		ネズミ類	大腿骨	R	1	
		ネズミ類	大腿骨	L	1	
		ネズミ類	脛骨	R	1	
	16	ネズミ類	下顎骨	L	1	
		ネズミ類	大腿骨	L	1	
		ネズミ類	大腿骨	R	1	
		イタチ科	橈骨	R	1	
	A2	1	ヒグマ	手根/足骨骨	不明	1
		8	キタキツネ	大腿骨	L	1
	A3	11	エゾクロテン	上腕骨	R	1
		エゾクロテン	脛骨	L	1	
A4	1	イタチ属	尺骨	L	1	
		エゾクロテン	脛骨	L	1	
	5	エゾクロテン	踵骨	R	1	
	7	エゾクロテン	大腿骨	L	1	
	ヒグマ	副手根骨	R	1		
A6	1	キタキツネ	橈骨	L	1	
		エゾタヌキ	尺骨	L	1	
	4	ネズミ類	大腿骨	L	1	
	サブ	キタキツネ	下顎骨	L	1	
	トレ	キタキツネ	下顎骨	R	1	

表32-2 22・23号竪穴上層廃棄層出土陸獣遺体

Grid	Cut	種名	部位	左右	点数	
B1	1	ヒグマ	第三中足骨	L	1	
	2	ネズミ類	遊離切歯	不明	1	
	2	エゾクロテン	上腕骨	R	1	
	3	キタキツネ	距骨	R	1	
		ネズミ類	脛骨	L	1	
	4	エゾクロテン	大腿骨	L	1	
		ネズミ類	大腿骨	L	1	
		ネズミ類	寛骨	L	1	
	6	ネズミ類	寛骨	R	1	
		ネズミ類	大腿骨	R	1	
	13	エゾクロテン	上腕骨	L	1	
	14	ネズミ類	下顎骨	L	1	
		ネズミ類	大腿骨	R	1	
	B2	1	キタキツネ	上顎骨	R	1
3		キタキツネ	橈骨	R	1	
4		エゾクロテン	尺骨	R	1	
6		エゾクロテン	踵骨	R	1	
		ヒグマ	基節骨	不明	1	
13		エゾクロテン	寛骨	R	1	
		ネズミ類	遊離切歯	不明	1	
		ネズミ類	上腕骨	L	2	
		エゾリス	尺骨	R	1	
		エゾシカ	下顎遊離歯I1	L	1	
一括		エゾユキウサギ	肩甲骨	L	1	
B3		4	キタキツネ	軸椎	-	1
			キタキツネ	大腿骨	R	1
	7	ヒグマ	中節骨	不明	1	
		エゾクロテン	下顎遊離歯C	R	1	
8	キタキツネ	尺骨	L	1		
	ネズミ類	大腿骨	R	1		
B4	1	エゾタヌキ	踵骨	R	1	
	一括	エゾクロテン	環椎	-	1	
		ネズミ類	寛骨	R	1	
		ネズミ類	大腿骨	R	1	
		ヒグマ	上顎遊離歯I3	R	1	
	ヒグマ	中節骨	不明	1		
B5	2	エゾクロテン	脛骨	R	1	
	4	エゾクロテン	尺骨	L	1	
	16	キタキツネ	上顎骨	L	1	
		エゾタヌキ	橈骨	L	1	
		ヒグマ	第四中足骨	L	1	

表33-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土アシカ科遺体

部位 Grid・Cut	側頭骨 頬骨突起	後頭骨	後頭頰	尺骨	手根骨	前肢第一 末節骨	大腿骨	脛骨	足根骨	仙椎	末節骨	肋骨		
	L	L	L	R	L	R	R	R	R			L	R	骨幹
A1	3									1				
	5					1								
	9										1			
	10						1							
A2	2												1	
	6					1								
	7							1						
	7							1						
	8											1		
	12		1											
	12							1						1
A3	7								1					
A4	2													1
	2			1										
	6	1												
A5	4					1								
A6	3				1									

表33-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土アシカ科遺体

部位 Grid・Cut	下顎骨	下顎遊離 切歯	肩甲骨	尺骨	手根骨	手根/ 足根骨	寛骨	後肢 第1指	指骨 未癒合 近位端	指骨 左右 不明	胸椎	肋骨
	R	左右不明	R	L	R	不明	L	R		R		
B1	4		1									
	11							1				
	13					1						
	14					2						
B2	6									1		
B3	5											1
B4	一括		1	1			1	1				
B6	3	1								1		

表34-1 22・23号竪穴上層廃棄層出土アザラシ科遺体

部位 Grid・Cut	切歯骨		上顎骨	側頭骨 頬骨突起		側頭骨 鼓室部		後頭顆		下顎骨		下顎 遊離歯		橈骨	尺骨	寛骨		大腿骨		脛骨	腓骨	中足骨			足趾	末節骨	指骨	頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	椎体				
	L	L		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	R	R	L	R	L	R	L	R	第一	第二	不明	R												
			上顎 遊離 大歯																																		
A1	3								1																												
	4																																				
	5																1					1															
	6																																				
	12				1	1		1						1											1												
	13																																				
	14																																				
	15											1										1															
A2	1				1																																
	3																																				
	6				1											1		1																			
	7				1				1													1			1												
	8																																				
	9											1																									
	12																	1	1																		
	16																																				
一括																																					
A3	1				1												1																				
	2						1										1																				
	3				1																																
	4	1			1																																
	5			1	1		1			1		1																									
	7				1					1		1				1																					
	8																	1																			
	11			1								1																									
	13					1																															
	一括																																				

表34-2 22・23号竪穴上層廃棄層出土アザラシ科遺体

部位 Grid・Cut	上顎骨		側頭骨 頬骨突起	側頭骨 鼓室部		後頭顆	下顎骨	下顎 遊離歯	肩甲骨		上腕骨	尺骨	寛骨	大腿骨	踵骨	第五 中足骨			末節骨	指骨	頸椎	胸椎	腰椎	尾椎	椎体	
	L	R	L	L	破片	R	R	R	L	R	R	R	L	破片	L	L	R									
A4	1																									
	2																	1								
	5																			1						
	6																				2					
	8																					2				
10					1							1						1	1		1					
A5	1																									
	4				1																					
	6	1																								
	7					1																				
9																										
A6	1																									
	2																									
	3																									
	4					1																				
	5																									
	一括					1																				



表35-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土

部位 Grid・Cut	頭骨 破片	切歯		中手/中足骨		胸骨	尾椎	椎骨 破片		肋骨			指骨			
		左右 不明	未癒合 遠位端	突起	L			R	骨幹							
A1	4											1	2			
	5							1				2				
	6									1				1		
	7									2		1		4		
	8						1					1				
	9													1	2	
	10														1	
	11											1	2		4	
	12	1					1							3	2	
	13														2	
	14										1				3	1
	15							5								1
	16															1
	A2	2										1	1			
		3														1
		4												1	1	2
5					1											
6										1	1	1	1			
7		1		1								2			3	
8							1									
9												2				
10														1	1	
11															2	
16															1	
A3		5													2	
		6										1				
		7														1
		8										1				
		11													2	1
	13												1			
A4	1												1			
	4											1				
	6	1													2	
	10												1		2	
	1				1								1			
	2														1	
A5	1												1			
	3									1		1	2			
A6	一括													1		

表35-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土 緒脚類遺体

部位 Grid・Cut	上腕骨 遠位部 破片	中手/中足骨			手根/ 足根骨	指骨	胸骨	椎骨破片		肋骨						
		近位部- 骨幹部	骨幹部- 遠位部	遠位部				未癒合 遠位部	突起	椎体	L	R	骨幹			
B1	2						2	1								
	3						2		1		1					
	4						2	4		1		1			2	
	5					1	1	3				1				
	6					1		2			1					
	7							2								
	8	1						3							1	
	9							1		1						
	10														1	
	11						1	2				1				
	13						1	2							1	
	14							1			1				2	
	15					1		2		1						
	16							1				1				
	B2	1		1	1						1					
		4						1								
6							3									
一括															1	
B3	1						2									
	3						2			1						
	4					1	1									
	5						1									
	8						2									
B4	1									1					1	
	一括			1	1		6			1	1	1	3			
B5	1						1									
	2						4									
	3												1			
	4										1					
B6	4						1									

表36 22・23号竖穴上層廃棄層出土鯨類遺体

種類・部位 Grid・Cut	イルカ上科					鯨類 破片
	胸椎	腰椎	尾椎	椎体 破片	肋骨 L	
A1	6			1		
	9			2		
	10					1
	13					1
	14					1
A2	3					2
	7		1			
	16					1
A3	2					1
	4		1			
A5	1					1
B1	3					1
	5					2
	6			1		
	16	1				
B2	4					1
B3	10					1
B4	1					1
	一括					1
B6	1					1

表37 22・23号竖穴上層廃棄層出土種不明大型哺乳類遺体

種類・部位 Grid・Cut	部位	頭骨 破片	椎骨破片		歯根 焼骨 破片
			未癒合遊離 椎頭/椎窩	関節 突起	
A1	3		1		
	4		3		1
	6			1	
	8				1
	9		1		
	16		1		
A2	4		1		
	5		1		
A3	3				1
	5	1			
	11		1		
A4	1		1		
A6	1			1	
B1	2			1	
	3		1		
	4		2		1
	5				2
	7		1		
	8		1		1
	14				1
15		1			
B2	1		2		1
	6		1		
	一括		1		
B3	5		1		
B4	1		1		
	一括		6		
B5	2		1		

表38-1 22・23号竖穴上層廃棄層出土同定不可破片乾燥重量

Grid	Cut	貝類	鯨類	海獸類	破片	燒骨
A1	1			8.8	1.9	10.7
	2			15.2	19.4	10.1
	3				40.2	14.1
	4			11.3	24.6	9.2
	5			21.5	202.8	25.8
	6			8.3	130.5	33
	7			10.4	70.3	15.3
	8			3.0	48.9	12.6
	9			16.9	149.3	3.4
	10				27.3	13.5
	11				41.7	13.9
	12				186.5	31.1
	13				50.0	
	14				52.0	4.2
	15				206.3	1.2
	16				375.1	0.9
A2	1				7.2	18.4
	2				16.7	22.1
	3	0.9			42.9	30.1
	4				1.7	
	5			2.5	35.3	20.2
	6			16.4	16.7	15.7
	7				30.1	26.0
	8			0.6	18.6	20.3
	9				14.1	3.7
	10				5.2	7.4
	11				20.2	35.0
	12				2.1	1.3
	13				11.5	
	16				41.0	2.4
一括				15.5		
A3	1				9.2	3.7
	2				25.6	34.0
	3				15.2	27.3
	4				11.5	19.9
	5				18.3	28.2
	6				19.0	10.8
	7				14.7	9.6
	8				5.8	17.6
	9				0.4	1.6
	10				0.7	0.8
	11	0.5			12.8	6.9
	13				7.3	12.0
	14				2.6	5.9
	一括			2.9	13.4	
A4	1	1.0			25.5	27.7
	2					19.7
	4				37.5	25.9
	6				11.3	12.5
	7		2.0		6.1	16.7
	10			10.6	6.8	
A5	1			204.3	9.7	4.1
	2				3.5	2.7
	3				0.7	9.3
	4				0.3	7.5
	6				0.2	2.1
	7				1.2	

表38-2 22・23号竖穴上層廃棄層出土同定不可破片乾燥重量

Grid	Cut	貝類	鯨類	海獸類	破片	燒骨	
A6	1			3.8	8.6	14.6	
	2					9.3	
	3	0.1		12.9	35.9	14.2	
	4				33.8	30	
	5				13.3	23.4	
	6					0.8	
	7					0.1	1.2
	一括				1.3	10.1	
	B1	1				18.4	3.1
2				8.3	39.1	19.3	
3					133.1	35.6	
4					272.7	36.8	
5					68.7	51.7	
6				11.6	78.2	30.9	
7					681.3	29.1	
8					33.3	43.3	
9					33.6	27.1	
10				4.0	23.5	14.0	
11				3.9	110.4	37.2	
13				21.8	113.2	17.5	
14				3.3	96.4	15.4	
15					86.1	14.8	
16				3.7	87.7	0.8	
B2		1					9.0
	2				24.1	21.6	
	3				37.9	20.0	
	4			1.8	40.9	29.7	
	5				37.3	55.1	
	6	0.7			32.8	27.9	
	13			3.0			
	一括			17.0	7.2	16.3	
	B3	1			4.8	65.3	11.8
		2				35.2	13.1
3		0.3			16.0	18.2	
4					17.1	19.8	
5					11.1	15.0	
6					5.2	8.0	
7				1.6	475.1	31.1	
8					31.1	24.8	
一括						3.5	
B4		1	2.2		4.0	26.2	6.5
	一括			32.6	62.0	50.6	
B5	1				23.1	20.4	
	2				31.6	16.5	
	3				0.1		
	4				14.5	36.9	
	5				13.1		
	7					0.8	
B6	11					0.1	
	1			1.8	21.0	3.9	
2			6.2	4.4			
計		5.7	2.0	478.8	5165.9	1648.9	

表39 包含層出土動物遺体

層位	地区	種名	部位	点数
I 層	TR4	中型陸獣	椎体破片	1
		アザラシ科	後頭顆R	1
		焼骨破片19.1g		
	TR6	ヒグマ	下顎第二大臼歯R	1
		アザラシ科	指骨	1
		鯨脚類	指骨	1
			椎骨椎体部	1
		鯨類	椎骨椎体部	2
焼骨破片30.6g				
II 層	TR4	ネズミザメ科	遊離歯	1
		サケ属	椎骨	1
		タラ科	腹椎	1
		アイナメ属	鋤骨	1
		中型陸獣	大腿骨L	1
		アザラシ科	後頭顆L	1
			下顎骨L	1
	海獣類焼骨破片6.7g, 焼骨破片35.7g			
	TR5	鳥類種不明	尺骨骨幹部	1
		エゾクロテン	下顎骨L	1
			第二中足骨R	2
		鯨脚類	肋骨	1
	大型哺乳類焼骨破片5.3g, 焼骨破片4.2g			
	不明	焼骨破片7.2g		
III 層	TR4	海獣類焼骨破片2.3g, 焼骨破片6.5g		
	計	海獣類焼骨破片9.0g, 大型哺乳類焼骨破片5.3g, 焼骨破片103.3g		20



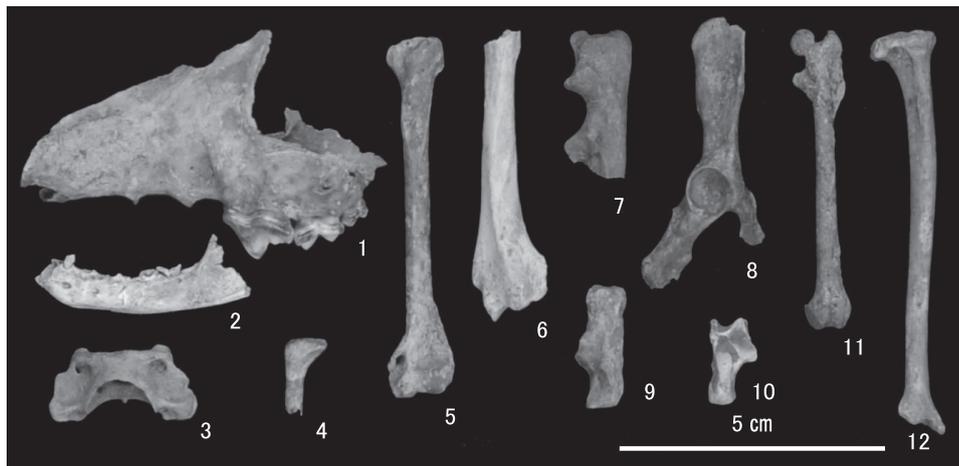
図版1 魚類遺体

1: サケ属前上顎骨L, 2: タラ科前上顎骨L, 3: アイナメ属前上顎骨L, 4: メバル属前上顎骨R, 5: カジカ科前上顎骨L, 6: メバル属主上顎骨L, 7: アイナメ属歯骨, 8: ウミタナゴ属歯骨R, 9: スケトウダラ歯骨L, 10: タラ科, 11: カジカ科歯骨L, 12: ヒラメ科主上顎骨L, 13: ヒラメ科歯骨R, 14: サケ属歯骨L, 15: メバル属歯骨R, 16: タラ科主上顎骨R, 17: カレイ科主上顎骨R, 18: アイナメ科主上顎骨L, 19: 貝類破片, 20: ニシン亜科歯骨L, 21: ウグイ属歯骨L, 22: カレイ科歯骨R, 23: カレイ科角骨L, 24: ヒラメ科角骨R, 25: メバル属角骨L, 26: ウグイ属下咽頭骨R, 27: タイ科角骨R, 28: タラ科角骨L, 29: カジカ科角骨L, 30: メバル属方骨R, 31: カレイ科方骨L, 32: タラ科方骨L, 33: タラ科前鰓蓋骨R, 34: イトウ椎骨, 35: サケ属椎骨, 36: アイナメ属尾椎, 37: ニシン亜科主鰓蓋骨R, 38: アイナメ属主鰓蓋骨, 39: カジカ科主鰓蓋骨R, 40: ヒラメ科舌顎骨R, 41: カレイ科第一血管間棘, 42: ヒラメ科擬鎖骨L, 43: サケ属擬鎖骨L, 44: カレイ科前鰓蓋骨L, 45: タラ科第一椎骨, 46: タラ科尾椎, 47: タラ科主鰓蓋骨R, 48: ウグイ属主鰓蓋骨R, 49: アイナメ属舌顎骨R, 50: ニシン亜科舌顎骨L, 51: カレイ科舌顎骨R, 52: メバル属舌顎骨L, 53: メバル属前鰓蓋骨R, 54: カジカ科前鰓蓋骨L, 55: カジカ科上擬鎖骨R, 56: ネズミザメ椎骨, 57: タラ科副蝶形骨, 58: ニシン亜科第一椎骨, 59: アイナメ属第一椎骨, 60: アイナメ属尾椎, 61: ウグイ属尾椎, 62: メバル属第一椎骨, 63: メバル属腹椎, 64: ヒラメ科尾椎, 65: ヒラメ科尾鱗, 66: タラ科鋤骨



図版2 鳥類遺体

1: 鳥類頸椎, 2: 鳥類胸椎, 3: 鳥類胸骨, 4: アビ科鳥口骨, 5: ウミスズメ科上腕骨L, 6: ウミスズメ科上腕骨L, 7: カモ科上腕骨L, 8: ウ属上腕骨R, 9: カモメ属脛足根骨, 10: ウミスズメ科足根中足骨L, 11: ウミスズメ科尺骨L, 12: カモメ属手根中手骨R, 13: キタアホウドリ属手根中手骨L, 14: ミズナギドリ科上腕骨R, 15: カモメ属上腕骨L, 16: ウミスズメ科大腿骨L, 17: カモメ属上腕骨L, 18: カモ科大腿骨L, 19: 鳥類前肢大指基節骨L



図版3 ヒグマ以外の陸獣遺体

1: キタキツネ上顎骨L, 2: エゾクロテン下顎骨L, 3: エゾクロテン環椎, 4: エゾシカ下顎第一切歯L, 5: エゾクロテン上腕骨L, 6: エゾタヌキ橈骨L, 7: キタキツネ尺骨L, 8: エゾクロテン寛骨R, 9: エゾタヌキ踵骨R, 10: エゾユキウサギ距骨R, 11: エゾリス上腕骨L, 12: エゾクロテン脛骨R



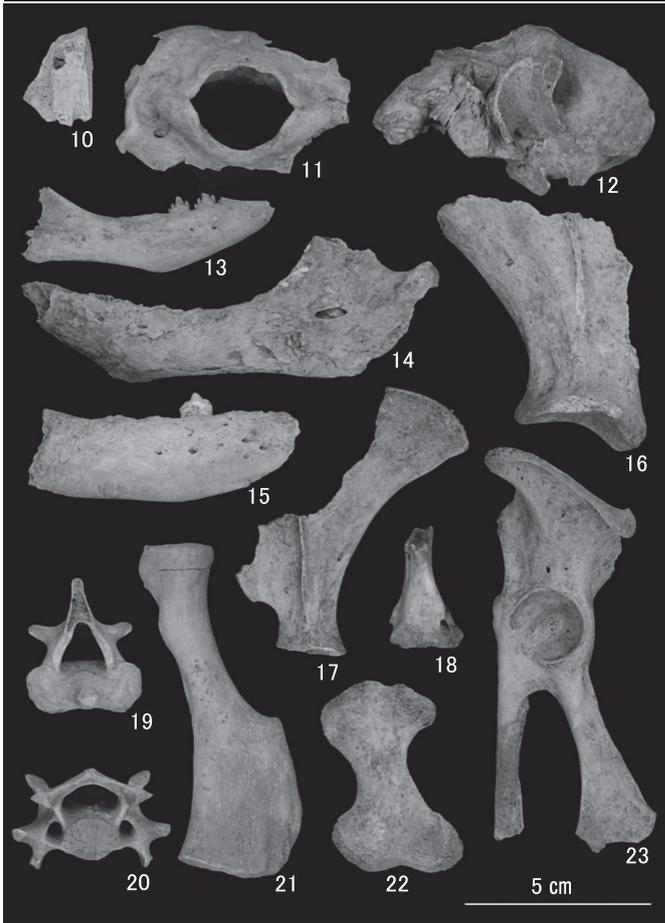
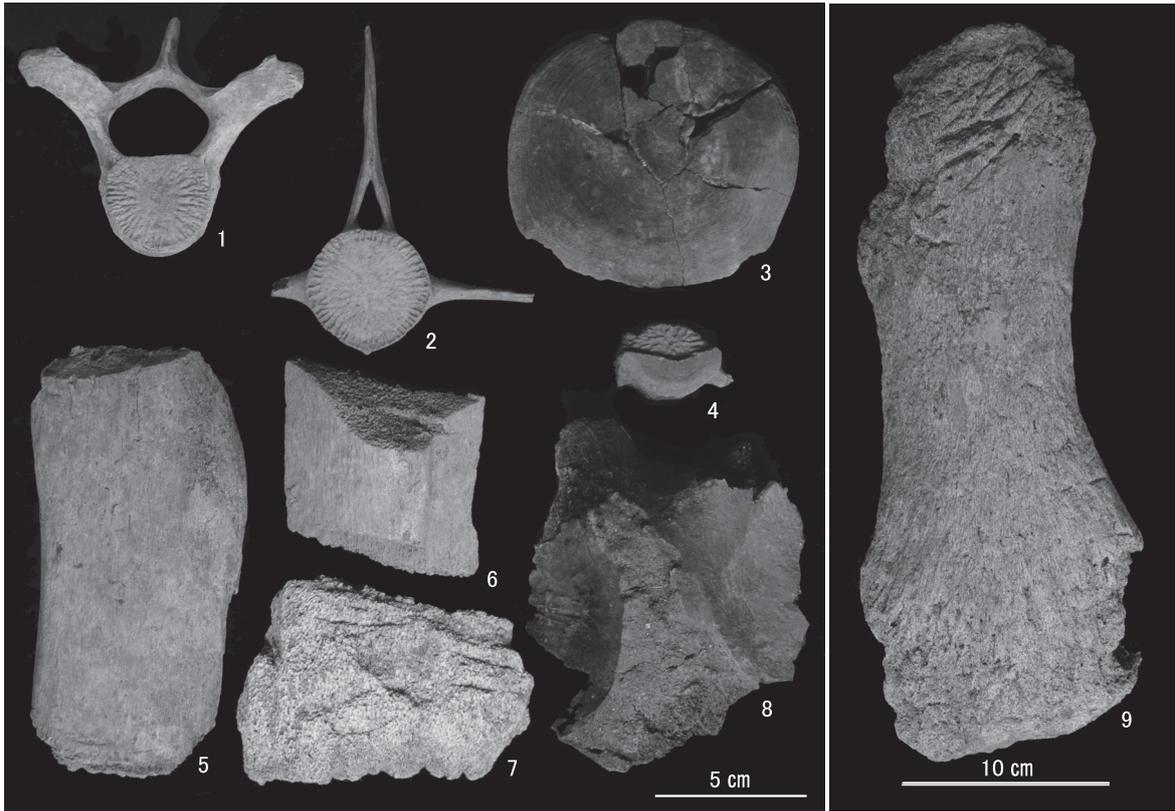
図版4 ヒグマ遺体

1: 下顎第三切歯R, 2: 下顎犬歯R, 3: 下顎第一大臼歯R, 4: 下顎第二大臼歯R, 5: 膝蓋骨L, 6: 橈骨R, 7: 寛骨(腸骨)L, 8: 仙椎, 9: 距骨, 10: 第四足根骨R, 11: 踵骨, 12: 第四中足骨L, 13: 第三足根骨R, 14: 尺側手根骨L, 15: 基節骨, 16: 中節骨, 17: 末節骨, 18: 副手根骨R, 19: 第五中足骨R, 20: 脛骨R, 21: 大腿骨L



図版5 アシカ科遺体

1: 脛骨L, 2: 胸椎, 3: 前肢第一末節骨R, 4: 指骨, 5: 肩甲骨R, 6: 大腿骨(矢印部分にカットマーク), 7: 尺骨L, 8: 中手または中足骨(白矢印部分にカットマーク), 9: 脛骨R



- 1: マイルカ上科胸椎
- 2, 4: マイルカ上科腰椎
- 3: クジラ目椎骨
- 5~7, 9: カットマークを持つ鯨骨片
- 8: クジラ目肩甲骨L
- 10: アザラシ科切歯骨R
- 11: アザラシ科後頭骨
- 12: アザラシ科側頭骨L
- 13: ワモンアザラシ下顎骨R
- 14: アゴヒゲアザラシ下顎骨L
- 15: ゴマフアザラシ下顎骨R
- 16: アザラシ科肩甲骨R
- 17: アザラシ科肩甲骨L
- 18: アザラシ科上腕骨R
- 19: アザラシ科軸椎
- 20: アザラシ科頸椎
- 21: アザラシ科橈骨R
- 22: アザラシ科大腿骨R
- 23: ゴマフアザラシ寛骨L

図版6 鯨類・アザラシ類遺体

## 第9節 チャシコツ岬上遺跡から検出された植物遺体

### 1. はじめに

ここで取り扱った資料は、斜里町ウトロ市街地南西に位置したチャシコツ岬上遺跡で、平成13年度から平成16年度にかけて発掘調査されたトレンチ2～7で検出された土坑、竪穴住居跡、積石墓、遺物包含層等から採取された土壌のフローテーション作業で得られた浮遊した炭化物と沈殿物である。採取された資料中から炭化種子を抽出するにあたっては実体顕微鏡を使用し、堅果の子葉、堅果皮片、穎果、果実、種子、小核の選別を行い、堅果皮片については重量を測定して表示し、子葉については縫合面で半割されたものを1個としてとらえて個数で表示し、果実、種子、小核については出土数を表示した。

なお、資料中には炭化した数多くの樹木の冬芽と、食用できない炭化種子が含まれていたが、それらについては対象としなかった。

### 2. 出土した植物遺体

炭化物中から作物種子1種類、野生植物の堅果、子葉、果実・種子など7種類が出土した。

#### A. 作物種子

1) オオムギ (*Hordeum vulgare* L.) 穎果：トレンチ5で発掘されたPit3竪穴住居床から2粒、同じくトレンチ5で発掘されたPit4積石墓覆土から14粒、トレンチ7のB-1、Cut4の廃棄層から2粒出土した。いずれも長楕円形で、腹面に縦溝があり、背面はほぼ平らで基部に円形の臍がある。出土したものは全てが多孔性で、煮沸されふやけたものが炭化した状態を示している。比較的小粒のオオムギで、計測可能な12粒の大きさは長さが3.9～5.3mm、幅2.8～3.9mmで、計測平均値は長さ4.56mm、幅3.88mm、長さ／幅の値が1.17である。穎果の形態、腹面の縦溝、背面にみられる円形の臍の存在、計測値から、出土したオオムギは裸性のオオムギと判断した。写真1a,b～4a,bはトレンチ5Pit4積石墓覆土から出土したオオムギで(aが腹面、bが背面)、1は長さ5.3mm、幅3.9mm、2は長さ5.1mm、幅3.6mm、3は長さ4.8mm、幅3.0mm、4は長さ4.2mm、幅3.4mmである。5a,bはトレンチ7B-1、Cut4廃棄層から出土したオオムギで、長さ4.3mm、幅

3.5mm、6a,bはトレンチ5Pit3竪穴住居床面から出土したオオムギで、長さ4.4mm、幅3.8mmである。

#### B. 野生植物

1) オニグルミ (*Juglans ailanthifolia* Carr.) 堅果皮片：堅果内の子葉を食するために割った際に生じた表面に皺が発達した堅果皮片とその細片が各トレンチから多量出土したが、トレンチ5やトレンチ7から比較的多く出土している。表には出土量が1g未満のもの、1～3gのもの、3g以上の3つに区分して表示した。写真16はトレンチ5Pit4積石墓覆土から比較的多く出土したオニグルミ堅果皮片である。

2) コナラ亜属 (*Quercus* sp.) 子葉および子葉片：縫合面から剥離した、半割された楕円形ないしは狭楕円形で、表面に弱い皺がみられる炭化した子葉片もしくは破片が各トレンチから出土しているが、トレンチ4で多く出土している。計測可能な7個体は長さが15.3mm～19.0mm、幅10.0mm～12.7mmで、幅／長さの値が0.57～0.68で、この値は山田(1990)が帯広市八千代遺跡で出土したドングリについて報告した際に参考とした現生のミズナラの子葉の値に近いことから、出土したコナラ亜属の子葉はミズナラの子葉であると判断した。

写真13a,bはトレンチ4、Pit2a(土坑)から出土したもので長さ16.5mm、幅0.8mm、14a,bもトレンチ4、II層(異物包含層)出土で、長さ15.5mm、幅10.0mm。15a,bもトレンチ4、Pit2b(土坑)出土で、長さ18.0mm、幅10.7mmである。

3) キハダ (*Phellodendron amurense* Rupr.) 果実・種子：ほぼ円形であるが一部が破損して、果肉中の種子の一部がみえる果実がトレンチ7、B-1、Cut3から1点出土した。大きさは直径7.8mm。また、表面に浅い凹みによる網目状模様が発達した、半横広卵形ないしは三日月状で扁平な炭化した種子が、トレンチ7の各層から出土。写真7はトレンチ7A-1、Cut5の廃棄層から出土した種子で、大きさは幅4.7mm、長さ2.6mm。

4) ブドウ属種子 (*Vitis* sp.) 種子：広卵状球形で、背面は円くその先端が尖り、縦に凹んだ臍があり、腹面には縦溝がありその両側に倒皮針形の凹みがある炭化種子。写真10a,bはトレンチ7、B-1、Cut2から出土したもので、大きさは長さ4.5mm、幅3.8mmである。この

種子以外は全て破片である。

北海道東部に分布するブドウ属はヤマブドウ (*Vitis coignetiae* Pulliat) のみであるが、類似した形態を持つものにノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata* Maxim.) があることからブドウ属として扱ったが、ノブドウの種子背面の臍部には凹みがなく、唯一完形の種子であった写真10の種子には凹みがあったことからヤマブドウと判断した。トレンチ7のA-1廃棄層、B-1表土、廃棄層から出土。

5) モクレン属 (*Magnolia* sp.) 種子：種皮に多くの浅い縦溝があり、扁平で円みがある横広円形の種子で、腹面中央に幅広い縦溝がある。北海道に自生するモクレン属には、ホウノキ (*Magnolia obovata* Thun.) とコブシ (*Magnolia kobus* var. *borealis* Sarg.) が分布するが、出土した種子は部分的に欠損したものであることからホウノキ属にとどめた。写真9はトレンチ7、A-1、Cut9から出土したもので、大きさは長さ8.1mm、幅6.2mmである。他にトレンチ7のA-1、Cut8とB-1、Cut11から出土。ホウノキ、コブシともに果肉を煎じたものが薬用として利用されたと考えられる。

6) タラノキ属 (*Aralia* sp.) 種子：半円形の種子で、種皮は小さな凸凹が多いスポンジ状である。背腹両面は扁平な狭線状長楕円形で、背面の中央に稜があり、両側面の上方には縦溝が2列並ぶ。北海道に分布するタラノキ属には灌木のタラノキ (*Aralia elata* Miq.) と草本のウド (*Aralia cordata* Thunb.) があり、タラノキは若芽が、ウドは若い根茎が食用できる。トレンチ7、B-1、Cut7から7個出土したがいずれも未炭化。写真11の大きさは幅2.1mm、長さ1.5mmである。

7) エゾニワトコ (*Sambucus racemosa* var. *Miquelii* Nakai) 小核：核面の長軸に直角なイボ状隆条が並んだ狭楕円形な小核。側面は扁平な半狭楕円形。トレンチ7、B-1、Cut7から4粒出土したが、いずれも未炭化。写真12の大きさは、長さ3.0mm、幅1.6mmである。

### 3. チャシコツ岬上遺跡での植物利用

チャシコツ岬上遺跡の遺構や遺物包含層からは作物種子の裸性オオムギと野生植物のオニグルミ堅果皮片、ミズナラの子葉、キハダと果実と種子、ヤマブドウの種子、モクレン属とタラノキ属種子、エゾニワトコの小核が出土した。エゾニワトコについてその利用法が不明であるが、他の植物は子葉や穎果、果実や若芽もしくは根

茎の食用が可能である。ここではミズナラの子葉とオオムギの穎果についてとりあげることにする。

#### 1) ミズナラの子葉について

ミズナラの子葉には多量のタンニンが含まれており、タンニンを除去しなければ渋くて食用とするのが困難である。タンニンの除去方法としては渡辺(1975)によって、縄文時代には水晒しと木灰を利用した加熱処理があげられているが、いずれも近世、近代の民間例である。実際にどのような方法を用いてコナラ亜属のドンダリを食用としてきたのかは不明である。ただ、北海道に居住してきたアイヌ民族には、樹木の果実や動物のあらとともに煮込むことによってタンニンの渋さを和らげて食用する方法が伝えられていた(辻1983)。

辻(1983)によると、十勝地方のアイヌは冬に堅果皮と渋皮を除去したコナラ亜属の子葉と乾燥したキハダの果実、動物や魚のあらと煮込み、凍らせてシャーベット状にして食用したとされている。チャシコツ岬上遺跡からもキハダの果実や種子が出土していることから、オホーツク文化の集団も同様にしてコナラ亜属の子葉を食用にしていた可能性が考えられる。

#### 2) オオムギの穎果について

斜里町ウトロでは平成16年度～18年度、平成20年度にかけて、一般国道334号線ウトロ国道改良工事に伴う緊急発掘が行われ、縄文時代後期からオホーツク文化期、擦文文化期の遺跡が発掘されている。その際、平成20年度に発掘されたオホーツク文化の刻文期および貼付文期の遺跡から多量の裸性オオムギとアワが出土している(山田2011)。このたびの発掘調査でもオホーツク文化の住居床面と、積石墓覆土、トレンチ7の廃棄層から裸性オオムギが出土したが、平成20年度に発掘調査された際に出土した量に比較するときわめて少ない量であった。このたびの発掘調査で出土した穀物は少量であったが、チャシコツ岬上遺跡内でも穀物利用が行われていたことは確実に、今後発掘対象区域が拡大された際にもその出土が期待されることから、アワやキビといった微小な穀物も逃さない調査が必要となる。

オホーツク文化期の遺跡から裸性オオムギなどの穀物が出土することは、網走市二ツ岩遺跡の貼付文期の住居内に設置された骨塚から裸性オオムギ、アワ、キビの出土が報じられたのが最初である(山田・椿坂・右代1991)。

以後、枝幸町目梨泊遺跡、雄武町雄武堅穴群遺跡、湧

別町川西遺跡から裸性オオムギ、アワ、キビの出土が、2009年には網走市モヨロ貝塚の刻文期の住居跡内から裸性オオムギ、アワ、キビ、モロコシ、アサの出土が報じられ（山田2009）、オホーツク文化の集団による穀物利用は6～7世紀頃の刻文期までさかのぼることが明らかとなっている。当時は北海道中央部では擦文文化が展開され、アワ、キビ、皮性オオムギなどを栽培する雑穀農耕が展開されていたが、擦文文化が利用していたオオムギは皮性オオムギであって、裸性オオムギではなかった点が重要となる。オホーツク文化の集団が利用していたこれらの穀物は、オホーツク文化の集団によった大陸との交易によって、大陸製品とともに北海道にもたらされていたものである（山田・椿坂1995）。

ウトロ遺跡からの裸性オオムギ、アワの出土でその南限が知床半島まで拡大されており、穀物利用がオホーツク文化圏のどこまで拡大するかが今後の検討課題となる。

次に、オホーツク文化期の集団が利用していた穀物すべてが大陸からの渡来品であったのか、初期には渡来品であったが後に自らが栽培したのかが問題となる。従来の見解どおりオホーツク文化の集団が農耕活動を行わなかったとすると、6～9世紀の間に食用となって消化されてしまう裸性オオムギやキビ、アワなどの穀物は継続して大陸から持ち込まれていたことになる。約4世紀にわたって穀物がもたらされる継続的な接触が保たれていたとすると、遺跡から出土する大陸製品も多種多様なものになっていたと考えられる。

しかし、オホーツク文化の遺跡から大陸製品が出土するがその数は決して多いものではなく、オホーツク文化期のすべての時期に普遍的に見られるものではない。大陸製品をめぐっては、天野（1994）によって、帯飾や鉾などの大陸製品がもたらされた時期はきわめて限られたものであり、その時期は7世紀頃に求められると指摘

されているとおりである。

当初は輸入食料として裸性オオムギなどの穀物であったが、その有用性からオホーツク文化の集団内での栽培化が始まり、発芽可能な状態で種子が維持されていたことによって、後に擦文文化に吸収された際にその栽培が受け継がれたものと考えられることから、オホーツク文化の集団によった農耕活動についても今後の検討課題となる。

（山田 悟郎：元北海道開拓記念館学芸員）

#### 引用・参考文献

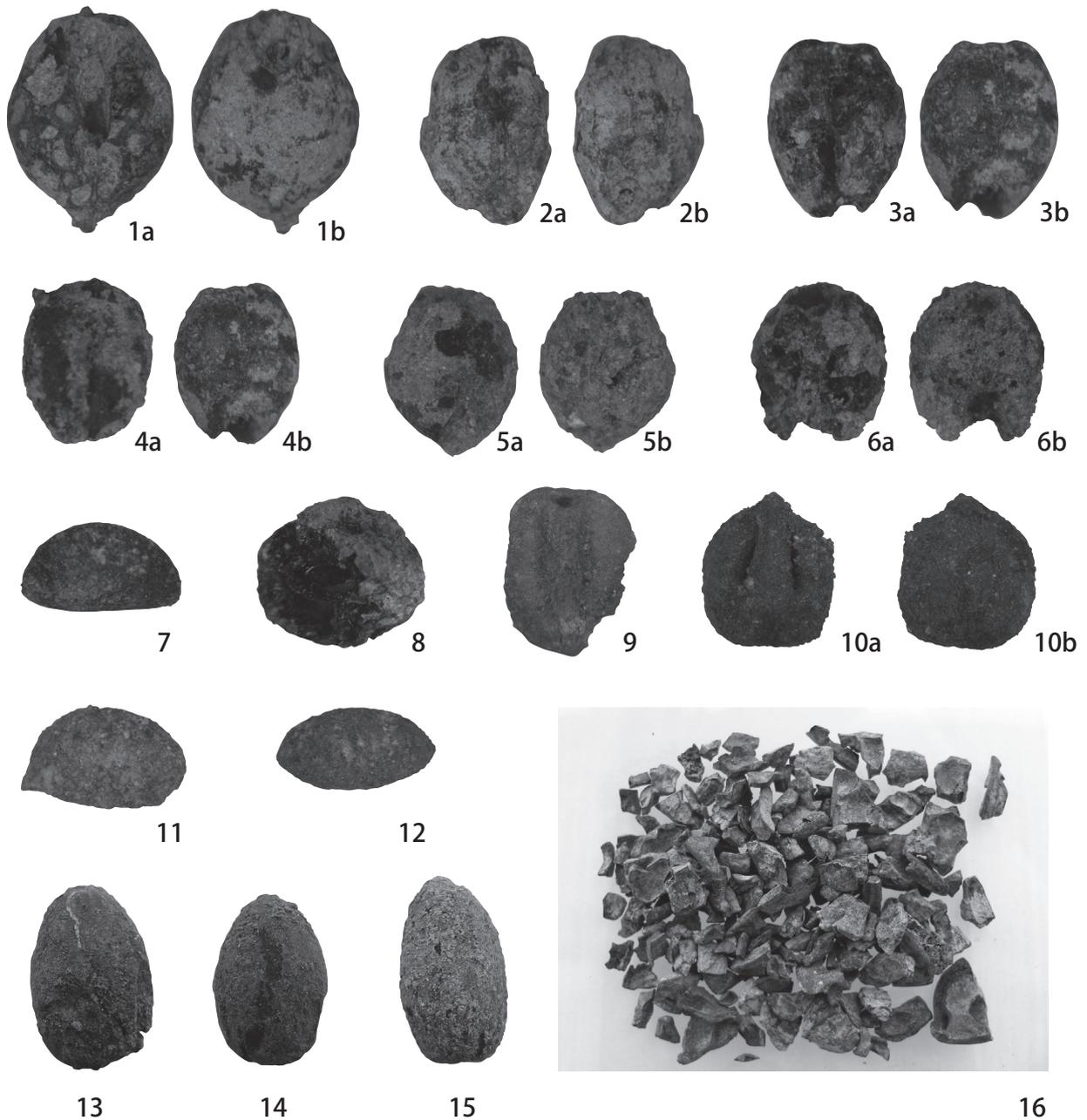
- 天野哲也.1994.「オホーツク文化期北海道にもたらされた帯飾板の背景」『北方史の新視座 外政策と文化』.pp45-73.雄山閣
- 辻 秀子.1983.「可食植物の概観」『縄文文化の研究』2、生業.pp18-41.雄山閣
- 山田悟郎.1990.「八千代A遺跡から出土した堅果と果実」『帯広・八千代A遺跡』.pp49-57.帯広市教育委員会
- 山田悟郎.2009.「モヨロ貝塚の住居跡および墓壇から検出された植物遺体について」『史跡最寄貝塚』.pp413-423.網走市教育委員会
- 山田悟郎.2011.「ウトロ遺跡から出土した植物遺体分析結果について」『ウトロ遺跡』.pp382-388.斜里町教育委員会
- 山田悟郎・椿坂恭代・右代啓視.1991.「網走二ツ岩遺跡から出土した栽培植物」『北海道開拓記念館調査報告』第30号.pp27-38.
- 山田悟郎・椿坂恭代.1995.「大陸から伝播してきた栽培植物」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』.pp107-134.北海道開拓記念館
- 渡辺 誠.1975.『縄文時代の植物食』考古学選書13、雄山閣

第1表 出土した植物遺体

調査区	層位	取り上げ番号	オオムギ穎果(個)	オニグルミ堅果皮片	コナラ亜属子葉(個体)	キハダ果実(個)	キハダ種子(個)	ブドウ属種子(個)	モクレン属種子(個)	タラノキ属種子(個)	エゾニワトコ種子(個)
トレンチ2	表土	233	—	○	—	—	—	—	—	—	—
トレンチ3	II層(包含層)	113	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
トレンチ4	表土	511	—	—	2	—	—	—	—	—	—
	II層(包含層)	224	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		225	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		257	—	—	1/3	—	—	—	—	—	—
		262	—	—	1/4	—	—	—	—	—	—
		396	—	—	1	—	—	—	—	—	—
		872	—	—	1/4	—	—	—	—	—	—
		905	—	—	1	—	—	—	—	—	—
		914	—	—	1	—	—	—	—	—	—
		933	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		934	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
	1233	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—	
	III層(包含層)	1169	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	Pit1(積石墓覆土)	910土器内	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	Pit2a(土坑)	370	—	—	1	—	—	—	—	—	—
		407	—	—	1	—	—	—	—	—	—
		534	—	—	2	—	—	—	—	—	—
		554	—	—	2	—	—	—	—	—	—
		575	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		579	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		660	—	—	1/4	—	—	—	—	—	—
		728	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		739	—	○	—	—	—	—	—	—	—
814		—	—	1/4	—	—	—	—	—	—	
815	—	—	1/3	—	—	—	—	—	—		
877	—	—	1/4	—	—	—	—	—	—		
Pit2b(土坑)	1043	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—	
	1052	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—	
	1139	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—	
トレンチ5	Pit3(竪穴住居覆土)	271	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		691	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		707	—	—	1/2	—	—	—	—	—	—
		1644	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		2063	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		2622	—	●	—	—	—	—	—	—	—
	212	—	○	—	—	—	—	—	—	—	
	Pit3(竪穴住居覆土)	285	—	◎	—	—	—	—	—	—	—
		895土器内	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	Pit3(竪穴住居床)	1866土器内	—	●	—	—	—	—	—	—	—
		1869土器内	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	Pit3(竪穴住居床直)	2192土器内	2	○	—	—	—	—	—	—	—
2298		—	●	—	—	—	—	—	—	—	
		2353	—	○	—	—	—	—	—	—	

調査区	層位	取り上げ番号	オオムギ穎果(個)	オニグルミ堅果皮片	コナラ亜属子葉(個体)	キハダ果実(個)	キハダ種子(個)	ブドウ属種子(個)	モクレン属種子(個)	タラノキ属種子(個)	エゾニワトコ種子(個)
トレンチ5	Pit3 (竪穴住居床直)	2383	—	◎	—	—	—	—	—	—	—
		3044	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		3046	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		3069	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		3105	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		3178	—	◎	—	—	—	—	—	—	—
	Pit3 (竪穴住居床面)	438	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		746	—	◎	—	—	—	—	—	—	—
		炉、東	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	Pit3 (竪穴住居)	炉、西	—	●	—	—	—	—	—	—	—
		炉、石囲	—	●	—	—	—	—	—	—	—
		3008	—	—	1/5	—	—	—	—	—	—
	Pit4 (積石墓覆土)	3035	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		3125	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		14	●	—	—	—	—	—	—	—	
トレンチ7	表土	A-1,Cut2	—	○	—	—	2	—	—	—	—
		A-1,Cut3	—	●	—	—	7	—	—	—	—
	廃棄層	A-1,Cut4	—	○	—	—	3	1	—	—	—
		A-1,Cut5	—	○	—	—	4	—	—	—	—
		A-1,Cut6	—	○	—	—	—	—	—	—	—
		A-1,Cut7	—	◎	—	—	2	—	—	—	—
		A-1,Cut8	—	○	—	—	1	—	1	—	—
		A-1,Cut9	—	◎	—	—	2	—	1/2	—	—
		A-1,Cut10	—	○	—	—	2	—	—	—	—
		A-1,Cut11	—	○	—	—	3	1	—	—	—
		A-1,Cut12	—	◎	1/4	—	4	—	—	—	—
	排土	A-1,Cut13	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	魚骨集中	A-1,Cut16	—	○	—	—	—	—	—	—	—
	表土	B-1,Cut1	—	○	—	—	2	—	—	—	—
		B-1,Cut2	—	◎	—	—	2	1	—	—	—
		B-1,Cut3	—	○	—	1	5	—	—	—	—
	廃棄層	B-1,Cut4	2	○	1/4	—	3	—	—	—	—
		B-1,Cut5	—	○	1/4	—	6	—	—	—	—
		B-1,Cut6	—	◎	—	—	9	—	—	—	—
		B-1,Cut7	—	◎	—	—	10	—	—	7	4
		B-1,Cut8	—	◎	—	—	7	5	—	—	—
		B-1,Cut9	—	◎	—	—	1	1	—	—	—
		B-1,Cut10	—	◎	1/4	—	4	1	—	—	—
B-1,Cut11		—	◎	1/2	—	—	1	1	—	—	
排土	B-1,Cut13	—	○	—	—	1	—	—	—	—	
住居排土	B-1,Cut15	—	○	—	—	—	—	—	—	—	
魚骨集中	B-1,Cut16	—	—	—	—	—	1	—	—	—	

○ 1g以下 ◎ 1~3g ● 3g以上



**図版説明** (a、腹面、b、背面)

1a,b~4a,b、裸性オオムギ、トレンチ5 Pit4積石墓覆土

5a,b、裸性オオムギ、トレンチ7 B-1 Cut4

6a,b、裸性オオムギ、トレンチ5 Pit3竪穴住居床

7、キハダ種子、トレンチ7 A-1 Cut5

8、キハダ果実、トレンチ7 B-1 Cut3

9、モクレン属種子、トレンチ7 A-1 Cut9

10a,b、ブドウ属種子、トレンチ7 B-1 Cut2

11、タラノキ属種子、トレンチ7 B-1 Cut3

12、エゾニワトコ小核、トレンチ7 B-1 Cut3

13、コナラ亜属子葉、トレンチ4 Pit2a土坑

14、コナラ亜属子葉、トレンチ4 II層(遺物包含層)

15、コナラ亜属子葉、トレンチ4 Pit2b土坑

16、オニグルミ堅果皮片、トレンチ5 Pit4積石墓覆土

## 第4章 総括

### 第1節 発掘調査の成果

5ヶ年に及ぶ調査の結果、チャシコツ岬上遺跡はオホーツク文化終末期～トビニタイ文化期にかけてのごく短期間に利用された集落跡であることが明らかとなった。集落内には窪地となって残る31軒の竪穴住居のほか、積石を伴う土坑墓、配石を伴う土坑、窪地を利用した廃棄層、多様な配石遺構など様々な遺構が構築されており、限定的な空間に密集して遺構を築くオホーツク文化的な在り方が認められる。本節では発掘調査によって確認された遺構や遺物についての成果を総合的に評価し、遺跡の内容理解を深めることとしたい。

#### 1. 遺構

オホーツク文化の集落を構成する代表的な要素として竪穴住居、墓、廃棄層の3点が挙げられる。本遺跡ではそれらすべてが検出され、特異な立地にも関わらず、チャシコツ岬上で完結した恒常的な集落機能を保持していたことが明らかとなった。以下、これら3種の遺構について順に見てゆく。

まずに竪穴住居跡について考察する。地表面から確認できる31軒の竪穴は、5ないし6角形の平面形、埋没具合、出土遺物等からすべてオホーツク文化～トビニタイ文化に属するものと推察される。これらの竪穴群は分布図（第3図）を見る限り、いくつかの単位で遺跡内に分布しているように見えるが、22・23号竪穴の切り合い関係から、隣接する竪穴が必ずしも同時併存しないことが示された。したがって、ある程度の間隔をもって一時期に数軒の竪穴住居が併存し、建て替えにより遺跡内で建物分布が変遷していったと考えられる。

唯一完掘した5号竪穴は保存状態が良好であり、骨塚やそれに伴う完形土器群の位置関係も明確に捉えることができた。オホーツク文化の竪穴住居では一般的に貼床の開口部となる入口部と相対する奥壁部に、ヒグマの頭部を主体的に集積した骨塚がしばしば認められる。特に道東部ではモヨロ貝塚に代表されるように、奥壁部だけでなく開口部側や炉の周辺などにも複数の骨塚がもうけられる例が少なくない（米村編2009）。その点では開口部に3基の骨塚を備えた本遺跡の5号竪穴もその例にもれない。しかし、注目されるのは第3章8節の分析で

も指摘されるように、入口部側にのみ骨塚が存在し、奥壁部には一切の骨集積が見られないという点である。複数の骨塚を備えた竪穴住居跡のうちこのように奥壁部の骨塚を欠く例は稀であり、5号竪穴の特異性が窺える。

一般に奥壁部以外に配される骨塚では、動物の四肢骨が主体となる例が多く見られ、本竪穴の骨塚でも資料数の多いヒグマに関しては頭骨がほぼ出土せず、掌先・足先を構成する部位に偏る傾向が認められた（第3章8節佐藤・吉永）。しかし、ヒグマに次いで資料数の多いエゾクロテンは全身の骨格が出土していることから、種によって対象となる部位が異なることが分かる。これより、本竪穴では明確な意図をもってヒグマの頭骨を除いていたといえよう。そこで問題となるのが最も一般的な信仰対象であるはずのヒグマ頭部の所在である。

調査によってヒグマの頭部に由来する資料が確認されたのは、意外にも平坦地に構築された配石遺構（TR6）中であつた。角礫の間に遊離した状態でヒグマの歯が分布しており（第26図）、一部は被熱資料と判断されている（第3章8節佐藤・吉永）。同配石遺構中からは大型哺乳流類の後頭顆破片や多数の骨片が出土していることから、ヒグマの歯のみが配置されたとは考え難いので、当時は頭蓋が存在したと考えられる。したがって、遺跡外から搬入された礫の間（もしくは上部）に、一部被熱したヒグマの頭蓋が安置されていたということになる。こうした状況は実用的な目的と評価しにくく、儀礼的な側面が強く示唆される。配石遺構を仮に屋外儀礼とした場合、屋内儀礼と屋外儀礼で出土するヒグマ骨の部位に補完関係が認められることから（第86図）、屋内と屋外の儀礼行為が密接に関係していた可能性があることを指摘しておきたい。

また、5号竪穴は焼失住居であり床面からは多量の炭化材が出土した。樹種は建築材として加工が容易なイチイやモミ属（トドマツ）を主として用いるという選択的な利用が窺え、骨塚部分では板材として利用されている。さらに、5号竪穴の調査成果はそれだけに留まらず、覆土中に構築されたトビニタイ土器を伴う配石遺構の存在によって、オホーツク文化終末期からトビニタイ文化への明らかな繋がりが示されることとなった。これ

はオホーツク文化の変遷を考える上で貴重な情報といえよう。

次に、墓について考察する。オホーツク文化の集落では居住区域とは別に墓域を形成する例が散見される。代表的な例として網走市のモヨロ貝塚がある。竪穴住居跡が存在しない空間に数百基の墓が密集して確認されており、オホーツク文化最大級の墓域として注目される（駒井編1964、米村編2009）。一方、チャシコツ岬上遺跡では2基の土坑墓がそれぞれ単独で検出されている。1号墓は竪穴住居の無い平坦地に構築されているが、周囲から墓は検出されず独立した墓域と考えるのは難しい。また、2号墓は5号竪穴に隣接して作られており、周辺には広い墓域を形成できるような空間は存在しない。したがって、本遺跡は居住域から独立した明確な墓域を形成せず、竪穴群の間に墓を構築していたと推察する。立地に制約された限定的な空間を効率よく利用するために、大規模な墓域を設けなかった可能性が高い。

また、2基の墓からはそれぞれ人骨（歯）が出土しており、1号墓の被葬者は20歳程度の成人、2号墓は4歳前後の幼児という分析結果であった。たった2基ではあるが幼児から成人までが岬上に暮らし、同様に埋葬されていることを示唆している。また、1号墓ではニシン科・アイナメ属・タラ科・サケ属などの焼骨、2号墓の覆土中には煮沸された状態の裸性オオムギ、サメ類・ニシン科・サケ属・カレイ科などの焼骨が出土した。出土遺体がすべて焼骨であり、両墓坑ともニシン科の資料を主体とする共通性から、混入ではなく副葬と推察される。このように、オホーツク文化終末期における葬送儀礼の一端も明らかにできた。

第三に廃棄層について述べる。従来、標高50 mを超える高所でオホーツク文化期の廃棄層が確認された例は無く、本遺跡のような高所に暮らした人々の生業活動とその特性を分析する上で重要な資料群である。廃棄層はほぼ脊椎動物のみで構成され、タラ科・サケ属・ニシン科・アイナメ属といった魚類がその大半を占め、その他に鳥類、ヒグマ・エゾクロテン・アザラシ科などの哺乳類遺体も少なからず含むという分析結果であった（第3章8節佐藤・吉永）。動物種や回遊する魚類の季節性などを勘案すると、本遺跡は季節的な利用ではなく、通年利用の集落として機能していたと考えられる。

また、道北部では活発に漁獲されていたウニや貝類の利用が本遺跡ではほぼ認められないことも分析結果から

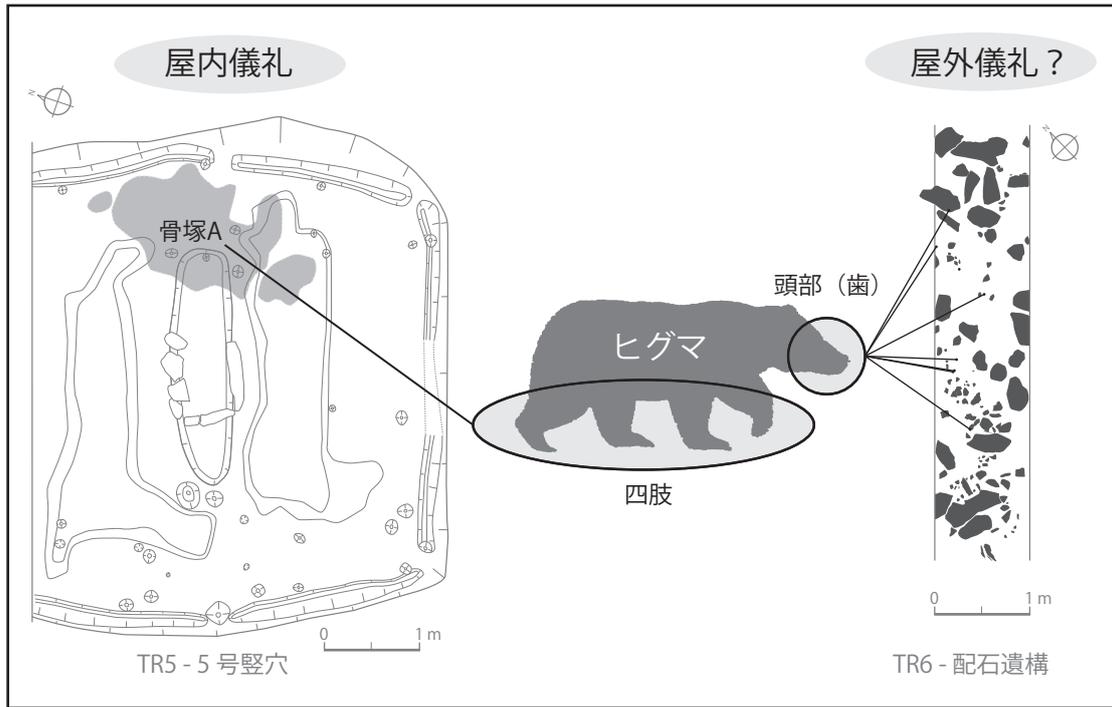
示されている。つまり、廃棄層中から得られた夥しい量の魚骨と、貝類の不利用は、道東部のオホーツク文化の海洋適応の在り方を示している。

一方、陸獣ではエゾシカの遺体がほとんど見られない点も注目される。エゾシカは道東部のオホーツク文化後期の遺跡では広く利用が認められ、チャシコツ岬上遺跡に隣接するチャシコツ岬下B遺跡からもエゾシカの遺体が検出されており（高橋2002・2011）、屋内の骨塚にもヒグマとともにエゾシカが組み込まれている。そのため、遺跡周辺にエゾシカが生息し、捕獲されていたことは確かである。一方で、チャシコツ岬上遺跡と同時期かつ似た地形上に立地する網走市二ツ岩遺跡では6軒の竪穴住居跡のうち3軒が発掘されているが、竪穴の床面や骨塚の動物遺体中にやはりエゾシカの出土が全く認められない。これより、あえて捕獲しなかった、もしくは遺跡内に持ち込まなかったなど様々な可能性が考えられるが、未調査部分に存在する可能性もあるため現状では出土しない理由を判断することは難しい。よって、エゾシカの利用に関しては今後も検討すべき課題としたい。

また、上記した竪穴住居・墓・廃棄層の他に、本遺跡を特徴づける遺構として大小様々なレキを用いた配石遺構がある。配石遺構を構成する礫はほぼすべてが遺跡外からの搬入物であり、礫に対する志向性が窺える。本遺跡で検出された例は、平坦地に構築されたもの（TR2、TR6）と竪穴の窪地に構築されたもの（TR5）に大別され、それぞれ異なる意図を持って作り分けられたものと推察する。それぞれの特性を個別にみていくと、平坦地の配石遺構（TR2・TR6）では礫が一部被熱し、被熱した動物遺体（ヒグマ・海獣類）を伴う。一方、窪地の配石遺構（TR5）は礫が全く被熱しておらず、複数の完形土器を伴うという傾向があり、構築場所だけでなく内容についても差違が認められた。機能は不明確であるが、被熱した動物骨を伴う例については実用的というよりは儀礼的な側面が示唆される。土坑墓の上部にも積石が施されることから、本遺跡における礫の役割は広範かつ多様であったと考えられる。

## 2. 遺物

チャシコツ岬上遺跡からは4ケ年の発掘調査によって約一万点以上の出土遺物が得られており、その大半はオホーツク土器の破片と黒曜石製の剥片石器である。そのため、ここでは遺跡の存続期間を推定する上での指標と



第86図 ヒグマ骨の出土地点

なる出土土器群と、生業活動を反映する出土石器群の的を絞ってみたい。

まず土器は時期が判別可能なもののうち約88%をオホーツク土器が占めている。この割合の高さからもチャシコツ岬上遺跡がオホーツク文化期の単一的な集落であることを窺い知ることができよう。特に5号竖穴住居跡では3基の骨塚に伴ってオホーツク土器の良好な完形資料(第30図)が得られており、直上に位置する配石遺構(TR5)からも複数のトビニタイ土器(第46図)が出土している。これらの土器をもとにした第3章1節の分析によれば、その大多数がオホーツク文化貼付文期後半(熊木編年IV群b類)のものであり、貼付文期前半(熊木編年IV群a類)がわずかに含まれるという結果であった。これより、貼付文期前半以前には遺跡の利用は低調で、貼付文期後半から竖穴住居跡等の主要な遺構が構築されたことが指摘されている(第3章1節熊木)。

さらにその中で、貼付文期を細別する指標として「3本重畳パターン」という文様構成を設定し、オホーツク文化貼付文期後半に起こる「文様の単純化」についてもふれている。チャシコツ岬上遺跡の5号竖穴からはこの「3本重畳パターン」の完形土器3個体が出土しており、チャシコツ岬下B遺跡、ニツ岩遺跡(網走市)、トーサムポロ遺跡R-1地点(根室市)からも同様な文様構成の完形土器が出土している(平川・野村編1982、

松田編2002・2011、愛場・広田編2015)。よって、これらの遺跡はオホーツク文化終末期に営まれた集落跡と考えて差し支えないだろう。

また、本遺跡を考える上で重要な要素といえるトビニタイ文化へのつながりであるが、この3本重畳パターンに着目すると理解しやすい。つまり、この3本重畳パターンの文様構成は貼付文期後半のオホーツク土器からトビニタイ土器へと受け継がれているということである。これは5号竖穴と上層配石遺構(TR5)の上下関係とも矛盾無く、オホーツク文化終末期～トビニタイ文化期にかけて連続的に本遺跡が利用されていたことの証左にほかならない。

次いで石器について述べる。出土石器を俯瞰すると黒曜石製の石鏃が卓越する一方で、ナイフやスクレーパーの出土がごく少数に留まる傾向がある。第3章2節の分析では、その要因として剥片石器の核となる石核状フレイクが3.1~5.6 cmと小さなものしか出土していないことを挙げ、石鏃以外の製作が困難であったとみている。また、同時期の他遺跡でも同様な現象が認められることから、このことは本遺跡に限った傾向ではない。おそらく、ナイフやスクレーパーは刀子などの鉄製品で代用するか、もしくは偶発的に手に入れた前時代遺物を再加工して使用したものと見なされる。加えて、この組成の偏りは代替品としてあげられる刀子の出土量が多いことと

も整合的である。

以上のように剥片石器の器種に偏りがあることは、石材の黒曜石の形状によるところが大きく、本遺跡における石器組成は同時期の恒常的な集落と共通していることが明らかとなった。

一方、最も出土量の多い石鏃に関しては、形態と石材の面から分析が行われた。形態はオホーツク文化後期以降に有茎のものが多いという従来の調査結果に合致するが、石材に関しては知床半島を境に網走・斜里側と根室側とで異なる様相が認められると指摘されている（3章2節松田）。すなわち、網走・斜里側では主に黒曜石が支配的であるのに対し、根室側ではジャスパーやチャートなどが全体の約3割を占めるという状況である（3章2節松田）。この差は各地域の石材調達と直接的に関係し、原産地に近く比較的容易に黒曜石を入手できた網走・斜里方面と入手がやや困難な根室地域の差を示していると考えられる。加えて、ジャスパーやチャートは黒曜石に比べ色彩豊かであることから、装飾的な意図をもった根室側の石材選択もうかがえる。チャシコツ岬上遺跡ではこういったジャスパーやチャート製の石鏃は出土しておらず、同じ知床半島であっても羅臼側からの石

材や製品段階での流通は希薄であったと推察される。

ところで、上記したオホーツク文化期に一般的に目にする石器類だけでなく、特徴的な礫石器や素材も出土しており、特に第42図1～5に示される玄武岩製石器が注目される。これらは板状に薄く剥離した玄武岩を素材としているが、北海道でこの板状節理が一番顕著に見られるのは利尻島の杓形溶岩である。杓形溶岩は粘性が低いため、鉱物が一定方向に配列する構造となり、板状に薄く剥離する特徴がある。こうした構造は知床半島の火山では見られないため、チャシコツ岬上遺跡から出土した玄武岩製石器とその素材も外部からの搬入品と考えられる。ただし、大空町の藻琴山でも小規模に産するため、これらとの成分の比較は今後確認すべき課題としたい。

以上、今回の調査によって検出された遺構や出土遺物の内容について述べてきた通り、5ヶ年の調査によってチャシコツ岬上遺跡の特性を示す成果が得られていることが分かる。しかし、本遺跡の位置づけを明確化するためにはオホーツク文化の他遺跡との比較検討が不可欠であり、次節ではより広い視野をもって相対的な位置づけを定めることとする。

(平河内毅)

## 第2節 オホーツク文化終末期の集落としての位置づけ

オホーツク文化の遺物を包含する遺跡は北海道内で約200以上確認されており（第87図）、その分布は海岸に集中し、海から最も離れた集落でさえ現海岸から1 kmほどしか離れていない（天野2008）。しかし、これだけ多くの遺跡がこれまでに発見されているにも関わらず、オホーツク文化終末期の様子を伝える遺跡は極めて少ない。そのため、北海道におけるオホーツク文化の終末には依然として不明瞭な点が多々残されており、全体像を把握するには資料の増加が待たれる状態にあった。その点においてオホーツク文化終末期に営まれた本遺跡の意義は大きく、北海道におけるオホーツク文化の変遷を理解する上で不可欠の情報を提供するものである。よって、本節ではチャシコツ岬上遺跡の性格と特性を整理し、他の遺跡との比較をもってオホーツク文化終末期の集落としての位置づけを明確化したい。

まず、チャシコツ岬上遺跡を特徴づける要素としては、竪穴住居跡の規模と密度が挙げられる。オホーツク文化後期以降にみる竪穴住居の小型化は従来の調査成果からも明らかであり、ウトロ地域でもその傾向を顕著に認めることができる。すなわち、ウトロ遺跡のオホーツク文化中期の竪穴では10 mを超える大型主体であるのに対し（松田編2011）、同文化終末期のチャシコツ岬上遺跡では5～8 m規模の竪穴が全体の約7割を占める状況にある。このように、竪穴住居の小型化という観点ではチャシコツ岬上遺跡もオホーツク文化後期以降の傾向に合致している。しかし、竪穴の規模こそ普遍的であるが、本遺跡の竪穴数と密度が突出していることは特徴的である。もっとも、竪穴数だけでみれば47軒のオホーツク文化期中期～後期の竪穴が確認されている柴浦第二遺跡に劣るが（武田編1995）、同文化終末期のごく短期間に31軒もの竪穴が高密度に構築された遺跡はチャシコツ岬上遺跡を除いて他に無く、独自性と評価できる。

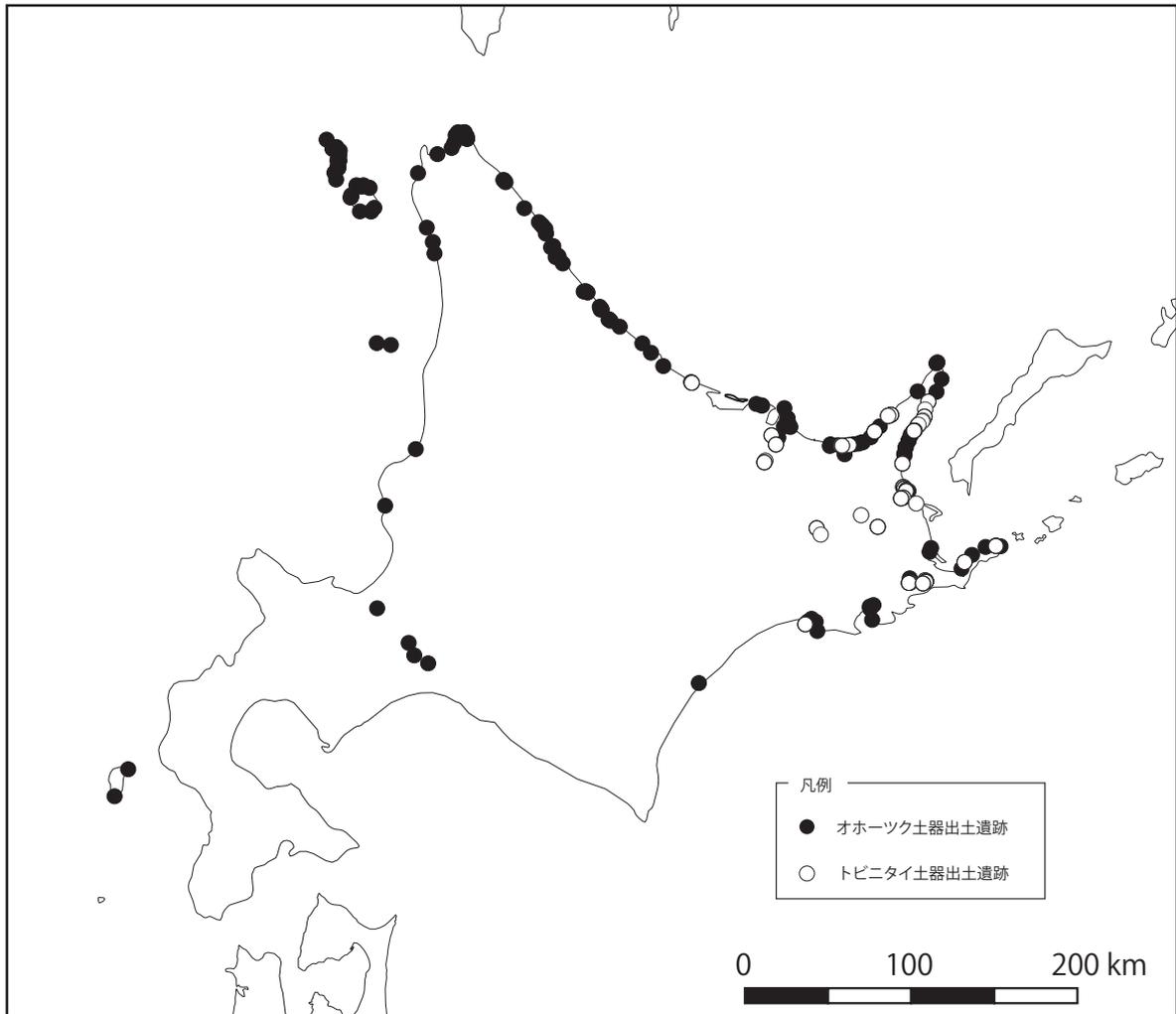
また、今回の発掘調査によって新たに存在が確認された墓の在り方にも本遺跡の特性がよく表れている。墓坑上を礫で飾る例は知床半島周辺ではまみ見られるが、せいぜい数個の大礫を配置する程度であり、本遺跡ほど大々的に集積する例は稀である。しかも複数の大礫を海岸段丘上へ搬入してまで用いていることから、重要な要素として考えられていたことは疑いない。機能を挙げ

るとすれば、大規模な積石は野生動物による掘り返しの防止や、新たな構造物によって墓が破壊されることを未然に防ぐ墓標的役割といったことが考えられる。特に後者は高密度に次々と遺構を構築するチャシコツ岬上遺跡の特性をよく示していると言えよう。一方、チャシコツ岬上遺跡の利用が開始される以前のウトロ地域では全く異なる墓域の在り方が認められる。ウトロ遺跡に隣接する神社山洞窟からは多数の遺体が上下関係をもって出土しており（高橋1993、石田・西本・松田1994）、長期にわたる継続的な利用が窺える。しかし、オホーツク文化終末期までの利用は認められず、それ以前にウトロ遺跡の集落が移転したものと推察される。このように同文化終末期には神社山のような特定の場所を墓域として利用する例が見られないのは、後述する集落立地の変化によるところが大きいかもしれない。

先述した通り、墓域の在り方や竪穴住居の規模など同一地域においてもオホーツク文化終末期までに変化することが多々存在することが分かる。しかしその反面で、海産資源への高い依存度はオホーツク文化終末期になっても変化なく保持されており、脊椎動物のみから成る構成も道東部のオホーツク文化にあっては決して珍しくないといわれる（第3章8節佐藤・吉永）。こうした動物利用は資源面だけでなく、儀礼面にも反映される。

本遺跡では5号竪穴の骨塚に代表されるように、動物儀礼的要素を含む遺構がいくつか検出されており、特にヒグマは主体的に用いられている。ヒグマ儀礼に関しては過去にチャシコツ岬下B遺跡で検出されたトビニタイ文化のヒグマ祭祀遺構の存在を無視できない。すなわち、屋外にヒグマ四肢骨を中心として組み、この周囲に完形土器や石器類、礫などを配置したものである。このトビニタイ文化のヒグマ祭祀遺構と今回検出されたオホーツク文化の5号竪穴および配石遺構（TR6）の検出状況を整理・検討することでチャシコツ岬周辺におけるオホーツク文化終末期～トビニタイ文化への動物儀礼の変遷過程を示すことができるかもしれない。

まず、出土土器からチャシコツ岬上遺跡の5号竪穴と配石遺構（TR6）が古く、チャシコツ岬下B遺跡のヒグマ祭祀遺構が新しい時期のものとして捉えられる。次に、屋外に構築された遺構同士を比較すると、共通点としては



第87図 北海道内のオホーツク文化およびトビニタイ文化の遺跡分布

ヒグマの部位が選択的であること、土器や石器、礫などの遺物を伴うことが挙げられる。一方、相違点としてはチャシコツ岬上はヒグマ頭部（一部被熱）が対象とされるのに対し、チャシコツ岬下Bは四肢骨（生骨）が対象とされていることが挙げられる。これより、共通点はヒグマの屋外儀礼の在り方を示しており、相違点は時期差あるいは遺跡毎の差によるものと考えられる。問題はこの相違点である。仮に相違点を時期差とした場合、チャシコツ岬上段階ではヒグマ頭部が屋外儀礼の対象とされ、岬下B段階になると四肢骨も屋外で儀礼を行う対象となるということになる。これにチャシコツ岬上遺跡の5号竪穴の四肢骨主体骨塚の事例を考え合わせると、オホーツク文化終末期頃に奥壁部のヒグマ頭骨が次第に屋外に祀られるようになり、後のトビニタイ文化の段階では四肢骨もやがて屋外の儀礼場をもうけるようになったということになる。

被熱していないため遺体が残存しなかったという可能

性も考慮する必要があるが、トビニタイ文化集落であるウトロ滝ノ上遺跡では屋内からヒグマ等の動物骨の出土がまるで認められない点は示唆的である（駒井編1964）。

ただし、トビニタイ遺跡（羅臼町）では2号竪穴内からヒグマ頭骨などの骨片群が出土しており、トビニタイ文化段階でもヒグマ頭部の屋内儀礼が継続されていたことが示されている（駒井編1964）。よって、地域毎に動物儀礼の変遷過程は異なるものと捉えられる。このように上記の仮説が当てはまるのはウトロ地域という限定的な範囲ではあるが、儀礼面も次第に変化してゆく様子が窺えるのはオホーツク文化終末期の特徴といえよう。

これらのことから、チャシコツ岬上遺跡は実用的要素だけでなく、墓や動物儀礼の場といった儀礼的要素も持ち合わせていることがわかる。利用可能な平坦地が限定的な地形上であるからこそ、高密度にすべての要素が集約されていると考えられる。

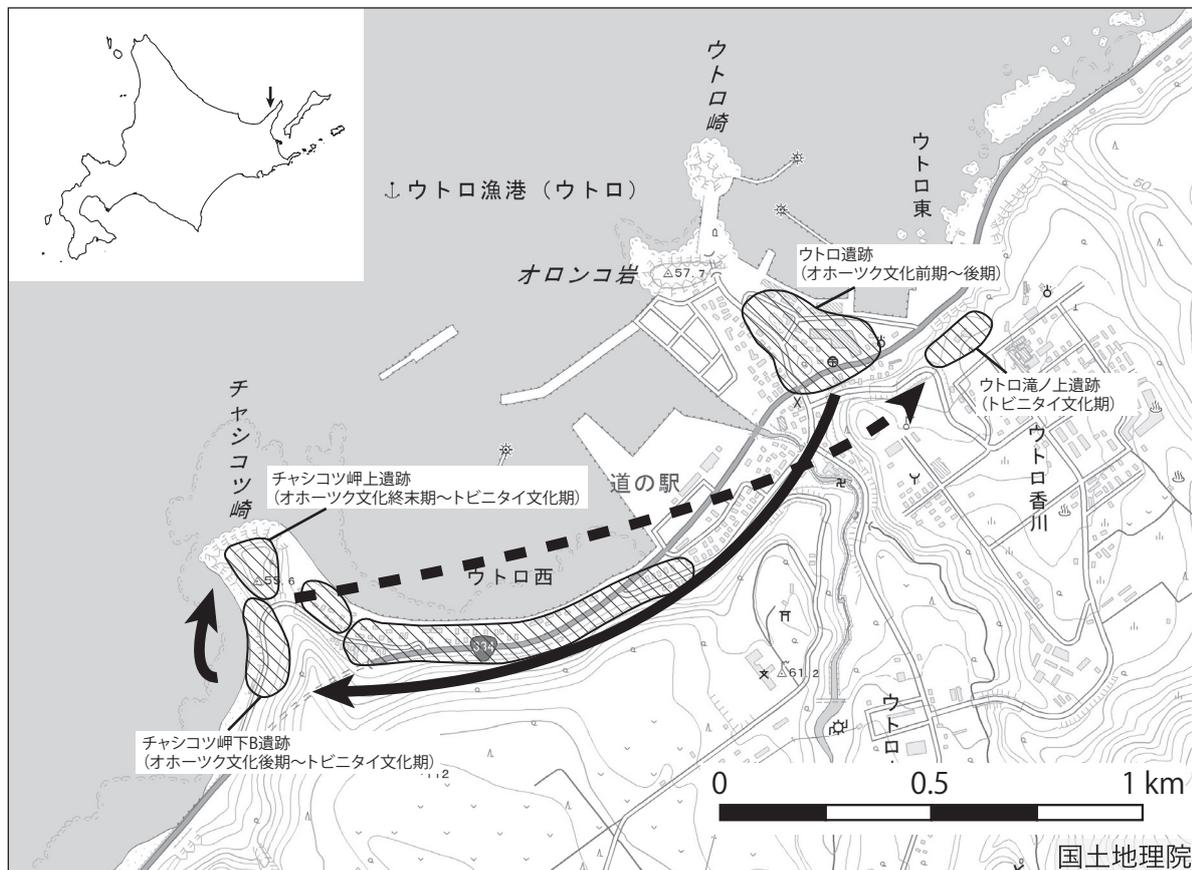
ところで、遺跡立地に関してはオホーツク文化期のある時期を境に変化することがこれまでの調査から知られている。すなわち、オホーツク文化中期頃は標高10 m以下の海岸砂丘等に立地する傾向があるが、後期以降は比較的高所の段丘上に集落を構えるという変化である(表7)。この傾向はオホーツク文化終末期においても継続的であり、同文化終末期の代表的な集落である二ツ岩遺跡(網走市)やチャシコツ岬上遺跡などは標高40 m以上の高所に立地している。一見、食料資源や水の搬入の手間、海へのアクセスを考えると不便ともとれる立地だが、高所ゆえの利点も存在する。それは広範な眺望である。チャシコツ岬上遺跡のような圧倒的な眺望範囲は狩猟対象の観察、船の視認性の高さ、異集団への牽制など様々な効果をもたらし、擦文集団との交流が活発化するオホーツク文化終末期には必要不可欠な要素であったと推察される。さらにチャシコツ岬上遺跡の場合、周囲が急崖という閉鎖的な地形的特徴も持ち合わせている。

本遺跡ほど顕著では無いが、急峻な崖に面した(以下、懸崖的)集落は他地域にも存在し、代表的なものでは二ツ岩遺跡(網走市)や能取岬西岸遺跡(網走市)、知円別南岸遺跡(羅臼町)などが挙げられる。興味深いのは、懸崖的な環境は他地域にも存在するにも関わら

ず、こうした遺跡立地がトビニタイ文化へと受け継がれている地域は知床半島部に限定的なことである(大西2009)。したがって、遺跡立地の面からも知床半島はオホーツク文化とトビニタイ文化のつながりが理解しやすい地域といえる。

これを裏付けるように、チャシコツ岬上遺跡の存在するウトロ地域においてオホーツク文化前期～トビニタイ文化期までの変遷を連続的にみることができることが今回の調査により明らかとなった。第3章1節のオホーツク土器の分析によれば、ウトロ市街地に位置するウトロ遺跡はオホーツク文化前期～後期までの長期にわたって利用され、終末期のチャシコツ岬上遺跡とは明確な時期差が示されている。さらに、隣接するチャシコツ岬下B遺跡はチャシコツ岬上遺跡よりもやや古い時期から利用されており、第88図に示されるような集落変遷が想定される。そして、チャシコツ岬上遺跡はトビニタイ文化期まで利用されていることから、先述した高所かつ懸崖的な集落であるウトロ滝ノ上遺跡への変遷も示唆的である。つまり、ウトロ地域においてチャシコツ岬上遺跡の存在はこれまで不明確であったオホーツク文化とトビニタイ文化の間隙を埋める重要な存在と位置づけられる。

(平河内毅)



第88図 ウトロ地域の集落変遷

表7. オホーツク文化集落属性表

No.	地域	所在地	遺跡名	オホーツク文化			トビニタイ文化	標高	竪穴住居数	墓数	廃棄層 (骨集積含む)	引用文献		
				前期	中期	後期								
1	道北	礼文町	香深井5遺跡	○	○			3	△	×	×	荒川編1997 内山編2000		
2			香深井1(旧A)遺跡	○	○			4	△	△	○	大井・大場編1976 大井・大場編1981		
3			浜中2遺跡	○	○	○		10	○	◎	○	前田・山浦編1992ほか		
4		利尻富士町	沼浦海水浴場遺跡	○	○	○		4~5	△	△	○	北・土肥編2017		
5			利尻富士町役場遺跡	○	○	○		13.4~18	△	△	○	内山編1995 山谷編2011		
6		稚内市	泊内遺跡	○				1.5	◎	×	×	稚内市教委1964		
7			川尻北チャシ	○				7~11	△	×	×	大場ほか1972		
8		枝幸町	ウバトマナイチャシ	○				17~19	△	×	×	右代ほか1998		
9			ホロベツ砂丘遺跡		○			3~4	△	×	×	枝幸町教委編1985		
10			目梨泊遺跡			○		15~25	◎	◎	○	佐藤編1988,1994 高島編2004		
11	道東 (オホーツク)	雄武町	雄武竪穴群		○	○		10~14	△	×	×	平川編1995		
12		紋別市	栄遺跡			○		10	△	×	×	小柳・因幡1969		
13		湧別町	川西遺跡		○	○		6	△	×	×	青柳編1995		
14		北見市	栄浦第二遺跡		○	○		8~10	◎	○	○	藤本編1972		
15			トコロチャシ跡遺跡群			○		18~19	○	△	○	熊木・國木田2012		
16			常呂河口遺跡			○	○	2~5	△	△	×	武田編1996		
17		美幌町	元町2遺跡				○	20	△	×	×	荒生編1986		
18		女満別町	元町遺跡				○	10	-	×	×	大場・奥田1960		
19		網走市	最奇貝塚			○	○	5~6	○	◎	○	○	駒井編1964 米村編2009	
20			能取岬西岸遺跡			○	○	40	△	×	×	×	青柳ほか1999 角ほか2010	
21			二ツ岩遺跡				○	45	△	×	×	×	野村ほか1982	
22			嘉多山3遺跡					○	20~30	△	×	×	米村編1992	
23			湖南遺跡					○	25	-	×	×	大場・奥田1960	
24			斜里町	ウトロ遺跡	○	○	○		4~8	◎	◎	○	○	松田2011他
25				カモイベツ遺跡		○	○		4~5	○	△	×	×	豊原・坂井2009ほか
26				トーツル沼1遺跡		○	○		3	△	×	○	○	松田ほか2001
27				オタモイ1遺跡			○		4~8	△	×	×	×	松田ほか2002
28				ボンベツ遺跡			○		5~20	◎	×	×	×	大井1984
29	知床岬遺跡				○	○	20	◎	△	×	×	松下ほか1964		
30	チャシコツ岬下B遺跡					○	○	10	△	△	○	松田ほか2002 松田ほか2011他		
31	チャシコツ岬上遺跡				○	○	49~55	◎	△	○	平河内編2014 本報告			
32	ウトロ滝ノ上遺跡				○	○	50~55	△	×	×	駒井編1964			
33	須藤遺跡				○	○	3~15	◎	△	×	金盛ほか1981			
34	ピラガ丘遺跡(第I地点)				○	○	5~9	△	×	×	米村1970			
35	ピラガ丘遺跡(第II地点)				○	○	6~10	◎	×	×	米村ほか1972			
36	ピラガ丘遺跡(第III地点)				○	○	19~22	○	×	×	金盛1976			
37	道東 (根釧)	松法川北岸遺跡	○	○	○	○	5	○	×	×	×	大場ほか1984		
38		羅臼町	相泊遺跡		○	○		10	△	△	○	○	沢ほか1971 浦坂1996	
39			知門別川南岸遺跡			○		35~42	△	×	×	○	浦坂編1999	
40			トビニタイ遺跡			○		13	◎	×	×	×	駒井編1964	
41			船見町高台遺跡		○		○	10~12	△	×	×	×	本田ほか1980	
42			サシル北岸遺跡				○	14	△	×	○	○	宇田川1975	
43			ルサ遺跡				○	5~20	-	×	×	○	駒井編1964	
44			隧道丘陵地遺跡				○	44	△	×	×	×	浦坂2002	
45		オタフク岩遺跡(第1地点)				○	40~45	△	△	×	×	浦坂・豊原1991		
46		標津町	三本木遺跡	○	○			3	△	×	×	×	北構1992 工藤1992	
47	伊茶仁孵化場第一遺跡					○	5~10	-	×	×	×	梶田1980		
48	伊茶仁カリカリウス遺跡					○	20	◎	○	×	×	梶田・梶田1982他		
49	伊茶仁B遺跡					○	21	○	△	×	×	石附1973		
50	別海町		浜別海遺跡				○	5	-	×	×	北構1971		
51	中標津町	当幌川左岸竪穴群		○		○	8~18	△	×	×	梶田・梶田1987			
52	弟子屈町	下鑑別遺跡				○	96~97	-	×	×	沢1971			
53	根室市	弁天島	○	○	○		11	○	△	○	○	八幡ほか1966 北地文化研究会1968他		
54		トーサムボロ遺跡		○	○		10~25	○	△	○	○	前田・山浦2004 三浦ほか2015		
55		ノッカマップ遺跡			○		18~19	△	×	×	×	岩崎・前田編1980		
56		オンネモト遺跡			○		20	△	×	○	○	園分ほか1974		
57		厚岸町	下田ノ沢遺跡				○	3~5	-	△	○	○	厚岸町下田ノ沢遺跡群 調査会編1972	
58	標茶町	トプー遺跡				○	14	△	×	×	×	宇田川・豊原1984		
59	浜中町	姉別川17遺跡				○	23~28	-	×	×	×	福土1983		
60	道南	奥尻町	青苗砂丘遺跡	○	○			5~10	△	×	○	○	皆川編2002 越田編2003	

註) 竪穴住居数: △10未満、○10~15、◎16以上。ただし、残存する竪穴のうち他時期に属するものとの区別が困難な場合は「-」で示した。

墓数: ×: 未確認、△10未満、○10~20、◎21以上。

廃棄層の有無: ○は確認、×は未確認。

### 第3節 大陸や本州との関係性

オホーツク文化の分布域は大陸と本州に挟まれ、北と南の両地域から強い影響を受ける位置にあった。そのため、オホーツク文化中期～後期初め（6～8世紀）頃にはアムール川流域の靺鞨系文化からの影響を受けて齊一化し、金属製品、ブタ、穀物などの大陸産品の流入が顕著であることが知られる（臼杵2005）。しかし、その後黒水靺鞨が渤海国に服属すると次第に大陸との交流は希薄化し、彼らの交易相手は南の擦文文化を経由した本州側へと変化することとなった（臼杵2005）。その証に8世紀後半になるとオホーツク文化における武器や装飾品が大陸製品から本州製品へ切り替わることが指摘されている（高島2005）。つまり、チャシコツ岬上遺跡が機能していたオホーツク文化終末期には擦文文化および本州との結びつきが非常に強かった時期ということになる。上記した本州との関係性を示す遺物としては鉄製品が挙げられる。チャシコツ岬上遺跡では調査面積に比して比較的多くの鉄製品が出土しており、チャシコツ岬上遺跡全体としても多量の鉄製品が流入していたことが窺える。多くは実用的な刀子などであるが、22・23号竪穴上層廃棄層から出土した神功開寶のように明らかに実用的でない異質なモノも出土している。

#### 1. 神功開寶の出土とその意義

神功開寶は、765（天平神護元）年初鑄の法定貨幣であり、皇朝十二銭の3番目、富本銭を含めると4番目に日本で発行された銅銭である。この年は、恵美押勝（藤原仲麻呂）の乱を鎮め、称徳天皇が淳仁天皇を廃し重祚した年にあたり、恵美押勝の政策の見直しを進めていた時期にあたる。そのため760（天平宝字4）年に押勝により発行された萬年通寶に代わり発行されたのが神功開寶であった（利光1973）。そして、782（天応2）年の鑄銭司の廃止でその鑄造は停止したが、使用は継続されていた。その後、796（延暦15）年に新たに隆平永寶の発行が開始され、同時に4年後に旧銭の使用は禁止されることが定められた（『日本後紀』延暦十五年十一月、詔）。しかし808（大同3）年の勅では、旧銭の併用が認められている。遺跡出土例から、古代の遺構・包含層において、ほぼ同時期に埋没したと考えられる出土銭貨の組成を見ると、隆平永寶と続く818（弘仁9）年

初鑄の富寿神寶との共伴例が少数だが存在するので、9世紀前半まである程度流通は継続したらしい。しかし、その後の度重なる新銭の発行と旧銭の回収が進む中で、10世紀末には奈良時代の貨幣はほぼ姿を消していた。『日本紀略』に987（永延元）年に、賀茂上社の鳥居周辺から古銭782文（和同開珎・萬年通寶・神功開寶）が発見された記事がある。その際にそれらの使用の可否を陰陽寮に占わせたことから、10世紀末には、すでに一般に知られていなかったことがわかる（利光1973）。

また、神功開寶は字形や縁・郭の形状によるヴァリエーションがある。チャシコツ岬上遺跡出土例は、「功」字の作りが刀になりノの部分が高い「長刀」、「開」字を隸書にする「隸開」であり、「寶」字の貝がやや小振りである。平城京分類のF型式にあたる（奈良国立文化財研究所1975）。神功開寶として、一般的な形態である。ただし、厚さが薄く、重量も2.19gと、神功開寶の中では非常に軽い。神功開寶の重量はおおむね4g前後に分布するので、その点では特殊な銭である。銭文に摩耗が見られることも、軽量化に影響している。しかし、摩耗の影響が比較的少ないはずの内厚も0.35mmと薄いので、当初から比較的薄く製作された製品であったことは確かであろう。神功開寶には鑄型のズレやヒビ、バリ残しなどが比較的よく見られ、製品として容認される基準が和同銭などに比べ広いと考えられるので、重量についてもさほど問題にされなかったと思われる（松村2009）。ただし、外径24.51mmと全体が若干小ぶりであり、観察すると外縁端が丸く仕上げられ、外郭の段差もなだらかにされている。通有銭の外縁部周囲を、後に研磨して加工したらしい。

この銅銭は、当然本州から北海道道部まで運ばれたことになるが、オホーツク人が直接本州で入手したのではなく、擦文文化圏を経由したと考えるのが妥当であろう。続縄文文化末期から擦文文化前半期には、太平洋側と日本海側との2つのルートにより東北地方との間に交易が行われ、古代国家との接触もなされたらしい。

一方、奈良時代の銭貨は、中世の一括埋納銭を除くと、陸奥国・出羽国を含む東北地方では出土例がきわめて少ない。これは、当時この地域では銭貨が流通する場が存在しないと考えられるので、当然のことといえる。

しかし、銭貨が存在しなかったわけではなく、銭貨が中央から持ち込まれたと考えられる多賀城や秋田城などの中心的な城柵周辺では、祭祀の祭料や墳墓の副葬品として、神功開寶は見られないものの数種の皇朝十二銭が出土している。この神功開寶も、それらの城柵における朝貢交易で入手されたものであろう。その時期は、本銭の摩耗の様子を見ても、鑄造後から一定期間の流通・使用の後であったと思われる。

また、8世紀後半から9世紀初頭にかけて、日本海ルートによる秋田城での交易が増大し、9世紀に全盛を迎えることが指摘されている(簗島 2015)。774(宝亀5)年の陸奥の海道蝦夷の蜂起は、陸奥側の律令国家との交易にも影響したであろうから、この時期に北海道・本州間の交易は出羽に集中した可能性が高い。つまり、本銭は、8世紀末から富寿神寶の発行が開始される818年ころまでの間に、秋田城・出羽国府での交易で入手された可能性が高い。隆平永寶発行にともなう神功銭の利用停止の詔の内容が効力を持った結果であるとすれば、800年までに、不要銭が擦文人との交易品とされたのかもしれない。

本銭が交易品となった理由はどのように考えられるであろう。擦文人が銭貨に大きな経済的価値を見出していたとは考えられないので、律令国家側から朝貢に対する禄物として与えられたと考えられる。ウサクマイN遺跡の富寿神寶、茂漁8遺跡の隆平永寶も同様な形で北海道に渡ったのであろう。このような傾向は、茂漁古墳群で出土している和同開珎から考えて、8世紀前半頃から存在したと思われる。その段階では東北における墳墓の影響を考慮すると、太平洋側ルートを通じて北海道にもたらされたのであろう。そして、この段階で擦文社会に貨幣の価値が知られていたことになる。

城柵とその周辺における貨幣は、上記のように祭祀関連で使用される場合が多い。多賀城に関連する山王遺跡多賀前地区では、8世紀末から9世紀初頭の河川跡から人面墨書土器、形代、斎串などの祭祀遺物とともに隆平永寶が出土しており、祓えなどの律令祭祀の祭料の一つと考えられる(宮城県教育委員会1996)。また、秋田城では、外郭東門の内側の南の8世紀後半の竪穴住居の床に埋められた壺内に萬年通寶5枚が納められており、胞衣壺と考えられている(小松1994)。秋田城、多賀城にまで、発行開始から時間を置かず新銭がもたらされているのも、両者の例からわかる。出土例はないもの

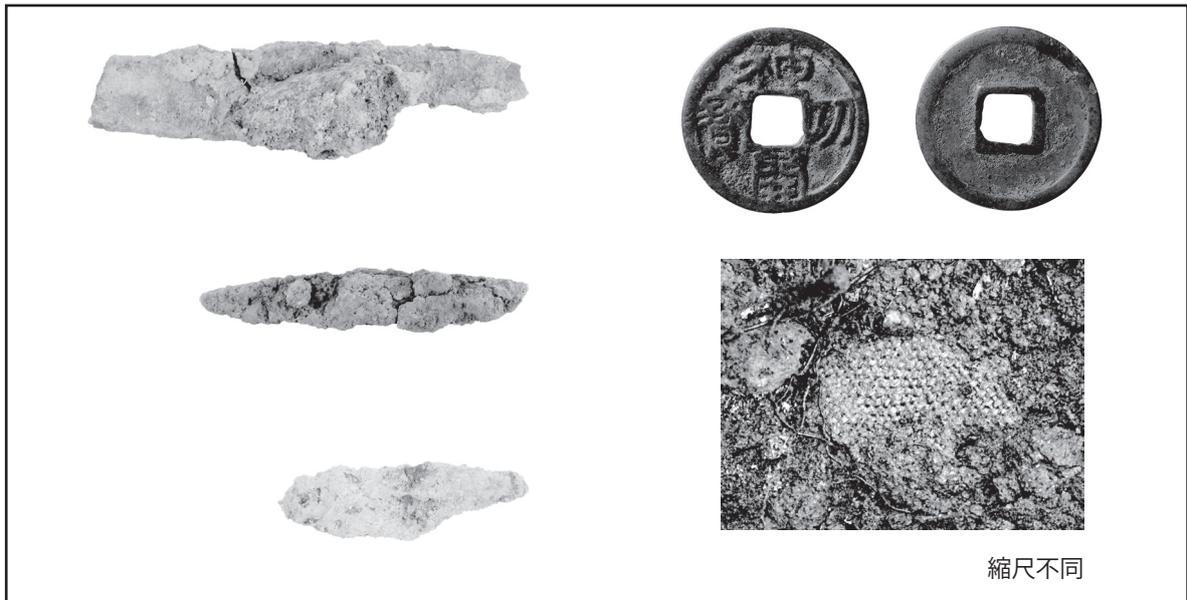
の神功開寶も陸奥・出羽にもたらされていたであろう。そして、銭貨の祭祀的な利用は、平城京などの都城でもさかんに行われており、銭貨に呪力を見出す思想は律令国家の北辺まで浸透していたと考えられる。そのために、擦文人:渡島蝦夷にも、象徴的な意味で貨幣が与えられ、さらに擦文人からオホーツク人に対しても、同様な形で交易品とされたのであろう。本貨幣の外縁が意図的に研磨されているのは、金属光沢を持たせることでより象徴的効果を高めようとした可能性もある。

## 2. その他の交易品と北海道の産物

オホーツク人の非自製品という点では2号墓から出土した織物断片も注目される。織物断片は墓坑上の積石直下から出土し、炭化によって運良く残存していたものである。第3章4節の分析によれば、本資料は靱皮繊維を素材とした平織組織の織物であり、目梨泊遺跡(佐藤1994)やトビニタイ遺跡(駒井編1964)などから出土しているものの類品に位置づけられる。しかし、本資料は織密度が極めて高いこと、靱皮繊維が驚くほどきれいに取り出された上で糸づくりが行われている点は他に例を見ないことが指摘されている(第3章4節吉本・宮地)。これより、緻密に織り込まれた高品質な布であることは疑いないが、気がかりなのはこれほどの優品がどういった経緯でオホーツク文化の集落に持ち込まれたのかということである。

まず、チャシコツ岬上遺跡の利用時期には大陸との関係性は希薄化していた可能性が高いことから、本資料に関しても本州との交易で得たものと考えて差し支えないだろう。若干年代は遡るがオホーツク人が布に関心を抱いていることは『日本書紀』に記述がされている。すなわち、660年の阿倍比羅夫の北征の際、肅慎:オホーツク人と接触を図るため「綵帛・兵・鐵」(絹・武器・鉄)などを海岸に置いたところ、肅慎の老翁2名が布一端を一度は持ち帰ろうとしているのである。このことから当時のオホーツク人の日本製の布に対する関心の高さが読み取れる。

しかし、このような直接的な入手は考えにくいので、やはり前述した神功開寶と同様、擦文人を介した秋田城からのルートによってもたらされたものと考えられる。北方交流の拠点であった秋田城では蝦夷の朝貢に際して饗宴と給禄をもって応接したとされており、9世紀半ばまでには朝貢する蝦夷たちへの給付が出羽国の財政を圧迫



第89図 出土した本州系遺物（鉄製品・神功開寶・布）

するほどであったとされる（箕島2015）。つまり、可能性の1つとして考えられるのは秋田城で「調」として納めていた布が朝貢に対する給禄として擦文人を經由して流入したということである。しかし、出羽の調布がはたして本遺跡の資料のように緻密で高品質であったかは不明確であるため、今後は発掘品だけでなく伝世品との比較検討が必要となってくるだろう。いずれにせよ、神功開寶や布などの本州製品と考えられるもの（第89図）がオホーツク文化の遺跡から出土した事実は、擦文人を介した古代律令国家との交流を示していると評価できる。

ところで、こうした本州製品への見返り品はオホーツク文化では動物の毛皮類であったとされ、それを裏付けるように遺跡からは多くの動物遺体が検出されている。特にヒグマに関しては阿部比羅夫の北征に伴う「熊皮七十枚」に代表されるように、オホーツク文化全時期にわたって広く利用が認められる。一方で、クロテン皮についてもオホーツク文化から日本社会への流入の可能性が論じられている（種市 2001）。ではこの交易品としてのクロテン皮の位置づけを北海道のオホーツク文化にも当てはめることができるだろうか。

北海道にはクロテンの亜種であるエゾクロテンが生息し、体色の美しさでは大陸やサハリン産のクロテンに劣るが、毛質は同等とされる。道東部のオホーツク文化集落ではこのエゾクロテンの遺体がしばしば出土しており

（金子 1972、西本 1995、佐藤 2009・2012）、骨塚にも含まれることから重要視されていたことが窺える。しかし、肉は食用とするには量が少なく、おそらくは毛皮利用が主であったと考えられる。では、衣服とするにはいったいどれほどの量が必要であったのだろうか。江戸時代や中国明末の史料によれば、貂裘を1領作るにはおよそ60張のテン皮が必要であったとされ（大館 2010、箕島 2015）、素材を交易品として流通されるには相当量を捕獲する必要性がうかがえる。ところが、エゾクロテンの遺体の出土が目立つ道東部のオホーツク文化集落でさえ、その出土量は竪穴住居1軒から10～20个体程度であり、毛皮交易を意識した生産には量が少ない。その状況はチャシコツ岬上遺跡においても同様であり、遺跡から出土するエゾクロテン个体数は貂裘の必要量に遠く及ばない。

海を生業の基盤とするオホーツク人が毛皮交易のためにエゾクロテンの生息する森林内へ進出していった可能性もあるが、主に集落付近の周囲や廃棄場にやってきた个体を捕獲していたと考えるのが妥当であろう。よって、交易品として流通していたとしてもその量は少数であることが予想され、北海道のオホーツク文化における主な産物はヒグマや海獣類の毛皮であったといえよう（第90図）。

（平河内毅）



第90図 周辺諸地域との交流

## 第4節 今後の課題

チャシコツ岬上遺跡の発掘調査は1949（昭和24）年に河野広道博士らの試掘以来、実に64年ぶりであった。これまで全く手付かずの状態でも保存されてきたが、今回の調査成果により本遺跡がオホーツク文化の変遷を象徴する重要な遺跡であることが改めて理解された。特に、神功開寶の発見は古代の日本社会と北海道のオホーツク文化との関係性を窺い知る大きな成果の1つと言える。こうした調査成果をあげることができた背景には本遺跡の良好な保存状態が大きく関係している。というのも、調査に着手する段階で土地の改変や盗掘の痕跡は全く認められず、わずかにヒグマの冬眠穴によって一部が掘削されているのみであった。そのため、小規模な調査面積であるにも関わらず、多くの情報を得ることができ、遺跡への影響を最小限に留めることができた。

しかし、わずかな調査面積であるため未だ解明できていない点が存在するのもまた事実である。例を挙げるとすれば、遺跡内での集落変遷の様相、トビニタイ文化の竪穴住居跡の有無の確認などといったことがある。これらの課題は今回の調査によって、オホーツク文化からトビニタイ文化への明らかな繋がりが示されたことによって認識したものであるが、遺跡への影響を押さえつつ確認することが困難というのが実情であった。確かに、31軒すべての竪穴を発掘調査すれば明らかになることではあるが、完全な状態で残る本遺跡の価値を半減することにもつながる。そのため、これらの命題の追求にあたっては今後慎重に調査手法等を検討する必要があるだろう。

また、調査を進める中で本遺跡の自然崩壊についても改めて認識することとなった。海岸部からの観察ではチャシコツ岬自体が波や流氷によって浸食されている状況が顕著に認められ、海岸の磯部分には崩落した巨大な岩石がそこかしこに見られる。しかしながら、こうした崩落はここ数十年で起きたようなものではなく、今後急激に風化が進行することも考えられないため、当面の間は現状保存を前提に経過を観察する必要があるだろう。むしろ、防止すべきはエゾシカの侵入であって、踏圧に伴う浸食によって縁辺部の崩落を助長しかねない状況である。

町教委としてはこれらの課題を踏まえ、チャシコツ岬上遺跡の文化財的価値を改めて認識し、本遺跡の適切な保存と活用を図ってゆく予定である。また、今後の活用にあたっては安全性に配慮した整備を実施し、遺跡内へのアクセスを可能にすることで地域の教育資源および観光資源として積極的に保存活用を進めてゆきたい。その際は観光部局ともタイアップし、他の町内史跡等を含め総合的な活用を進める方向性である。

また、学術的にも価値の高い遺跡であることが今回の調査によって再確認されたため、今後も調査研究を推進するとともに、その成果を町民に還元し、一般に広く周知していく必要があるだろう。そして、今後は斜里町内だけでなく、近隣市町村と古代オホーツク文化圏をつなぐ広域的なネットワークを構築し、活用を図って行くことが期待される。

（平河内毅）

## 引用文献

- 愛場和人・広田良成（編）.2015. 根室市トーサムポロ湖周辺竪穴群（1）. 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 青柳文吉 .1995. 湧別町川西遺跡 . 北海道北方民族博物館調査報告 . 北海道立北方民族博物館厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会（編）.1972. 厚岸町下田ノ沢遺跡 . 北海道発掘調査シリーズ 8. 北海道出版企画センター
- 秋葉実 .1985. 戊午 東西蝦夷山川地理取調日誌 中 . 北海道出版企画センター
- 天野哲也 .2008. 古代の海洋民オホーツク人の世界 . 株式会社雄山閣
- 荒生健志（編）.1986. 元町 2 遺跡 . 美幌町教育委員会
- 荒川暢雄（編）.1997. 礼文町香深井 5 遺跡発掘調査報告書 . 礼文町教育委員会
- 石田肇・西本豊弘・松田功 .1994. ウトロ遺跡神社山地点第三次（1990 年度）発掘調査報告 . 知床博物館研究報告 第 15 集 . 斜里町立知床博物館
- 石冨喜三男（編）.1973. 伊茶仁遺跡 B 地点発掘調査報告書 . 北地文化研究会
- 稲垣はるな（編）.1999. 能取岬周辺の遺跡 . 北方民族博物館調査報告 2. 北海道立北方民族博物館
- 岩崎卓也・前田潮 .1980. 北海道頭部地区における考古学的調査 . 筑波大学先史学・考古学研究調査報告 I . 筑波大学歴史・人類学系
- 右代啓視・山田悟郎・村上孝一・為岡進 .2000. 枝幸町ウバトマナイチャシ第 2 次発掘調査外報 . 北海道開拓記念館調査報告 . 北海道開拓記念館
- 内山真澄（編）.1995. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書 . 利尻富士町教育委員会
- 内山真澄（編）.2000. 香深井 5 遺跡発掘調査報告書 2. 礼文町教育委員会枝幸町教育委員会（編）.1985. ホロベツ砂丘遺跡 . 枝幸町教育委員会枝幸町教育委員会（編）.1988. 目梨泊遺跡 . 枝幸町教育委員会
- 宇田川洋・豊原熙司 .1984. トブー遺跡の発掘調査 . 釧路川流域史研究会会誌・釧路川 3. 釧路川流域史研究会
- 宇田川洋（編）.1975. 幾田 . 羅臼町文化財報告 2. 羅臼町教育委員会
- 宇田川洋（編）.1981. 河野広道ノート考古篇 1. 北海道出版企画センター
- 白杵勲 .2005. 北方社会と交易 - オホーツク文化を中心に - . 考古学研究 52-2. 考古学研究会
- 栄原永遠男 .1993. 日本古代銭貨流通史の研究 . 塙書房
- 栄原永遠男 .2011. 日本古代銭貨研究 . 清文堂
- 大井晴男・大場利男（編）.1976. 香深井遺跡上 . 東京大学出版会
- 大井晴男・大場利男（編）.1981. 香深井遺跡下 . 東京大学出版会
- 大井晴男 .1984. 斜里町オホーツク文化遺跡について . 知床博物館研究報告第 6 集 . 知床博物館
- 大館大學 .2010. 日本古代のクロテンの皮衣（黒貂裘）の形状について . BIOSTORY14. 生き物文化誌学会
- 大西秀之 .2009. トビニタイ文化からのアイヌ文化史 . 株式会社同成社
- 大場靖友・本田克代・豊原熙司・涌坂周一 .1984. 松法川北岸遺跡 . 羅臼町文化財報告 8. 羅臼町教育委員会
- 大場利夫・奥田寛 .1960. 女満別遺跡 . 女満別町教育委員会
- 大場利夫・新岡武彦・大井晴男・菊池俊彦 .1972. 枝幸町川尻北チャシ調査外報 . 枝幸町教育委員会
- 岡孝雄 .2010. ウトロ地域における地形解析業務委託報告書 . アースサイエンス株式会社
- 勝井義雄・後藤芳彦・合地信生・舩山淳 .2007. 知床の地質 . しれとこライブラリー 8. 知床博物館
- 金盛典夫・村田良介・松田美砂子 .1981. 須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告書 . 斜里町文化財報告 1. 斜里町教育委員会
- 金盛典夫 .1976. ピラガ丘遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告 . 斜里町教育委員会
- 金沢悦男 .1995. 八・九世紀における銭貨の流通一特に畿外を中心として一 . 日本古代の法と社会 . 吉川弘文館
- 北構保男・前田潮 .2009. 根室市弁天島遺跡 14 号竪穴の発掘調査 . 北地文化研究会
- 北構保男 .1992. 標津町三本木オホーツク遺跡試掘調査外報 . しべつの自然歴史文化 : 標津町ポー川史跡自然公園紀要 1. 標津町ポー川史跡自然公園
- 北構保男（編）.1971. 浜別海遺跡 . 北地文化研究会
- 北沙織・土肥幸子（編）.2017. 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡第 1 次発掘調査報告書 . 礼文・利尻島遺跡調査の会
- 鬼頭清明 .1984. 平安初期の銭貨について . 奈良平安時

- 代史論集下巻. 吉川弘文館
- 国分直一・北構保男・増田清一・岩崎卓也・前田潮.  
1974. オンネモト遺跡. 東京教育大学文学部考古学研究報告 4. 東京教育大学文学部
- 越田賢一郎(編). 2003. 奥尻町青苗砂丘遺跡 2. 北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書 3. 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 河野広道. 1955. 先史時代史. 第九章遺跡. 斜里町史第一巻. 斜里町
- 小松正夫. 1994. 秋田城跡出土胞衣壺の埋納銭「萬年通宝」について. 出土銭貨. 創刊号
- 小柳正夫・因幡勝雄. 1969. 栄遺跡調査略報. オホーツク沿岸もうべつと(創刊号). 紋別郷土史研究会
- 熊木俊朗・國木田大(編). 2012. トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点. 東京大学大学院人文社会系研究科駒井和愛(編). 1964. オホーツク海沿岸知床半島の遺跡. 下巻. 東京大学文学部
- 工藤研治. 1992. 三本木遺跡の範囲確認調査(試掘)について. しべつの自然歴史文化: 標津町ポー川史跡自然公園紀要 1. 標津町ポー川史跡自然公園
- 駒井和愛(編). 1964. オホーツク海沿岸知床半島の遺跡. 下巻. 東京大学文学部
- 佐藤孝雄. 2009. 骨塚から検出された鳥獣遺体. 史跡最寄貝塚. 網走市教育委員会
- 佐藤孝雄. 2012. トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 7号・9号・10号 縦穴の脊椎動物遺体. トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点. 東京大学大学院人文社会系研究科
- 佐藤隆広. 1994. 目梨泊遺跡. 枝幸町教育委員会  
沢四郎・本田克代・宇田川洋・大沼忠春・西幸隆・豊原熙司・鶴丸俊朗. 1971. 羅臼. 羅臼町文化財報告 1. 羅臼町教育委員会
- 沢四郎(編). 1971. 弟子屈町下鑑別遺跡発掘調査報告. 弟子屈町教育委員会出土銭貨研究会北陸ブロッ(編). 2000. 畿内・七道から見た古代銭貨. 出土銭貨研究会第7回研究大会資料集. 出土銭貨研究会
- 梶田光明・梶田美枝子(編). 1982. 伊茶仁カリカリウス遺跡発掘調査報告書. 標津町教育委員会
- 梶田光明・梶田美枝子(編). 1987. 標津の縦穴 10. 標津町教育委員会
- 梶田光明. 1980. 標津の縦穴 3. 標津町教育委員会  
其田良雄・河野本道(編). 1980. 知床国立公園幌別川口遺跡発掘調査報告書. 斜里町教育委員会
- 高橋理. 1993. ウトロ遺跡神社山地点発掘報告. 知床博物館研究報告 第 14 集. 斜里町立知床博物館
- 高橋理. 2002. 付篇斜里町ウトロ・チャシコツ岬下 B 遺跡動物依存体. チャシコツ岬下 B 遺跡. 斜里町教育委員会
- 高橋理 2011. 付篇 3 北海道斜里郡斜里町ウトロチャシコツ岬下 B 遺跡の動物. チャシコツ岬下 B 遺跡. 斜里町教育委員会
- 高島孝宗. 2004. 目梨泊遺跡. 枝幸町教育委員会
- 高島高宗. 2005. オホーツク文化における威信材について. 海と考古学. 六一書房
- 武田修(編). 1995. 栄浦第二・第一遺跡. 常呂町教育委員会
- 武田修(編). 1996. 常呂河口遺跡(1). 常呂町教育委員会
- 利光三津夫. 1973. 神功銭鑄造をめぐる史的背景. 続律令制とその周辺. 慶應義塾大学法学研究会
- 豊原熙司・坂井通子. 2009. カモイベツ遺跡発掘調査概報. 斜里町教育委員会
- 奈良国立文化財研究所. 1975. 平城宮発掘調査報告 VI-左京一条三坊の調査. 奈良国立文化財研究所学報. 第 23 冊. 奈良国立文化財研究所
- 西本豊弘. 1995. 川西遺跡出土の動物遺体. 湧別町川西遺跡. 北海道立北方民族博物館
- 西本豊弘. 2003. 第 1 部根室市弁天島遺跡発掘調査報告. 国立歴史民俗博物館研究報告 107. 国立歴史民俗博物館
- 野村崇・三野紀雄・平川善祥・山田悟郎・小林幸雄.  
1995. 雄武縦穴群遺跡. 北海道開拓記念館研究報告 14. 北海道開拓記念館
- 平河内毅(編). 2014. チャシコツ岬上遺跡発掘調査報告書. 斜里町文化財報告 37. 斜里町教育委員会
- 平河内毅(編). 2015. チャシコツ岬上遺跡発掘調査概要報告書. 斜里町教育委員会
- 平川善祥・野村崇(編). 1982. ニツ岩. 北海道開拓記念館研究報告 7. 北海道開拓記念館
- 福士廣志. 1983. 姉別川 17 遺跡発掘調査報告. 浜中町教育委員会
- 藤本強(編). 1972. 常呂. 東京大学文学部  
北地文化研究会. 1968. 根室市弁天島西貝塚調査外報. 考古学雑誌 54-2. 日本考古学会

- 本田克代・豊原熙司・涌坂周一.1980.船見町高台遺跡. 羅臼町文化財報告 4. 羅臼町教育委員会
- 前田潮・山浦清.2004.トーサムポロ遺跡 R-1 地点の発掘調査報告書. 北地文化研究会
- 前田潮・山浦清(編).1992.浜中 2 遺跡の発掘調査. 礼文町教育委員会
- 松下亘・米村哲英・畠山三郎太・安倍三郎.1964.知床岬遺跡. 北海道発掘調査シリーズ 7. 北海道出版企画センター
- 松村恵司.2009.出土銭貨. 日本の美術 512. 至文堂
- 松田功(編).2001. トーツル沼 1 遺跡発掘調査報告. 斜里町文化財報告 15. 斜里町教育委員会
- 松田功(編).2002. チャシコツ岬下 B 遺跡. 斜里町文化財報告 16. 斜里町教育委員会
- 松田功(編).2011. ウトロ遺跡. 斜里町文化財報告 32. 斜里町教育委員会
- 松田功(編).2011. チャシコツ岬下 B 遺跡. 斜里町文化財報告 33. 斜里町教育委員会.
- 松田功(編) 1993. オショコマナイ河口東遺跡オタモイ 1 遺跡発掘調査報告書. 斜里町文化財報告 5. 斜里町教育委員会
- 皆川洋一(編).2002. 奥尻町青苗砂丘遺跡. 北海道埋蔵文化財センター重要遺跡確認調査報告書 2. 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
- 篠島栄紀.2015.「もの」と交易の古代北方史. 勉誠出版
- 宮城県教育委員会.1996. 山王遺跡IV多賀前地区考察編. 宮城県文化財調査報告書第 171 集
- 森明彦.2016. 日本古代貨幣制度史の研究. 塙書房
- 山谷文人(編).2011. 利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ. 利尻富士町教育委員会
- 米村衛(編).1992. 嘉多山 3 遺跡嘉多山 4 遺跡. 網走市教育委員会
- 米村衛(編).2009. 史跡モヨロ貝塚. 網走市教育委員会
- 米村哲英.1970. ピラガ丘遺跡. 斜里町教育委員会
- 米村哲英.1972. ピラガ丘遺跡第Ⅱ地点発掘調査概報. 斜里町教育委員会
- 涌坂周一・豊原熙司(編).1991. オタフク岩遺跡. 羅臼町文化財報告 14. 羅臼町教育委員会
- 涌坂周一.1996. 相泊遺跡 2. 羅臼町文化財報告 16. 羅臼町教育委員会
- 涌坂周一.1999. 知円別南岸遺跡. 羅臼町文化財報告 17. 羅臼町教育委員会
- 涌坂周一.2002. 隧道丘陵地遺跡. 羅臼町文化財報告 18. 羅臼町教育委員会
- 稚内市教育委員会.1964. 稚内・宗谷の遺跡 富磯貝塚 泊内竪穴住居跡 抜海岩陰遺跡. 稚内市教育委員会

Cultural Property Survey Report  
of Shari town XL

# Chashikotsu-misakiue Site

## Overall Report

2018.3.31

Shari Town Board of education



# CONTENTS

Preface

Explanatory Notes

I	Outline of the Investigation .....	1
1	Purpose and process of the investigation .....	1
2	Implementation of the investigation .....	2
3	Geographical characteristics .....	4
4	Historical background .....	8
II	Execution of the excavation .....	9
1	Method .....	9
	(1) Setting excavation area and grid .....	9
	(2) Excavation and sorting processes .....	9
	(3) Stratification .....	12
	(4) Classification of artifacts .....	12
	(5) Selection of artifacts to be posted .....	13
2	The remains .....	15
	(1) Outline of the remains .....	15
	(2) Pit House 5 (TR5-Pit3) .....	15
	(3) Stone alignments for ritual purpose upper layers of the Pit House 5 .....	25
	(4) Pit House 23 .....	25
	(5) Disposal layer of Pit House 22 and 23 upper layers .....	29
	(6) Pit burial 1(TR4-Pit1) .....	29
	(7) Pit burial 2(TR5-Pit4) .....	34
	(8) Earthen Pit(TR4-Pit2a) .....	34
	(9) Earthen Pit(TR4-Pit2b) .....	38
	(10) Stone alignments for ritual purpose including (TR6-Pit 5) .....	38
	(11) Concentration of relics (TR6) .....	41
3	The relics .....	45
	(1) Outline of the relics .....	45
	(2) Excavated relics from Pit House 5 (TR5-Pit3) .....	45
	(3) Excavated relics from stone alignments for ritual purpose from Pit House 5 upper layers .....	46
	(4) Excavated relics from Pit House 23 .....	64
	(5) Excavated relics from disposal layer of Pit House 22 and 23 upper layers .....	64
	(6) Excavated relics from Pit burial 1 (TR4-Pit1) .....	64
	(7) Excavated relics from Pit burial 2(TR5-Pit4) .....	70
	(8) Excavated relics from Earthen Pit(TR4-Pit2a) .....	70
	(9) Excavated relics from Earthen Pit(TR4-Pit2b) .....	70
	(10) Excavated relics from the stone alignments for ritual purpose including Pit5 .....	70

(11) Excavated relics from animal ritual place (TR6) .....	79
(12) Excavated relics of I and II layer .....	79
(13) Excavated relics of III layer.....	89
III Various analyzes .....	101
(1) Tentative analysis of the chronology of Okhotsk pottery and Tobinitai pottery excavated from Chashikotsu-misakiue Site (Toshiro Kumaki) .....	101
(2) Stone implements and weapons excavated from Chashikotsu-misakiue Site (Isao Matsuda) .....	107
(3) Chemical analysis of Jingu-kaihou excavated from Chashikotsu-misakiue Site (Junya Kobayashi, Kazuyuki Nakamura) .....	113
(4) Analysis of carbonized fiber relic excavated from Chashikotsu-misakiue Site (Shinobu Yoshimoto, Tsuzumi Miyaji) .....	117
(5) Identification of tree species of carbonized material excavated from Pit House 5 at Chashikotsu-misakiue Site (Paleoenvironmental Research Institute, Inc.) .....	121
(6) Radiocarbon dating of Chashikotsu-misakiue Site and calendar year of Okhotsk culture based on 14C age (Kentarō Nakamura and Paleo Labo Dating Group, Paleo Labo Co., Ltd.) ....	129
(7) Human skeletal remains excavated at the Chashikotsu-misakiue Site (Hajime Ishida, Taketomo Touyama) .....	135
(8) Animal remains detected from Chashikotsu-misakiue Site (Takao Sato, Akiko Yoshinaga) .....	137
(9) Plant remains detected from Chashikotsu-misakiue Site (Goro Yamada) .....	179
IV Summary.....	185
1 Results of Investigation .....	185
2 Characteristics of the settlement in the terminal stage of the Okhotsk culture .....	189
3 Relationship between this site and with the Continent ore Honshu .....	193
4 Subjects to be solved .....	197
Abstract of the report .....	198
English Summary .....	205

# Summary

## Outline of the excavation results

Chashikotu-misakiue Site is a settlement of Okhotsk culture located on the coastal terrace at 55 m in altitude. From this site, various remnants including 31 pit houses, tombs, pits, stone alignments, abandonments, and relics concentration, were detected. Animal remains were also excavated with many relics. Considering with excavated remains and relics, we estimate this site is mainly founded in the terminal stage of the Okhotsk culture. On the basis of the analyzed radiocarbon ages and excavated old coins (Jingu-kaihou), this site continued from the 8th to 9th centuries.

This settlement founded here not only for living but also for strategic reason because it has an excellent wide view. This site is also characterized by its ceremonial function for animal, mainly bear, rituals. In addition, “Jingu-kaihou”, one of the twelve kinds of copper coins minted by the central government of that period, is the first detection from Okhotsk cultural remains. This is important to show the possibility of a connection between Okhotsk culture and the ancient state through intermediation by Satsumon culture.

## Pit House 5 (TR5-Pit 3)

Pit House 5 is a burnt pit house in the Okhotsk cultural period. This is a small size or medium size pit in Okhotsk period and its planar shape is hexagonal. In the Pit house, there was a stone-paved floor, a stone furnace, and a bone mound. All of them are not typical form of Okhotsk culture. In addition, pillar holes and ditch surrounding a settlement were also detected. There are three large and small mounds of bones at the entrance of house. Those bones are brown bear, sable, marine mammals and so on. Except for this site, there is no example that all bone mounds set near the entrance. It may show the unique recognition of the ritual space.

The trees most widely used in the pillars and flooring of houses are Sakhalin fir. Taxus and broad leaves trees were also used.

The age of the pit house analyzed by the AMS method is coincident with the pottery chronology, from the late 8th to the early 9th century.

## The stone alignments for ritual purpose upper layers of the Pit House 5

The stone alignments for ritual purpose was constructed after the abolition of the Pit House 5. It is about 4 m wide and consists of flat sharp gravel with a diameter of 30 to 40 cm. Four perfect potteries were excavated from the same layer on the east side and on the west side of the stone alignments for ritual purpose.

The age of Stone alignments for ritual purpose analyzed by the AMS method is from the early- to mid- 8th century. However, as this result se is slightly older than Pit House 5, it might be affected by the old tree in this alignments.

On the basis of the excavated pottery, we assume that it belongs to the Tobinitai cultural period.

## Pit House 23

As we conducted only small scale trench survey details are not clear yet. However, judging from the shape of the excavated pottery and the Pit house recess, it should be a Pit House in the Okhotsk culture period. This pit house is medium size and the planar shape is pentagonal or hexagonal. A disposal layer of the Okhotsk cultural period partly formed the upper layer.

Carbon dating of Pit House 23 was carried out by the AMS method using the carbonized seeds of the excavated floor surface. However, the estimated age, from the early- to the mid- 7th century shows discrepancy with the chronology of pottery excavated on the floor.

### **Disposal layer upper layers of the Pit House 22 and 23**

It is the disposal layer of the Okhotsk cultural period formed in Pit House 22 and 23. Both the 1st and 2nd layers contain large amounts of fish bones, and many Okhotsk pottery pieces with pasted patterns are excavated from those layers. The 3rd layers contain much more pieces of burned bone. In addition, one Jingu-kaihou, a money of the Nara period, has been excavated from the top of the 3rd layers.

Carbon dating by the AMS method using the excavated carbonized seeds among revealed that Pit House 23 age is from the late eighth to the early ninth century. It is consistent with the circulation period of Jingu-kaihou excavated from the disposal layer.

### **Pit burial 1 (TR4-Pit 1)**

Pit burial 1 belongs to Okhotsk culture period. The planar shape in one part is irregular, but another part is corner round rectangle. In addition, a rounded gravel about 5 to 40 cm in diameter is placed around Pit burial 1. A pottery was covered on the head of the buried person. Judging from the excavated pottery and positions of teeth, head position faced to the southeast. We estimate that the burial method is the contracted burial. In addition, the age of the burial person is less than or equal to 20 years of age based on the analysis of the excavated teeth.

We estimated age of Pit burial 1 by AMS method carbon dating of carbonized seeds (walnut shell) excavated from fill. The estimated age is from the late 8th to early 9th century, and it is almost consistent with the time of the excavated pottery.

### **Pit burial 2 (TR5-Pit 4)**

Pit burial 2 belongs to Okhotsk culture period. The planar shape is the corner round rectangle. In the top of Pit burial 2, round gravels of 30 to 50 cm in diameter were stacked like a circle shape about 1.3 m in width, and teeth and relics were excavated under them. It is different from burial method of Pit burial 1. Carbonized plain weave material is a remarkable relic among excavated remains.

We estimate head position faced to the south-west, judging from the excavated position of the tooth. The age of the buried person should be around 4 years old based on the formation stage of the permanent tooth. We estimated age of Pit burial 2 by AMS method carbon dating of carbonized seeds excavated from fill.

The estimated age is the early- to mid- 8th century which is consistent with the time of the excavated pottery.

### **Earthen Pit (TR4-Pit 2a)**

Pit 2a is earthen pit of the terminal stage of Okhotsk culture or in the Tobinitai cultural period. The planar shape was misshapen ellipsoidal, and there was a stone alignment of 2.5m in width in the upper layer.

Through observation of the fill, it became clear that the Okhotsk people constructed Pit 2a after breaking down the lower pit (Pit 2b).

### **Earthen Pit (TR4-Pit 2b)**

Pit 2b is earthen pit in the late stage or in the terminal stage of Okhotsk culture. The upper layer of Pit 2b is pulled down for the construction of Pit 2a. The planar shape of the extant part of this pit is misshapen ellipse. The scale is small.

### **Stone alignments (TR6-Pit 5)**

Stone alignments for ritual purpose and Pit 5 are excavated from the late- or the terminal Okhotsk cultural remains

or from the earthen pit. Both stone alignments and Pit 5 were detected in the same layer. Stone alignments for ritual purpose was approximately 4.5 m in width and it was existed in the I - II layer.

Material of them is mainly large sharp gravel with 50 to 60 cm in diameter, but also there are many small gravels of 5 cm in width. Pit 5 is earthen pit dug just under gravel arranged in circle. We found a brown bear's molar tooth from this pit.

Teeth of two brown bears have been excavated from stone alignments for ritual purpose.

Since some of the teeth were heated, these teeth should be used for animal ritual place in the open.

### **Concentration of relics (TR6)**

Animal ritual place are dated from the late stage or the terminal stage of Okhotsk culture. It consists of pottery, stone implements, stone weapons, bone or antler implements and animal remains. Also, since it was detected from the upper part of the III layer or from the bottom part of the II layer, it should be older than the adjacent stone alignments for ritual purpose (Pit 5).

It is remarkable that this animal ritual place in the open contains many relics and animal bones.



# 写真図版





チャシコツ崎周辺 空撮

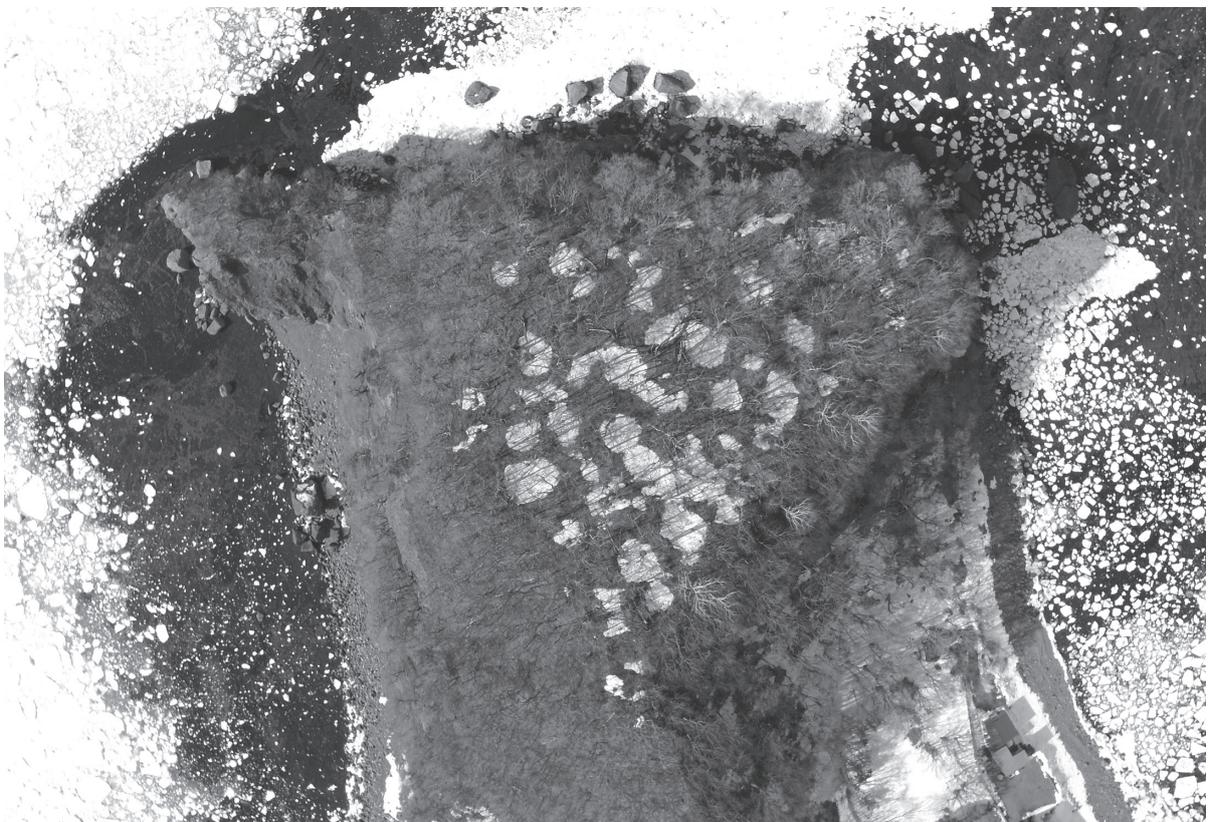


チャシコツ岬上遺跡 全景

PL.2



チャシコツ崎 俯瞰



残雪期のチャシコツ岬上遺跡



5号竖穴 (TR5-Pit3) 掘削前状況



5号竖穴 (TR5-Pit3) 検出状況



5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚A



5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚出土土器1



5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚出土土器2



5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚B



5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚C



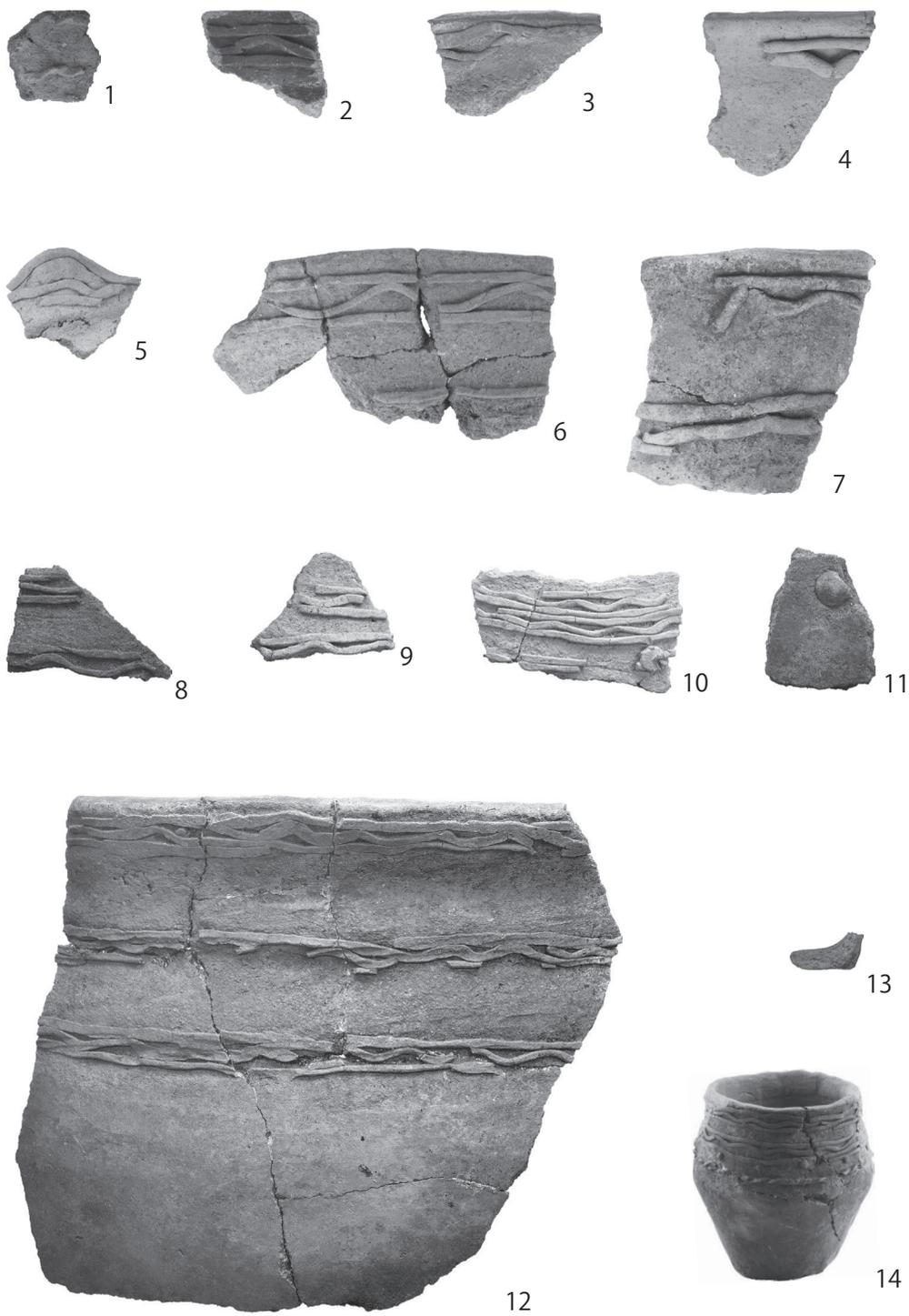
1



2

5号竖穴 (TR5-Pit3) 床面 出土土器 (1)

PL.6

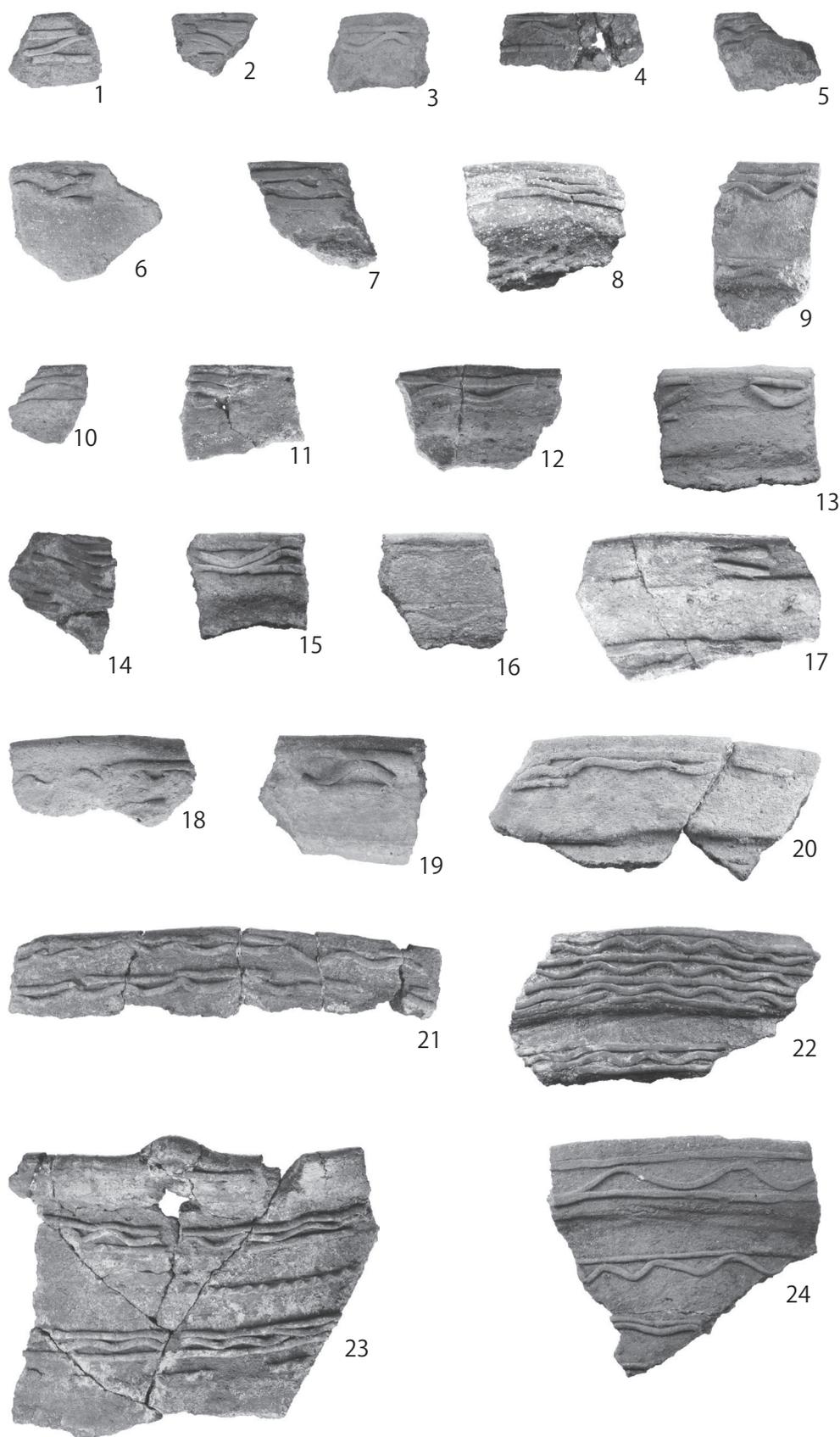


5号竖穴 (TR5-Pit3) 床面 出土土器 (2)

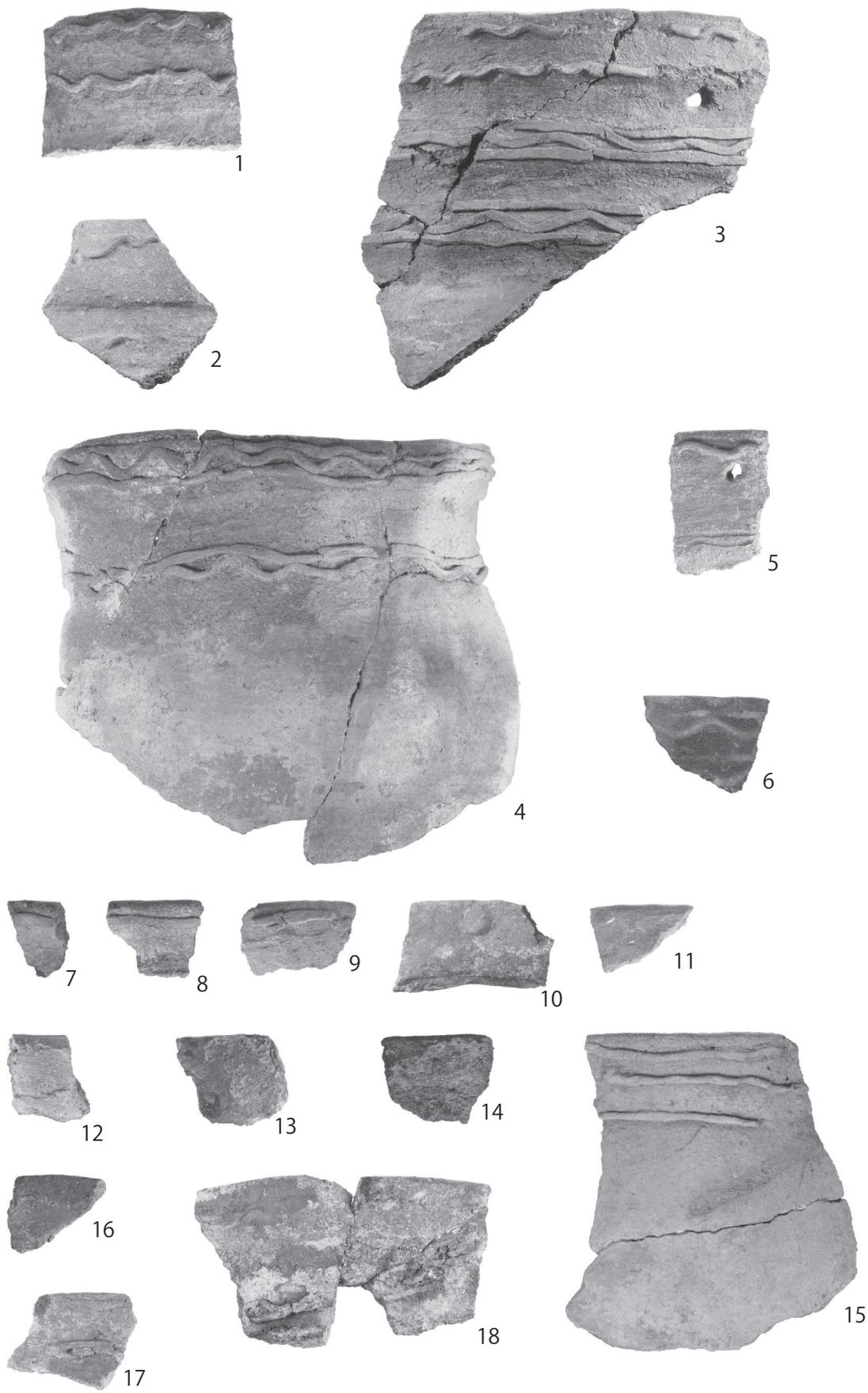


5号竖穴 (TR5-Pit3) 骨塚 出土土器

PL.8

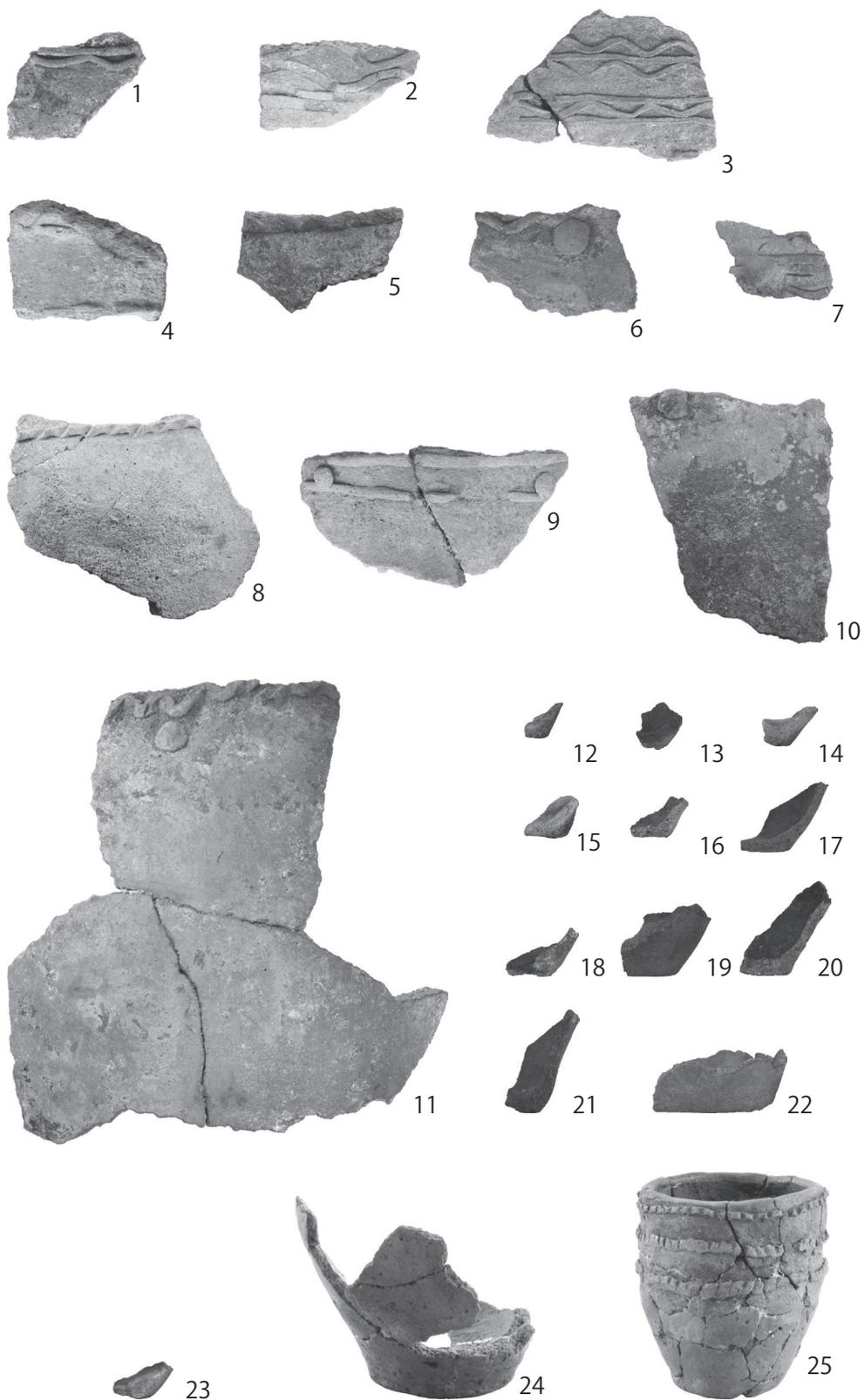


5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土土器 (1)



5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土土器 (2)

PL.10



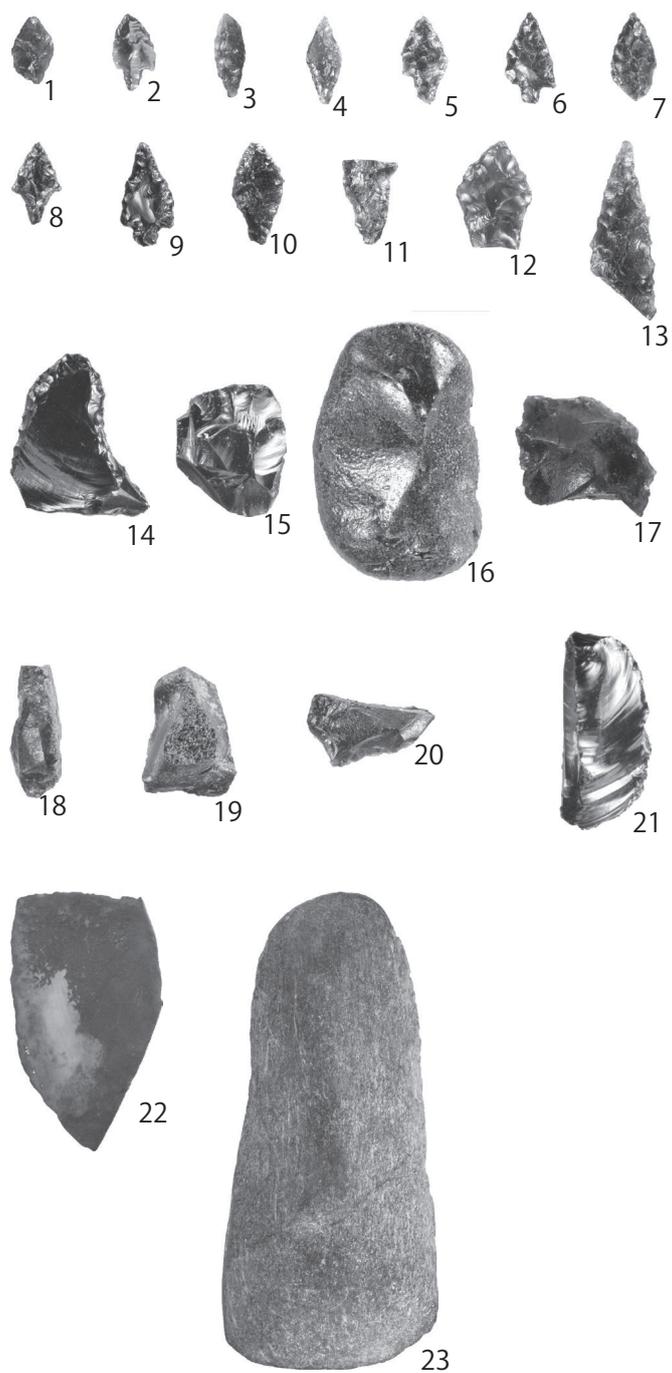
5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土土器 (3)



5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土土器 (4)



PL.12

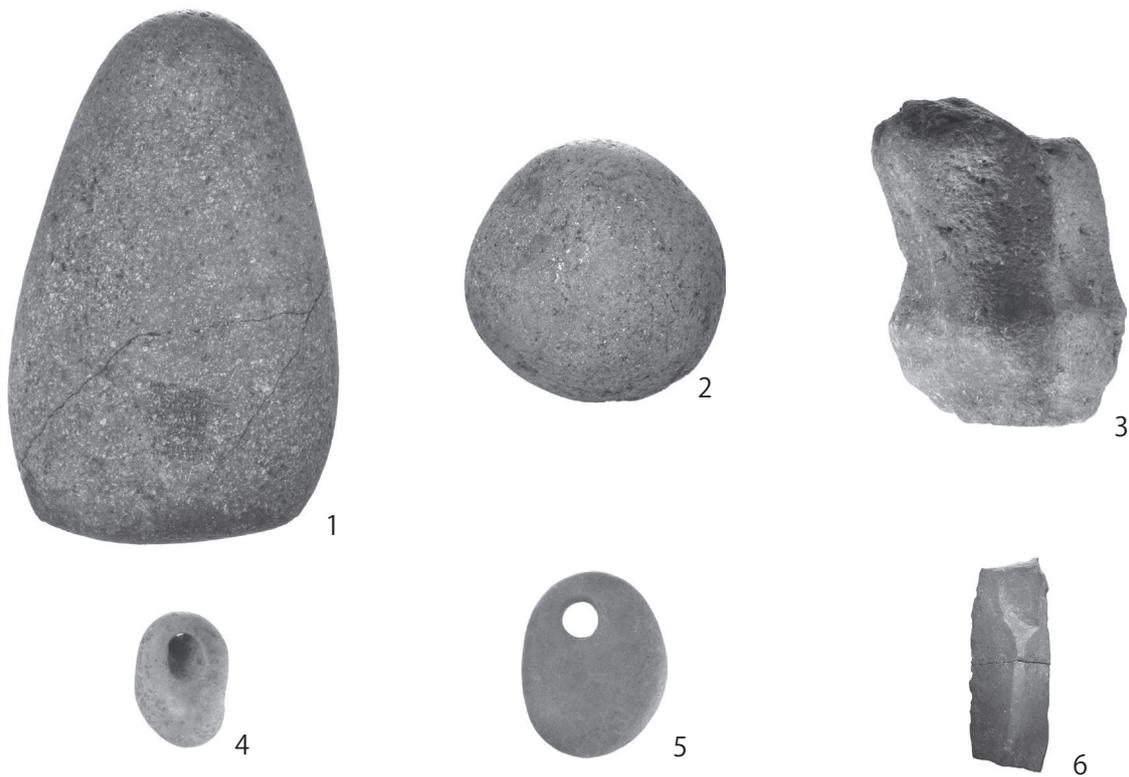


5号竖穴 (TR5-Pit3) 床面 出土石器 (1)



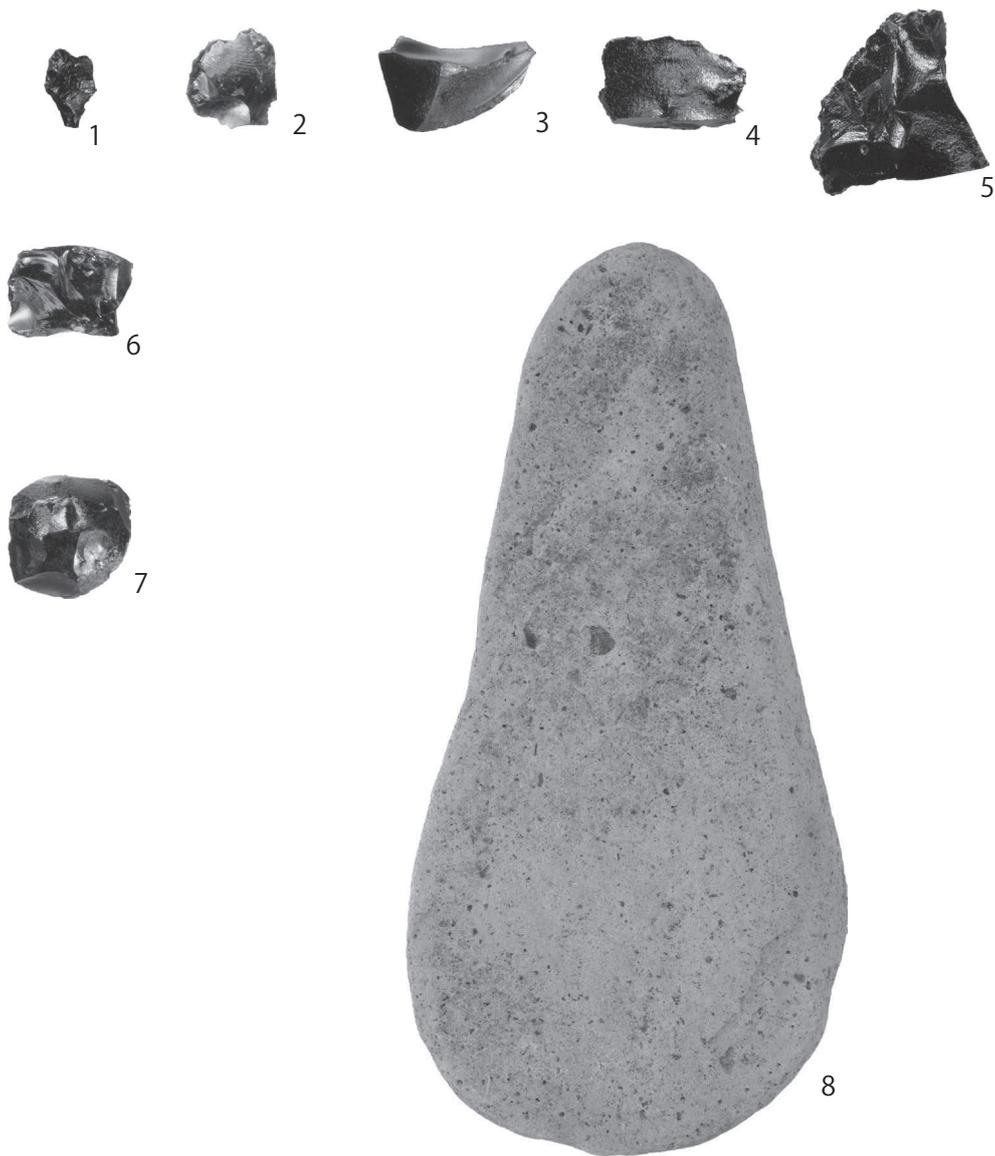
5号竖穴 (TR5-Pit3) 床面 出土石器 (2)

PL.14



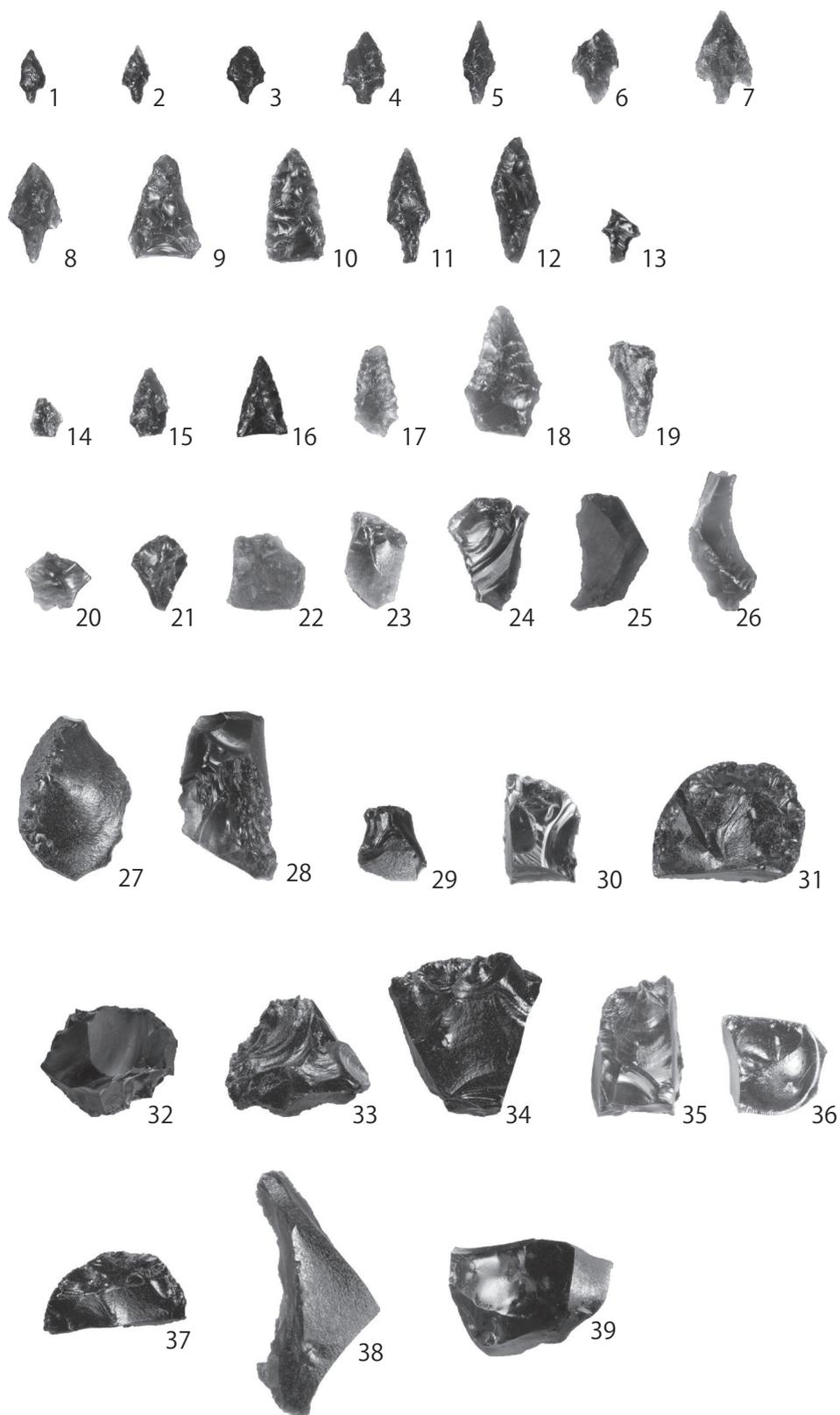
5号竖穴 (TR5-Pit3) 床面 出土石器 (3)





5号竖穴 (TR5-Pit3) 炉·圜炉裏 出土石器

PL.16



5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土石器 (1)



5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土石器 (2)



1



2



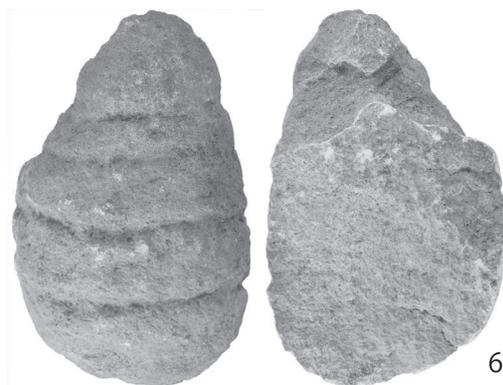
3



4



5



6

5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土石器 (3)



1



2



3



4



5

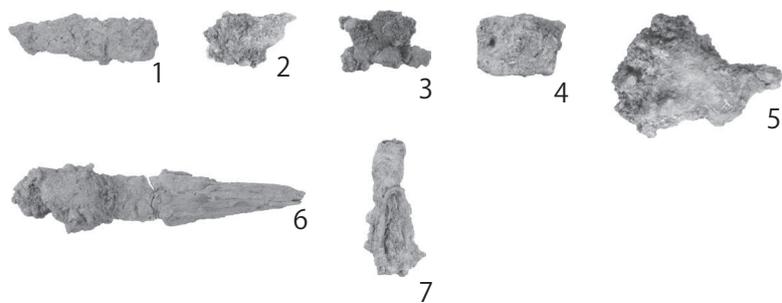
5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土石器 (4)



5号竖穴 (TR5-Pit3) 出土骨角器



5号竖穴 (TR5-Pit3) 床面 出土金属製品



5号竖穴 (TR5-Pit3) 覆土 出土金属製品



配石遺構 (TR5) 検出状況



配石遺構 (TR5) 土器出土状況1



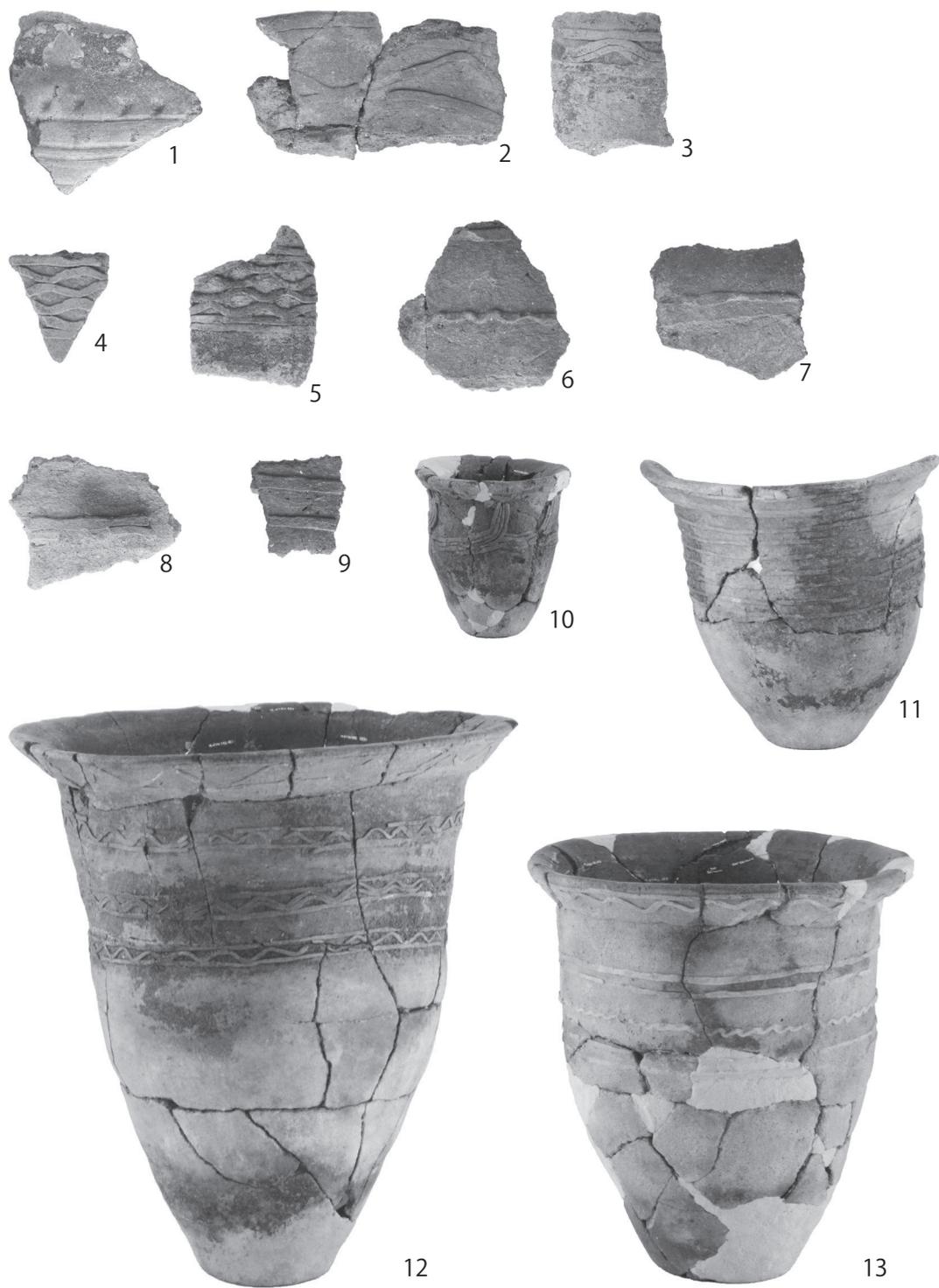
配石遺構 (TR5) 土器出土状況2



配石遺構 (TR5) 土器出土状況3



配石遺構 (TR5) 土器出土状況4



5号竖穴上層配石遺構 (TR5) 出土土器



22・23号竖穴 (TR7) 南側断面



廃棄層 (TR7) 魚骨出土状況



廃棄層 (TR7) 海獣骨出土状況



廃棄層 (TR7) 骨角器出土状況



廃棄層 (TR7) 神功開寶出土状況

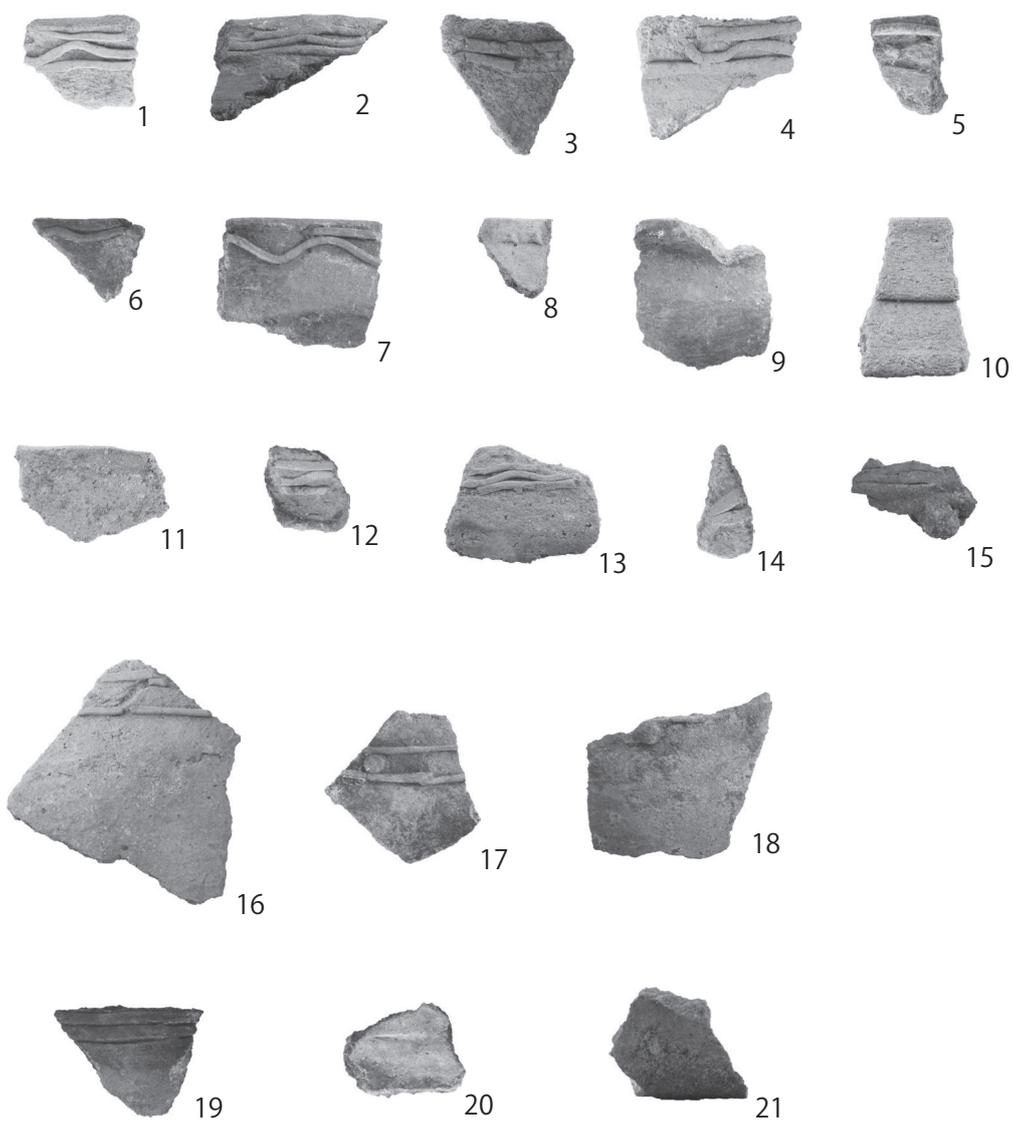
PL.24



23号竖穴 (TR7-Pit6) 出土土器



23号竖穴 (TR7-Pit6) 出土骨角器

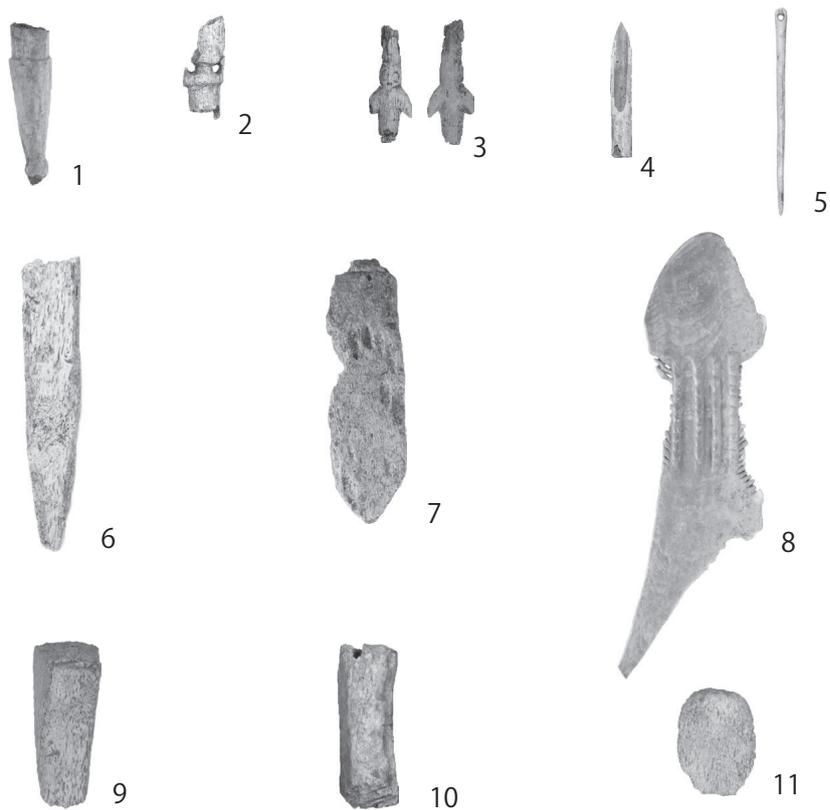


22·23号竖穴上层废弃层（TR7）出土土器



22·23号竖穴上层废弃层（TR7）出土石器

PL.26



22・23号竖穴上層廃棄層 (TR7) 出土骨角器



22・23号竖穴上層廃棄層 (TR7) 出土金属製品



1号墓 (TR4-Pit1) 検出状況



1号墓 (TR4-Pit1) 調査状況1



1号墓 (TR4-Pit1) 調査状況2

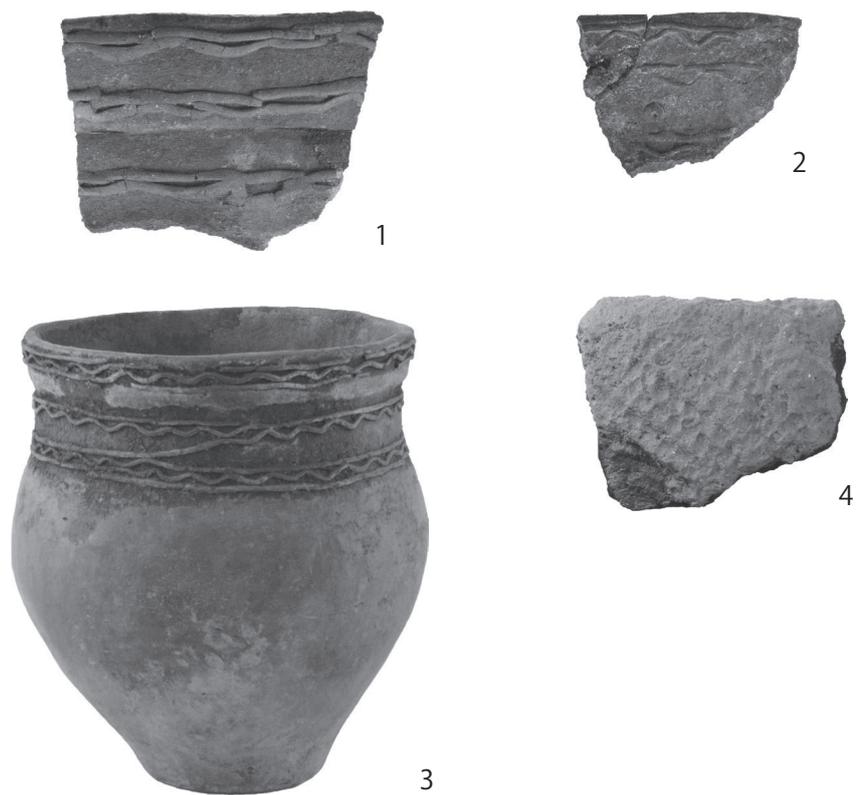


1号墓 (TR4-Pit1) 完掘状況



1号墓 (TR4-Pit1) 出土人骨

PL.28



1号墓 (TR4-Pit1) 出土土器





1号墓 (TR4-Pit1) 出土石器



1号墓 (TR4-Pit1) 出土金属製品



2号墓 (TR5-Pit4) 検出状況



2号墓 (TR5-Pit4) 完掘状況



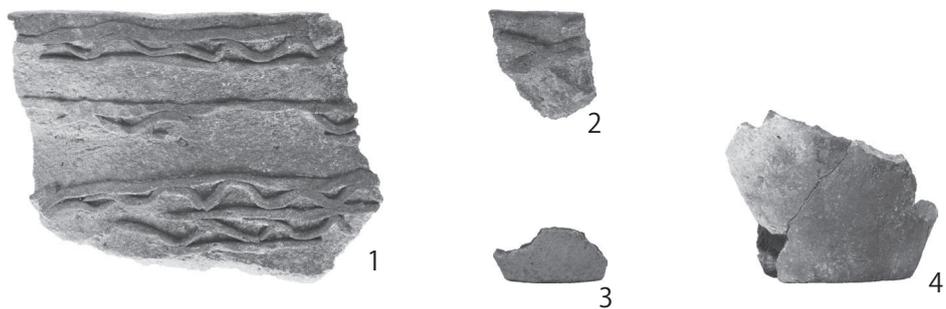
2号墓 (TR5-Pit4) 布片出土状況



2号墓 (TR5-Pit4) 刀子出土状況



2号墓 (TR5-Pit4) 土器及び人骨出土状況



2号墓 (TR5-Pit4) 出土土器



2号墓 (TR5-Pit4) 出土石器



2号墓 (TR5-Pit4) 出土金属製品



土坑 (TR4-Pit2a) 上部配石



土坑 (TR4-Pit2a) 完掘状況



土坑 (TR4-Pit2a) 土器出土状況



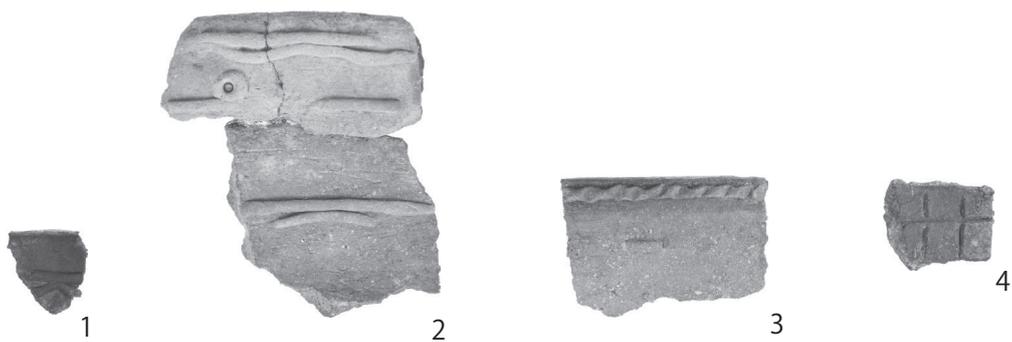
TR4調査風景



土坑 (TR4-Pit2b) 調査状況



土坑 (TR4-Pit2b) 完掘状況

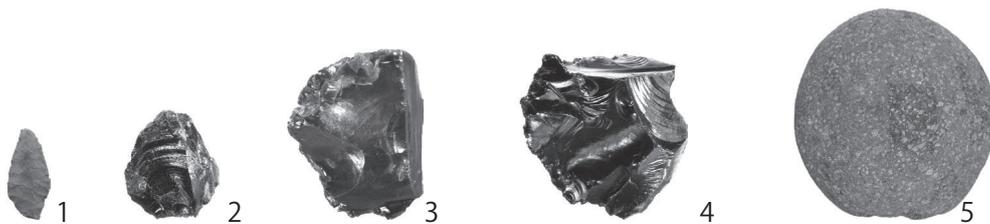


土坑 (TR4-Pit2a) 床面 出土土器



土坑 (TR4-Pit2a) 覆土 出土土器

PL.34



土坑 (TR4-Pit2a) 出土石器



土坑 (TR4-Pit2a) 出土金属製品



土坑 (TR4-Pit2b) 出土土器



土坑 (TR4-Pit2b) 出土石器



配石遺構 (TR6-Pit5) 検出状況



配石遺構 (TR6-Pit5) 調査状況



配石遺構 (TR6-Pit5) 土器出土状況

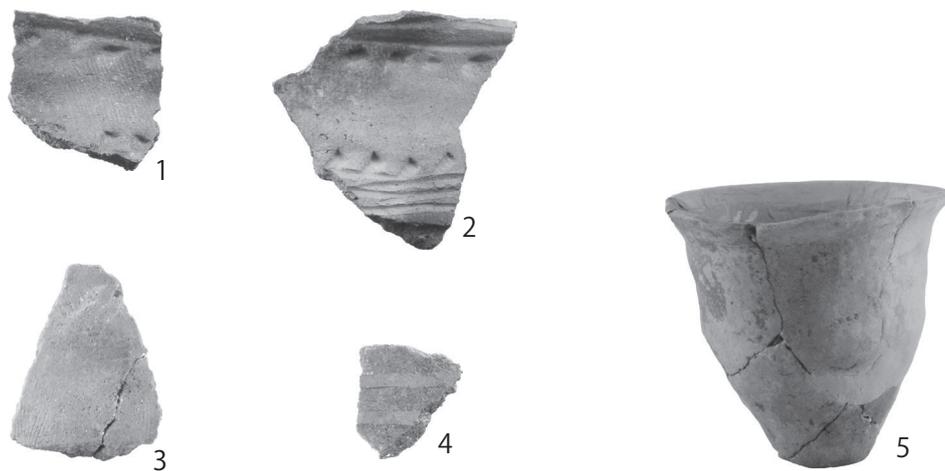


配石遺構 (TR6-Pit5) ヒグマ歯出土状況1



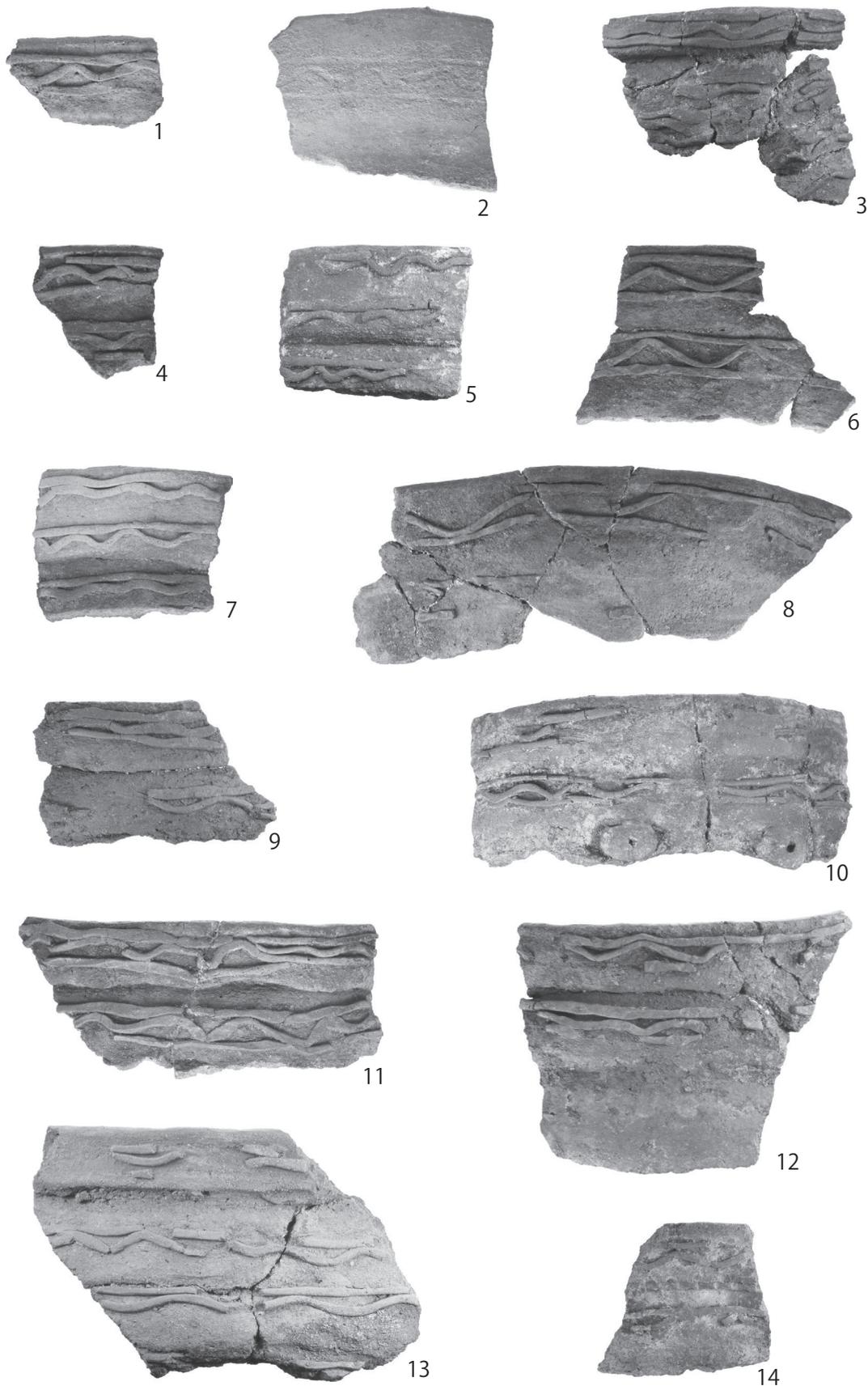
配石遺構 (TR6-Pit5) ヒグマ歯出土状況2

PL.36

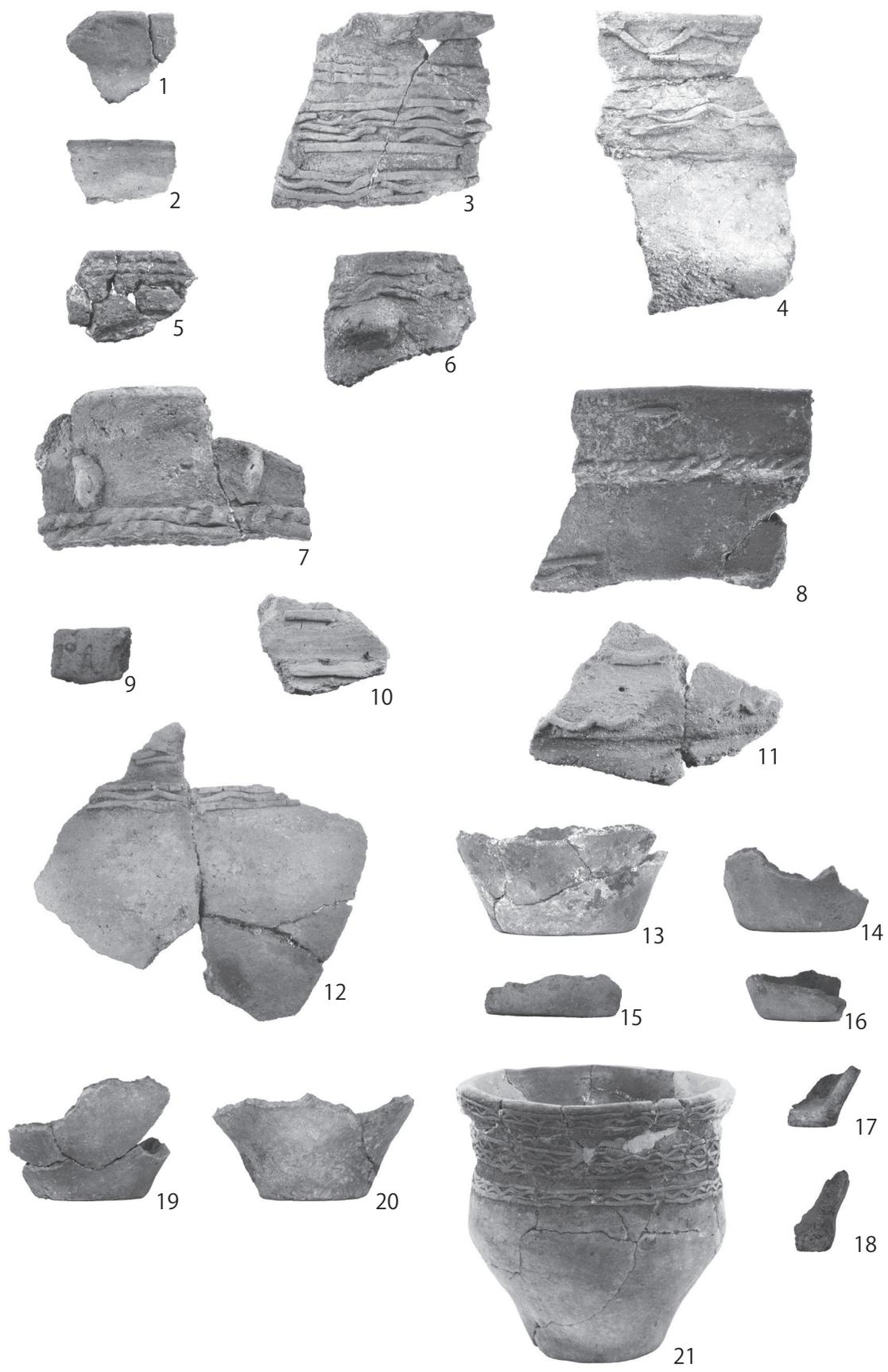


配石遺構 (TR6) 出土土器 (1)





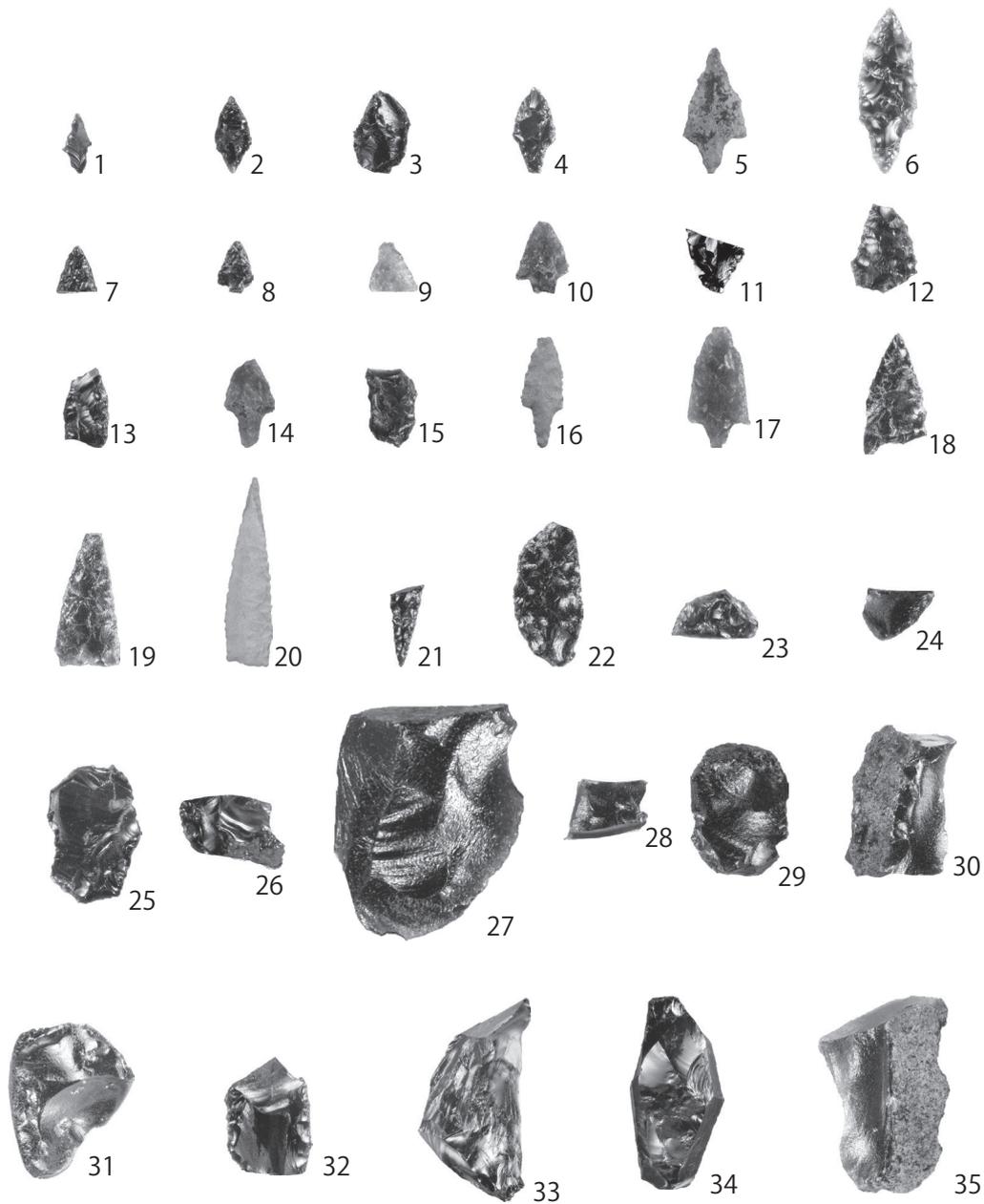
配石遺構 (TR6) 出土土器 (2)



配石遺構 (TR6) 出土土器 (3)



配石遺構 (TR6) 出土土器 (4)



配石遺構 (TR6) 出土石器 (1)

PL.40



1



2



3



4



5



6



7



8



9

配石遺構 (TR6) 出土石器 (2)



1



2



3

配石遺構 (TR6) 出土石器 (3)



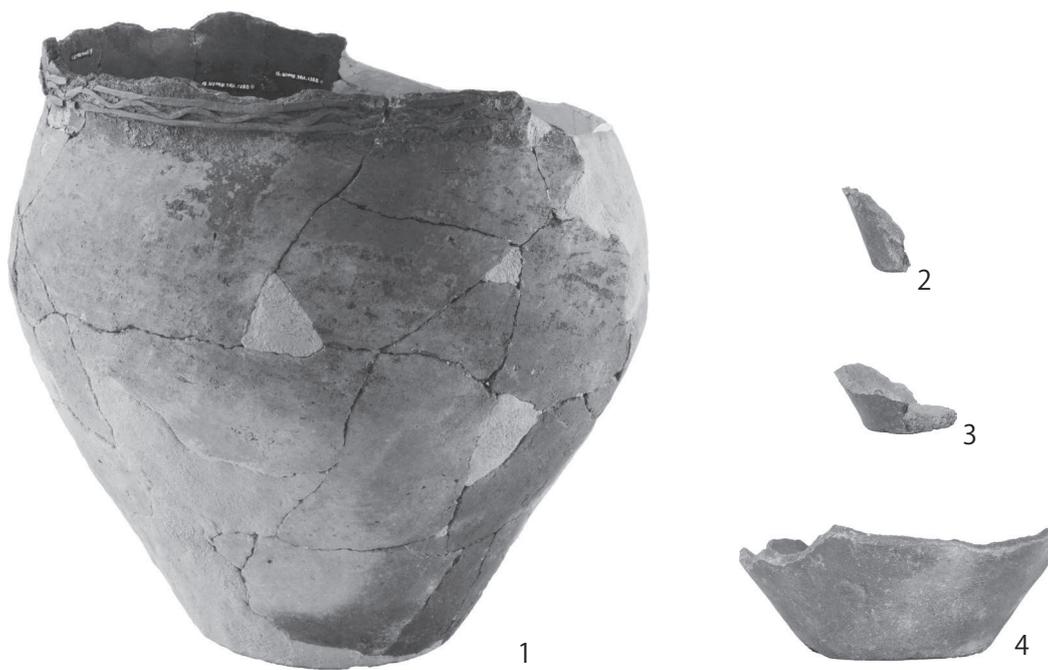
配石遺構 (TR6) 出土骨角器



遺物集中 (TR6) 調査状況1



遺物集中 (TR6) 調査状況2

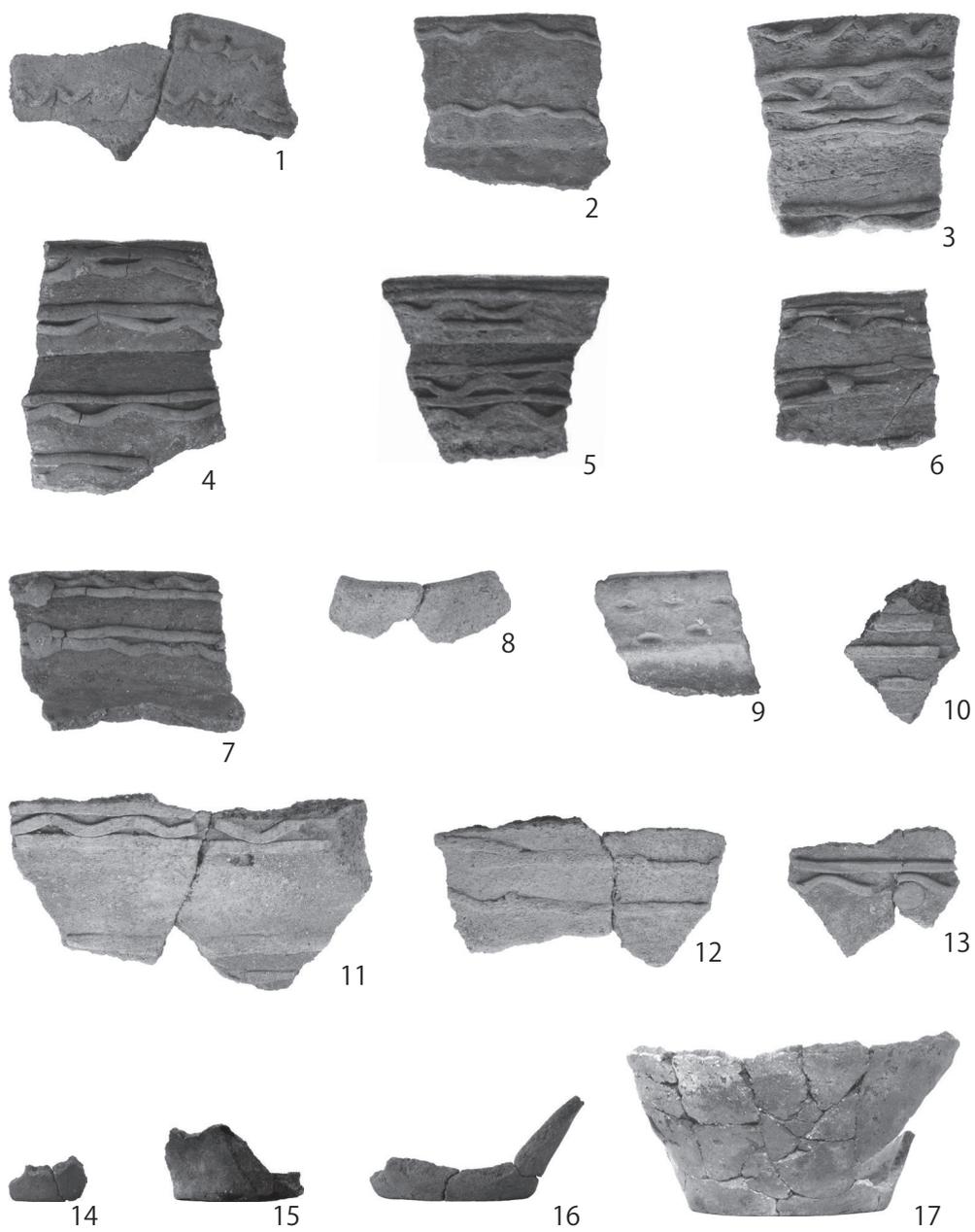


遺物集中 (TR6) 出土土器

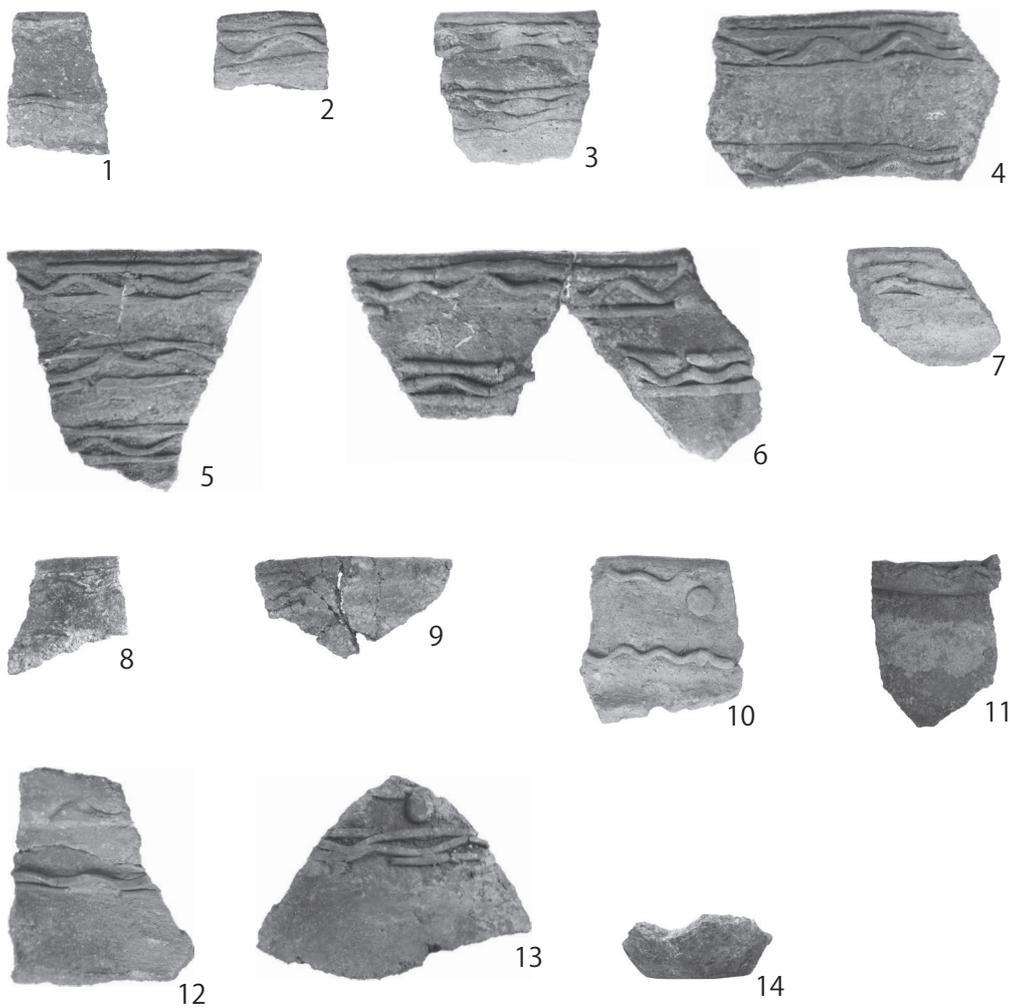


遺物集中 (TR6) 出土骨角器

PL.44

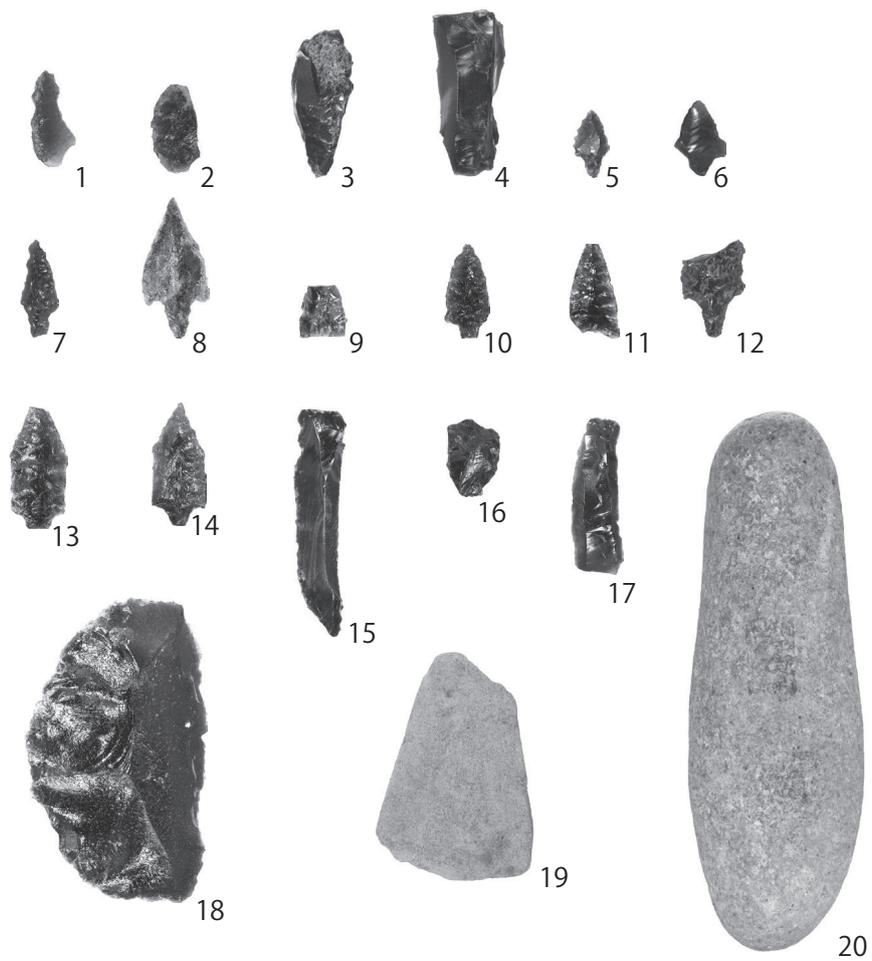


I・II層出土土器 (TR4)



I・II層出土土器 (TR5)

PL.46



I・II層出土石器 (TR4)



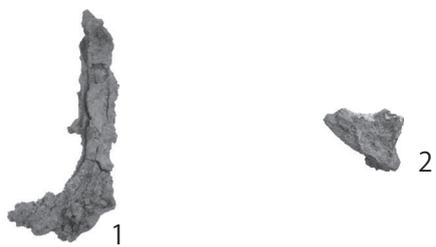
I層出土石器 (TR7)



II層出土石器 (TR5)



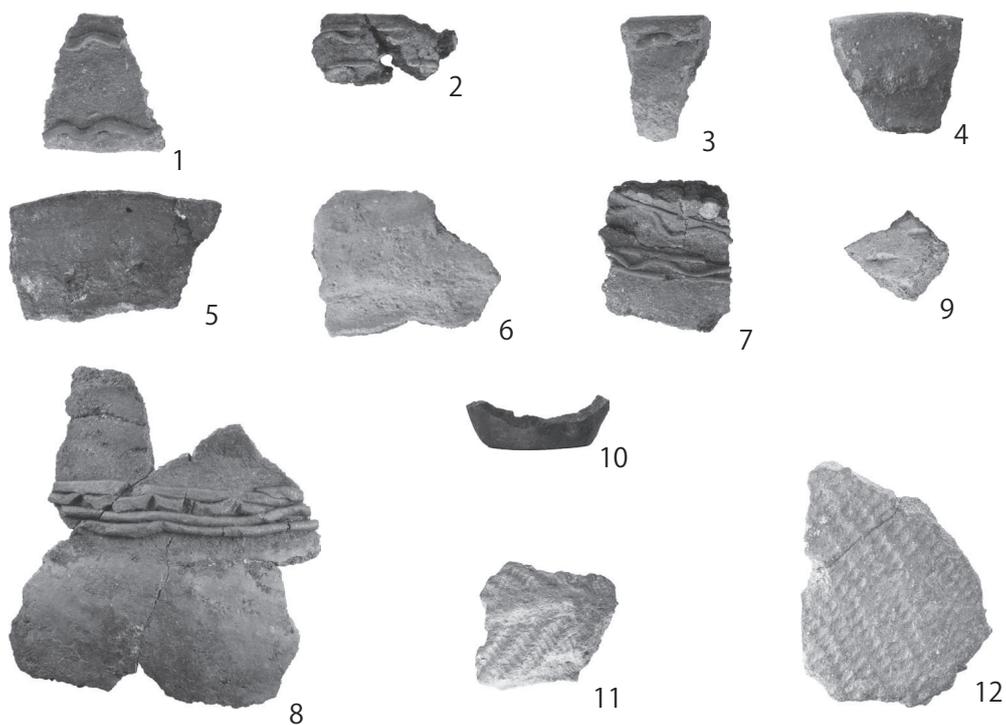
I層出土骨角器 (TR7)



I 層出土金属製品 (TR4)



II 層出土金属製品 (TR5)



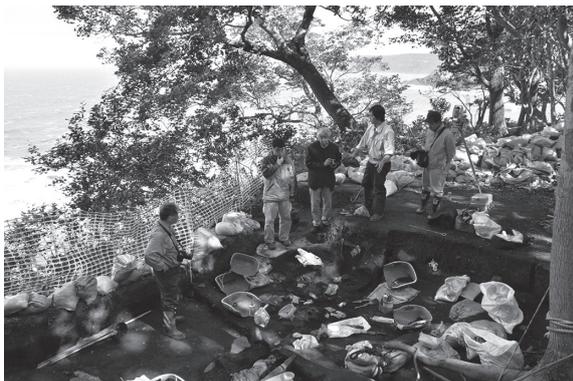
III層出土土器 (TR4)



III層出土石器 (TR4)



III層出土骨角器 (TR4)



調査検討委員会 現地視察風景



調査検討委員会 出土品検討風景



遺跡見学会1



遺跡見学会2



平成28年度発掘調査集合写真

## 報告書抄録

ふりがな	ちゃしこつみさきうえいせき							
書名	チャシコツ岬上遺跡							
副書名	総括報告書							
巻次								
シリーズ名	斜里町文化財報告							
シリーズ番号	XL							
編著者名	平河内毅（編著）、松田功、石田肇、熊木俊朗、小林淳也、佐藤孝雄、中村和之、中村賢太郎、宮地鼓、山田悟郎、吉永亜紀子、吉本忍							
編集機関	斜里町教育委員会							
所在地	〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町1 2番地 TEL0152-23-3131							
発行年月日	2018（平成30）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちゃしこつみさき うえいせき チャシコツ岬上遺跡	ほっかいどう	015458	21	44	144	2013. 9.3～ 9.17	20㎡	保存を目的と した内容確認
	しゃりぐん							
	しゃりちょううとろ							
	にしちさき こくゆうりん 北海道斜里郡斜里町 ウトロ西地先国有林							
						2014. 9.2～ 9.30	40㎡	
						2015. 8.29～ 10.10	27㎡	
						2016. 8.30～ 10.8	37㎡	

所収遺跡名	種 類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
チャシコツ 岬上遺跡	集落跡 遺物包含地	縄文中期 オホーツク 文化期	オホーツク文化期の 竪穴住居跡、土坑墓、 土坑、配石遺構、 廃棄層、遺物集中など	縄文中期（トコロ6類）、 オホーツク土器（貼付文）、 トビニタイ土器、剥片石器、 礫石器、骨角器、金属製品、 繊維製品	オホーツク文化 終末期の集落跡

### 要約

チャシコツ岬上遺跡は標高55 mの海岸段丘上に立地するオホーツク文化の集落跡である。遺跡からは31軒の竪穴住居跡、墓、土坑、配石遺構、廃棄層、遺物集中といった各種遺構が検出され、多くの遺物と共に夥しい量の動物遺体が出土した。出土した遺構・遺物から主にオホーツク文化終末期に営まれた集落とされ、放射性炭素年代と古銭（神功開寶）などの出土遺物の年代観に鑑みると、8～9世紀代に機能したと推察される。

優れた眺望を有した拠点的な集落機能に加え、ヒグマなどの野生動物を対象とした儀礼的側面が強いことも本遺跡の特性である。また、オホーツク文化の遺跡では初例となる皇朝十二銭の神功開寶が出土しており、オホーツク文化集団の擦文文化を介した古代国家との交流の可能性が示された重要な遺跡である。



斜里町文化財報告 X L

チャシコツ岬上遺跡

—総括報告書—

編 著／平河内 毅

発行日／2018（平成30）年3月31日

発行者／北海道斜里郡斜里町本町12番地  
斜里町教育委員会

印 刷／株式会社 須田製版